追憶

―長崎医科大学原子爆弾犠牲者の霊に捧ぐ―

沿革略記

――長崎医科大学――

長崎医科大学は大正十二年四月一日長崎医学専門学校の組織を変更して、開設された官立医科大学六校の一つである。その起源は遠く安政四年（一八五七年）十一月十二日開設された幕府の医学伝習所（今の市内大村町）で、オランダ国軍医ポンペ（J. L. C. Pompe Van Meerdervoort）が幕府の医官松本良順等十一名の学徒に医学の講義を開始したのがその濫觴であつて、これ実に我国医学校の嚆矢として近世文化史上特に重要視されるべきものである。万延元年（一八六〇年）幕府はポンペの建言をいれ、小島郷字稲荷岳に、郷民の救恤診療を行う病院として養生所を建てることを決定、翌文久元年完成した。この養生所には薬局を置き、また図書館並びに人体解剖室を設け、臨床医学の講義も行われた。慶応元年、時の長崎奉行は養生所を精得館と改称し更に化学教室を完備した。

明治元年、時に判事であつた井上聞多（侯爵馨）が同館を視察し、政府に精得館の状況を報告、更に整備すべき旨を建議した、よつて政府は精得館を長崎府医学校と改称、長与専齊が校長となつた。同三年、大学所轄となり、翌四年文部省所管となり校名も長崎医学校と改めた。同七年征蕃の事おこり同校廃止、蕃地事務局病院となる。翌八年病院設備は県所轄となり長崎病院が開設された。明治九年同病院内に医学場を開設、その後明治十一年長崎医学校と改称、更に明治十二年に県立となつたが、同十六年長崎県立甲種医学校と改称、更に明治二十年勅令により地方税による校費の支弁が打切られたため、同校も二十一年三月限りで終りを告げることとなつた。そこで政府は二十年八月第五高等中学校医学部を長崎に置くこととした。すなわち明治二十一年三月、時の長崎甲種医学校長吉田健康を医学部長に任じ、九月第一回入学式を行つた。明治二十三年六月薬学科を附設した。明治二十四年九月、現在の医学部の地（旧浦上山里村里郷）に校舎を新築し、同二十七年九月第五高等学校医学部と改称した。明治三十四年長崎医学専門学校と改称、同年六月田代正が初代校長に任ぜられた。

大正十二年三月三十一日長崎医学専門学校は廃止となり、四月一日長崎医科大学が開設され、山田基が初代学長に任ぜられた。

大正十四年より附属医院の鉄筋コンクリート病棟の新築に入る。昭和二年三月第一回卒業生十九名を世に送る。同十四年臨時附属医学専門部を新に置く。同十六年東亜風土病研究所が創設、大学に附属された。同二十年八月九日原子爆弾投下さる。直ちに長崎市新興善小学校舎を仮收容所としたが、九月大学再興を議決し、十月大村市の元海軍病院において講義を開始し同二十一年諫早海軍病院跡に転ず。附属医専廃校、長崎特設高等学校を置く。昭和二十二年附属医院外来本館の補修を開始し、基礎医学教室復帰し同年十一月復帰式を挙行し、事務部復帰す。

昭和二十四年新制長崎大学に包括さる。同二十五年臨床各科新興善より復帰す。同二十八年基礎医学教室校舎第一棟一部竣工し、管理部復帰、生理学教室入室す。同二十九年三月最後の旧制医科大学卒業式を挙行す。

慰靈碑

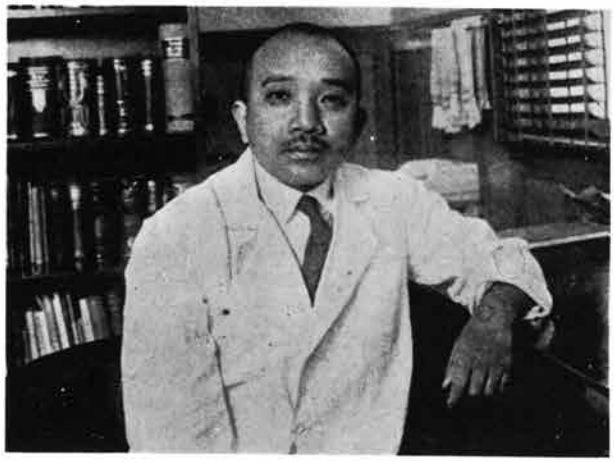
慰　霊　碑

昭和二十二年十一月十二日長崎医科大学記念日に当り職員、学生、有志一同の醵金により旧陸会会議室趾に建立さる。

尚資材として用いられたのは大講堂玄関（向つて右）の花崗岩の柱である。

故　角　尾　学　長

故 池 田 教 授（解剖学第一教室）



故 高 木 教 授（解剖学第二教室）

故 清 原 教 授（生理学教室）

故 内 野 教 授 （生化学教室）

故 内藤(達)教授（細菌学教室）

故 祖 父 江 教 授（薬理学教室）

故　大倉教授（衛生学教室）

故　金子教授（風土病研究所）

故　梅田教授（病理学第二教室）

故 竹内教授（病理学第一教室）

故 国房教授（法医学教室）

故 山根教授（眼科学教室）

故　内藤(勝)教授（産婦人科教室）

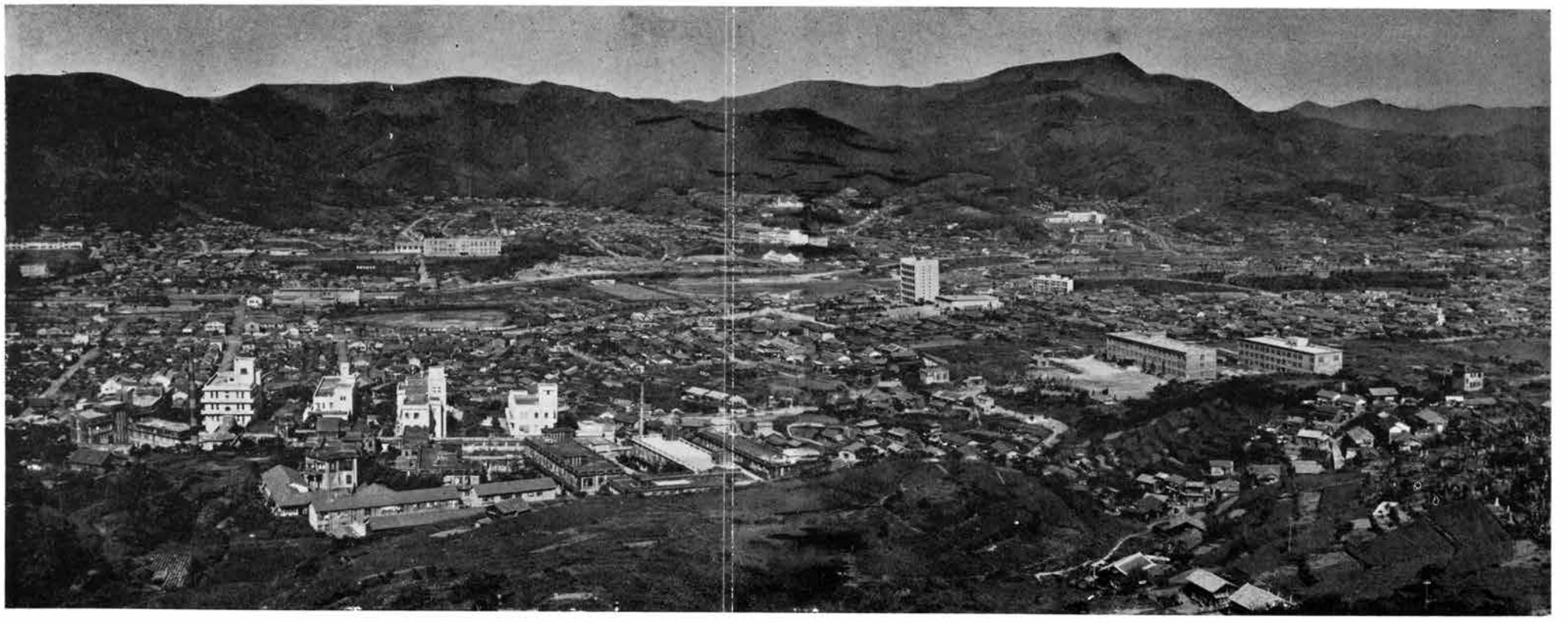
故　永井助教授
（物療教室）

故　山木事務官

被爆直後稲佐山より旧長崎医科大学及び爆心地(↓印)を望む　（朝日新聞社提供）

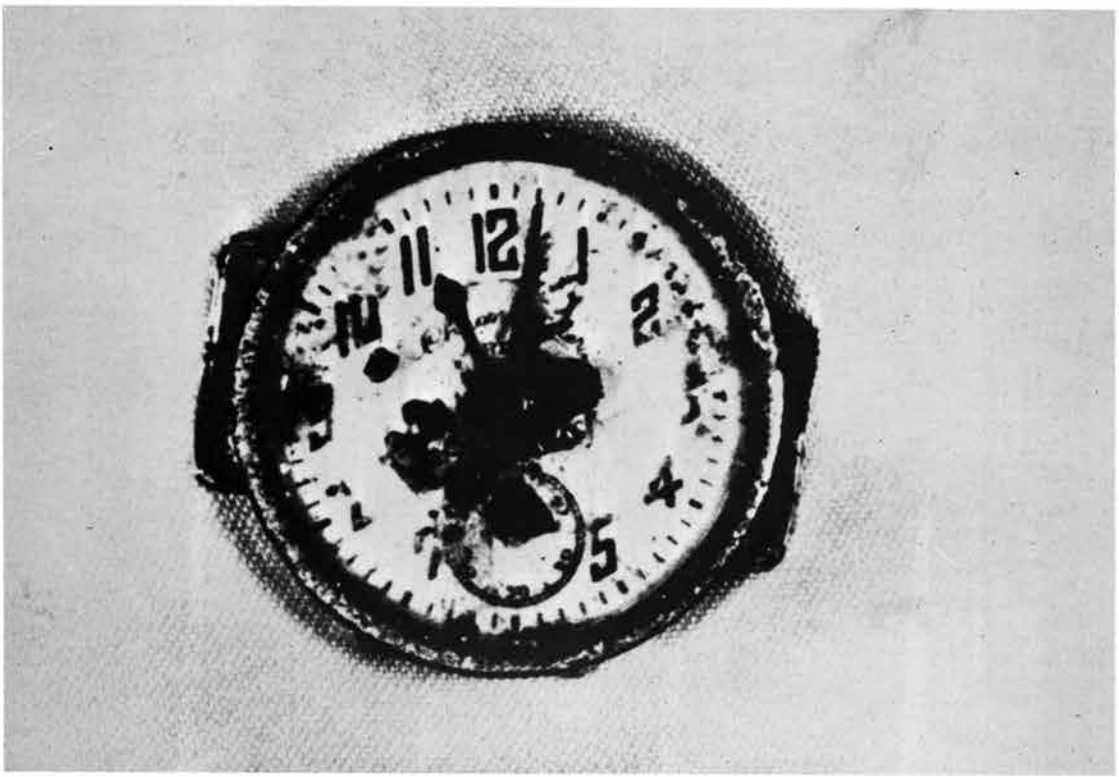
稲佐山より長崎大学医学部及び爆心地を望む(昭和30年)

被爆直後の長崎医科大学全景（穴弘法山より）

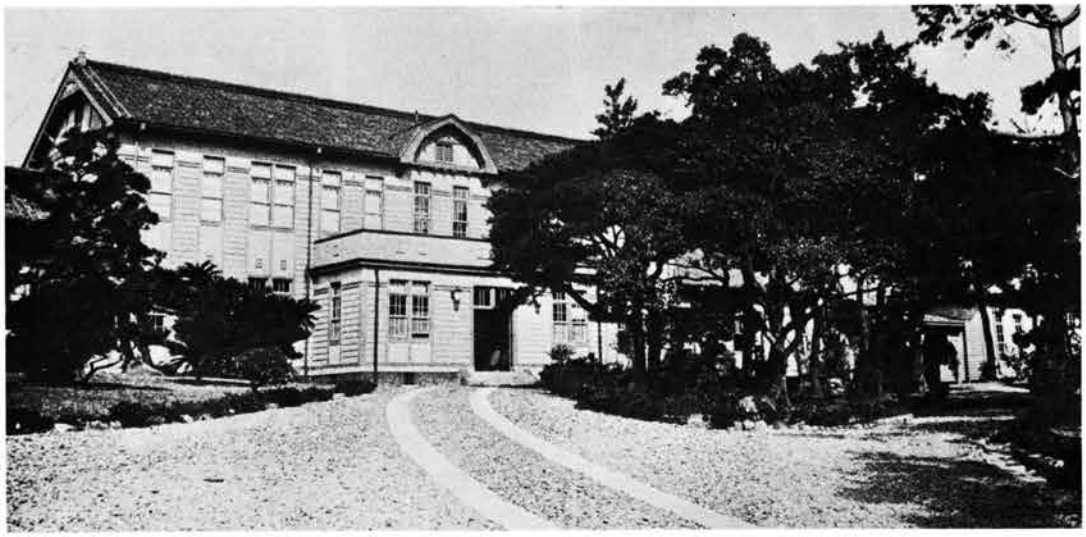


復興途上の長崎大学医学部全景（穴弘法山より、昭和30年）

長崎の原子雲

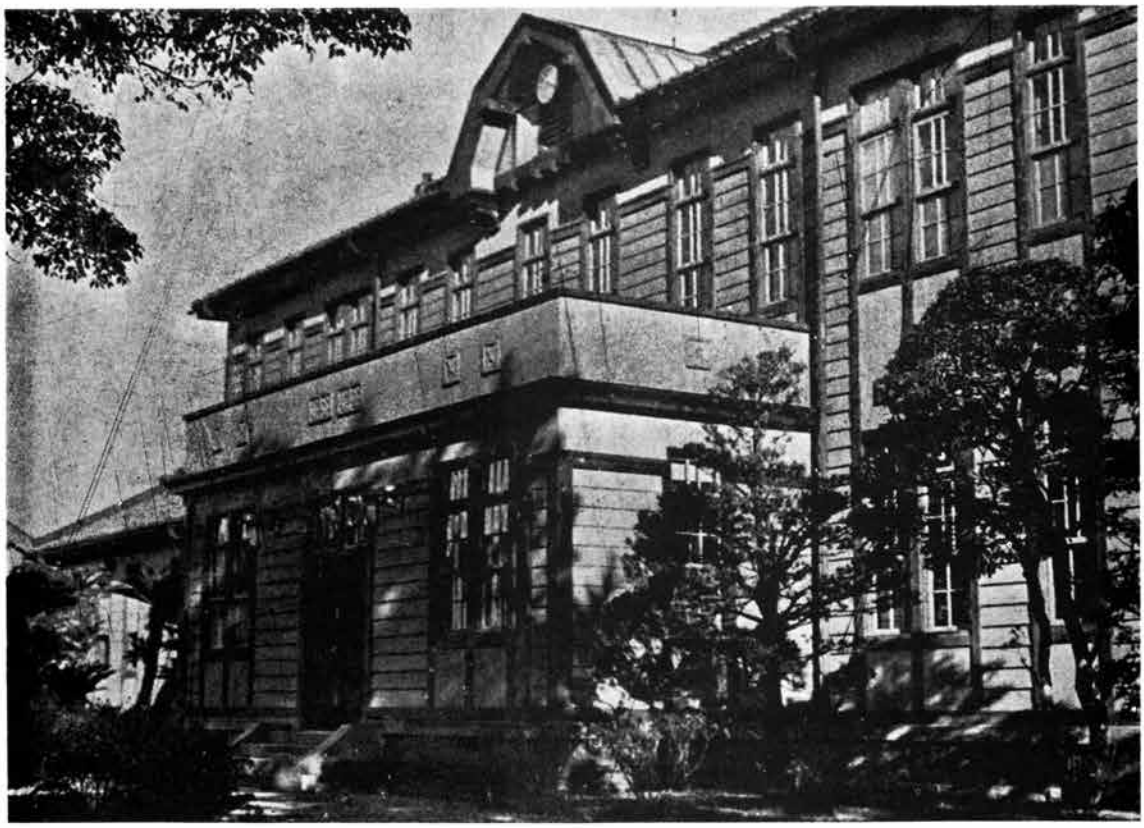


投下11時2分を示す時計（東松 照明氏写）

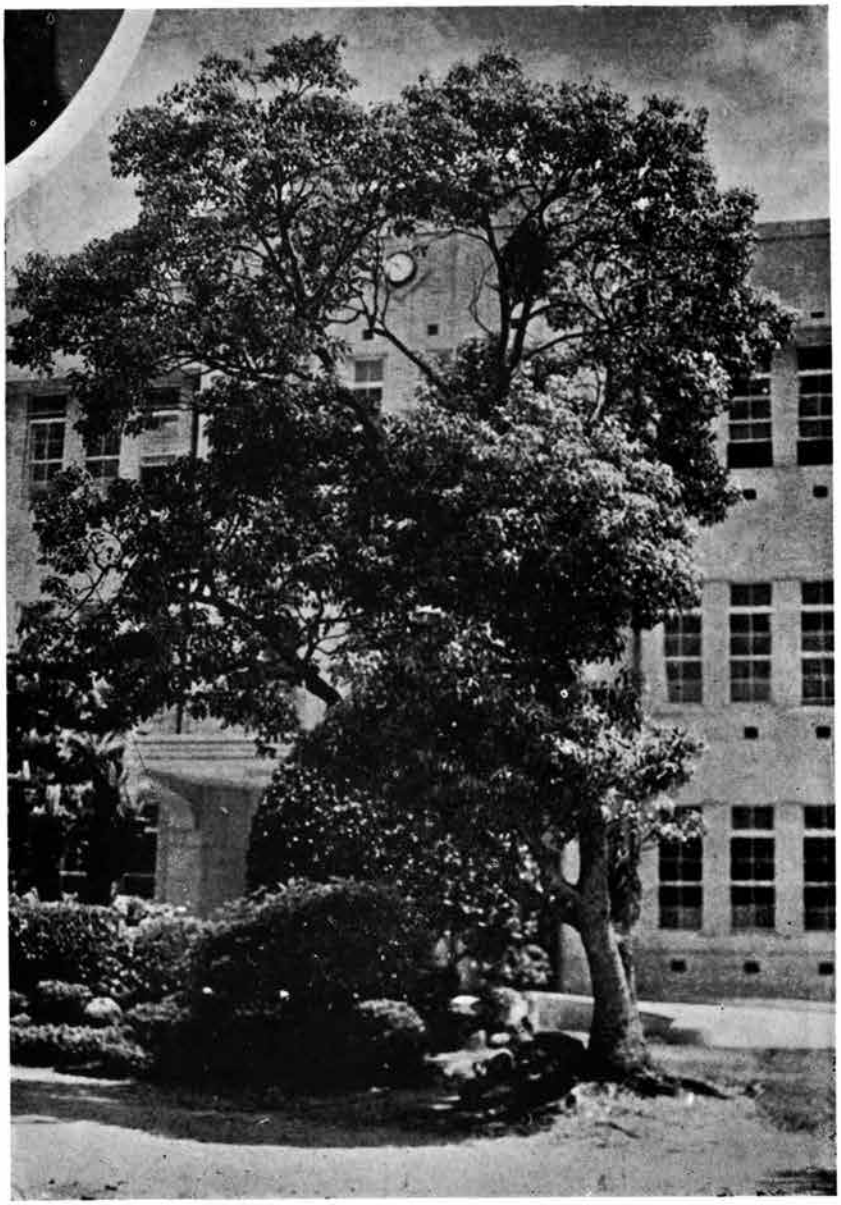


旧長崎医科大学本館正面

病院に登る石畳（大学坂）原爆の前

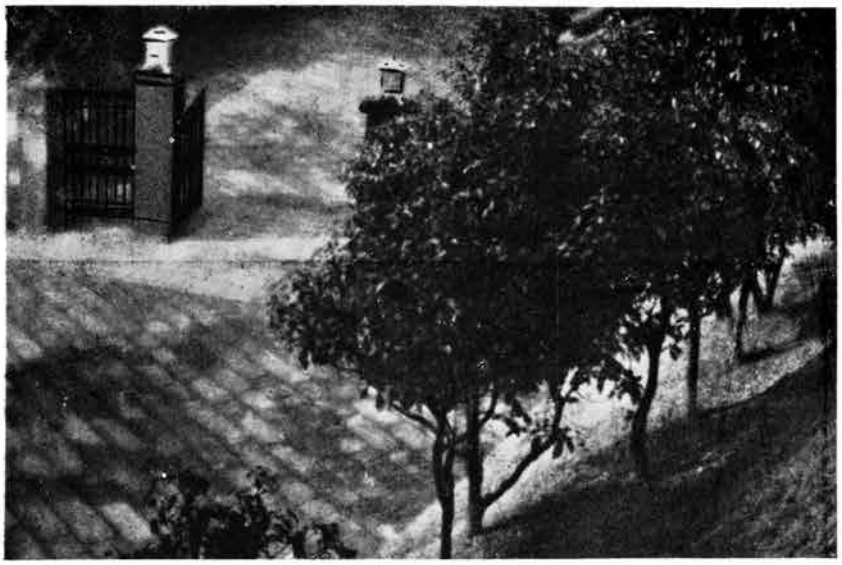


旧 長 崎 医 科 大 学 本 館

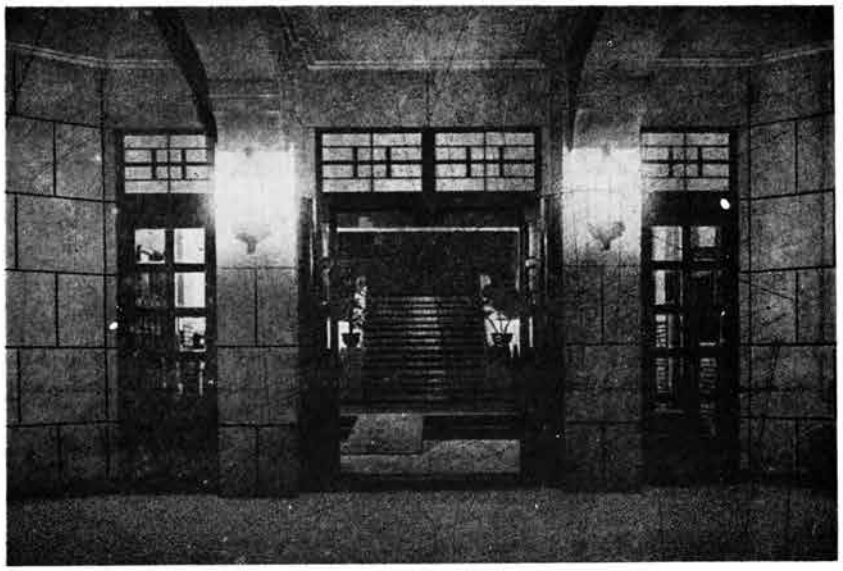


旧長崎医科大学附属医院

旧長崎医科大学大講堂



旧長崎医科大学正門



旧長崎医科大学附属医院玄関

旧長崎医科大学グラウンド及び旧浦上天主堂

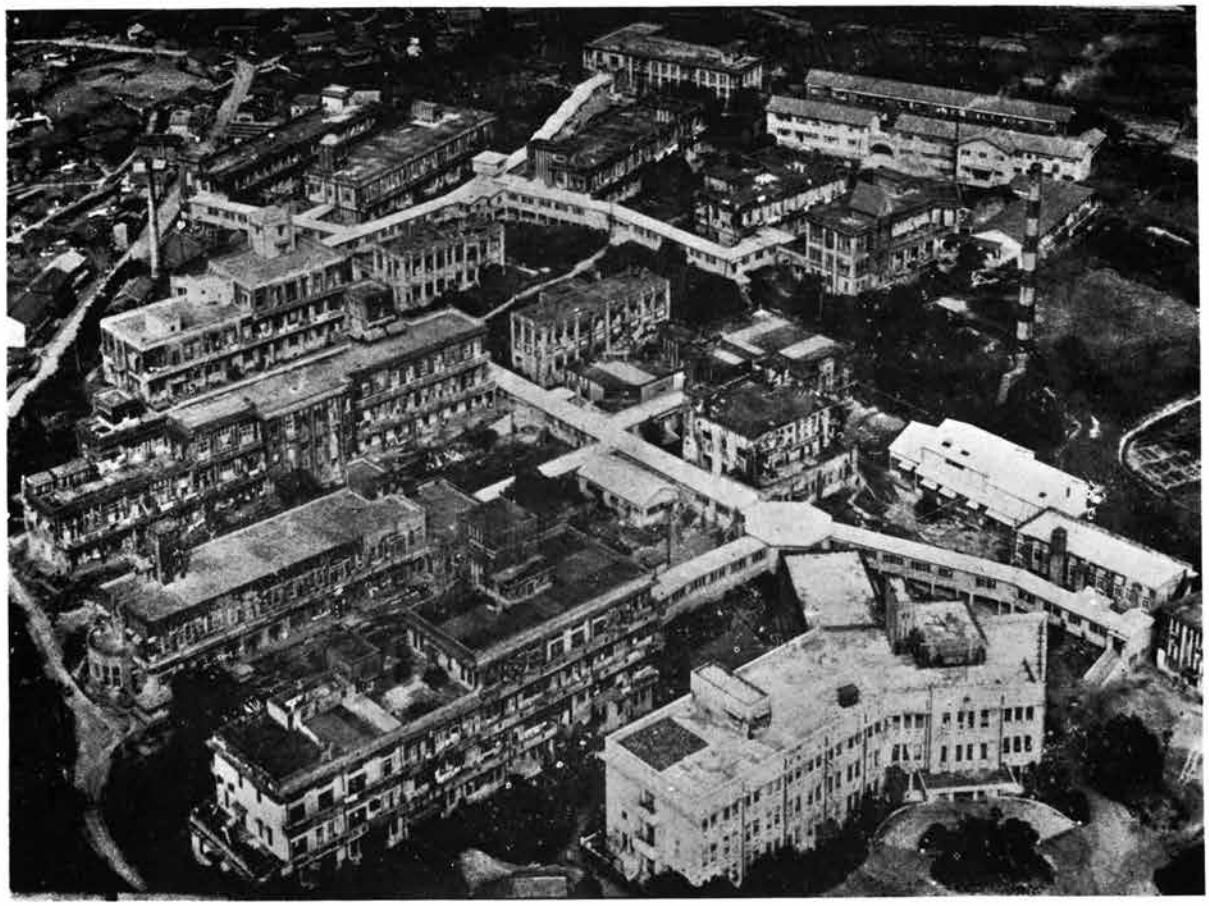
被爆直後の長崎医科大学附属医院

被爆直後の長崎医科大学附属医院

被爆直後の長崎医科大学グラウンド及び基礎医学教室

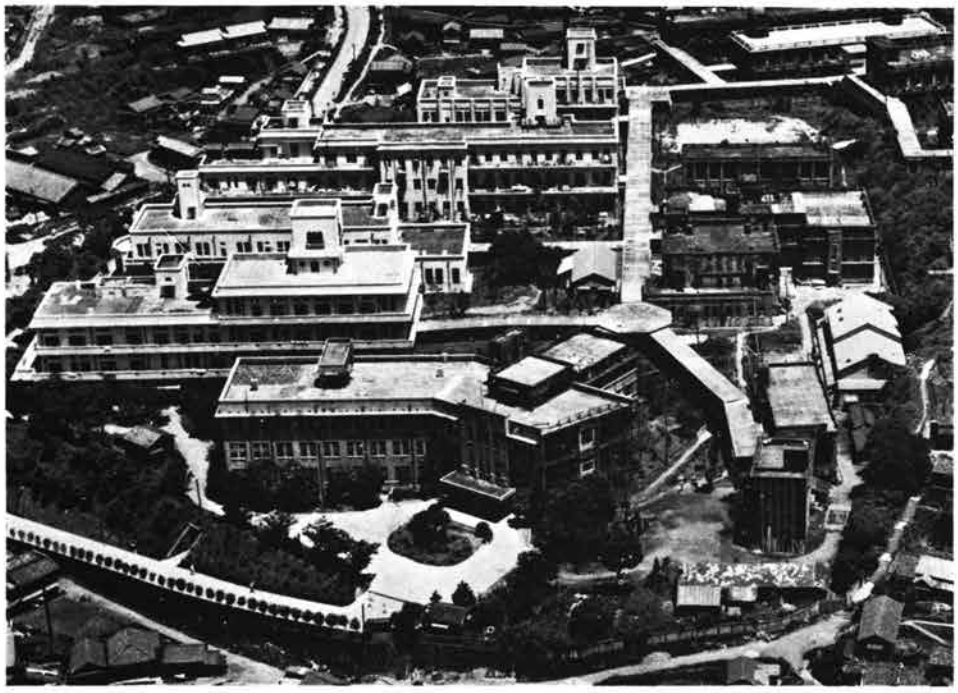
新興善小学校に於ける被災者の治療状況

同　　上



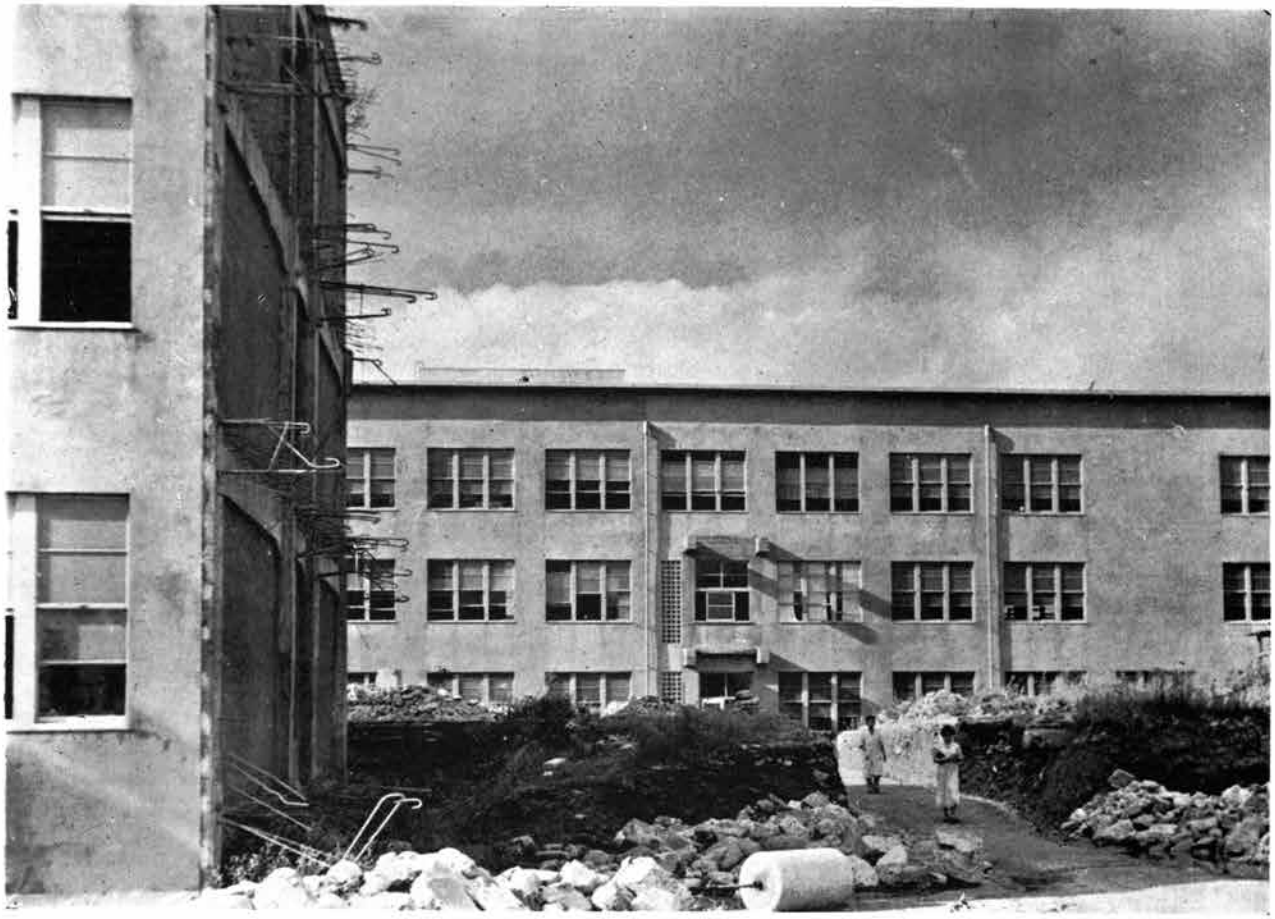
復興途上の長崎大学医学部附属病院全景（昭和28年）

復興途上の長崎大学医学部附属病院

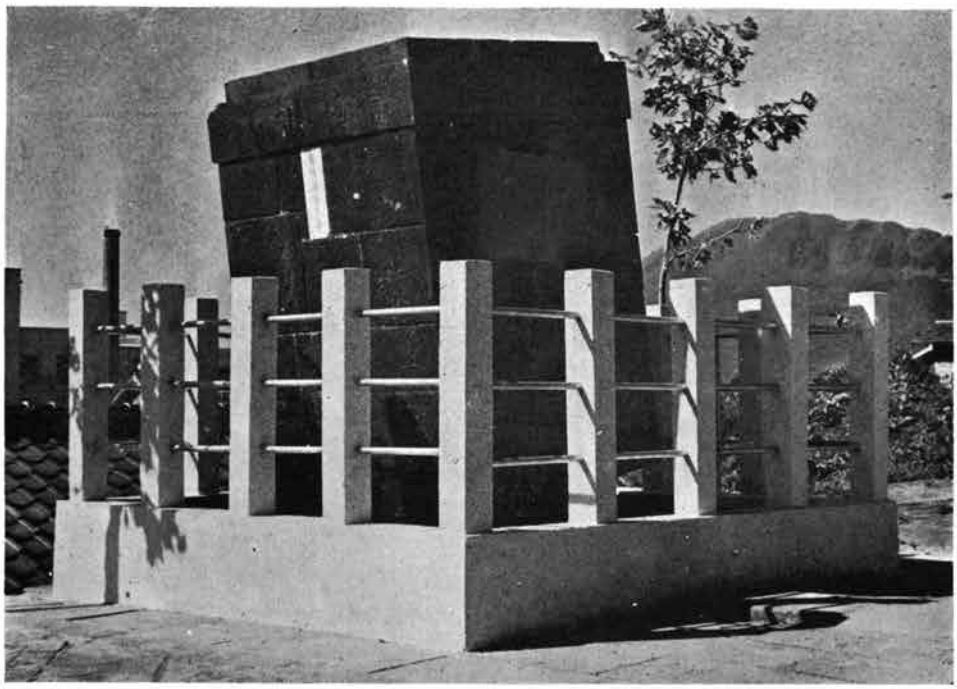


同　上（毎日新聞社提供、昭和30年）

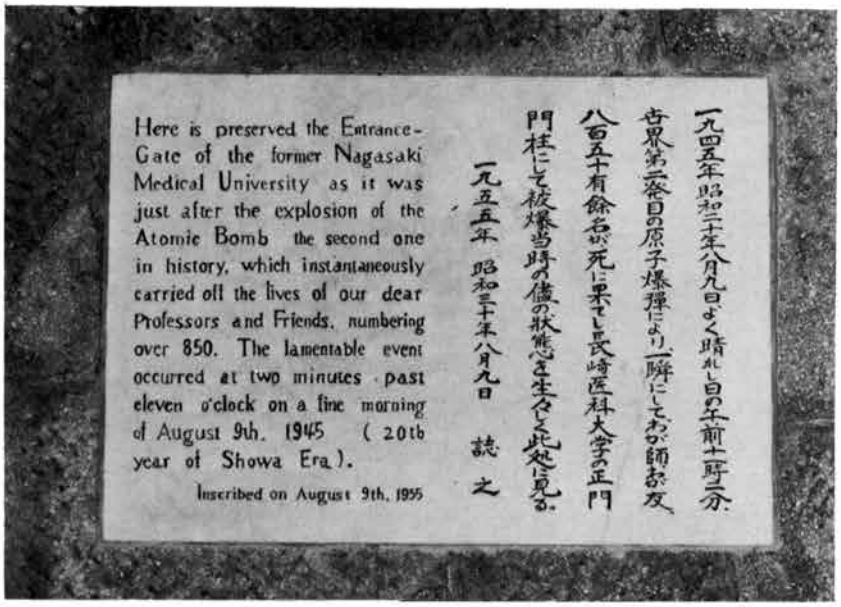
復興途上の長崎大学医学部基礎教室（昭和30年）



復興途上の長崎大学医学部基礎教室（昭和30年）



旧長崎医科大学正門　（向つて左、昭和30年）



同上　門柱碑文

被爆十年

旧長崎医科大学基礎教室跡に祈る遺族

原 爆 十 周 年 記 念 式（昭和30年8月9日）

慰霊碑納骨所蓋板

現在、蓋板の下に重ねてある砂岩（横九〇糎、縦三四糎、厚四・五糎）には「友此処に眠る」と横書に刻してある。被爆後、大学講内にあつた遺体は家族、友人等によつて殆ど処理されたが、一月半後の九月下旬まで残存散在していた遺体は、復員直後の山本繁一郎・吉本博一・米村博臣・張欽南・冨崎十美夫・浜里欣一郎の六氏（いづれも昭和二十年、附医卒）が十一月初までかゝつて処理、且つ協力して墳墓を営み、残余の遺骨は墳墓の前に備えた水槽に収めることゝし、大講堂前の敷石に前記六字を鉄棒と石とを以て刻し、それを墳墓の上に置いて墓標に代えた。その後、七周忌に当り、墳墓は水槽内の遺骨と共に慰霊碑に合葬された。

なお、上掲の蓋板には慰霊碑建設後間もなく永井隆氏が銅板を鋳造、嵌入されたが、何時の間にか持ち去られて今はない。

原爆十周年を迎えて

古屋野宏平

昭和二〇年（一九四五）八月九日、世紀の驚異である原子爆弾が攻撃兵器として、地球上に於ける第二発目の炸裂をわが長崎の上空でしてから、早くも十年の歳月が流れました。この間に我国は漸く独立と秩序とを取戻し、世界の緊張もまた平和に向つて緩みそめ、原子爆災について語りよい時勢となりました。もしこの機を逸すると、いわゆる〝十年一昔〟で私共の記憶は色あせて辿りにくゝなり、感激も昔日のものと化し去るでありましょう。よつて私共相計り、当時の関係方面の追憶を、主として遭難生残者の諸君に記していたゞき、之れを素として記念誌を編むことを企てました。

けだし、一つには尊き犠牲者たる亡き同僚師友への手向けとし、二つには我が長崎大学前史の参考資料に供え、更に又御遺族同窓知友の追憶のよすがにもと念願してのことであります。

一度この企が医学部、薬学部、風土病研究所等関係部局の職員及び遺族会にはかられますと、各自このために資財を提供され、加うるに委員の方々は少なからぬお骨折りをされました。それで斯く美事な完成を見ましたことは、まことに感謝感激のほかありません。八五〇有餘の御霊も大学復興の現状と共にこれを嘉納されることと信じます。

おもえば八月九日、爽かに晴れた朝、先づ警戒警報が出、次で七時すぎ空襲警報となり、九時には之れが解除のサイレンが鳴り渡つたので、人々は常態に復つて講義に、診療に、それぞれの部署について居た。十一時二分、突如怪光一閃つゞく轟音と共に――〝ピカドン〟と言う表現は端的である――長崎市の北西部は潰滅に帰した。爆心から六〇〇～八〇〇米の圏内にあつた長崎医科大学、附属医院、薬学専門部、風土病研究所、看護婦寄宿舎等一連の建物は、八五〇有余名の職員、学

生生徒と共にこの例外であり得なかつた。

本来なら八月は夏期休暇中であるが、当時は非常短期速成で休暇を返上して授業が続けられ、加うるに一九四〇年頃から、いわゆる東亜共栄圏への医師の供給に備えて、臨時附属医学専門部（主事高木純五郎教授）まで置かれたので、犠牲学徒の数は倍増したわけである。

大学の管理部と基礎医学の教室は薬学部と共に、附属医院よりも爆心にやゝ接近した丘上に、木造で建てられていた。看護婦宿舎は附属医院の構内であつたが、木造二階建であつた。之等木造建築は爆発と同時に倒潰し、次で原子の驚く可き高度の熱エネルギー放射によつて燃え出したので、管理部の如きも、山木事務官ほか給仕さんまで、一切の書類帳簿と共に灰となつた。（ちなみに山木君は大金庫の前に席があつたので、一時圧死をまぬがれたらしく、救いを求むる声を国房教授は聞かれたとか。）

基礎科の内藤達男教授（細菌）は教室の廊下で、大倉玄一教授（衛生）は教授室で、清原寛一教授（生理）は教室内で圧死されたことがお遺骨に添つた遺品により確かめられた。わけても池田、清原、永井、金子（直）の四教授、中村（定八）助教授の如きは御家族まで全滅された。

当時基礎科の五つの講堂では講義中であつたから、小野直治教授（医専解剖）、芦塚陽助教授（生理）、梅田薫教授（病理）、斎藤圭一教授（医専生化学）、福田秀信教授（医専衛生）等は教壇に、これを前に学生のお遺骨が、整然とその座席にならんで発見された。第一次大戦の際、独軍の爆弾によりベルダンのざん壕に、銃尖のみを現わして整列埋死した仏軍の話は聞くが、大学の講堂で平和の学徒が、斯かる死をとげたことを私は知らない。

薬学専門部では当時幸にも一、二学年生は熊本県の水俣、山口県の小野田、その他の工場に勤労奉仕で出て居り、三年生は学内で防空壕を掘つていたので、多くは壕中にいたゝめ犠牲が少かつた。たゞ杉浦孝教授（衛生化学）が薬草園で爆死

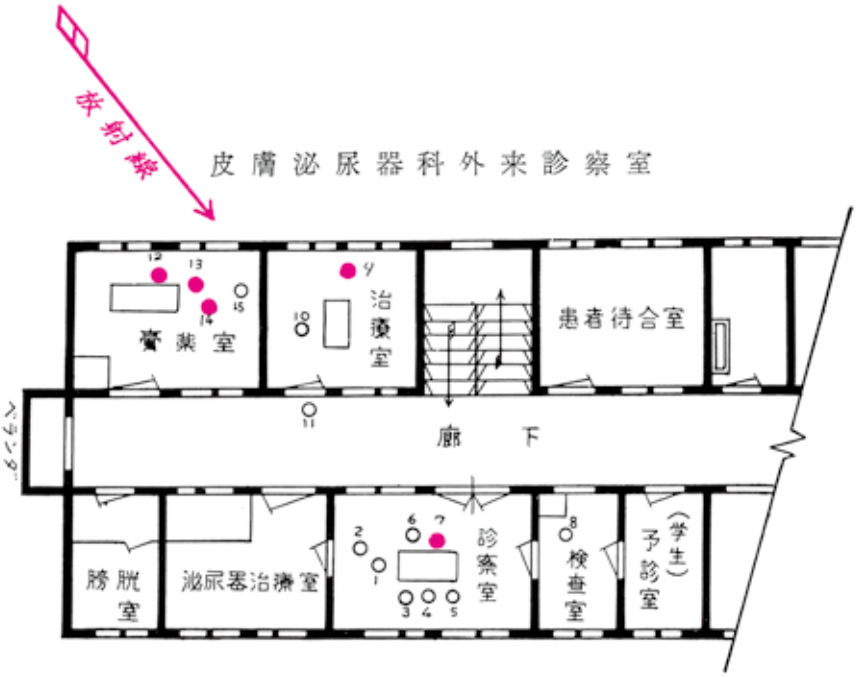
された。

東亜風土病研究所は一九四二年併設され、角尾所長ほか所員の発令もあり、建築費は民間寄附の二十餘万円も調つて、窮乏の最中に漸くのことで資材万端が集つていたが、起工寸前という所で一切烏有に帰した。

臨床科教室（附属医院）は基礎科教室と一〇〇米余の谷をへだてて、やや低い丘に鉄筋コンクリートの三階建が、南向きにて並行していた。各室は中廊下を挾んで南北両側にならんでおり、爆心は北西にあたつた。従つて北側の部屋に居た者は放射線に直面することゝなり、南側の者に比し死者を多く出したが、（附図参照）木造のように倒潰による圧死はなく、僅かに内藤勝利教授（産婦人科）の如く書架の下敷となられたり、山根浩教授（眼科）の如く落下物により重傷を負われた例はある。当日登院していて助つた北村包彦教授（皮膚科泌尿器科）、調来助教授（外科）、長谷川高敏教授（耳鼻咽喉科）古屋野宏平教授（外科）永井隆助教授（理療科）等は皆南側にいた者である。放射線による傷害で斃れられた角尾晋学長（内科）石崎戍助教授（外科）大和田野浩一講師（外科）などの部屋は北側で爆心に向つて窓が開いていた。

基礎科の教授中にも逃れ出て一時助かつた方はあるが、高木純五郎教授は、收容された横穴防空壕内で枕をならべて居た角尾教授も診察したわれ〳〵にも、全く見当がつかず、診断不明のまゝ、たゞ水を飲んでは吐き飲んでは吐きしながら、十一日悶死された。お遺骸はテニスコートに土葬した。国房二三教授（法医）は御自宅で十五日に、祖父江勘文教授（薬理）は佐野保教授のお宅に運ばれて、自ら気管切開を試みんとする程の強い口狭炎性呼吸困難を起して十六日に、亡なられた。臨床科の山根浩教授は破傷風を発して十五日に、角尾晋学長は自ら赤痢を疑われた程の血便下痢に、四十度を越える稽首高熱が加わり二十二日遂に逝かれた。病院の構内に皆で木材をつみ火葬を営んだ。

爆災から復興の当時を回顧すれば、涙と共に思出は次ぎ次ぎと湧いて止まない。



三　階

1. 北村教授　受傷
2. 西森学生　受傷
3. 黒木副手補　無傷
4. 東岡先生　受傷
5. 金子講師　受傷
6. 後田看護婦　脱毛
7. 橋本看護婦　脱毛発熱　八月二十六日死亡
8. 土橋看護婦　受傷
9. 中山助手　受傷　八月末死亡
10. 山崎看護婦　受傷
11. 浜崎看護婦　受傷
12. 肱黒看護婦　火傷　八月十日死亡
13. 若松看護婦　受傷発熱　九月一日死亡
14. 林　看護婦　受傷発熱　九月六日死亡
15. 福島看護婦　火傷

目次

原爆十周年を迎えて……古屋野宏平

被爆記録

一、医科大学の部

原爆遭難記……調来助……一

教室関係

解剖学第一教室……一一
解剖学第二教室……一五
生理学教室……一七
生化学教室……二三
細菌学教室……二六
薬理学教室……三二
病理学第一教室……三八
病理学第二教室……三九
法医学教室……四五
衛生学教室……五一
東亜風土病研究所……五四
角尾内科学教室……五六
影浦内科学教室……六九
古屋野外科学教室……七四
調外科学教室……八二
産婦人科学教室……八四

小児科学教室……九〇
皮膚科学教室……九六
眼科学教室……一〇三
耳鼻科学教室……一〇八
精神科学教室……一一一
物療科学教室……一一四
薬局……一二三
学生関係……一二六
看護学校関係……一六九
二、附属医専の部……一七二
三、附属薬専の部……一九一
沿革……一九一
原爆前後……一九三
体験記……二〇五
四、事務関係の部……二三九

復興記録

復興年譜――医学部関係――……二四九
原爆後十年間の薬学専門部並に薬学部の歩み……二五一

表題題字　古屋野宏平

被爆記録

一、醫科大學の部

原爆遭難記

外科学教室
調　来　助

昭和二十年八月九日、今日も朝から日本晴れの上天気で、見渡す限り雲一つない。昨夜は防空当直で病院に泊つたが、幸いに何事もなく無事にすんだ。ホツとしたさわやかな気持で六時起床、六時半に同じ当直の内藤（達）教授、梅田教授、医専木戸教授、薬専杉浦教授達と調理所の二階で朝食をとる。

雑談の暇もなく、七時に空襲警報が発令された。直ちに当直学生を本館前に集め、欠席の高瀬教授に代り簡単な点呼を行つて、各自部署につく。敵機の音は聞こえない。九時に空襲警報が解除され、引き続き警戒警報に入つた。ゲートルのまゝ第二中講堂で医専三年の講義をすまし、帰りに中講堂の前を通つたら、角尾学長は十時を過ぎたのに未だ熱心に講義の最中であつた。

自室に帰つて徳永君（広島原爆で死亡）の論文を書いていると、突然ばたたましい爆音が耳に入つた。時計を見ると丁度十一時、すぐに立ち上り普通の衣を洋服に着換え、取るものも取りあえず部屋を出ようとすると、ドアの所で「ピカツ」と青白い光が目に映つた。「やられたツ」と直感して手洗台前の部屋の隅つこにうずくまる、同時に「ボン」と陰にこもつた低い音がして、「ドドドツ」と激しい家鳴震動、「ガラガラツ」という物の壊れる音、頭といわず背中といわず、何か落ちて来て体にぶツつかる。「アツ」という間にすつかり埋もれて了つた。だが背中の物は案外に軽い。思い切つてそつと立つてみたら、わけもなく立ち上がれた。目を開くとあたりは真の闇で何一つ見えない。又かゞんだ。「ザアーツ」と大雨のような音がする。多分噴き上げられた土砂の落ちる音であろう。暫くじつとしていると、この音も静かになつたので、又立上つて目をあけて見た。今度は夜明けのようにボンヤリと明るい。辺りを見まわすと、机も戸棚もベツドも、衝立も、みんな横倒しに倒れて、その上に天井が覆いかぶさり、足の踏み場もない。机の前に行つて見た。今まで書いていた原稿も、机の上に置いてあつた鞄や時計、本なども何処にふつとんだかさつぱり判らない。足許に表紙のちぎれた手帖が一つ見つかつたので、ポケツトに捻じ込んだまゝ急いで部屋を出た。廊下も階下も落下物で雑然としている。然し幸いに難なく階下におりることができた。東の出口に来ると、二三日前に手術したばかりの虫垂炎の女が、男に助けられながらフラ〳〵して立つている。見ると別に怪我はない。「大丈夫だ。私についておいで」と叫びながら調理所裏の防空壕に走つた。汽罐庫はつぶされ、中で「シューシュー」と蒸気のもれる音がする。前のタタキの上には人が二三人倒れて動かない。窓の枠にぶら下つ

て死んでいるものも居る。何だかさつぱり訳がわからない。

調理所の角で古屋野教授と出会つた。額に血条が見えるが、いつものようにニコニコしておられる。「御無事で」と挨拶したまゝ防空壕にとびこんだ。中は人が一ぱいで、よく見ると調外科の荒木看護婦がいる。左前腕に大きな傷を受けていたので、ハンケチを出してくくつてやつた。

壕を出て本館に向つた。人がなだれ出て来てとても入れそうにない。ためらつていると調外科の佐藤君(仮卒業生)が片手に杖をつき、片手に佐藤看護婦を支えながら出て来た。皆の安否を尋ねると大したこともなく先に待避したとの答えに安心して、二人を励ましながら裏山に登つた。

テニスコートではまつ先に長谷川教授に会つた。白衣を着たまゝフラフラしている。眉間に傷があるが大したことはない。次に古屋野外科の石崎助教授が、顔や腕一面に火傷を受け、這いながらやつて来た。「調先生」と悲しそうな声で呼ぶ。「何処にいたんだ」と聞くと、「自分の部屋にいました」と力なく答える。長谷川教授と一緒に待つているように云いおいて、更に東病棟に向つて走つた。高南に近ずくと木戸君が元気な笑顔で上つて来た。「よかつたナ」と互に無事を喜び合つているところに、「調先生」と泣き乍ら村山婦長が駈け上つて来た。顔と前腕に火傷を受けているが、石崎君ほどではない。「やア、よかつた〳〵。みんなで一緒に上の方へ行こう」と村山を助けながら引返したが、長谷川教授も、石崎君も、最早テニスコート附近には見当らなかつた。

避難者達はなだれをうつて、金比羅山の坂を登る。昨日まで青々と繁つていた甘藷畑は、茎も葉も何処へとび散つたのか、丸裸になつて地肌を露はしている。樹は倒れ根元から折れて、葉は一枚もついてない。中腹に建ててあつた感化院は倒壊して已に一部から火を発していた。後をふり返ると、病院も町家も、基礎教室も、木造家屋は全部潰れて、既に濛々とした煙に包まれている。友を呼ぶ声、わめく声、救いを求める声等々、辺りは阿鼻叫喚の巷と化して凄惨この上もない。丸裸となつて焼け爛れたもの、顔は黒く煤けて目ばかりきよろつかせているもの、衣服がずた〳〵に破れちぎれて、俊寛僧都のような格恰をしているもの、怪我で血達磨のように紅に染つたものなど、まるで地獄絵でも見るようだ。

丘の中腹にかゝつた頃、右下の畑の方から自分の名を呼ぶ声がした。角尾学長が負傷して山へ上つて来ておられるらしい。村山達には先に行くように命じて、段々畑を横つ飛びに声を頼りに走つた。学長はと見ると、一番下段の畑に筬島助教授、高橋講師、前田婦長たちに看護られながら、仰臥して居られたが、顔は蒼白でシャツは鮮血に染まつている。「怪我はどこです?」ときくと、「ウン、左手と左足を少しやられた」との答えだ。声に力がない。「しつかりして下さい」というと、「大丈夫だ」と云はれる。左大腿の傷は、ガラス破片による切創で、少し出血していたので手当りの三角巾で包帯し、シャツがいかにも気持悪そうだつたので、自分のノータイを脱いで素早く着替えさせてやつた。

火の手はます〳〵勢を逞しうし、風にあふられた火の粉がさかんに飛んで来る。差当り学長を丘の上に移すことにし、一番元気そうな高橋君に背負はせて、自分が道案内となり丘を登つた。途中右往左往する遭難者に救いを求められ、「お母さん」とか、「水を下さい」とか、「助けてー」など喚めき叫ぶ声に耳を塞ぎながら、上へ〳〵と畑の畔を辿つたが、学長は「動くと脳貧血が来て吐きたくなる」と云つて時々嘔吐を催

される。中々道ははかどらない。炎上中の感化院を迂廻して丘の頂きについたのは午後一時頃であつたろうか、時計をなくしたのでさつぱり時刻がわからない。

丘の上につくと学長を丸裸になつた畑の上に寝かした。風が強くて寒そうだ。誰かゞ布団を一枚持つて来て呉れたので、二つ折にしてそれに学長を移した。間もなく角尾内科の大倉君も元気でやつて来て、芋の蔓で擬装して呉れた。

この頃風が変つて、山から下の方へ吹き出した。煙が来なくなつて下界の景色が手に取るように見える。看護婦寄宿舎、病院廊下、基礎教室、大学本部など火に包まれてメラ〳〵と燃えている。窓から焔を吹き出している病棟もある。時々大橋兵器の方に当つて火薬の爆発する音が聞える。町は一面火の海で、「ボウ〳〵」、「パチパチ」という焼け音が丘の上まで響いて来る。太陽は赤茶けたいやな色をして、人の顔も夕焼に染んだように、黒ずんだ赤灰色を呈している。誰かゞ救急袋を持つて来た。中に沃丁のアンプレがあつたので、学長の傷の手当をした。頭に二ケ所、左大腿に四ケ所、手に二ケ所、相当大きな切創があり、背中は一面のガラス傷だ。痛いのを我慢して貰つて、全部に沃丁を塗つた。傷からいうと決して心配になる程の傷ではない。最早嘔吐も来ず、気分もよくなり、顔色は次第に生気を取り戻して来た。

午後三時頃、風が又変つて時雨みたいな雨が降り出した。山上の負傷者は雨と風とで、皆寒そうにふるえている。自分は暇を見て、谷を越え向ふの丘へ弘治（私の次男）の行方を探しに出かけた。山陰に白い布団にくるまつた石崎君が横たわつていたが、一人では運ぶこともできない。路々には手もつけられないような重傷者が何人となくいて、殆んど声を出す元気さえない者が多い。学部四年の奥君らしいのが崖下に横たわつていたが、失神したのか呼んでも答えない。草から垂れる雨垂れが、顔中に落ちかゝつても払おうとしない。もう間もなく駄目になるだろう。医専三年の上野君は頭に包帯していつも程元気がないが、それでも甲斐々々しく友達の介抱をしていた。自分は「弘治」の名を呼びながら精神科裏の山までさ迷い歩いたが、何の返事もない。調外科の日高君（仮卒業生）も協力して探して呉れたけれど、矢張り駄目であつた。多分講堂の下敷となつて、そのまゝ焼け死んだことであろう。

やがて学長のいる丘の上から自分を呼ぶ声がした。「永井先生の出血が止まらないから来て下さい」という。走つて帰つて見ると、永井助教授は畑に横わり、左耳の前に無数の「コツヘル」がぶら下つている。施君（物療科助手）に代つて止血を試みたが、血管が深いので却々挾めない。仕方なく圧迫タンポンを施し、その上から縫合して止血した。麻酔薬なしの手術に顔色一つ変えない永井君の忍耐には感服のほかはない。手術がすむとすぐに立上つて助手及び看護婦の一隊を引きつれ、丘を下つて行つた。学長の処に帰つて見ると、別に異状はない。誰かゞ南瓜を割つて造つた容器に氷の破片を入れて持つて来た。学長も咽がかわくのか、美味しそうに食べて居られた。

午後四時頃だつたか医専三年の香田君が、高木教授を背負つて登つて来た。何処にも怪我はないが、顔色が悪く元気が全くない。聞けば解剖の教授室で遭難し、幸に逃れ出て運動場を横切り、浦上天主堂の方へ這つて行つたが、川辺についたとき力が尽きて歩けなくなつたところを、香

田君に助けられたのだという。学長の側に寝かした。続いて薬専の清木教授がパンツ一つで杖をつきながら上つて来た。壕掘りの最中に遭難し、幸い壕の中にいたので爆死は免かれたが、飛んで来た材木で腰を強打されたとのこと、なるほど火傷も創傷もないが、随分痛そうに見える。

夕方江上君（耳鼻科助教授）と川本君（薬局）とが正装してやつて来た。二人とも滑石にいたため難を免れ、火中を抜けてよう〳〵たどりついたとのこと。救急材料を持つて来て二三人治療していたが、その内又姿が見えなくなつた。

雨もやみ、辺りは夕靄に包まれはじめた。風は少し凪いだようだ。下界は火事が益々猛烈となる。夜に入るにつれて火の赤さが増し、見える限りは火の海だ。金比羅山を越す者もと絶え、丘で野宿する者も大体一定の位置に落着いた。学長、高木教授等は、感化院上の丘でそのまゝ一夜を明かすこととなり、学内関係者及び一般負傷者の一部がその周囲にたむろした。その他永井助教授等は崖下の小屋に、皮膚科の満島婦長等の一行は穴弘法寺の右下方の畑の中に、看護婦の一団は穴弘法寺の前庭に、学生及び看護婦達の一群は穴弘法寺下の倒壊民家の庭に、それ〴〵一かたまりとなつて、励まし合いながら暗い寂しい夜を迎えた。

夜に入ると風は全く凪ぎ、空は晴れ渡つて星が降るようにまたゝいている。月がなく、辺りは真暗でさだかには判らない。驚愕と緊張とですつかり忘れていたが、昼めし抜きの腹が急に鳴り出した。皆も嘸空腹を覚えていることだろうと思うと、可哀そうで堪らない。

丁度その時、町の救護本部から乾パンの箱が届いたので、自分はこれを抱えて各屯所に配給してまわつた。昼間見定めていた小径を頼りに、人の影を探し求めつゝ小袋を一つずつ渡して行つたが、暗い露天に淋しくしょんぼりと起臥している様を見ては、胸がつまつて慰めの言葉一つかけることができない。問はれるまゝに友の情報を伝えつゝ、最後に穴弘法下の民家にたどりつくと、此処では学部四年の安東君が隊長となつて、大きな釜に白米の御飯を炊いていた。それを四、五人の元気な和服姿のお嬢さん達が手伝つている。聞くと三菱の挺身隊の人達だそうで、思はず感激させられた。火があるだけに此処だけは明るくて暖い。

学生達と遭難の模様を語り合つている内に、祖父江教授が近くの畑に一人動けないでいることが判つた。名を呼びながら探し求め、肩で支えて学生達の所まで連れて来た。傷は軽いが、高木教授と同じように、とても苦しいらしい。莚をしいて火のそばに寝かし、後のことを学生達に頼んだ。

やがて御飯ができたので、結びをつくつて乾パンの箱につめ、安東君と二人で、それを配給しながら学長のところに引返した。道はます〳〵暗く、五、六丁の処が三十分以上もかゝつたろう。もう十時をまわつたかも知れない。皆は黙つてはいるがまだ寝つかれないらしい。学長にお結びをさし上げると、大変おいしいそうに一つ二つ召し上がられたので、この分なら大丈夫だろうと安心した。下界の火事は大分下火になつたが、赤い火で焼け残りの窓がすいて見え、昔華やかなりし頃の長崎の街は、こうでもあつたろうかと想像されるほど美しかつた。

夕食が一段落を告げたので、元気な者一同崖下の畑に集り、火を焚き暖を取りながら明日なすべき事ども協議した。話は却々尽きそうもないが、夜も深くなつたので一同散会し、自分は永井君の勧めに従つて、物

療科急設バラック内の藁の上に身を横たえた。

天を仰ぎながら、静かに今日一日のことを追想すると、まるで夢のようである。ピカッと光ると共に世は一瞬にして混乱の巷と化し、無数の人々が傷つき倒れ、或はそのまゝ死んでしまった。自分達は漸うにして難を逃れ、この山上に駈け上って来たが、病院も市街も焼けて了い、帰るべき転場もなく、明日から一体どうしたらよいのか。今日会った学長、古屋野教授、高木教授、長谷川教授、祖父江教授達は別として、他の教授達の安否はどうか。弘治は基礎で講義中だったに違いないが、うまく逃げてくれたかしら。精一（私の長男）は大橋兵器に行っていた筈だが、これはどうだったろう、無事でいてくれゝばよいが。それにしても疎開先の滑石では、色々と心配していることだろう」等と、頭は走馬燈のようにぐる〳〵まわって却々寝つかれない。

その中敵機が来て道の尾方面に一回爆弾を投下した。小さいものらしい。又頭上にも一つ空中で爆発する小型爆弾を投下したが、別に何の異状もなかった。自分は暫く耳をすまして警戒していたが、その後は敵機の襲来もなく、夜は静かに更けていって、何時とは知らず眠りにおちた。多分午前一時頃だったと思われる。』

以上は私が当時心覚えに書き留めておいた遭難手記の一節である。手記はなお続いているが、余り冗長に亘るので要点だけを拾って見よう。

学長は翌日西山の御自宅へ担架でお連れするよう勧めたが、肯ぜられないので止むなく大学病院焼跡へ案内した。そこへ折りよく元気な古屋野教授の顔が見えたので、学長代理として復興に努力するよう後事を託され、その後二三日間古屋野外科裏の横穴防空壕で、高木教授、山根教授、石崎助教授等と共に過された。然し、こゝでは充分な治療が施せないので、古屋野教授に図り、私は十日午後疎開先の滑石に帰って町内会長に交渉し、適当な救護所（滑石大神宮の拝殿と岩屋クラブ）を借り受け、十二日夜学長と山根教授を大神宮の拝殿に、学生、看護婦等三十余名を岩屋クラブに收容した。負傷者の予後は極めて悪く、山根教授は十五日に破傷風を併発して鬼籍に入り、学生や看護婦達も約半数は次々に後を追って死んで行った。

当時滑石郷には、数百名の負傷者が入り込んでおり、これらを木戸助教授、調外科看護婦九名、及び医専三年生数名と共に巡廻診療し、一時は目のまはる程の忙しさであったが、一週間前後でその大半は死亡し、私の長男も大橋兵器で火傷を受け、元気で帰っていたのが、十六日正午に永眠した。

学長は滑石大神宮拝殿の畳の上で、一時大いに元気を恢復されたが、十日目頃から所謂原子爆弾症が増悪し、二十二日午前十時、令夫人（西山在住）、令弟（現昭和医大の角尾滋教授）、古屋野教授、其他教室員諸君に看とられながら、眠るが如く他界された。「巨星地に墜つ」。これは学長の御臨終に列席していた私の偽らざる感想である。実に学長は敬虔なる学者としても、敏腕なる政治家としても、共に申し分なき天分を持たれ、我が長崎医科大学を雙肩に担って、教育界に重きをなされていた。若し学長が無事であったら、長崎医大の復興に更に大きな役割を演ぜられたであろうことは、強ち私一人の謬見ではないであろう。

負傷者達の救護も一段落ついたので、私は家族一同と浦上解剖学教室焼跡を尋ねて、次男の遺骨を拾い、九月初めから愈々大学復興の大事業に

参画しようと思つていた矢さき、私自身も亦原子病にやられて病牀に呻吟する身となつた。約一ヶ月間生死の間をさ迷つたが、大学再建の緒につくべく、未だ癒えぬ身を大村海軍病院に運んだのが九月二十六日、米軍衛生官ホーン大尉の厚意により、元新興善小学校を貰いうけて、こゝに長崎医大附属病院建設の業を興したのが十月四日、かくて我々は古屋野新学長の統率の下、全員一致協力して本学の再建に邁進し、幸いに偉大なる成果を收めつゝ今日に至つたのである。

それからすでに四年余り、グビロガ丘の頂には古屋野学長の麗筆になる大理石の慰霊碑が聳え、坂本町、岩川町、浜口町、その他見はるかす浦上一帯の焼野原には、今や陋屋ながら復興の新築が建ち並んで、車馬の往来、人の動き、最早や四年前の面影は見るべくもなく、再建日本の姿は我が長崎医科大学の復興と共に、愈々活潑となりつゝあるのを覚える。

「わが大学に永遠に幸あれ」と祈りつゝ原爆思ひ出の筆を擱く。（昭和二十四年十一月二十三日、原爆遺族会の集りの日）

× × ×

以上の原爆遭難記で被害の大要は会得出来ると思うが、尚書き洩らした点につき、私の知つているだけのことを記してみよう。

当時長崎医大にいた職員及び学生の総数は詳らかでないが、原爆死亡者は、グビロガ丘の慰霊碑にも刻まれているように、八百五十余名の多きに達した。そのうち基礎教室方面にいたものは死亡率が殆んど一〇〇%で、助つたのは雨天体操場裏の横穴防空壕で仂いていた小使三名位なものであろう。之に反し、病院の方は私が調べたところでは死亡率が四二、三%で、半数以上は助かつている。これは全くコンクリートのお蔭と云つても差支ないと思う。

当時在籍の医大教授は基礎九名（生化学欠員）、臨牀一〇名、風土病一名、合計二〇名で、基礎では病気のため鳴滝の自宅で静養中の竹内教授を除き、残りの九名が犠牲となり、臨牀では出勤者七名の中、角尾学長（内科）、内藤教授（産婦人科）、山根教授（眼科）の三名が死亡、古屋野、北村（現東大皮膚科教授）、長谷川（現大阪市立医大教授）、調の四教授が幸運にも九死に一生を得、高瀬教授は北高湯江、影浦教授は諫早、佐野教授は堂茶屋に居て被爆を免れられた。他界された教授方の当時の模様を略記すると、概そ次の通りである。

角尾学長（内科）

十時過ぎまで中講堂で講義、其後外来に行つて新来患者（女、即死）を診察中に被爆、頭、背中一面、左大腿、左手等に硝子傷を負われ、黄副手、物療科の友清技術雇及び施副手補等に助けられて洗濯所裏の段々畑に仰臥中、筬島助教授、高橋講師、前田婦長等がかけつけ、私も呼ばれて傷を診察した。其後感化院の丘で一夜を明かされ、十日朝大学病院焼跡に下りて古屋野外科手術場裏の横穴防空壕に收容され、十二日夜トラックで滑石の岩屋クラブに行き、十三日早朝リヤカーで滑石大神宮拝殿に移られた。其後の経過は

十三日　左手背の創化膿しリンパ管炎を併発す、熱三八度八分。

十四日　リンパ管炎は治療により少しく軽快したるも熱下らず、軽度の下痢加わる。

十五日　熱三九度〇分、下痢続く。

十六日　下痢止む、但し解熱せず、咽喉痛を訴う。口内炎を発し食物摂取は疼痛のため困難となる。

十七日　創は乾燥して汚色を呈し、皮膚に光沢なし。

十八日　熱四〇度五分、食慾次第に減退す。

十九日　熱四一度〇分となり、口内炎は益々悪化す。

二十日　全身に皮下溢血斑を生じ全身倦怠甚し、熱下らず。

二十一日　午後五時頃より意識少しく混濁し来り、胸内苦悶を訴う。

二十二日　意識混濁し、一般状態悪化して午前十時遂に鬼籍に入る。

同日午後に遺骸を浦上に運び、外来本館の玄関階段に安置して通夜を行い、翌日告別式を行った後、テニスコートで荼毘に附した。

学長は滑石大神宮に御病臥中、汗が出たら熱が下ると思うが汗が一寸も出なくて困るとか、今度の爆弾は普通と違つて何かほかにある、爆弾プラスXだとか、或は奥様に向つてしみじみと、病気が癒つたら茨城に帰つて開業でもしようねなどと云われたが、その言葉は今もありありと耳に残つて忘れることが出来ない。又自分のことは放つて置いて、側に寝ている山根教授の身辺を何かと気遣われ、あゝせよ、こうせよと指図されたことも、到底我々には出来ない御仁慈の発露と深く感銘している次第である。

山根教授（眼科）

眼科教室の便所から廊下に出たところで被爆された由、私が初めて教授を見たのは十日午前十時頃、精神科下の狭い横穴防空壕内に寝て居られる時であつた。学生達と一緒に教授を外に出してみると、顔面から下顎部にかけて縞の着物をさいた布で包帯がしてあり、之をとると下顎部に大きな裂創があつた。簡単な消毒を行い包帯を換えて、強心剤一筒を注射した。

其後三日間外科裏の防空壕に收容、十二日夜角尾学長と一緒に岩屋クラブに運び、十三日早朝滑石大神宮拝殿に移した。其後の経過は

十三日　意識明瞭、発熱なく、化膿も殆んど認められず、一般状態も漸次回復しつつありしに、本日午後より軽度の牙関緊急あらわる。

十四日　牙関緊急高度となり、全身痙攣発作を見るに至る。角尾学長の命により学長所持の破傷風血清四〇瓩を注射す。

十五日　痙攣発作は次第に頻数となり、食事を摂る能わず、意識次第に混濁し、午後七時過ぎ遂に鬼籍に入る。

十四日だつたが、自ら死期を悟られたと見えて酒を所望されたが、戦争中のこととて酒がなく、止むを得ず教授の言葉に従つて五%アルコールを作つて差上げた。しかし喉頭痙攣のためにどうしてものどを通らない。前田婦長に頼んでネラトンを食道に挿入しようとしたが、これも痙攣が起るので自ら取り去つて了い、どうしても駄目かねと弱々しい言葉を洩らされたのは誠に痛ましかつた。夕方になると村の人達が参詣に来て鈴をならしたが、其度毎に強い痙攣発作が起つて苦しまれた。これも痛ましい思出の一つである。

内藤教授（産婦人科）

二三日の間は色々のデマがとんで、生死の程も全く判らなかつたが、

十二日午後、外科東病棟（現放射線科教室）で古屋野教授と事務打合せをやつている時、学生の松瀬君が「婦人科病棟の廊下に内藤先生らしい屍体がある」と報告して来た。同時にポケットにあつたと云う万年筆、手帳、シガレットケイスなどを持参したので、みると手帳は電車の定期で、明らかに「内藤勝利」の名が記してあり、間違ないものと思われた。早速かけつけてみると、婦人科一階の廊下は焼け残つていて、天井から大きな梁が落ち転がつている中に、上着、巻ゲートルをつけて海老のように曲つた屍体があつた。よく見ると皮膚は黒ずみ、痩せていた同教授とは思われぬ程ブクブクに太つて、すぐ側の白壁には手型の血痕がついている。恐らく歩いて逃げる途中梁が頭上に落下して頭蓋骨折並に脳挫傷を受け、失神したまま死亡されたのであろう。全身が腫れていたのは、死後二日を経過したため腫脹したものと思われた。

高木教授（解剖）

大要は原爆遭難記の通りであるが、九日夜を感化院の丘で明かした翌十日、角尾学長と一緒に大学焼跡に下し、古屋野外科手術場裏の防空壕に收容した。十一日午後は教授の希望により、学生の担架隊を召集してお宅へお連れしようとしたが、一般状態が悪く、到底輸送には耐えられないと思われたので、其儘佐野教授にお願いして壕内で治療し、次記の如き経過で十一日夕方他界された。

九日　午後三時診察、胸内苦悶を訴え、脈搏細小頻数、顔面蒼白、熱なし。

十日　一般状態依然として不良、回復の徴なし、食慾全くなし、流動食も摂取せず。

十一日　午後に至り不安状態を呈し起臥常ならず、脈搏益々微弱となり、呼吸も促迫す。但し意識は明瞭なり。強心剤投与、其他種々の治療も加えたるも、午後七時遂に鬼籍に入る。

池田教授（解剖）

永らく行方不明のまま殆んど忘れられていた十一月、不思議にも大学の慰霊祭が経専で行われた日に、ミイラ化した教授の頭とズボンのベルトが祭場に持ち込まれた。顔面には教授の面影がありありと残り、ベルトには片仮名で書いたイケダの三字が判読された。屍体は山里小学校附近の丘にあつたそうで、近所の人の話を聞いても、生前に「自分は医大のものだ」と云つて居られたとか、三カ月を経過した慰霊祭の日に、屍体となつて再び大学に帰つて来られるとは、誠に奇縁と云うべきであろう。

梅田教授（病理）

教授も暫らく行方不明となつていたが、数日後病理講堂の教壇のあたりにあつた半焼屍体の傍から煙草の缶が発見され、同教授が平素マドロスパイプと缶を携えて居られたところから、教授の屍体であることが判つたとの事である。これも一つの奇縁と云つて差支ないであろう。

国房教授（法医）

十日朝基礎の焼跡を巡回した時、法医の教授室と思われる焼跡に半焼

屍体が一つ転がつていた。私は確かに国房教授に違いないと思つて合掌して其処を去つたが、十一日に大学に行くと、同授教が皮膚科の地下室に收容されていることを聞きかけつけてみた。打撲傷だけで何処にも傷はない。奥様がつき添つて缶詰の空缶に水を入れ頭を冷して居られた。熱が高くて焼けるようだとの事だつたので、私は大きなバケツに清水を充たして持つて来てやつた。其日は元気をつけて其儘別れたが、夕方学生の担架で自宅に帰られ、佐野教授の治療を受けつつ十六日に死去されたとの事である。

後で聞くと、教授は九日朝裁判所に行き、十時半頃大学に帰つて山木事務官の部屋で話している時に被爆し、家屋の下敷となつたが漸う這い出して焼死を免れたとの事であつた。

祖父江教授（薬理）

原爆当日のことは既に前に書いたが、其後螢茶屋の佐野教授宅に引取られ、手厚い看護を受けながら十六日夕方死亡された由を聞いた。

仄聞する所によると、教授は八日の夜行で学生と一緒に東京に帰られることになつていたが、広島の被爆で切符を売らないので止むを得ず翌日に延ばし、学生は八日朝十時の汽車でたつたが、教授だけ夜行で行くこととなり、自室のソファーに横たわつていたところを被爆されたとの事である。尚八日に電報が打つてあつたので、遺族の方々は永らく教授の死亡を信じられなかつたと云う話を耳にした。

金子教授（風土病）

十日朝本原町の神学校附近で路傍に倒れて居られる由を聞いたので、かけつけて呉れた南高有家町青年団の人達に頼んで大学に收容しようとしたが、行方が判らないと云つて其儘引返して来た。其後教授の消息は全く判つていない。

清原教授（生理）

内藤教授（細菌）

大倉教授（衛生）

以上の三教授は皆教室内で被爆、其儘焼死されたので、遺骨も判然としないままに打ち過ぎた。誠にお気の毒の至りである。

× × ×

建物の損害は今日大部分修理され或は取り壊されたため判然としなくなつたが、基礎も病院も木造建築物は全部倒壊した後焼失した。内科と耳鼻科との中間にあつた物療科などは、疎開のため解体してその材木が積み重ねてあつたが、それまで綺麗に焼けて了つた。

コンクリート建の部分は内部が焼けた所と、破壊されただけで焼け残つた所とがある。基礎では所々にポツンポツンとコンクリート建の部分が立ち残つていたが、生化学実習室の一部を除いた外は全部内部まで焼けていた。此等の大半は既に取り壊されて、今日残つているのは図書館

の書庫と生化学実習室の二つだけである。書庫は残るだろうと思つて教室の書籍を全部持ち込んだにも拘らず、窓が開放されていたためこれも焼けてしまつた。

病院は大部分がコンクリート建だつたので、倒壊は免かれたが内部は殆んど焼けて、唯部分的に破壊だけに止つたところが見られるに過ぎない。一番焼け方の少なかつたのは眼科と精神科で、書籍なども大部分残つたのは幸であつた。しかし顕微鏡などは何時の間にか姿を消して紛失し、使用に耐える器械は一つもなく、長崎医大の全体が烏有に帰したと云つても敢て過言ではない。誠に惨憺たる状態であつた。

（昭和三〇、九、三）

▽教室関係△

解剖学第一教室

当時の教室員は、国友鼎名誉教授、池田吉人教授、佐藤純一郎助教授、中村定八助教授（休転中）大原裕専攻生、高木直也副手、技術雇として小川作郎氏、研究補助の小田文子嬢、傭人の間ノ瀬ツタエ、松本利子嬢それに清掃婦の深井ハツ氏であつた。

被爆時の状況

池田教授、小川、間ノ瀬、松尾、深井の諸氏は教室で、中村助教授は山里町の自宅で高木氏は竹ノ久保町の自宅で被爆す。

国友名誉教授、佐藤助教授、大原専攻生、小田補助員は所用のため当日不在であつた。

池田教授の遺体は十一月経専に於ける追悼式当日、山里小学校上の墓地より発見され、深井氏の遺骨も確認さる。他の教室員も教室内で殉転。

故 池田吉人教授略歴

正四位勲三等医学博士　解剖学教授。

明治三十三年十月十七日兵庫県に生る。
大正十四年三月東北帝国大学医学部卒業。
大正十四年四月同学助手に任ぜられ解剖学を専攻す。
大正十五年四月東北帝国大学助教授に任ぜらる。
昭和三年三月解剖学の研究のため欧米に留学同五年十一月帰朝す。
昭和十二年八月長崎医科大学教授に任ぜらる。
昭和十八年陞叙高等官一等
昭和二十年八月九日大学において原子爆弾の爆発により爆死転に殉ず。

主なる研究題目

水晶体の再生に関する発生理学的研究

死亡者の官職並びに氏名

官職	氏名
教授	池田吉人
助教授	中村定八
副手	高木直也
技術雇	小川作郎
傭人	間ノ瀬ツタエ
〃	松尾利子
定婦	深井ハツ

亡き師を懐ふ

解剖学第一教室　佐藤純一郎

(一) はじめに

間もなく八月九日が巡つて来る。

恩師を、同僚を、学生を、幾万の市民を、そしてありとあらゆるものを、文字通りに灰燼に帰せしめた、呪はしい原爆の記念日である。

歳月を重ねて今年は早や十周年。追悼記念誌の編纂があるといふ。教室の思出を誌せといふ。

締切の日を気にしながらもペンを執る気持にはなれない。

誌すべく何物も無きが如く感じ、記すべくあまりにも多過ぎるが如く思ひ、また、それにもまして追想すること自体が心の古傷を疼かせるがためである。

受けた打撃はあまりにも強く、その哀しみはあまりにも深すぎるの故である。

(二) 被爆

あの呪はれた日には、私は戦病死した弟の遺骨受領、葬儀などのために諫早の田舎に居つた。

空高く飛去る敵機を、空襲に馴れきつた身には「またか……」と左程気にもとめずに見送つたその敵機が悪魔の使いであつたのだ。

馳せつけた自分が見出したものは、跡形もない廃墟であり、瓦礫のみとなつた教室であつた。

そして尚も燃えつゞける書庫の煙を唯呆然と見つめるのみであつた。

蠢く被災者たちの焼け爛れ、切り裂れた肉片は襤褸布を身に纏つたかの如く、蒸焼になつたであらう焼屍体の群は豚の丸焼を想はせた。

溝という溝を埋めつくした屍体の数々、

裏山の畑に声も無く蹲つた頻死の人々と屍体、屍体。

狂気の様に捜し求めたが師の姿は遂に無く、教室跡に残されたものは触れば音もなく崩れ去る骨灰のみであつた。

私は深い哀しみとともに思い出す。

廃墟と化した病院の床下にもぐり、苦痛を訴へる学生達に添寝して、たゞ水を与へるしか術を知らず、次々と息絶ゆる人々を見守るのみであつた当時を。

苦痛を讃美歌にまぎらして居た看護婦たち、その唱声も細くなり、やがては消えていつたことを。

そしてまた、息絶へる際の苦しみの叫びを。

あの当時の哀しみを身に泌みて味はつた人、家族を喪ひ、身に傷しながらも尚、献身の誠を惜まなかつた人が此の学園に幾人あつたといふのだらうか。

当時を憶ひ、心からの畏敬の念を捧げうるものとして、古屋野学長、高瀬前学長、佐野保教授等僅か四、五名を挙げうるにすぎないのは淋しい限りである。

㈢ 教室の人々

被災直前は当教室もお多分に洩れず、教室員は次々に召集されて軍務につき、残る者は極めて僅かであつた。

即ち、国友名誉教授、池田吉人教授、休職中の中村定八助教授、それに助教授としての私、戦傷を受けて帰還したばかりの高木直也君、専攻生の大原裕君、技術雇の小川作郎君、教室補助の間ノ瀬ツタエ君、松尾利子君、小田文子君、清掃婦の深井ハツ君であつたが、之等の中、原爆を免れた者は当日大学に居合せなかつた国友先生、大原、小田両君と私だけにすぎなかつた。

後日、幸にも遺骨を確認し、收容し得たものに池田教授と深井君のそれがあつた事は、せめてもの慰めとすべきではあらうが、他の人々の遺骨は勿論、一片の消息だに知り得ないのは遺憾の極みである。

遺族の方々も原爆で死絶へたのであらうか。

㈣ 池田教授

池田教授は昭和十二年、東北大学から転じて国友名誉教授の後を継がれた明朗な先生であつた。

先生の教授としての講義を受けた第一回の学生の一人が私であり、私は卒業と同時に先生の教室に入つたのであるが、学生時代の選習生としての時期も加へると八年間の薫陶を受けたことになる。

実習の準備に、講義のそれに、泣きたい思ひの連続ではあつた。峻厳な先生の鍛へ方は故布施現之助教授の愛弟子である先生には当然であり御自分の体験から敢へてさうされたものらしい。元々、左程肥つては居なかつたが、僅かの期間に私はみるみる痩せ細つて行き、其年に受けた徴兵検査の結果は「兵役を免除す」であり、周囲を驚かせた。

教室での私は雑務主任であり、屍体処理係であり、実習も講義も、何も彼も私の受持であつた。「君は将来も教室に残る人だから …」と云ふのが先生の口癖であり、将来のためにという言葉に、雑務の処理に明け暮れた日々であつた。

夜を徹して準備した実習用プレパラートが先生の気に入らず、こんなもの使へるものかとばかり窓越しに投棄てられた口惜しさに、私は憤然となり、ラボランチンは泣き出すといふ場面が幾度展開された事だらう。

この様に厳しく叩きこまれた事が、教室を主宰する日になつて如何程役立つた事か、泌みじみと師の恩を懐ふこと切である。

先生はまた思ひやりのある優しい先生でもあつた。夜更けの二時、三時、時間給水の水を自らバケツにかつがれる先生であり、酒好きの私の岳父のためには配給の酒をわざ〳〵とゞけて下さる先生でもあつた。

戦争も末期になつて、空襲の連続に教室に泊込みの日が続いた頃、胡瓜の一夜漬を作るのは先生の仕事であり、それを食べるのは私の役であつた。

その様な時、薄暗い管制燈の下で、研究の見通しや、教室員の仕事に関して、若し自分が死んだら……等と其時の処置を指示し、托されるのであつた。

此の亡き師の後を継いで早や八年、先生の得意とされた実験発生学の分野の研究は何一つ発展させ得なかつた自分を恥ぢる。唯、最近になつ

て台湾猿の解剖に着手出来た事を地下の先生も苦笑しながらも見守つて下さつて居る事と自ら慰めてゐる次第である。

教室の私の部屋には先生の遺影が私の日常を見守つて下つて居り、晒した遺骨は無言の指導者である。専門の分野に足を踏み入れたばかりで師を失つた親無子の私に絶へず無言の激励をおくつて下さる。師を失つて師の有難さが分る。師の無い苦しさを、佗しさを幾度、身に泌みて味はつた事か。その度毎の私の慰めは師の遺骨と語ることであり、遺影を仰ぐことであつた。

何時の日にか、亡き師の名を耻しめぬ存在となりうるのか、いまの私には重いおもい肩の荷ではある。

(五) 中村助教授

先生は変人と云はれたが真の学究の徒であつた。私は後輩として先生に甘へ、親切な指導を受けたが、教室に入つて二年目、私が講師に就任するのと前後して休職となり、外科医としての修業に入られのであつた。そのいきさつは記さないが、権威に屈せず信念に生抜かれた尊敬すべき先輩であつた。人材の乏しきを云々される本学出身者にとつて、第二解剖の小野、呂両助教授と共に其の死は惜しみても餘ある人物である。

原爆の数日前、大学の下で偶然お逢ひし、「自分は郷里へ引揚げて開業するので荷の発送も終つた。君も長崎なんかにグズグズしてない方がいゝよ……」と立話しされたのが先生とのお別れになつた。

一昨年、招かれて台湾へ渡つた折、屏東近くの田舎でだつたか本学出身の康君から、原爆後、先生は天主堂近くの横穴に数日間を過され、一人の幼児に生米を噛んでは口移しに与へられていた云々の悲惨な話を聞かされ暗然とした事であつた。

(六) おわりに

原爆は古いものを消し去つた。何も彼も変つてしまつた。今更、学究の徒たるべきものは……と云つてみたところで愚痴としか聞えまい。それにしても偲ばれるのは亡き恩師達の偉大さであり、風格である。研究一途に情熱を捧げつくして悔いなかつた先輩の姿である。

懐しく思出されるのは、深い木立の間にポツポツと建つて居た木造教室の古びた姿であり、芝生に寝そべつては聞いた天主堂の鐘である。

亡びしものは美しきかな。

過ぎし日をかく追想し懐しむのは、既に老の徴が私にも萠し始めたせいだとすれば、亦何をか云はんやである。ペンを擱かう。

(昭三〇・六・一記す)

池田吉人教授のお遺骨

原子爆災の涙かわきもあえぬ十一月二日、漸く今の経済学部講堂で医科大学関係の殉難者慰霊祭を行つた。その時我々の職員控室に永井隆助教授が一ツの大きな白木の箱を持込まれた。これは山里小学校上手の墓地から発見されたお遺骨で、附近の者の話によると、大学関係の罹災者のものだとのことであるから拾うて持参された次第だ。打寄つて開いて見ると、風雨にさらされて大方白骨化した頭蓋と着衣の破片が收められ

ているが、誰れとも見当もつかない、そのうち上顎が総入歯であることが発見され、影浦教授であつたか、解剖の池田吉人教授が総入歯であつたぞと言い出した。そのうち又ハンカチーフらしい布片の片角に、洗濯屋が書入れた文字の一部が〃ケダ〃と読みとられた。そこで今一度頭蓋を見なおすと、なるほど池田教授の面影が伺われ、まごう方もない。

原爆の翌日ひるすぎ、大学病院の焼跡の仮本部に居た私に、山里小学校の校庭から〃自分は大学の池田であるが負傷しているので、救助に来てほしい〃との伝言を齎した者があつた。早速学生教名が担架を持つて出里校に行たが、夕方帰つてきて、附近の防空壕まで探したが見当らなかつたとのことであつた。

その後何の手がゝりもないので、どこかへ救護班にでも運び去られ、自ら連絡もできずして死なれたか——当時そんな行方不明者が多くあつた——と思はれていた。そこで慰霊祭の日に偶然発見されたお遺骸の状況から察すると、教授は山里小学校の校庭で、救助のことを伝言されたあと、漸くうらの墓地まで自力で辿りつかれ、そこで気力つきて逝かれたものらしい。墓地に向われたのはそこが御自宅のはるかに見える地点であつたからであろうと思われる。

あゝしかし、その時御宅は已に倒潰して、奥さまと赤ちやんは即死され、一人生残られた十一才の嬢ちやんも佐藤純一郎助教授の宅に八月十日に引きとられて一週間目に亡くなられたのであつた。

（古屋野記）

解剖學第二教室

当時は高木純五郎教授、小野直治、呂雲龍の両助教授が勤務中であつた。

被爆時の狀況

高木教授は研究室で、小野助教授は解剖学を講義中、呂助教授は研究室で被爆。

高木教授は救出され外科横穴壕で治療を受けるも終始興奮裡に十一日夕方死去さる。

又解剖学講堂の教壇に小野助教授の遺骨を確認、呂助教授も研究室にて殉職す。

故 高木純五郎教授略歴

正四位勲三等医学博士　解剖学教授

明治二十九年五月三十一日岡山県に生る
大正十一年七月東京帝国大学医学部卒業
大正十二年四月長崎医科大学助教授に住ぜらる
大正十二年五月解剖学研究のため欧米に留学同十四年十月帰朝す
大正十四年十二月長崎医科大学教授に住ぜらる
昭和十年五月欧米各国に出張を命ぜられる
昭和十六年四月陞叙高等官一等
昭和二十年八月九日大学に於て原子爆弾の爆撃をうけ十一日鬼籍に入り職に殉ず

主なる研究題目

脊髄の細胞構築学的研究

死亡者の官職及び氏名

官職	氏名
教授	高木純五郎
助教授	小野直治
〃	呂雲龍

以下不詳

思ひ出

小野壽子

当時主人は長崎医大助教授、附属医専教授、学生主事など兼任致しておりました。

その日は附属医専一年生二百名に解剖学の講義をしていた様です。その講議を受けていた学生さんの一人（佐賀県神崎町五、原さん）が不思議に二・三日生きのびて郷里へ帰られて亡くなつたそうですが、その方のお母さんからお知らせ下さいましたところによりますと、

十一時二分、ピカツと光った瞬間、小野先生が光った窓を見られた。それからあとは、一瞬に破壊され、恐らく先生も友人もそのまゝだつただろう。自分は窓から吹きとばされ山の方へ逃げた。そこで兄と一緒になりたんかにのせられて佐賀へ帰つたとのことでした。

その後、学校の方で、教壇のあつた場所の遺骨が小野のだろうというわけで、ほんの二・三片の骨を拾つて封筒の中へ入れて下さつていました。従兄の三菱造船所へつとめていた者がそれを受け取り疎開先の四国へ届けてくれた次第でございます。

私も一度主人最後の場所におまいり致したいと存じておりますものの、子供達の教育に追われ未だに実現出来ません。早いもので十週年を迎えました。幸い私も遺児三人も元気で過しております。子供の教育の為に二十七年三月より上京致しております。

（手紙より抜萃）

小野先生の想い出

西森一正

今、基礎教室にはないが、原爆以前には敷地の全周に塀が繞らされ、今の運動場の西南の角に裏門があつた。小野先生は何時も門の外で本を読みながら門の開くのを待つて居られたさうだ。小野先生の研究室や教壇に於ける態度は謹厳そのもの、まことに近寄り難いものがあつた。然し個人的には全く打ちとけた方で、私は時々夕食時を選んで出かけ先生の好きな晩酌のおこぼれにあづかつたものだつた。煙草を喫われなかつたので奥様は配給煙草を酒と交換してよく手に入れられた。

臨時医専が併設されて以来の医専学生主事でそれだけに仕事も多く気苦労もされたらしいが、医専の生徒にとつてはまことに「こわい」存在であつて、便所など随分攻撃的な落書きなど多かつたが先生は平然と笑つて居られた。

大抵の人々の記憶にあるものはこうゆう面が多いと思うが、あまり皆の御存じない二、三の思い出を書いてみたい。何処の高等学校でも第一回生は相当偉物の多いものであるが先生の同期も多士済々であつたらしい。その中にあつて弊衣をまとつた応援団長が若い日の小野先生であつたと聞いて、あの実直な先生からは想像も出来ないことだつた。しかし、「時局柄、若い連中の乱暴を取締らなければならんのはつらいですよ」と私に時々もらされていたのも何だかわかる様な気がする。

九大の解剖講座を担当する様に招聘されたのは戦争も末期の頃だつたが、第三解剖（人類学）が設けられることを確約された学長の要請で当まられることになつた。人類学の講座の準備も着々進められて居り、現在私の手元にある「人工変形頭蓋概説」も講義のために印刷されたものだと記憶している。

朝鮮に渡り、支那を歩き随分厖大な人類学研究のデーターが集められていた。学生であつた私にはその内容などわかる筈はなかつたがその量に目を見張つたものだつた。東大の理学部に学位論文（数計学）を出す様になつていて、遂に先生の手の中で焼失してしまつたのであろう。

先生も奥様も私と同じ土佐の寒村の出身であり、学生の頃は事あるにつけ面倒をみて下さつた小野先生。お別れして既に十年の歳月が流れ去つた。今思い出も新たに少しばかりの面影を綴りました。

（病理学教室勤務）

生理学教室

当時の教室員は清原寛一教授、芦塚陽助教授、崎元行夫助手、橋田数綱嘱託、西村ユキ傭人、それに定夫の崎田関一氏であつた。

被爆時の狀況

清原教授、芦塚助教授、橋田嘱託、崎田、西村氏は教室内で爆死。崎元助手は家野町の寄宿先で受爆、負傷して大村海軍病院に收容さる。

故清原寛一教授略歴

従四位医学博士　生理学教授

明治三十八年二月十五日福岡県に生る
昭和三年三月長崎医科大学卒業
同年同月　長崎医科大学助手に任ぜられ生理学を専攻す
昭和八年十月長崎医科大学助教授に任ぜらる
昭和十四年七月満洲国及び中華民国に出張を命ぜらる
昭和十四年十月長崎医科大学教授に任ぜらる
昭和十八年三月陞叙高等官三等
昭和二十年八月九日大学に於て原子爆弾に遭ひ即死耘に殉ず

主なる研究題目

光力学的作用に関する研究。

死亡者の官職並びに氏名

官職	氏名
教授	清原寛一
助教授	芦塚陽
嘱託	橋田数綱
傭人	西村ユキ
定夫	崎田関一

原爆に潰滅した生理学教室員を悼みて

崎元行夫

昭和二十年の初め頃の生理学教室員は清原教授、芦塚助教授、筆者、橋田氏それに小使の崎田氏の五人であつて、外に応召中の野間、玉井、須藤各氏の名札が掛つてはいたが陣容としては他の教室に較べて決して少い方ではなかつた。当時大学生百名、附属医専二百名に講義せねばならなかつた為め、清原教授は殆んど毎日四時間位の講義を受持つておられ、芦塚氏並に私が医専の方の加勢をしていたのであるが、医専は二班に分れて同じ講義を二回宛行つた為め講堂は入れかわりにfullに使用されていたと云つても過言でない。併し夕方警報解除の後ではよく教授や小使も一緒に手製の煙草を喫ひ、僅かの人造酒をちびりちびりやり乍ら雑談に耽つたりしたものである。或日素晴らしく見事な茂木ビワを一籠誰からか戴いたので五人は例の小使室に集り腹一杯ありついたが其の時「あゝこんな素晴らしいビワは之が食べ納めかも知れないな」と呟いた。一瞬不気味な気分が辺りに漂つたが、いかにも予言者を気取る橋田君らしい思い切つた一言であつた。橋田君はかつて思案橋の手相見がよく当るから行けと再三私にすゝめて呉れたが、それがよく的中するのに全く感心していた程無邪気で善良な方だつた。今頃の世間では中々得難い人材であつた。飄々として身軽く廊下を歩いていた芦塚助教授も当時は中々元気であり、軍医予備員訓練も受けてこられた程であつた。「私の肺には両側共こんな大きな空洞があるのですが平気ですな」と両手を夫々左右の胸に当て指で円い空洞をつくつて得意であつた。小使の崎田氏は六十才位に見えたが煙草好きと見え山いちごの葉と配給の葉たばこ半々に混ぜ倍量にして喫つていた。

教室員は僅かであつたが親しさは又格別であり何等遠慮も固苦しさも無かつた。併し其れも開け放しで親分肌の清原教授だつたからそんな事も許されたのであろう。清原教授の御家族は幼稚園の御長男及三才位の御嬢ちやんがおられ、奥様も当時御健康相に見受けられ、一家睦まじく城山町の自宅に住んでおられた。正月橋田君と共に御宅に招待されたが、すべて奥様のお料理であり美味しい御雑煮、芳醇な日本酒等全く豪華版であつた。併し之が最後の記念すべき御招待になろうとは神ならぬ身の誰も知るよしも無かつたのである。

教授以下私等は講義の準備に多忙であつたので帰りは毎日おそくなつたが、二階から先生のお帰りの靴音がするときまつて私の室の前で停り一緒に帰ろうと誘われた。大学の中庭を裏門へ抜けて山里の本通りを下

り、山里小学校を経て大橋で二人は別れ先生は城山町へ、私は家野町へ帰るのが日課の様になつていた。

途中戦況其の他四方山の世間話は勿論の事、教授会の模様迄差支え無い範囲で話して下さつたので私も長い帰途の疲れも忘れて楽しい時間であつた。或日小学校の横に差しかかつた頃こんな事を話して下さつた。

「僕はいつも家内に云うのですが子供だけ残して死ぬ事があつてはならぬ、死ぬ時は皆一緒に死ねと云つていますよ」。其の御言葉通り御家族三人は御自宅で遭難され先生も学校で御遭難と云う、何たる悲劇であろう。又或日こんな話をされた。「君も家族を呼んで一緒に住みませんか、家と食料は私がなんとか世話出来ますよ」。之は原爆数日前の事であり、人は寧ろ郊外へ、田舎へと避難する折だつたから今から考えてみると先生は余程覚悟を決めておられたものと思われる。学校でも民間にならつて「防火策」として繋廊下を取り外す事になり、生理学教室でも教室員並に防衛に割当てられた学生十名位によつて、南の教室から北の実習室へ行く廊下の屋根、壁を取り壊した。又重要実験器具、図書を佐賀へ疎開する事になり、教室でもにわか作りの箱に納めて送つた。教授は現在不必要なものだけ疎開すると云う御意見だつた。先生にしてみれば仮令死んでも学校、重要器具、図書とは離れ度くない強い御決心の程が伺われ悲壮であつた。

六月中旬私は先生のお奨めにより一週間の予定で最後の休暇を戴いて帰郷したがその前日已に自宅は焼失していた。此時地下一尺に埋めた品物が火災に安全であつた事を先生に申し上げた所、早速重要薬品の一部を生理講堂地下に埋める事にされた。瓶入りの薬品に水湿からレッテルを守る為教授の指示により墨汁で書き直し、その上を流動パラフインで塗つたが、翌年五月法医の徳川助教授と之を掘り返して見て、水中に浸つていた之等薬品瓶がレッテル、内容共に無疵であつた事に驚嘆し先生の先見の明あるのに敬服した。

二階図書室にあつた金庫は六人担ぎで辛じて階下動物室へ運び、教室員に一部個人的使用も許されたので各自原稿や現金等を入れた。併し翌年二月私が全快して帰学した時は已に無断で開かれ、内容は荒され講義の原稿のみが散乱して残つていたのには驚いた。教授の原稿の一部は私が形見に保存しておるが、あの達筆で特長ある御筆跡は先生の面影に接する思いがする。

教室内の防災措置をなす一方、学校では全職員交代で図書館裏に横穴を掘り始めたが戦局は益々逼迫する事とて皆懸命に仂き、またたく間に出来上り、確か八月一日であつたか長崎市初空襲の折は早速之が役立ち我々は念仏を唱え乍らこの壕内におびえた。此の日は教室の化学実験室天井に径二尺位の大穴があけられ、不発弾ではあるまいかと恐る恐る調べたものであつた。実験室のアルコールは随分ねらわれていたもので「メチルアルコール」のレッテルを貼つて盗難を防ぎ、又一斗入りアルコール缶二個も奥深く仕末した。

当時街にはリンゲル液が不足したので急救の患者に二、三回提供した事もあつた。当時実験用薬品は充分であつたし、ガマ、カエルは中庭の飼育池に多数いたが兎は不足した。七月頃だつたか学生二、三人が来てカエル二十匹位研究用に戴けないだろうかと相談に来た。その後も又二回程来たが勿論私は喜んで之を提供した。之が当時彼等学生にとつて唯

一の動物性蛋白栄養源になる事を私は直感したからである。仮令敗戦後とは云え今日の学生は斯の如き悲惨な食料難は御存じないだろう。当時の長崎医大学生は止むを得ず必要にせまられてガマやカエルを食用に供せざるを得なかつた程窮していた。而もその揚句は殆んど全学生が空腹の儘原爆の犠牲となつて倒れたのである。食料難は学生のみならず職員も同様であり、眼科教室の台湾出身某君からは度々電話で実験使用後のガマ、カエルの寄贈を頼まれた。我々生理教室でもガマ、カエルの骨格筋や肝臓を塩焼にして食つたが、肝臓はザラザラ砂を嚙む様で気味が悪かつた。又橋田君はガマから散薬を造つて之を常備栄養剤と称して机の上に置いて呉れた。即ちガマを中庭の木の枝に刺して、充分乾燥後之を粉砕器にかけ更に篩にかけて気付け薬としたものであつて私も毎食後之を愛用したものだ。又新鮮な牛の血液を材料に冷凍羊羹を造つて呉れたが之は私の口にはとても合わなかつた。

此の様に戦局重大な中にも屢々大講堂から美しいピアノの音が無気味なしじまに溶け入る様に流れて来るのであつた。久しく我々から失われている希望と喜びが晴れやかに湧き出で、戦いに疲れ果てた心身に生気が蘇る思いがして陶然として之に耳を傾けた。当時の一年生にはピアノに堪能な者が三人程いて「トルコ行進曲」、ウェーバーの「舞踏への勧誘」、ショパンの「葬送行進曲」等を好んで弾いていた様だつた。

八月になつてからは警報はひつきりなしに出て其の度毎に講義は中断され、各人は直ちに夫々の部署についた、そして全職員、生徒の頬から笑いは失せて頬の肉は落ち何か一大事の予感におびえるかの如き真剣な顔貌を呈し悲壮な決意が見られた。

福田助教授夫人が御子さんをおんぶして校内防空壕へ走りこまれる御姿、金子教授が防空壕用の材木を担いで裏山の方へ行かれる御姿が忘れられない印象となつて残つている。私が清原教授に最後にお会いしたのは、原爆前日の夕方であつたが相変らずとても御元気であつたし、橋田、崎田両君共に元気だつた。芦塚助教授は前日は諫早へ行くとて休暇をとつておられ私は原爆当日休暇をとつた事が運命の岐れ目となつた訳である。

即ち清原教授、芦塚助教授、橋田氏、崎田氏は教室内で見るも悲惨な最後を遂げられ私は家野町の寄宿先で遭難したが幸にも約十分後には倒壊家屋の下から這い出る事が出来たのである。然し鼠蹊部の大血管を破つたらしく出血甚しく、三十分位路上に坐つた儘出血部をおさえて生命を守るのに死物狂いであつた。漸く周囲の火の海から逃れ、鉄路を直角に横ぎり射撃場へ出て更に迂回して城山町の清原教授宅へ向つた。出血と意識昏濁とに死物狂いで打ち勝ち乍ら夕刻やつと城山町の裏手へ出たが、城山町一帯が全く灰燼に帰しているのを知り茫然自失、其の儘丘の上によろめき倒れた。

眼科森路先生の知人と云う名も知らない親切な人がバケツ一杯の水と菓子器を貸して下さつたので之を飲んでは目を開き、睡気が襲つて来れば舌を嚙んで之に打ち勝たねばならなかつた。睡気の為負傷部をつまんだ手を緩めて仕舞い其の度毎に血糊の為手指が滑り止血困難な事が数回あつて一人で死闘を演じた。絶望に陥り目を閉ぢるかと思うと又振いたつ生命への欲望が蘇つて来る。誰でもいい、知人の所へ行き度い、そして死ぬものならせめて誰か知つた人の下で死に度い。虫けらの如く埋れ

て死に度くない。故郷の人々の顔がぼんやり浮んでくる、然しどうにもならない無気力さを如何とも出来ない。なるが儘よと捨鉢になる。又生き延び度い欲望が甦つて来る。かくするうち漸く意識が正常に戻つて来るのが自分にも分つて来た。誰やら叫んでいるのが聞えた。「下山しろ救援列車が来る。」

落ちていた棒切れを拾い、杖にすがり乍ら一歩一歩と線路へ下りて待つ中に果して救援車が目前に停車した。狂喜して之に乗車させて貰うと漸く襲い来る安心感のせいか欠呻が出る、睡気が襲う、然し私は鼠蹊部の手を緩めてならない。その中嘔気がくる。あちこちの患者は泣き叫び或は嘔吐を催す。夜おそく列車が大村駅に着くと待つていたトラックに移され、忘れもしないあの物凄く冴えた月光を浴びて漸く海軍病院へ收容された。直ちに全裸にされ、クレゾール液で全身を拭き破傷風血清らしき注射を二本受けた。

教授と特に親密な間柄の須山弘文軍医が御勤務の事をかねがね承つていたので直ぐ連絡を頼んだが中々通じて貰えなかつた。数日後庭でふと知り合つた栗原飛行少尉の御厚意で須山軍医との連絡もなんの事もなく出来、それ以後病棟勤務の転員は私に対して特に懇切叮寧であつた。

毎日37.5°C乃至38°Cの熱があつて食欲もなかつたが須山軍医をはじめ入院加療中の栗原飛行少尉、芝克彦軍医大尉の御厚情は生涯忘れる事が出来ない。長崎の情況は毎日救援隊によつて齎らされたが長崎へ帰る事等もつての外だとの事で一応郷里へ帰る事にした。途中大村市御開業の松尾先生(須山軍医の義兄)にお世話になつた上汽車に乗せて戴き人吉市へ向つた。人吉で三ケ月静養したが、この間一時全く重態に陥り絶望とあきらめたがどうやら切り抜ける事が出来た。眼科の小笠原長秋軍医が丁度人吉陸軍病院付であつたので一方ならぬ御世話になりお蔭様で容態も日増しに快方へ向つた。秋風の立つ十一月になつてやつと鹿児島に帰着したがその後更に四ケ月間静養せざるを得なかつた。

二十一年二月末大村市の大学へ帰つてみると衛生の原先生、病理の若原先生、法医の徳川先生等が已に勤務しておられたが設備や図書は殆んど無かつた。その中、間も無く諫早へ移転する事となり雨の中をトラックにゆられて大村を出て行く時は悲痛とも残念とも例へ様のない複雑な胸のつまる思いだつた。衛生の原先生が海軍の前歴に物言わせて基礎教室の設営に骨身を惜しまず献身的に仂いて下さつた御努力は忘れてなるまい。又教室の整備に当つて当時学生であつた岡野君が色々と加勢して下さつた事もこの誌上をかりて厚く御礼申し上げる。

かつて空襲下慌だしく、やれ防災の、やれ疎開荷造りと苦しみを共にした人々を偲びつつ私は痛々しい思いに耐え忍び乍ら震える手で疎開荷をほどいて整理していると、見覚えあるキモグラフイオン、感応コイル、解剖器具等でて来る度に、之にまつわる数々の記憶や思い出がまざまざと甦り、思わず無念の涙に咽んだ。そしてせめて亡くなつた教室の方々の御意志をくんで残務整理だけは心置なくやつておき度い熱意に燃えて整理に務めたが、満足な事が出来なかつた事は残念であつた。

五月末清原教授を始め犠牲になられた教室関係の御霊を弔ふ追悼会を諫早市天祐寺で挙行したが、住職の娘さんも当時生化学教室ラボランチンとして敢無い最後を遂げられた由にてその供養も合せ盛大に行つて戴いた事はせめてもの慰めであつた。当日の集りは芦塚助教授未亡人並び

に御子さん、橋田氏未亡人、井沢、松尾教室先輩、斎藤助教授、徳川、若原各助教授、生徒有志であつて、終つて書院で有志寄贈の握り飯、ジヤガイモで故人を偲んで色々と御慰めや懐旧談に時の経つのも忘れた。何分短時日間の計画であつた為連絡もれの先輩があつた事が分り洵に申訳無かつた事をこの紙上をかりて深く御詫び申し上げ度い。

其の翌日私は教室を辞して帰郷したのであるが、数日後には田中育郎氏がおみえになつた事を知り、草葉の蔭で清原教授も嘸御満足の事と心ひそかに喜びを禁じ得なかつた次第である。

終りにのぞみ清原教授以下教室関係犠牲者の御冥福を心からお祈り申し上げると共に、願くばいつまでも我が生理学教室の守護神として後輩をお導き下さる様祈念する次第である。

（鹿児島市立病院）

清原先生の想出

井沢正三

故清原教授は私にとつて佐賀高等学校の先輩でもあり、又大学では生理実習を教えていたゞいたり、更に音楽部の先輩であられたので、学生時代からよく存じ上げて居りました。卒業後、高井、亀谷両君と共に生理教室へ入る事が出来た時は、三人共全く有頂天になつたものでした。蓋し心から尊敬し崇拝して居た緒方教授と清原助教授の下で研究が出来る様になつたからに外なりません。クルズスが済むと直ぐ私は清原先生御指導のもとに組織呼吸の仕事をやらせていたゞきました。清原先生と御一緒にさせていたゞいて特に感じた事は何よりも先づ先生の明晰そのものの如き頭脳と、飽く事なき努力の蓄積で、それは正に驚異的なもので、暫く教室に居ると、とても我々凡夫のよくする処で無ないと云う事がよく解りました。先生の助手、助教授時代を通じて生理学の多方面に亘る沢山の御研究が発表されて居りますが、昭和十四年本学出身の最初の教授となられてからは、各種イオンの生理学的検索と言う厖大なテーマと取組まれ、一歩一歩と確実な研究を進められ着々とその成果をあげて居られた様でした。原爆の為に先生が夭折されたと言う事は、生理学界の為にも、長崎医大の為にも非常に残念な事でした。

先生は学者としてばかりでなく、その人格、見識も抜群であり、又政治性、実行力等稀にみるものであられたので、若し生き永らへて居られたら大学の再建には、恐らくは学長として不屈不撓の御努力を惜しまれなかつた事と思います。

原爆の数日後私は救護班員として佐世保より長崎へ参りましたが、楽しい七年間を過したあの懐しい生理教室は人も建物も全部灰になつて居りました。あれから十年経つた今日、目を閉ぢて当時を追憶して見ますと、地球最後の日を思わせる様な原爆の図の記憶よりも、不思議と清原先生の幾分おどけた様な、あの人懐つこいニコ〳〵した温顔が瞼に浮んで参ります。

（高知県香美郡山田町在住）

生化学教室

内野豊生教授は二十年春、軍医備員として入隊中急死さる。

原爆当時は斎藤圭一助教授が教室を主宰し、矢野明助手と雇の奥平幾代、福田穂実子、久保マリ子、傭人の野間肇、黒川作市の諸氏が教室員であつた。

被爆時の状況

斎藤助教授は医専に講義中、矢野助手、奥平、福田、久保、野間、黒川の各氏は教室内で被爆死亡す。

故内野豊生教授略歴

従四位勲四等医学博士　生化学教授

明治三十四年三月十五日熊本県に生る
大正十四年三月東京帝国大学医学部卒業
大正十五年三月同学助手に任ぜられ医化学を研究す
昭和九年九月九州帝国大学助教授に任ぜらる
昭和十年八月東京帝国大学助教授に任ぜらる
昭和十三年六月長崎医科大学教授に任ぜらる
昭和十四年七月満洲国及び中華民国へ出張を命ぜらる
昭和二十年三月陞叙高等官二等
昭和二十年三月三日病のため卒す

主なる研究題目

蛋白質の化学構造に関する研究

故斎藤圭一助教授略歴

正七位附属医専教授兼生化学助教授

明治四十五年五月十一日宮崎県に生る
昭和十五年十月長崎医科大学卒業
同　年十二月同学助手に任ぜられ、生化学を専攻す
昭和十八年六月同学助教授に任ぜらる
昭和二十年七月長崎医科大学附属医学専門部教授兼長崎医科大学助教授に任ぜらる
昭和二十年八月九日大学に於て原子爆弾に遭い即死転に殉ず

主なる研究題目

Aminopeptidase に関する研究

死亡者の官職と氏名

官職	氏名
助教授	斎藤圭一
助手	矢野明
雇	奥平幾代
〃	福田穂実子
〃	久保マリ子
傭人	野間肇
〃	黒川作市

教室の思い出

伊藤　茂

早いもので長崎の地に原子爆弾が投下されて既に十年になり亦其の日が間近に迫つてきました。其の度毎に想い起されるのは、あの生々しい当時の災害の状況です。私は当時病院の婦人科に勤務していましたので、原爆当日の生化学の状況は知るすべもありませんが、あとで、かけつけた時あの懐しい教室の建物は跡形もなく、唯、真黒に焼けおち、吹き飛ばされた広野の中に見覚えのあるコンクリート建の図書室の一部を見て、この位置が生化学であつたかと思われるのみでした。そして僅かに昔の姿をとどめていたものは教室の前に有つた横穴防空壕と、図書室の地下室の中だけでした。建物の跡には、それらしい建物の台石が点々としてある外、歩くのにさえ困難な程、物凄い破壊のあとでした。

想えば昭和十七年から十九年八月迄、此の建物で恩師内野教授のもと、斎藤助教授、天野助手等と共に学んできましたが、其の間段々状勢が厳しくなり、燈火管制の夜、暗幕をはりめぐらした実験室で教室員も次々と減つてからはとう〳〵三日に一回宛当直したこと等未だに忘れることができません。

其の後教授は二十年春、軍医予備員として久留米一四八部隊に入隊中急死され、後任教授の欠員中斎藤助教授が教室を主宰され、研究に学生の実習に矢野助手と二人で励まれたようでした。

其の二人も既に教室と運命を共にされ今は在りません。

八月一日に長崎に空襲があり、病院もねらわれて、直撃弾が数発落ちました。其の折私も負傷しましたが、斎藤助教授が来られて基礎教室の方は安全でしたよ、我々は防空壕にも入らず敵機の方向を見ていました。今後も基礎教室の方はねらわれるはずはない安全ですよと言つておられましたが其の数日後に運命の原爆でした。

当時生化学にも警報中は学生が数名配属され各々其の配置任務を与えられていましたが、小使にいたるまで全部亡くなられたと思われます。

十年後の今日更に当時を追想し、原爆の犠牲になられた皆様の御めいふくを祈る次第であります。

（佐世保港外崎戸町　三菱鑛業所病院勤務）

当時を憶う

増田　綾子

十年前の八月私は矢野の妻でした。

想い出して見れば戦時非常体制の為め繰り上げ卒業で、生化学教室へ這入つたばかりの主人の処へ嫁いで来た時は、教室は内野教授と斎藤圭一助教授、斎藤健夫先生、伊藤茂先生四人丈けで、現在に較らべると淋しい次第でした。

十九年に斎藤達夫先生の論文が通り、教室を去られ、やがて伊藤茂先生も婦人科へ入局され、二十年に内野教授は予備医員として入隊中急病でお亡くなりになりました。内野先生は非常に勉強家で色々御仕事の成果を残されて居られました相です。先生の御家族は戦争もはげしいし、

生活も苦しいからと、大学葬が済み、一ト月ばかりで東京へ引揚げられました。斎藤圭一先生は伊良林にお住いでしたけれど、小さいお子様がおできになつてから、大学の防空警備や自宅と、大変になるからと、奥様お子さん二人を故郷へ帰され御自身は教室にお住いでした。

其の頃は斎藤助教授と、矢野と二人で隔日の当直でした。又夜毎の空襲で、家に帰宅しても警報が鳴れば夜中でも起きて出かけ警備にあたる始末でした。しかし心配する程空襲される事はありませんでしたが、一度婦人科に直撃弾を受けて死亡者が出ました。其の日は心配していましたが元気よく帰宅しましたので空襲と云うことをノンビリ考えて居ました。

九日の朝、粗末な朝食の折、角尾先生が広島で見てこられた新型爆弾の話をして、いろ〳〵大学も疎開する事等話して九時頃、家を出ました。私はびんに玄米を入れステツキで、精米してる時、パツとあの忌々しい奴が落ちたのです。十一時頃だから、すでに大学に着いていた筈です。防空設備は自宅よりいゝからと私は心配もして居ませんでした。だが、其の晩かえらないので、翌朝あわてゝ尋ねに出かけました。長崎駅辺りより地獄の様にまだ燃えすぶつてる処を心ばかり急ぎ、暑い太陽の上り始めた頃出かけたのに着いたのは午後一時近くなつていました。全く何とも今一度想い出したくもありません。

空襲の為め食事の用意も時間通り出来ないし、又当直で泊る事が多かつたので、ほとんど毎日の様に弁当を持つて大学へ行つたものでした。

私は第一実験室で仕事をしてる時もあれば、実験の材料、薬の仕入れに馳け廻る事もありました。蛋白の為めの牛肉を、闇の屠殺場へ買いに行く事が度々ありました。少しでも余れば食事に使えると思うと、うれしくなつたものでした。かえり途は大学の庭に小使さんにつくつてもらつた南瓜や馬鈴薯を負つて帰宅するのです。いよ〳〵戦局はきびしくなる一方で、アチラ、コチラ疎開されてる話に、家でも姑を田舎へやり、ホツトしたばかりでした。荷物も三個、生化学教室の地下室へ入れて居りました。

基礎教室はほとんどが木造洋館でしたので、すつかり灰となつて土台石さへ見当がつかず教室や主人の居た部屋の辺りを探し出した時はボンヤリなり、気がぬけてフラ〳〵と坐りこんで、しばらく立てずに「こわい、如何しよう」と一瞬変な気になつて、腰がぬけたのではないかしらんと思いました。後でようやく気を取り直し、一度帰宅して家人について来て貰い、それから、あちらこちらと探し廻りました。

教室に関係のある方の家庭へも尋ねて行きましたけど、誰一人生き残つた方もありませんので、其の時の様子がサツパリわかりません。只当日逢つた学生さんの話に依れば、丁度斎藤助教授は講義中で光りの一瞬直ぐ教壇に倒れて居られた相です。

教室入口が小さい小使室でした。其処へ、まだ半分程焼け残つた死体が二体ありました。何如にも、その一つの様に想えるがまた慾目で、何処かに負傷でもして生きてる様な気がして随分探し廻りましたが、二十日程のち、伊藤茂先生より指摘され、やつとお骨を拾いに行きました。内野先生の後、頼尊先生におきまりになつたばかりで、まだ当地へは赴任して居られませんでした。矢野も斎藤先生を手つだつて医専の講義に出て居りましたから、随分勉強と実験に忙かしかつた様でした。実家の父が拾つてくれた主人の骨が骨つぼにコト〳〵音を立て悲しみの涙が一度

に、せきを切つて流れ出しました。遺族の方々のみ知る突然の悲哀ではないかと思います。後日、図書館の地下室へ荷物をとりに行きました折薬品や、非常袋や、メチャ〳〵でしたので、わからなくなりましたが、故内野先生の奥様より非常袋に先生の数々の研究の結果が納めてあつたと聞き、「貴女も近くに居て保管すべきだつたのに」と、言われ、全く気が付かずに済まない事をしたと、今だに後悔しています。

アノ日から十年目の夏です。私はお蔭様で、又大学に勤めさせて頂いてますので、毎日毎日を多忙の中に暮して居ります。時折斎藤先生の二人の御子様、奥様は、又、教室に居られた方々の御家族様はいかゞお過しだろうかと思つております。二度とこうしたおそろしい事がありません様にあわせて、故人の冥福を祈つて居ります。

（附属病院外来患者係勤務）

細菌学教室

当時の教室員は内藤達男教授の下に、三谷秀夫助手、葉国慶、山田英子両副手が研究に従事し、尚其の他に雇の原ルイ子、深井光子、教室補助の井上公人、定夫の渡辺直道、傭人として糸柳源太郎の諸氏が勤務して居た。

被爆時の状況

内藤教授は三谷助手、山田副手外二名と共に教室で被爆され、内藤教授、三谷助手は爆死、山田副手は片淵の下宿に辿り着いて死亡。他の教室員も教室で被爆し、深井、渡辺の両氏は死亡す。

故内藤達男教授略歴

正四位勲四等医学博士　細菌学教授

明治三十年九月一日徳島県に生る
大正十二年六月京都帝国大学医学部卒業
同　十五年一月同大学助手に任ぜられ細菌学を専攻す
昭和五年四月同大学助教授に任ぜらる
同　七年六月長崎医科大学教授に任ぜらる
同　十年三月細菌学研究のため欧米に留学、翌十一年十一月帰朝す
昭和十七年七月満洲国及中華民国に出張を命ぜらる
昭和十八年一月陞叙高等官一等
昭和二十年八月九日大学内に於て原子爆弾に遭い転に殉ず

主なる研究題目

抗原並びに抗体分析の立場よりみた感染及び免疫機序

死亡者の官職並びに氏名

官職	氏名
教授	内藤達男
助手	三谷秀夫
副手	山田英子
雇	深井光子
定夫	渡辺直道
〃	川口某

当時の思い出

青木義勇

現在の皮膚科に風研片峯研究室が同居しているように、当時助教授の私が主宰する東亜風土病研究所病理部細菌学科は細菌学教室内にあつた。細菌学教室主任恩師内藤達男教授は、あの日、三谷秀夫助手、山田英子副手、外二名の方と共に殉職された。もつとも山田女史は崩壊した建物の下から脱出し全身の負傷火傷を押して山を越え片淵町の下宿に辿着いて後死去された。教室の高橋庄四郎助教授は永い応召の末に福岡市外水城の西部軍管区防疫部に転属、そこに私がその年の四月赤紙を受けて入隊し、相共に生残つたというわけである。

原爆後の長崎に下痢患者多発、その原因調査という当時としてはもつともな命令を受け、この青木見習士官が数名の衛生兵を引率して着いたのは十三日の朝、直ちに本学病院の玄関、調理場、兵器製作所本館に臥している多数の被害者を見舞い一部検便にとりかかつたものの、求められる治療で医療箱の材料はみるみる空になつた。十四日薬品を補充して同じく救護、十五日今の放射線学教室階下の一室ではじめて大学の幹部の方々におあいし、声涙下る古屋野教授の御話しに一同涙で和し大学の復興を堅く誓つた。

無残な教室の跡を訪れたのはそれから二、三日経つた後の夕方であつた。うづ高い図書の灰の中に生花一束、内藤教授御遺骸のありし場所と察して佇立、御冥福を祈つた。温情誠心学問の化身とでも申すべき恩師、昭和七年京大助教授から御赴任以来猪突奔馬のようだつた私の癖が出始めると無言で諭されお導き下さた内藤先生、万事控え目とは申せ事公務に関せば決然同仁会の班長も引受けられる内藤教授、去る八月五日福岡の西部軍々医部でお目にかかつたばかりの内藤教授、一転して御遺族のことなど。感慨は巡り夕色一入なのに気附かぬ程であつた。

髭の三谷君、男勝りの山田女史、勤続二十餘年その頃は助産婦として婦人科に勤めあの日負傷し経専内の仮設病院で死去された小川すいさん、原爆には先立つが鹿児島で戦災死された元講師当時鹿児島医専教授の柴原義夫君、その他上田判夫、柳田義高君など戦没の各位、思い出は尽きない。

東亜風土病病理学科担当の金子直教授も殉職された。私の研究室の副手才津芳雄君は勤務先女神検疫所から大学に向う途中、恐らく大学の極

めて近くで死亡されたと想像される。お隣りの衞生学教室では大倉教授、福田、内田両助教授がなくなられた。長大の基礎当時の支柱はもとより次代を担うべき方々まで全滅のうき目にあつたのである。

九月軍務を解かれた私は風研を、高橋助教授は細菌を、夫々一人ぼつつりで再建第一歩に入つた。大村病院から諫早へ、その頃から復員の教室員も加わつて、洗濯場の風研、日本間の細菌は次第に活気づいてきた。長崎から諫早への通勤の途次遠心器を下げていつた当時の体力がしみじみ懐かしい。

二十二年の秋、私が細菌を担当することになり高橋助教授は風研に転ぜらる。間もなく待望の浦上復帰、すべてを復興の二字に集約してひたすら努めたその後数年、はりつめた気分で送る月日は早い。それにしてももう十年か。

（細菌学教室）

父を憶いて

内藤久美子

何万燭光もの電球を一時に当てられた感じで工場の中は一瞬ピカツと光つた。次の瞬間、私は何が起つたのか、大きな工場の梁の下にうづくまつて居た。工場全体がぐしやつと潰された感じだつた。然し何時壊れたのやら一時私は意識を消失して居たらしい。

「内藤さん出てこんね、内藤さん、内藤さん。」

との徴用工員浦辺さんの声ではつとした私、のこ〳〵と崩れた天井へ這上り何時もの避難所の裏山へと無我夢中でかけ上つた。

先程迄のギラ〳〵した真夏の太陽は消え嵐の前の様に、被いかぶさつた墨色の空の下で血を流し、破れた衣服をまとつた。

人々の叫び!! べら〳〵と赤くはげた皮膚の半裸のお母さんが泣き叫ぶ泣ん坊をしつかりと抱きしめて走つて居たのが今も眼前に浮んで来る。近くの山の大木は無残に根元から折れ、緑の葉は赤茶け、畠は一面荒れて了つて居た。さつき迄つや〳〵したてりを見せいた茄子や胡瓜が全く焼けただれて精気を失つて居たのが実に不思議に思われた。

やつと腰を降した時、自分の顔にもづる〳〵と生溫い血が流れて居るのに始めて気が附いた。お友達の宅島さんが矢張り血みどろで、「痛い〳〵」と泣いて居た。

此の山からはるか彼方の、確しか聖フランシスコ病院と思われる赤煉瓦の建物だけが目についた。あちこちで火が出始めて居た。

×

帰心矢の如く同じ工場の人達に〝帰りたい〳〵〟と駄々をこねて帰宅への途を急いだ。汽車の線路を黙々と歩く。一面焼野ヶ原、遠く大学の建物が〝まぼろし城〟の如く何か異様にそびえて居た。

父の事がちらと脳裏をかすめたが、しかし私の心は其の時、只家へ帰りたいの一心だつた。

浦上球場の辺りでは熱くて〳〵、附近の焼ける熱気で、今にも火傷しそうだつた。岩川町辺りへたどりついた。耘長の小父さんは〝家も何も無か、皆んな死んで了つたとやろうか、僕はもう一度工場へ帰るけん〟と云つて一人とぼ〳〵と帰つて行つた。

製鋼所の裏の浦上川へ出てそのどろ〳〵の川端を歩いた。赤肌の焼け

ただれた人々が（男か女かの区別も出来ない）〃水ば〃〃水ば〃と私達にせがんだ。

やつと幸町にたどりついた時、対岸に大浦天主堂が見えた。

あゝ私の家はある。母の所へ帰れる。とあの時の嬉しかつた事。

×

〃母ちやん〃と一言云つてぽら〳〵涙がこぼれた。

〃もう明日からは行かんわ〃と私は始めてそう云つた。その日迄毎日下痢をしようが、熱を出そうが〃負けては大変〃と大橋迄、下駄をはいて歩いて行つた私だつたけれど。〃父様はもつと大変でしようネ教授会でも開かれてるでしよう今夜は遅いわ〃と母。

〃大学の辺は何も無かつたよ〃と私、母は此の私の言で始めて父の身を案じ出したのではなかつたろうか。一瞬の〃ピカツ〃で浦上方面に何が起つて居るのか、聾盲同様の通信状態だつたので、何も分からなかつたのでした。それから何時も特徴ある父の足音をどんなに待ちわびた事か。しかしあの足音を永久に聞く事が出来ないとは誰があの時考えたろうか。

×

その日から毎夜〳〵防空壕で戦々恐々と夜を過した。

十日の夜警報解除で家へ帰つたら暗がりの玄関で靴が当つた。父!!しかし父の靴ではなかつた。奥の八畳の蚊帳の中で誰かが寝ている。泥棒!!いや佐賀から家を案じて帰宅した兄だつた。

×

翌日から兄は各所の負傷者収容所、市役所、県庁へと走り廻つた。手懸りは全く得られなかつた。大学の上の穴弘法附近も、友達や私のピアノの先生方と共にかけづり廻つて探した。

ある日〃穴弘法の山の上で内藤先生に会つた〃と云つた人があるとの噂が這入り、それと勢い立つた。私はあの日から傷と以前からの下痢との為殆んど臥床して居た。

三人共、然し、父が死んで了つて居られるなんて全く思つてもみなかつた。ひよつくり今日は、明日は帰つて来られると期待し続けて居た。今日も一緒に探そうと弁当持ちで兄の友達の小川さんが来て下さつて居たが、重大放送があるとの事で正十二時ラジオの前へ集つた。何かさつぱり解らぬボソ〳〵した雑音だらけの放送だつた。しかし敗戦と云う事は解つた。又その後阿南大将の自害の報も聞かれた。その日の午後、今は生理の助教授の尾崎先生が角帽を被つた学生さんで家へ尋ねて下すつた。

〃先生の御遺骨がみつかりましたのでいらして下さい〃と。

呆然とした。何んと云う事だ。あの父が逝つて了つたとは。

×

十六日の朝、母兄私の三人と知合いの小母様との四人で浦上へと向つた。破壊の街の中、人通りも少ない。憲兵が馬で通る。昨日の放送は〃デマ〃だとふれ廻つて居た。

浦上迄の遠路も少しも苦にならなかつた。一面の焼野ヶ原。此処ら辺りは何々のあつた所と話し合うのみ。

大学病院の坂で馬が悪臭を放つて倒れて居た。くさつて赤ぶくれて。緑色の全くない死の街。

レントゲン跡の詰所へたどりつく。古屋野学長と、お変りなかつた佐

藤教授が忙しそうに走り廻つて居られた。古屋野先生も頭に傷をされて居た。高瀬教授に案内されてグルンドへ向う。

グビロが丘の辺りで、銅像の様に手足をにゆつと伸ばしたまゝ真赤にふくれた死体が異様に立つて居た。

沢山の死体を踏み越えて行くと恐怖も凄惨さも麻痺して了い、あゝ又かと思うだけだつた。全くの廃墟。細菌教室の附近へ出る。此の間迄、木々の繁みに囲まれた象牙の塔は今はもう灰と泥だけの荒地と化して居た。

教授室の隣、図書室の部厚い灰の中の一体の骨が父のであるそうな!!全く実感が湧かぬ。用意した箱につめるだけ骨を入れた。これが父、いやそんな事はと、考えて始めて涙が出た。母の心中はどんなだつたろう。灰の本は字の跡を頁もその儘残してしかも完全に燃えて居た。

〃一思いに亡くなられたかしら〃と母。

〃きつと此の本の下敷きになられた時私達の事考えなすつたわネ、きつと父様の事だもの〃と私。

あの母思い、子思いの父だつたもの、死の直前に意識があつたら私共の為にどうしても生きのびねばと思つて下さつたろうに。

×

あちこちの疎開地で油の燃える臭い。人の焼かれる臭いがその頃立ちこめて居た。今日は誰さんが○子さんを焼いてらつしやると話し合つた。〃父様は私達にあんな事させなくて済む様に灰になつてらしたのよ〃と話した。一応お坊様も呼び、戒名も附けて貰つたが、しかし、まだ何か信じ切れぬ日々だつた。

ある一日、三人で再度スコツプを持ち浦上のグルンドの丘を訪れた。前にあつた男の人の死体がその儘の位置で烏にでもつゝかれたのか目がくり出て居た。

父の死場所を掘り返した。父の持物と違うものが何も出て来ぬ様に願いながら探したあげく、父の愛用の時計が出て来た。ガラスも針も壊われて——。時計、鍵、眼鏡の玉と次々に出てくる父の遺品、涙の中に掘り返しこれで父の死は確定的だと思いつゝも、いや、それでもまだ、奇蹟を願い夢みる三人だつた。

×

その頃の大学の教室員は殆んど出征して人員は全く少なかつた。病気で残つた人、女医さん等で父は責任感強く三日に一度位は当直とて泊つて居た。真夜中に警報が出ると責任があると云つて一里程の道をゲートルを巻き、母の作つた防空頭巾や鉄かぶとを下げて出掛け、又解除になると家へ戻つた。行こうと云う希望者の少ない東京への連絡にも何度も出掛け、いつぞやは宿る所なく東京駅で仮睡しベンチから落ちて「〃目から火が出る〃と云う事は本当だね」と笑つて居た父だつた。

八月八日の夜も当直とて朝何時もの様に出掛けたきりだつた。

八日の午後小使さんが用事で来て呉れその折父よりの手紙があつた。〃今日明日が危いそうだから善処する様に、何時も前へ逃げる事のみ考えていたけれど、後の方への事も考慮する様に〃と。

後で聞くと角尾学長の広島見聞の報告もあつたそうだし、何かアメリカ機投下のビラによる、新型爆弾を投下するぞとの情報も這入つていたとか。しかし危険とて教室を捨てる父ではなかつた。例え何かの用で教

室を離れて居て死を免れても、自責の念に、居ても立つても居られなかつたであろうし、図書の灰に埋まつた学者らしい死は、父にふさわしい様にさえ思える。

その朝細菌に出入りしていられた学生の和泉さんと云う方が、父に、牛乳と桃を届けて下すつたとか…。父が死出の水にそれを食べただろうか。私共に珍らしいから持つて帰つてやらうと、取つていらしたのではあるまいか。母は毎年の命日に必ず桃を霊前に供えている。

×

父に叱られた記憶は少ない、余程の事でない限り。しかし曲った事は徹底的に嫌つて居た。機嫌の悪い父を見た事がない。何時も変らぬ温容だつた。頭は祖父ゆづりですつかりはげて老けて見えたが、つや〳〵した頬色は仂き盛りを示して居た。暇があると二階の書斎で、横文字の本を拡げて居た。しかし一家の団楽は大好きで食事後は、皆それ〴〵一日の事を話し合い父も又色々と話しをしてくれた。

原子物理の初歩の電子や陽子の事を教えて呉れたのも父だつた。私の質問を喜ぶ父だつた。日曜日等よく一家四人で郊外のあちこちへ散策した。楽しい思出はつきない。

父は何時も〝人間の頌は心掛けと教養で美しくなる。どんなに不細工でも理智のひらめきの表れた頌程美しい物はない〟と云つて居た。

私の将来を案じて呉れた言葉であつたろうか。

夜の食事の用意が出来て、皆で父の帰りを待つた。電車の音を聞きつつ此の電車、次の電車とよく兄と云い合つた。特徴ある心持ち片方に重心が傾いた様な足音に兄と二人玄関へ飛んで出た。酷暑には、冷蔵庫に手拭を入れて、帰つた父の頭にのせて上げるのが得意だつた。温容をほころばして喜んでくれる父であつたから。

その後私は父が居られないからとて、変る事があつてはと、一心に勉強した。

多くの方々の御好意で此処迄やつとたどりついたものの父の御護りあつての事と、入学、卒業時、父の大阪のお墓に報告し大学卒業の日グビロが丘に立つて、やつとこれ迄父のお守りと母の苦労でたどりつきましたと報告した。三人それ〴〵アルバイトし苦しい時期もあつたが、此の地に住つて居た為か、父の知人の方々の大きな〳〵御好意に包まれ甘えてここ迄来得た私共だつた。しかし父が若し生きていてくれたらと如何に思つた事か。父亡き後、私共二人を黙々と育てあげてくれた理解ある母に、孝養をつくす事のみ私共に残された義務であり、父への孝養とも思うのに、心配のかけ通しとは何んと親不孝の極みであろう。

（昭和三十年八月記　筬島内科勤務）

薬理学教室

当時の教室員としては祖父江勘文教授、伊賀由喜友助手、研究補助員の橋本米子、山中フジ子、前田某女、傭人の吉井浅太郎、浦田笑子、伊ケ崎千鶴子、給仕の前田政子の諸氏であつた。

被爆時の狀況

祖父江教授は研究室で被爆。病院廊下に收容。十一日佐野保教授の自宅へ運び加療中、十六日午後一時頃死亡。他の教室員も教室内で被爆、死亡す。

故祖父江勘文教授略歴

従五位医学博士　薬理学教授

明治二十八年十二月二十四日東京市に生る
大正十一年三月東京帝国大学医学部卒業
大正十一年四月同大学副手になり内科学を専攻す
大正十四年七月同大学助手に任ぜられ薬理学を専攻す
昭和二十年四月長崎医科大学教授に任ぜらる
昭和二十年八月九日大学に於て原子爆弾に遭ひ同月十六日鬼籍に入り転に殉ず

主なる研究題目

ラッテの可移植性腫瘍の増殖に及ぼすキニーネ及びその誘導体の作用に就ての研究

死亡者の官職並びに氏名

官職	氏名
教授	祖父江勘文
助手	伊賀由喜友
化学研究補助	橋本米子
〃	山中フジ子
〃	前田某女
雇	浦田笑子
傭人	吉井浅太郎
給仕	前田政子

思い出

祖父江辰子

主人は昭和二十年五月三日に東京を立ち長崎へと向いました。東京で生まれ東京を離れた事のない主人にとつて敗戦の色の濃かつたあの頃、空襲下に家族を残すという事は心細くもあり心配だつた事と存じます。長崎行が決定してからは一家を上げてとも考えましたが、長崎にも家はなく又一方東京でもヤタラに家を空家にする事は、防空上隣組がこれをゆるしませんでした。この家の事については後日、主人が諫早に居る教え子に依頼すると申してをりました。それでも当時の長崎は極めて静かで、

ノンビリして東京では当り前となつていた防空ズキン、ゲートル掛の姿の主人は教室への行き帰りに皆さんによく笑われたそうです。六月中旬頃一度もどり一週間で又そちらへ参りましたが、それから後次第に長崎も深刻となり、防空壕も掘り始められた様で「長崎までわざ〳〵穴掘りの監督に来た様なものだ」と書いてよこした事もあります。大学の建物も廊下などをこわしてお互いの連絡をなくして災害の拡がるのを防いだ様でした。

さて七月にはいり最初の七月十八日には東京へ帰るというのから始まつて次第に予定の変更があり、とう〳〵夏休にはいるまで講義をして、八月の八日には長崎を立つという事になりました。それより以前に東京を立つた日から一ケ月目に帰るといふ事にしてありましたので……その頃の通信は速達でも十日から十五日間かゝりましたから、この時の様に小刻みの変更がありますと、どうせ便りを出しても丁度立つた後へ着くのではないかと通信を差控えてしまつたので、通信はいつも主人の方からばかりで、私達以上に通信のみを、只一つの慰めとして欲していた主人には、何も出さなかつた事もあり、今でもそれが悔まれてなりません。

さて、八月八日に長崎を立つという事は決定済になりましたから、私達は只管その日を待つ中に広島に新型爆弾が落され、続いて長崎にも落されましたが、新聞報道も広島の事ばかりで長崎の事は少しものらず、気になりながらも一同の気持は、次第に長崎を立つた主人は広島通過の際医師として被爆患者の救護に当るといふ事になつたのに違ひないという方に向つて参りました。そして心配の中にも安心を見出そうとしたのです。

所が或日、息子の友人が、長崎被爆状況のくわしく出ている新聞を持つて遠方からたづねてくれました。焼野ケ原と化した長崎の写真、驚ろきながらも長崎の地名、大きな建物のある場所などをくわしく知らぬ私共には果して主人もやられたか、大学が損傷を受けたかなどわからず、近くにおすまいの当時東大薬理の教授、東龍太郎氏をおたづねして色々お話したりしました。こうした不安の毎日を送る中、八月の二十五日頃でしたか、八月十六日消印の長崎からの主人の手になる研究原稿が表書も主人の文字で送られてきたので、私達の長い間の憂は一辺に消し飛んでしまいました。何しろ消印が終戦の翌日であり、外も中も主人の文字である以上、主人の存命は確実と思われたからです。それからは、家族一同すつかり朗らかになり、九月二日の「チヽ、シスイサイフミ」といふ電報を玄関へ取りに出るのさえ、何かの朗報と飛んで出た程でした。しかし右の様な電報で一瞬私達は絶望の真中に落されてしまいました。それから一、二時間した頃、主人は佐野保様の抱く花びんの中の一片のお骨となつて帰宅したのでした。電報はその時より十日も前に打つて下さつたのだそうですが、その頃は電報さへ十日もかゝつたのでした。此処ではじめて佐野様から主人の長崎に於ける被災から死ぬまでの話を承わりました。

角尾学長様は、東京からの御帰途広島を通過の際、新型爆弾の惨状を目撃されて八月八日、一同を集められ大いに警戒する様話されたとの事、しかもその翌日、同型の爆弾が長崎にも落されたのでした。

主人は八日午後長崎を立つべく駅へ行つた所、小倉に貨車脱線があつて復旧に手間取るとの事で翌日に延ばした由、九日の午前十一時警報解除後にこの爆弾は落され、一瞬にして長崎は死の町と化し講義をうけて

いた学生はそのまゝの姿で白骨と化し、丁度用事で外出された先生の何誰かはそのまゝ行方知れず、主人は帰京の時を待つ間を研究室の椅子に横になつていた所でしたが、落ちてきた梁の間をくりゞぬけて外に出て裏山に二晩をすごした由、佐野様は御幸運にも田舎の御来客の為め当日は大学を休んで御自宅にいらつしやつた為め災害をまぬがれ、先生方の御救済に当られた由裏山に祖父江が居るとのしらせにさがされたが、結局、焼残つたコンクリートの病棟の廊下（産婦人科？）に筵をのべて横たわる主人を見出し早速担架で御自宅へお運び下されたそうです。

この担架は学長様の為めに用意されたものでしたが、既に学長様の御病状は悪く、御家へ御運びする事さえ危ぶまれてそのまゝ横穴の中で御治療を続けられたと承りました。一方主人は佐野様方で御手厚い御看護をうけ、三日目には大変よくなつた由。受けた傷もたいした事なく大きな傷は、額と手首に二糎位のものがあり、他はカスリ傷で、これは大分アチコチにあつたと記憶します。

暑い折とてワイシヤツ一枚にズボンの軽装だつたので二晩の野宿に何方かに羽織を一枚頂いた由で、二日間食事もなく水を呑んだりして下痢がひどかつたそうでしたのでした。

三日目に大変軽くなつてその節、東京の私共へ手紙を書いてよこしました。勿論この手紙もお骨が家にもどつた時よりずつと〳〵あとになつて配達されましたが、内容も自分の死は夢にも予想せず早く東京へ帰り度い事、佐野様御一家に大変御世話になり感謝している事、新型爆弾は大変な威力だから気をつけて必らず防空壕に避難する様にとの注意などでした。

さて、その翌日の十四日、夕方、佐野様が御帰宅なさると奥様が走り出られて、早く〳〵との事、主人が息苦しい為、自分で切開するからナイフでも貸してくれる様にと奥様をこまらせたのだそうです。申遅れましたが、その以前からあの頃の皆様の共通の症状のクチビルが乾き口中が腫れていたとの事でした。佐野様は早速枕頭に行かれて切開をするなら消毒もせねばならぬ、ともかくと云われて何やら注射をなされ、淋しい病人の気分も先生のお傍で静まつて切開もせずに済んだとか。しかし病状は次第に悪化し、十六日の午後一時頃息を引取つたそうです。意識は最後までシツカリしていたそうです。その時、佐野様はもう一人の御教授の御看護を受持たれ、御症状も殆んど主人と同様で主人と前後して亡くなられたそうです。

御名前も失念致しましたが、長崎へ御住居をお持ちで御家族もをられ、御自宅で亡くなられたと承知します。

この先生も、主人も佐野様のお手で大学わきの空地で荼毘に付され骨壺さへない折とて御手持の花びんに納めて御持ち下されたのでした。

こうして昭和二十年の九月二日、その日まで主人の帰宅を待ち佗びた私達は一切の希望を空しくせねばならなくなつたのですが、わからないのが一時私達を非常に安堵させてくれた十六日消印の原稿の件でした。どうしても凝問がとけず、とう〳〵消印局へ事情をはなして調査を頼みました所、程経て返事が参りました。それによれば当時下宿住いの主人の為、研究室で仂らく女子の方がおり、九日朝、御両親は今日あたり危ないから休む様申されたのを、その方は今日は先生が東京へ立たれる日だから行かねばならぬと云つて、出がけに前もつて主人から投函を託

されていた前記原稿包みを御両親に頼んで御自分は大学へ、御両親が十六日に投函して下さつたのだそうです。勿論、そのお嬢さんもギセイになられました。

（東京都練馬区下石神井二ノ一二八九在住）

故 祖父江勘文博士の追憶

小林芳人

私が博士を知つたのは随分古いことで勿論学生時代のことである。第一高等学校当時からその優れた才能はクラスを異にする我々にもよく知られて居た。大正十一年東京大学医学部卒業後当時の稲田内科に入り、次いで大正十五年七月に薬理学教室に入つて来られた。私が同年十月に薬理学教室へ入つたから殆んど同時に薬理学の勉強を始めた様なわけである。その後博士は研究生活を一時中断するの止む無きに到つた。その当時の事情に就いて私はよくは知らないが、経済的の問題があつた様に聞いて居る。浅草に開業してからの博士の実地診療医家としてのすばらしい名声は、その門前常に市をなし往診には自動車で飛び廻つても時間が不足であつたと云う様なことでよく窺える。収入の点でも東京都内の開業医中屈指のものであつたらしい。

博士が再び薬理学教室へ現われたのは昭和九年であつた。診療の余暇に研究を再び始め度いと云うことであつた。そこで選ばれた研究は「悪性腫瘍の化学療法」と云う問題であつた。診療の仕事に疲れた身心でこの大きな仕事に取組むことは大変だと人は思うかも知れないが、博士にとつては多年の希望が実現した喜びで実にハツラツたるものであつた。この頃から薬理学教室の玄関には高級自動車が終日とまる様になつた。そのとまる日もだんだん殖えて行つた。博士が診療を他の人にまかせ教室へ来る日が殖えて行つたのである。研究も次第に進展して行きその発表は薬理学会に於て異彩をはなつ様になつた。

この様にして博士が次第に診療室から研究室内へ移つて来て居る中にぶつかつたのは、長崎大学薬理学の後任教授の問題であつた。博士が第一の候補者として挙げられた。これは博士にとつて大きな問題であつたに違い無い。博士はこの時、従来の診療関係の仕事を一切やめ研究生活に専念する決心をしたのであつた。昭年二十年東京では空襲のはげしかつた当時の長崎医科大学長角尾晋博士が私を訪ねて来られ私から祖父江博士の意向をただし、その結果同年春に博士の長崎就任が決定した。五月頃から博士は長崎へ出掛けて研究室の整備に掛つた。当時は東京から長崎迄の旅行は仲々容易でなかつた。絶えず空襲の危険にさらされて居た。博士の決意の如何に堅かつたかが解る。

長崎に原爆の落ちた八月九日は博士は大学の研究室内に居たそうである。その時は大した負傷でも無かつた様に聞いて居る。亜急性的原爆症の経過をとつて八月十六日に亡くなられて居る。八月八日の東京行切符を持つて居たと後で聞いたが、何かの都合で出発を一日延ばしたものと見える。誠に不運な一日であつたと思う。

博士の終生の仕事として惜しくも中絶した悪性腫瘍の化学療法に関す

る研究発表は博士の遺稿として最近発表された論文を含めて欧文及び和文合せて十九篇に及ぶ。細胞毒であるキニーネが生体内では腫瘍に対して細胞毒としての仂きを示さないが、これに腫瘍嗜好性を持つ化合体を結合させることによつて目的を達するのでは無いか。その為めには薬物の生体内分布とこれに及ぼす色々の影響とが大きな問題となる。博士によつて報告されたこれら十九篇の報告には如何に見事にこの問題が着々と解決されて行きつゝあるかを示して居る。

博士にとつて長崎への赴任はこの研究完成への一歩前進であり、今後の輝しい成果が期待されて居たのであつた。十年を経た今日当時を回想して感慨深いものがある。

（東大医学部薬理学教室）

故 祖父江勘文教授の業績と思ひ出

中沢与四郎

祖父江教授の最初の論文は昭和三年に発表されたビリルビン反応の成因に関するものであるが、日本薬理学会において数年間に亘つて相続いで毎回発表せられたのはラツテの可移植性腫瘍の増殖に及ぼすキニーネ及びその誘導体の作用に就ての研究であり、恐らくは長崎医大に赴任せられてからも続けられていたものと思う。

祖父江教授は腫瘍の増殖速度を測定する方法を新に考案し、キニーネ等がこの増殖を抑制することを発見し、その機序に就ては螢光を利用してキニーネの向腫瘍組織性を明にし、更に種々の臓器及びこれらに生じた肉腫におけるキニーネの分布を追及した。本研究が完成せられたならば腫瘍の療法に新分野が開かれたものと考えられ、教授の急逝は斯学のため誠に痛恨に堪えない。

私は偶然にも祖父江教授の後任者となつたが、同教授にお目にかゝつたのは年に一回の薬理学会の席上だけで個人的なおつき合いは全くなかつた。だから私は祖父江教授の思い出を書く適任者ではない。それにもかかわらず筆をとつたのは、学会を通じての短い印象が今なお私の脳裡に深く残つているからである。祖父江さんは美髭をたくわえた白面の貴公子で、学会にはいつもハンチングをかむつた軽装で来られ人目をひいた。そして又会場では当時としては珍しいカラースライドを御持参のライカープロヂエクターを使つて頗る明快に説明し聴者をして感銘せしめた。このような印象は恐らく私だけでなくその頃の出席者のだれもがいだいたことであろう。

祖父江さんと二人で初めて話したのは昭和十八年秋東京で薬理学会の終つたあと、地下鉄のホームで電車を待つているときであつた。私は自分の行先の道順を彼にたづね、ついでに二言三言語り合つたが、そのとき小さい声で物静かに話される祖父江さんの態度は演壇に於ける声高く少し威圧するような感じとは全くちがつていた。私は意外に思つたが、同時に祖父江さんの温和な人格の一端にふれたように感じた。しかもこれが祖父江さんとの最後の面接となつてしまつたのである。

戦後（昭和二十五年）長崎大学で薬理学会西南部会が開かれたとき東

大名誉教授林春雄先生が東京からわざわざ出席された。突然先生は原爆犠牲者の墓にお詣りしたいと言い出され、次の予定時間が迫つていたので、私は大急ぎでグビロが丘に先生を御案内した。当時はまだ全く整地されていない道なき瓦礫の上を御老体の林先生は大股で歩き一気に丘の上にまで行かれた。先生の御元気さは私とお伴の熊谷教授（東大）は息をきらして辛うじてあとに続いたほどである。慰霊碑の前で先生は敬しく長い黙禱を捧げられた。私も頭をたれ乍ら祖父江教授のことを思つた。そしてこの時、先生が戦後の未だなお諸事の不自由をしのんで長崎までその御老体を運ばれた目的は、浦上のこの地下に眠つておられる先生の愛弟子祖父江勘文博士の冥福を祈るためであつたことを今更の如く見たのである。祖父江さんは林先生がどんなにか期待しておられた俊秀だつたかを思い又その美しい師の愛をしみじみと見た。そのお元気だつた林春雄先生も先年長逝された。天国で祖父江さんと長崎の話をしておられるような気がしてならない。

（昭和三十年八月八日記　薬理学教室）

由喜友

伊賀久子

ああ、忘れ様としても忘れられない思い出の八月九日の原爆紀念日が、又近づきました。

ことに今年は十周年とて、思い出も一入で御座います。十年前の此の日は、遠くはなれた四国の松山で、毎日の空襲に仕事も手につかず、ただ逃げる事のみ考えて居りました。老母は田舎へ疎開させ、主人も病中だつたので多くは田舎に居り、一人私のみ家を守つて居ました。それで自分は何日死ぬかも分らぬと思つていましたが、息子が死ぬ等とは夢にも思いませんでした。其時長崎へ新型爆弾が落ちたが、曇で被害はなかつた、とのニュースを聞きましたが、自分の方が不安なものですから、息子の心配をするひまもない有様でした。其の内十五日の休戦となり急に気にかゝりまして方々手をつくして聞きました。始めはちつとも分りませんでしたが、そのうち長崎大学は全滅との事を聞き、それから苦心して汽車の切符を求めて出発したのが八月二十一日朝、翌日長崎へ着いたら想像以上の惨状で、由喜友の死も確認されて遺骨を受取りました。余りの驚きに始めは泣くにも涙も出ませんでしたが、お骨をもらつて休んで、始めてわれにかえり泣けて参りました。それから暑い中をお骨をいただいて、市役所や、警察へ行つて手続きをすませ、こんないやな土地には一時間も居るのはと、直ちに汽車に乗つて帰途につきました。其の往復の汽車中の苦しみと、かなしみ。私ごとき者の筆にては、到底書き表わす事も出来ません。帰つてお葬式をすませました処、主人が落たんの余り床につき、翌二十一年春死亡致し、つゞいて二十二年老母が亡くなり、只今は一人で御座います。余り次々の不幸に、私の気もちも何やら分らぬ様で御座いましたが、今では落ちつき、此の記念日に長崎までお参りに行くのを何よりのたのしみと致し、故人が生きて居た時会いに行く時の様な気持ちで、長崎まで出掛けます。之を老後のたのしみに、之からもボツ〳〵行かせて頂きます。

（松山市南立花町在住）

病理学第一室

当時の教室員は竹内清教授、保野正之助教授と、技工嘱託の中村繁治氏、技術嘱託の高谷重雄氏、雇の井手口貞市、田川甚蔵、池田等、小野輝子、岡田綾子の諸氏であった。

被爆時の状況

竹内教授は鳴滝の自宅に結核療養中で難を免る。保野助教授は下宿（永井隆助教授宅）で爆死。中村、高谷、池田、小野、岡田の諸氏は教室玄関前の防空壕附近で、井手口、田川の両氏は金比羅山麓に小使室を移築中、現場で被爆。一週間後井手口は死亡。中村繁治氏は数日後御船蔵町の自宅で死亡。高谷氏は行方不明。

故 竹内清教授略歴

従三位勲二等医学博士　病理学教授

明治二十四年七月十六日兵庫県に生る
大正四年十二月九州帝国大学医学部卒業
大正六年一月九州帝国大学助手に任ぜらる
大正八年六月九州帝国大学助教授に任ぜらる
大正十二年六月長崎医科大学助教授に任ぜらる
同　　年同月病理学と病理解剖学研究のため欧米に留学
同　十四年十二月帰朝す
大正十五年三月長崎医科大学教授に任ぜらる
昭和十一年五月欧米各国に出張を命ぜられ同十二年一月帰朝す
昭和十二年一月陞敍高等官一等
昭和十四年二月満洲国及び中華民国に出張を命ぜられ同年三月帰朝
昭和二十一年四月十九日病を得て卒す

主なる研究題目

結核病変の組織発生学に関する研究

死亡者の官職並に氏名

官職	氏名
助教授	保野正之
技工嘱託	中村繁治
技術嘱託	高谷重雄
雇	井手口貞市
〃	小野輝子
傭人	池田等
〃	〃	岡田綾子

病理学第二教室

当時教室員は僅に梅田薫教授と傭人深堀ハツエ、角田セキの両氏のみであつた。

被爆時の状況

梅田教授は病理講堂で学部二年の講義中で爆死。角田氏は教室玄関前の防空壕の外で爆死。深堀氏は病気の弟を疎開させる為田舎に出かけていて難をのがれる。

故梅田教授略歴

正五位勲六等医学博士　病理学教授

明治三十六年二月東京府に生る
大正十五年三月東京帝国大学医学部卒業
同年四月京城帝国大学助手に任ぜられ病理学を専攻す
昭和四年十月同大学助教授に任ぜらる
昭和十一年五月病理解剖学研究のため欧米に留学
同十三年七月帰朝す
昭和十六年八月日本大学医学科教授となる
昭和十九年七月長崎医科大学教授に任ぜらる、陞叙高等官参等
昭和二十年八月九日大学に於て原子爆弾に遭い斃に殉ず

主なる研究題目

鉄代謝の形態学的研究

死亡者の官職並びに氏名

官職	氏名
教授	梅田薫
傭人	角田セキ

原爆当時の病理学教室

若原猛夫

慌しい様な、夢の様な日を送つてゐる内に、もう十年が経つてしまつた。あの日教室に出勤していた人々はすべて、建物と共に消えて行つた。この文を書いている私は、その三ケ月半許り前、幸か不幸か、赤紙召集を受け、九州戦線の第一線薩摩半島の西海岸で、あわれな見習士官として、手の施し様のない程蔓延していた赤痢の防疫業務に追われていたばかりに、家族共生命永らえているわけで（当時自宅は城山町の川端にあつた）運命は分らぬものである。幹事よりの命により筆をとりはじめたが、毎日と忙しく施療に追われていて、一向に稿想をねる暇がないので、まとまりのつかぬ文になることゝ思うが、不悪御諒承願い度い。尚、原爆当時は不在で、遅れて大学に帰つて来たため、当時の模様は色々の人々、殊に故竹内教授（病理学）の未亡人より聞いたことの受売りであることを御断わりして置く。

当時のことを書く前に、少し遡つて教室の模様を述べることにする。病理学教室は、基礎教室が南北に三列に並んでいる内の一番西側の列の真中、北の解剖両教室と南の法医学教室との間に挾まれた木造建で、一部だけコンクリート二階建、その南端の講堂が、今の基礎教室の玄関、事務室のあたりになる。その廊下つなぎの建物の中に、第一、第二教室と大陸医学研究所改め東亜風土病研究所（現在の風土病研究所の前身）の病理部病理学科が合世帯をしていた。第一、第二教室共、原爆二年前頃迄は、夫々十名位の教室員をかゝえ〔主任教授は夫々故竹内清教授と吉田富三教授（現東大教授）であつた〕賑やかに、又盛んにアルバイトやスポーツにいそしんでいた。吉田肉腫が見つかつたのもこの頃である。それが昭和十八年暮頃になると、次々の応召、研究を終えて教室を出て行く人々等で、両教室共夫々半分位或はそれ以下になつてしまつた。その頃迄には朝鮮出身者も故郷に引揚げた。

東亜風土病研究所は当時臨床部が編成されていなくて、病理部のみ（主任は病理学の金子直教授）、その中に病理学科と細菌学科（細菌学教室内に間借りしていて、主任は現在の細菌学の青木義勇教授――当時助教授）があつた。病理学科には丸吉氏が唯一人助手として勤めて居られたが、その応召後は金子教授と、ラボランティン二名という淋しい陣容であつた。

昭和十九年になると、木村男也教授が南方に軍嘱託として出られて欠員中の東北帝大病理学教室に吉田教授が赴任されることが決定した。当時の第二病理の医局は、佐々木仁一君（現在山形市開業）と私の唯二人、もう一人の牟田義男氏（現在矢上町開業）は既に応召して大陸に渡る前で、久留米の部隊に属していた。そこで相談の結果、佐々木君が仙台へ吉田教授について行き、私が長崎に残ることになつたが、その佐々木君も吉田教授の赴任される一ヶ月前遂に応召してしまつた。吉田教授は昭和十九年七月に赴任され、八月に後任梅田薫教授を日本大学医学部から御迎えした。当時の病理学教室の蔵書は単行本、叢書、雑誌何れもよく揃つていたので、東京時代文献を探そうとすれば、態々四谷の慶応大学医学部か、本郷の東大に出かけねばならず、大いに苦労されていた梅田教授は手許に充分の文献を持つて大喜びで、着任早々早朝から深夜迄大いに張切つて研究にいそしまれた。十一月になつて、私が、欠員中の第二病理の助教授を拝命することになつた。

時が経つに従つて戦争は益々深刻になり、長崎の上空には度々大村への往復のB29の編隊が見られ、その度毎に空襲警報で防空壕に待避を余儀なくせられた。併し長崎市は昭和二十年八月一日迄は、極く軽度の空襲を受けたのみで、何事もなく過ぎて行つた。

婦女子に竹鎗訓練をさせた断末魔に近い軍隊は、医師を出来るだけ戦線に引出すため軍医予備員志願を奨励した。そのお手本として大学の教授が二十五日間の軍医予備員の教育に志願したのもこの頃であつた。（教授は召集されないが、他の人々は志願を強請され、続いて召集を受ける破目に陥つて行つた。）昭和十九年の第五次教育（同年は全部で五回）では九月から十月にかけて、本学から法医の国房教授と生理の清原教授が参加され、昭和二十年の第一次（二月施行）には病理梅田、生化学内野、婦人科内藤などの若手の諸教授が（確か五名と思う）が参加された。この内、内野豊生教授は在営中流行性脳脊髄膜炎に罹り、当時未

だ日本人は殆んど知らない、そして軍隊だけが漸くにして作り上げたペニシリンを（角尾学長がさる筋から入手して居られた）用いたが效なく、遂に亡くなられた。

この様にして昭和二十年を迎えたのであるが、四月十五日夜私が令状を受け福岡の部隊に応召したあとは、第二病理は梅田教授と二人のラボランテイン（深堀・角田両嬢）だけになつてしまつた。この頃は第一病理も講師の筒井氏が三菱病院に勤められ多田君（講師）が古屋野外科に出て、町田氏等も応召され、最後に残つた原田君も私の三日程後に応召し、残りは竹内教授、保野正之助教授と二人のラボランテイン（小野・岡田両嬢）だけになつた。その他両教室に共通に所属している写真技師高谷重雄氏、掛図や実習標本担当の秋紅中村繁治画伯、小使兼解剖助手の井手口貞市・田川甚蔵両君、それにヂーサンの小使の山口末三郎君と若い小使の池田等君（夜学に通つていた）がいた。研究所の方は金子教授と二人のラボランテイン（平山・草野両嬢）、以上がその後原爆時迄の病理の全員で、こうなつては日常の講義や研究に事缺くわけである。

その内に、沖縄や南洋諸島からの本土空襲は回数が増して来て、警報の出ない日は殆んどない様になつた。従つて警報発令中は全員業務を放つて防空壕に待避し、学生（学部四学年、附属臨時医専四学年、それに附属薬専の三学年も居る）の講義は殆んど進展しない様になる。併し長崎市内は極く軽度の爆撃を蒙つただけで殆んど無傷に近かつた。それ故空襲を軽視したためか、警戒警報発令時は講義を続行する様になつたとのことである。又一方大学の財産、殊に図書や研究資材の疎開も考えられ、いくらかは佐賀県鹿島のあたりに持つて行つた。

一方火事を最小限度に喰い止めるために、建物の間引きも考えられた。そして病理教室でも廊下を切離したり、小使室を毀して取除けたりした。品物疎開に就いては病理は殆んど参加していない様である。（終戦後病理の疎開荷物として我々の手元に戻つて来たのは、二～三台の顕微鏡だけであつた。）と言うのは、曩にも述べた様に、病理学教室には鉄筋コンクリートの二階建の建物があり、二階は竹内教授室と図書室並にその別室があり、一階は顕微鏡標本の格納室と結核動物の実験室の二室から成つていた。そこで疎開する代りに色々な品をこの建物内に押込み、窓はすべて外からトタン板を張つて、その外に赫土を塗つて置いた。これならば普通では類焼しなかつた筈である。

こうゆうことと併行して、人員疎開も次第に行われた。浜口町の高台に居られた梅田教授は大草のあたりに疎開され、御自身は殆んど教室に泊り込みで、時々大草に帰られた様である。保野助教授は城山町に住んで居られたが、母堂を送つて一回、更に令室令嬢達を送つて、何れも島根県迄往復された。この引越が少々無理だつたためか、以前から治療して居られた胸の病が重くなり、時には休んで静養される様になつた。竹内教授は御宅が鳴滝のシーボルト宅趾のそばだつたが、別に疎開されようという動きは無かつた様である。唯、教室員が減りかけてからは、昔から取扱つて居られたテーマ「結核」を、更に深く研究のために、時々佐賀県中原の傷痍軍人佐賀療養所（現在の国立佐賀療養所）に泊りがけで出掛けて病理解剖や実験に当られる様になつたりした仕事上の無理が、戦時中の栄養不足や直接菌を使はれたことなどと重つたためか、遂に御自身も結核症に罹られ、原爆当時は鳴滝の自宅で臥床されていた。金子

教授は矢張り人員疎開迄はして居られず、先づ荷物疎開のため、病理で取除きの運命に遭つた小使室を本尾町の奥、金比羅山の麓のあたりに移築中であつた。

この様な処に八月一日、長崎市も空襲され大波止その他が被爆、大学も直撃弾を受けて、外科の手術室、婦人科の教授室・図書室・手術室あたりが目茶々々になり、看視の学生が一、二名死亡したと聞いている。こうなると大学も入院患者の内、軽症者など退院させて余り残つていなかつたそうだ。

この様にして、運命の八月九日を迎えたわけである。当日教室に出勤していたのは、梅田教授と高谷・中村両氏、小使の山口・池田両君、ラボランテインの小野・岡田・角田・平山・草野の五名で、原爆の時には梅田教授は病理講堂で学部二年生の講義中、学生と共に即死された。

他の人々は教室玄関前の防空壕の中や外にいて、ひようきんな中村氏がラボランテインを例によつて笑わせていたと聞く。其処へ原爆一閃、何れも強烈な爆風で追しひしがれ、つゞいて起つた真空状態にもまれ、建物はつぶれ、病理教室が頼みにしてゐた鉄筋コンクリート建は、建物自体にひゞが入り、その上、壁や天井に凹み迄出来ている。従つて窓を塞いだ赫土やトタン板など一瞬にとび去り、つゞいて木造建の処々から同時に発火、遂に病理学教室は全部焼けてしまつた。勿論コンクリート建の中味も同様で、不燃性の金属、陶器、硝子などの残骸があちこちに残在してゐるが、何千度の灼熱にあつてすつかり変質し、もろくなつていた。位置も爆風ですつかり変つていた。図書室の蔵書も高さ三、四尺もあろうという灰の山と化し、又竹内教授の蔵書で珍らしい多数のコレクションも同様な運命に遭つた。

この日竹内教授は自宅で病床にあつたため生命を拾われたけれど、その後重症の金子教授の令息仁君（次男で五・六才？）を預られ、その夜を徹しての泣き声で教授は不眠となり、病勢が悪化された。後、大学が大村海軍病院の施設を利用する様になつて、そこに入院された。併し終戦直後のことで、今の様に進んだ治療も出来ず、昭和二十一年四月十九日大村病院の病室で亡くなつた。

丁度その四日前の十五日は、GHQからサムス大佐が大村に乗り込んで来て、一方的情報に基き、医大を十五日間の猶予で、大村病院から追出して諫早（現在の分院）へ移る様にと、全く残酷な命令を出した日で、我々は涙をのんでこの命に服し、引越しの準備をすると共に、諫早に行つて研究、診療、講義に必要な器械、薬品その他の英文リストを占領軍に大至急提出すべく大童の最中であつた。竹内教授としては、大学が去つて後大村に一人残されるのは心細いことであられたに違い無く、そんなことが精神的ショックとなつて寿命を縮められたのではないかと思う。

金子教授は、前にも書いた通り、建物疎開で取除けられた教室の小使室を貰つて、荷物疎開のため金比羅山の麓に移築中であつた。当日も末の坊ちやん（後日竹内教授宅に引取られた）を連れて現場にあり、小使の井手口・田川両君と、それに井手口君達の近所の人々の応援で、完成真近かであつた。その仕事の最中被爆し、夫々痛手を受けた。そこで、まだ元気であつた金子教授は、大学から救護班を連れて来ると言い残して立去られ、そのまゝ戻つて来られなかつた。後に国友名誉教授が金比羅山の中腹から山道伝いに西山水源地の上手の方に行かれる途中、力尽

きて水を求めている金子教授に会われたが、後刻その姿を探しても見当らなかつた由で、どこで亡くなられたか不明である。令息は間もなく竹内教授の御宅に引とられ、火傷のため昼夜泣かれた。その後元気になり、その内佐世保の教授の令兄の許に引取られてあつたが、二十二年はじめ肺炎で亡くなつた由である。教授の御宅は浜口町の高台への登り道、今の原爆公園を見下ろす位置にあつたから無論その御家族は全滅である。教授と一緒にいた井手口君はそのまゝ亡くなつたが、田川君の方は奇蹟的に助つている。屋根と家との蔭にいたそうであるが、その後元講師の筒井先生（当時三菱病院）に手厚い治療を受けたためであろう。一時は起き上ることも出来ずにいたが、その内に元気を恢復し、目下長大本部勤務の文部技官として大工転の筆頭である。原爆で全家族を失い、又授精能力をも失つたのではないかと心配していたが、その方は健全であることが後継の出生により立証され喜んでいる。でも尚原爆症は治りきつていない。

も一人助かつた幸運者は第二病理の深堀ラボランテインで、病気の弟を疎開させるという従姉（元第二病理ラボランテイン）の伴をして田舎に出かけていた。保野助教授は、家族を島根県へ帰えされた後は、上野町の故永井教授（物療科主任、当時助教授）の御宅に下宿され、当日は自室でねて居られた由で、そのまゝの姿で遺骸が見附かつている。原爆は全く困つた武器で、被爆時即死しなければ暫くは症状が現われない。従つて本人は思い思いの方向に行動する。そして、その内に、中には間もなく、中には大分時間を経過してから、症状が現われて遂にはどこかで、従つて被爆時と全く別な処で、息を引とることになる。然かも、当時近くにいた人々、即ちお互が誰であるかの証人は殆んど生きていないので、他の土地から来た親戚の人々には、その遺骸を探す伝手がない。即死した人でも、あの猛烈な爆風で元と位置が変つているから始末が悪い。こうゆうわけで、当時のことも色々聞いたが、その伝手のない人のことは薩張り詳しいことが分らない。高谷老と他のラボランテイン、山口君及び池田君のことは聞及んでいない。中村秋紅氏のことは、夫人が助つていたので少し分つている。即ち秋紅氏は被爆後、長与に買出しに行つている夫人を迎えに行き（同日夫人が汽車の切符が手に入つているから一緒に行つて欲しいと頼まれたが断つている。元来夫人が病弱であつたからその身体を心配して迎えに行つたものらしい。）途中で遭つて共々御船蔵町の自宅に戻つた。帰り着いて見ると、大学から逃れて来た令息が壕の中で発病して呻つている。その内には秋紅氏も症状が現われて、数日の間に二人共相ついで亡くなつた。竹内教授の御家族も、梅田教授の御家族も、幸にして皆無事であつた。

その他教室関係の人々の内原爆に関係のある方では、当時県庁に勤めて時々第一病理に来て居られた奥田氏は、城山町に住んで居られ、家族を亡くされたが、現在は浜口町の大学の下に開業して居られる。竹之久保の長崎病院に勤務して居られた岡部準四郎氏（第一病理）は、同病院をやめて家族共々故郷に一旦引揚げられたが、原爆の時は折悪しく、単身荷物引取りに竹之久保に来て居られて被爆し亡くなつた。筒井前講師は平戸町の自宅が道路拡張のための強制疎開にかゝり、城山町の小学校下に越して来て居られた。同氏は病院に出勤して無事であつたが、家族は駄目で、重症の夫人が防空壕の中で「あなたは私の病気を治せぬのか

」と恨み事を述べられたとの憐れな話を聞いている。多田前講師は既に古屋野外科に移つていたので助かつた。以上が当日の教室関係の被爆者の模様の大要である。

当時のことは教室以外の人のことも色々聞いたが、あれから十年近く経つと、漸く記憶も薄れかけた。爆風で倒れた家が、直ぐでなく、暫く合間を置いて、而も火の気のない処から、一せいに発火するなど全く想像も出来ないことである。こうゆうことも聞いた。法医の国房教授が山木事務官と共に爆風で倒れた木の下敷になつた。そして、どちらかゞ先にこの木の下から抜け出たなら、必ず他の一人を助け出すことをお互に約束し合つた。その内、国房教授だけがどうやらぬけ出すことが出来たものゝ、力尽き果てゝどうにも出来ないでいる内、その木は燃え始めて事務官はそのまゝ亡くなり、教授は興善町の自宅迄担架で運ばれ、後に亡くなつた。又、本尾町のある被爆者の処では、皆が枕を並べてねている。その内症状が悪化して来ると、患者は急に床の上に立ち上つて、そのまゝ枕を倒す様にドスンと倒れる。かういうことを繰り返えす様になるともう駄目で間もなく死んで行く。沢山いた家族が一人一人この様にして次々と亡くなつて行くのに、何一つ施す術もない。無為にこうゆう有様を見せつけられる生残りの家族の心の中は如何だったろう。これらのことから考えると、原爆とは何とゆう残酷な武器だろう。非戦闘員を全くのなぶり殺しにするわけで、いつそ一度に息の根をとめる武器の方が余程ましだと思う。原爆当時の苦しみを全然知らずに、おこがましくもこんなことを述べて、亡くなつた方々には誠に申し訳がないが、伝え聞いたことであつても、それを出来るだけ忠実に書き残すことも、生残つた者の義務だと考え、敢えて拙文を御目にかける次第である。長崎を離れて田舎に住い、又資料も殆んどなくて、事実を確かめる術もないが、記憶の糸を辿つて、教室の人々のことを出来るだけ充分書こうと努力してみた。

私は昭和二十年末になつて大学に戻り、先づ大村海軍病院内、次いで諫早、長崎へと教室と共に五年余りを暮らした。大村時代或は諫早時代殆んど零に等しい設備で、それに終戦前に比べれば、換算して、約十分の一位の僅かな教室予算しか与えられず、いつになつたら教室は元に戻るだろうかと心細い思いをしていた。その間、林・松岡両教授を迎え、或は臨時医専の廃校・附属薬専の九大移管問題、初代学長候補交渉や同窓会の寄附募集などに馳け廻つたり、講義や研究の材料をかき集めたり、嬉しいこと、悲しいこと、苦しいことの連続であつた。それでも年月の経過と共に復興は一歩一歩進み、十年目の今日は大学も教室も先づ完全に近い機能に復活してゐることを非常に嬉しく思う。原爆前に比べると、図書その他はまだ〳〵お話にならないが、併し別な点では近代化して今の方が勝つているとも言えよう。あと五年乃至十年したら、又更に充実して、終戦直後のことは夢にも想像されぬ様な時代になろう。唯学内を眺めてみると、あの頃一緒に苦労した人々は、一人去り二人去り、現在は極く僅かしか残つていないのは、少々淋しい感じである。原爆十周年に当り、被災された方々の事を拙い表現ながら書きとゞめ、その御冥福を祈り上げると共に、再建の跡著しい大学の今後愈々の御発展を望んで筆を擱く次第である。

（昭、三〇、五、二七、於世知原）

思い出

岡本生

当時、学二武田学兄(現病理学教室、高津学兄に語りし言葉)の言に依れば『八月九日は梅田教授の学部三年にたいしての病理各論の開講日であつた。病理教室の講堂は満員で「一般に人間の心臓の大きさは、ほゞその人の手のこぶし大で!」と語られた。その瞬間、閃光あり、学生一同教授の顔をみつめ、教授も学生を見渡された。瞬時にして教授の背側にあつた防火壁が倒れかゝると同時に教室全体が倒壊し、学生は机の下に潜り込んだ。教室は発火し、一部の学生は側壁の板のわれ目より脱出した。』とゆう事です。これが梅田教授の最後の御様子だと思われますが、その後の消息は不明です。また武田学兄も典型的の原爆症で亡くなられました。

法医学教室

八月一日の空襲により、当教室も落岩による被害があつた。尚当時の教室員は国房二三教授、徳川武夫助教授(内地召集中)と技術嘱託の山口与作氏、雇の黒川マツ子、傭人の吉田マサヱの各氏であつた。

被爆時の状況

国房教授は教室で被爆、翌日小児科の地下室に救出され其後桜馬場町の自宅で加療中、十六日未明死亡される。

他の教室員も教室内で爆死す。

故国房二三教授略歴

正四位勲四等医学博士　法医学教授

明治三十四年五月十六日福岡県に生る
昭和四年三月東京帝国大学医学部卒業
昭和四年四月京城帝国大学助手に任ぜられ法医学を専攻す
昭和六年五月京城帝国大学助教授に任ぜらる
昭和十五年七月長崎医科大学教授に任ぜらる
昭和二十年五月陞叙高等官二等
昭和二十年八月九日大学に於て原子爆弾に遭い同月十六日鬼籍に列し転に殉ず

主なる研究題目

ABO式血液型の亜型の研究

死亡者の官職並に氏名

官職	氏名
教授	国房二三
技術囑託	山口与作
雇	黒川マツ子
傭人	吉田マサエ

国房教授の思い出

佐藤武雄

原爆十周年記念に「国房教授の思い出」をと友永教授に乞われた。原爆と云えば多くの知友同僚を失つた自分には色々の思い出が蘇つて来る。中でも国房教授の思い出は一入切なるものがある。私が京城帝国大学法医学記念創設の任を帯びて赴任したのは昭和四年四月の事である。勿論京城に於て教室の人を求める事は困難であつた為め、母校東大に来て人を探し求めた。当時国房君は臨床をやるのはあまり好まないがとゆう考であつて、日赤中央病院へ行く様な話を聞き及んで、直ちに京城へ来て貰えないだろうかと交渉をした所、喜こんで来て呉れた。爾来京城に於ける私の生活には国房君と繋がるものが十有余年の間続いたのである。そして長崎の教授として迎えられて京城帝大の法医学教室を去るに至つたのである。この間の思い出の数々は到底限られた紙面ではそのすべてを尽す事が出来ない。茲にその一二を記し国房君の冥福を祈る次第である。

国房君が京城に赴任したのは、先づ私と同時であると云つてよい。その当時城大ではまだ卒業生も出ないので国房君と二人の教室生活が一年続いた。

当時私が「沈降素量と沈降素価」との研究を進めて居つたので二人で夜おそく迄教室で研究を続けていたものであつた。同君の仕事の仕振りを見ていると、なか〳〵手堅く且頭の仂きもよいので仕事は着々進んだ。家へ来て夕食を共にして又教室へ出かける様な事もあつた。食事を共にすると、同君はお菜を一皿宛平らげて他の皿に移る、決してあちらの皿もこちらの皿もと手をつけないので見ている方が稍々ハラハラする。「君それ嫌いなのかい？」と聞くと「いやこちらをすませてそちらに移ります」と云つた様な風で、なか〳〵特長のある食べ方をしたものだ。

当時京城を始めとして朝鮮全土に於ては、法医解剖を他の医者がして居つたので、解剖例数も少なかつたが、時を経るに従つて漸次その数も増して来、又活動範囲も広くなつて来て、屢々二人で朝鮮の奥地へ解剖に出かける様な事があつた。一つの解剖をして帰るのに一週間も費す様な僻地へ出かけた事もあつた。国房君が年齢に比較して老けて見え、私が比較的若く見えるもので、お互に無口である二人であつた為めもあろうが、食事の時など国房君が正座に進められるので同君はいつもその裁きに閉口して居た。後でコソ〳〵その事を僕に話し「先生どうかさつさと正座へ行つて下さい」と彼一流の笑顔で物語つて居たものだ。

僕が昭和六年に外国へ行く様になつて留守中を私に代つて教室の一切の事を約二年間見て居て呉れた。私が昭和八年の五月に帰つて来たので

あるが、不在中大した問題もなく過していて呉れたのに、昭和八年の四月に彼にとつて一大問題が起きた事がある。それは四月の十日頃、子供の首丈が路傍に捨てられてあつて胴体が発見されず、その首の鑑定をした問題である。胴体は私が帰朝してはじめて登学した日に奇しくも発見されて検査されて居る所であつた。その問題というのは首だけを検査鑑定した時の結論の内、死後経過時間の問題に関してであつた。国房君の判断は少しも誤つて居る所はなかつた。併しその首が埋葬されてある死体を堀り出し切断され、然も路傍に捨てられてあつたとゆう経過が判明して居らなかつた為めに素人考え的判断から云えば、事実と相違して居つたいう所から問題が起きて来たのである。この経緯を詳細に記せば長いことになるし、又興味ある事である。こゝでは思い出という記事であるから省略する事とする。要は国房君の誤まつた判断でないのに誤まつた如く宣伝して、それを或政治的の材料にしようと云う甚だけしからない司法警察官の悪意の現われである事がよく判つた。然も新聞記者がその人に躍らせられて、国房君を責めるので、国房君はもう法医は止め度いと私に云い出した。当時国房君の心中穏やかならざるもののあつた事は推察するに餘りある所であつた。私は国房君に「君の判断が法医学的に見て誤まつているものでない事は明確である。如何に隠謀を巡らせられ様とも僕が矢表に立つて全部を引き受けてやる、そんな弱気を出すな。馬鹿程こわいものはない、馬鹿相手のけんかはするものでない」と云つて慰めてやつた。そしたら又意を翻して法医を専念する事になつた。

昭和十年に発覚された例の世を震駭した集団殺人事件、銘して「白々教事件」なるものの処理に当つても数々の思い出が走馬燈の如く私の頭に去来する。私が京城帝大の医学部長になつて教室の事をあまり面倒を見る事が出来なくなつてからも実に国房君はよく教室の事の面倒を見て呉れた。長崎の教授に栄転する時は私にとつて実に手離し難い人物であつたが、本人の将来を考えて喜こんで送り出した。長崎へ行つてからの仕事もなか〳〵頭脳明快な仕事を切り拓いていたのに、戦争が烈しくなり有意の才を抱き乍ら、思う様に研究も進められず、遂に原爆によつて倒れるに至つたことは、本人も嘸かし残念であろうし、私も実によい人を失なつたと悲しんで居る。当時国房君の死を私はおくれて郷里で受けて亜然とした。考えて見れば実に同君は不運であつた。明眸才媛なる夫人を、長崎へ赴任して間もなく失い、又その後を追うて自分自ら原爆の犠牲になつたとは……。今日迄彼が健在で研究を進めて居たら、恐らく劃期的の研究を成就していたであろうのに。原爆十周年記念に当つて聊か追憶を記し、御令息方のその後や如何にと思いを走らせて筆を擱くことにする。

（信州大学学長）

国房二三教授を偲ぶ

友永得郎

昭和三十年八月九日、十たび周り来し原爆忌、例年の様にグビロが丘の慰霊碑の前に黙禱を捧げる私どもの頭上には十年前のこの日と同じく晴れ渡つた空から灼けつく様な太陽がかゞやいている。十年の歳月は短

かくして又長い。この期に静かに故国房二三教授を偲び筆のおもむくまゝに記して故人の冥福を祈る。

国房教授が長崎の法医学教授として着任されたのは昭和十五年七月で、当時京城の佐藤武雄教授の下に助教授であつた同氏は北条教授の九大転任の後を受けついだのであつた。私の恩師である千葉の加賀谷先生と佐藤教授とは非常に親しい間がらであつた関係上、私と国房氏との間にも何となく相通ずるものがあつた。しかし国房氏の長崎着任前は京城と云う地理的関係で毎年の学会には余り顔を見せなかつた様に思う。そのためか私には長崎以前の同氏については、これと云う思い出もない。

国房氏が長崎に着任された翌年、昭和十六年の法医学会は四月に台北で開催された。その学会出席の往路に私は国房氏と同じ船、香取丸に乗り合せ、しかも同じ食卓が割当てられた。食卓の四人の中ほかの二人は船の事務長と青森の或会社の幹部の人であつた。その時食卓に出されたリンゴの事で国房氏と青森氏との意見が対立した――国房氏は朝鮮リンゴがうまいと主張し青森氏は青森のリンゴの方がうまいと云う、両方とも仲々頑固で自説を曲げない。次の食事の時に又その論争を蒸し返すと云つたありさまで、私と事務長とは只ニヤ〳〵笑つて聞いているより仕方がなかつた。この時はじめて私は国房氏の真面目に触れた様な気がした。重い少しかすれた声で口角泡をとばさんばかり一歩もゆずらないのである。――やがて国房氏曰く「あなたは朝鮮リンゴをどこで食べましたか」、青森氏曰く「東京で食べました」、国房氏「それではだめです。朝鮮リンゴは朝鮮で食べなければほんとの味はわからない」。青森氏「それではあなたは青森のリンゴをどこでたべましたか」。国房氏「勿論東京で」。青森氏「それではほんとの味はわからない。やはり青森でたべなければ」――そこで私は横合から口を出した「それではどちらがうまいか私が判定しましよう。後日私のところへ両方から一番うまいリンゴを送つて下さい」。これでどうやらリンゴ論議は大笑いの中に解消した。（その年の終りには太平洋戦争となり、香取丸も間もなく撃沈されてしまつた）

台北の学会の席上では今一つ国房氏の真面目を見せられた。それは某教授が教室員の演題を代演したのであるが、その内容が溺死の診断に関する事で、私がすでに数年前から学会で二回に亘つて報告したものと規を一にしたものであつた。これに対し国房氏質問して曰く「溺死の診断については既に友永氏が前の学会で報告しているが演者はその抄録をお読みになつたか」。某教授「まだ読んでいない」。ここにおいて国房氏憤然と色をなして「いやしくも学会で研究報告をなさんとする者が前の学会の記録を読んでいないとは何事であるか」と叱咤したので某教授は一言もなかつた。当の私は余り突然の応酬であつたので、只ぼんやり聞いていたのであるが私のささやかな報告にもよく注目しておられた同氏に、更めてひそかに敬意を表した事であつた。はからずも私が国房氏のあとを受けて長崎に着任してから溺死の研究に手をつけた際、この学会での出来事がふいと思い出されて妙な因縁だと思つた。

台北の学会のあと見学旅行に行を共にしたが、阿里山の宿で山頂の日の出を拝せんと早朝何名かで頂上の展望台に登つた。この時偶々国房教授のところの鹿毛君が撮した写真が今でも残つているが、それは大きな檜の切株に空を背にして中央に加賀谷先生が立たれ両脇に国房教授と私とが蹲んでいるもので、この写真も私には何か因縁めいたものを感じさ

せるのである。

もう一つ、これも因縁ばなしになりそうだが、国房教授は着任以来「血液型の亜型の研究」に力を注いでおられた様で、昭和十八年の法医学会では、亜型の記号を「1、2、3……」とし、部分抗原の記号を「Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ……」とする事を提案され、それまで多少区々であつた記号が統一される様になつた。昭和二十年の法医学会には「ＡＢＯ式血液型の亜型の研究」の題目で宿題報告を担当される事に予定されていたのであるが、戦局は次第に逼迫して昭和十九年の法医学会は十一月五日に開催されたが、僅か十数名の出席で東大の講堂の床下に空襲を避けながら行われた状態であり、昭和二十年の学会は遂に開催不能となつてしまつた。しかも国房教授は原爆にたおれ「ＡＢＯ式血液型の亜型の研究」の宿題報告もそのまゝになつてしまつた。それから十年、明昭和三十一年には当長崎で法医学会が開かれる事になつており、その際のシンポジウムの題目は偶然にも「血液型の亜型の問題」と予定されている。

国房教授は長崎に着任後奥様を亡くされ、その後再婚されたが、いくばくもなく国房教授が亡くなられると云う非運に遇われた。奥様は仙台の御実家に戻られ、魁、透、尚の三人の御子息は夫々東京の御親戚等に引きとられた由、今では立派に成人なされていられる事と拝察する。

（法医学教室）

戦時下の法医学教室

徳川武夫

私が法医学教室と関係を持つ様になつたのは、卒業後産婦人科教室に入つてからだつた。

当時故清水教授から血清学に関係あるテーマを貰い、その標準血清作成の指導を当時在局中の谷口先生に御願いしてからでした。昭和十二年八月、支那事変に応召し同十五年に教室に帰つた。同年九月頃か国房教授が城大から来任された。翌十六年三月、清水教授が停年退転されたので、同教授の紹介で四月から法医教室に入つた。当時は植村、鹿毛、徳永、古川、関本、諸氏が在局中だつたと思う。この頃は未だ実験材料も豊富で割合のび〳〵と仕事が出来た様だつた。再び同年七月召集を受け、約二年後教室に戻つた。

その時の在局教室員は植村、菊地、朝鮮から来た香川、北京大学からの当学生、張、それに前川の諸氏だつたと思う。段々戦争も深刻になつて、防空壕作りや、食糧増産が叫ばれ、到る処空地利用の家庭菜園が造られることになり、法医でも空地は全部耕して薯、野菜等の自給自足を計つた。その時国房教授も自分で鍬を持つて畑を耕された。

これより先、私の第二回目の召集直後、仮初の病で奥さんが亡くなられた。その後三人の子供さんを長い間育てられ、その間の研究指導等仲々の事ではなかつたろうかと思われる。その当時の教室での主な仕事は、宿題報告予定の血液型の亜型と取り組んで着々とその成績を挙げられて

いた。徳永のA₁A₂型、香川のB₁B₂型、前川諸氏のO₁、O₂型、の研究、それに私のM・N型等である。その外純法医学的研究としては、植村の水中急死、菊地の窒息死の研究等々であつた。

その間にも長崎市民の血液型の検査を主唱され、全学を挙げて実施した。それに要する標準血清の作成、調整及ひ検査の指導監督に教室こぞつて従事した事もあつた。

法医解剖もその間着々と施行され国房教授の解剖実施五〇〇体記念祝を教室で行なつた。

坑血清作成後の家鶏、家兎は蛋白質不足の折の教室の唯一の蛋白供給源として、今はないあの広い第一実験室で、血液を供与して呉れた学生を混じえてのさゝやかな、然し楽しいパーテーのひと時もあつた。

昭和二十年初、日本敗色濃しと見てか朝鮮から来ていた香川は業半ばにして突然引き揚げてからは教室員も段々少なくなり、教室はがらんとしていた。然し研究は続けられた。即ち、教授との共同研究の遷延性ショック死の疑点の解明研究や、急性一酸化炭素中毒死の血液凝固時間に及ぼす影響、及び欧、亜、インドネシヤ人の血液型の亜型の頻度の研究成績等々は原爆で一片の灰と帰した。これより前、二十年の六月には私も長崎要塞司令部に内地召集を受けた。

八月九日原爆当日は、私は出張で長崎には居なかつたが、翌日帰つて長崎を遠望した時の驚きは今も明かに脳裡に映じて居る。早速大学へ行つた。一望灰燼の中にコンクリートの部分だけが残つている。法医教室は勿論爆風に吹き飛ばされ、大部分は燃えていた。図書室の図書は遠く大学の門前近くまで散乱して居り、大丈夫だと思つて重要なものを入れてあつた解剖室の半地下室内のものは一物をも残さず燃えて居り、実験器械、ガラス器具、図書など漸くその形を残しているに過ぎなかつた。技術員の山口君、雇員の山口、黒川嬢など実験室の瓦礫の中に見出された。

国房教授は教室の東側の道路近くまで爆風に吹き飛ばされ、一夜を近くの防空壕に明かし、私が行つた時は、小児科の半地下室の莚の上に、高熱と熱傷と食思不振と頑固な下痢に悩まされて居られたが意識は明瞭だつた。先づ解剖室下の半地下室の安否を問われた。既に消失した事を話したら暫く暗然として居られた。今になつてみれば云わなければよかつたと後悔している。角尾学長も、山根教授も、元高南病棟地下の防空壕に、重症の身を横たえられていた。

私も軍務の傍ら、桜馬場町の自宅に帰られ静養中の先生のところに度々出かけた。矢張り高熱、下痢、食思不振と外傷に悩まされて居られた。八月十五日未明、今日は飛行機が飛ばないなあ、何だか淋しい様だなあと云われ乍ら、最後まで意識明瞭で終戦を知らずして、遂に原爆の犠牲となられ他界された。翌十六日、遺骸について大学に行き、元高南病棟横のテニスコートで、夫人、佐野教授、私外数人の淋しいみとりの下に荼毘に附した。

その後約一年、友永教授の来任まで法医教室を御預りしていたが、一身上の都合で大学を去つた。

今、静かに先生と共に過した数年間を考えてみると、走馬燈の様に消え浮ぶ思い出から残るものは、あゝいゝ先生だつたなあと云う事だけである。願わくば先生の霊よ、永久に幸あれ。

衛生学教室

当時の教室員は大倉玄一教授、福田秀信助教授、内田信久助教授、其の外に研究補助員二名（氏名不詳）雇の木下大吉氏であつた。

被爆時の状況

大倉教授は教授室、内田助教授は第五研究室で被爆。遺体は夫々確認される。

福田助教授は医専講義室で被爆死。他の教室員も教室内で爆死。

故大倉教授略歴

正四位勲三等、医学博士　衛生学教授

明治二十六年十一月一日岡山県に生る
大正九年三月九州帝国大学医学部卒業
大正十一年六月同大学助手に任ぜられ衛生学を専攻す
大正十三年十二月同大学助教授に任ぜらる
昭和六年五月衛生学研究のため欧米に留学
同　九年十二月帰朝す
昭和九年六月十一日長崎医科大学教授に任ぜらる
昭和十七年十月陞叙高等官一等
昭和二十年八月九日大学に於て原子爆弾の爆発に遭い爆死耘に殉ず

主なる研究題目

肺炎双球菌の菌型及び溶血素に関する研究

死亡者の官職並びに氏名

官職	氏名
教授	大倉玄一
助教授	福田秀信
〃	内田信久
雇	木下大吉

大倉教授とマウスと葉巻

永田友諫

大倉玄一教授が衛生学教授として九大から赴任されたのは昭和九年の夏。教授室から一歩も出られないで読書。そして片時も口辺から葉巻を離されぬ。通学は愛国タクシー。大層ぜい沢で気取つた様にも見えたのであるが、その実電車通学ではいやでも人に会う。会えばモノも云わずばなるまい。――面倒だと云う処らしかつた。この流儀を教室でも押し通されて研究事項以外は一切合切話題にならぬ。だからこちらから話をもちこまぬ限り幾日も顔も合せぬと云う事になつた。これは一面教室員にとり研究の自由が与えられると云う事にもなつたのである。教室員は少いし研究費に缺事く事はなかつた。処で一つだけどうしてもフに落ちない事があつた。訳の分らぬ事を申される先生では絶対に無いのでこの一件だけは今でも忘れない。と云うのは福田講師、永山、茅野、それに

私の四名が肺炎双球菌の仕事を与えられたのであるが、これにマウスを使用するに就いて節約を非常にやかましく申される。肺炎菌とマウスは切つても切れぬ間柄でマウス無しではこの研究はやれない。殊に疫学的方面を受けもたされた私にとつて打撃が大きい。当時マウス一匹十五銭。千匹使つた処で百五十円にすぎぬ。なぜだろう？四人が鳩首頭をヒネつて考えても分らない。マウスに代用出来る方法と云うものは絶対に無い。無いなら仕様あるまい！結論は茲に来ざるを得ず、いるだけは使うさ！と云う事になつて実験を開始した私は、たちまち二、三百匹のマウスを殺した。動物屋の請求書でこれを知つた大倉教授、本当に眼の色を変えて雷を私の頭上に落された。又々鳩首評定、なぜだろう？疫学方面の仕事は止めよと云う事に外ならぬ。処で教授にその考えは無いのである。絶対絶命。マウスに代る肺炎双球菌の分離方法に就いて真剣に考え寝食を忘れて実験に沒頭した。

二ヶ月にして一つの方法を得た。マウス通過法では三日目に肺炎菌の純培養が得られるのであるが、これでやると一昼夜で血液寒天平板に殆ど純培養状に肺炎菌が生えて来る。可検材料としては唾液が最も厄介。と云うのは口腔内に無数の雑菌が居るので、これから肺炎双球菌だけを選択的に一挙に純培養状に検出出来ると云う事は誰が考えてみても眉ツバもの。それで数十枚のプラッテを教授室の隣の部屋まで運んで「先生見て下さい！」。これを何十回となく繰りかえしたのであつた。確実に出さえしたらよいのであつて純培養状に証明されなくてもかまわぬのであるが「純培養状に出る」と云うこの一点に何ら故意の作為が無い事を信じて貰うためには斯うするしか無かつたのである。これで難関突破。山里小学校児童の唾液一五〇〇個から一二〇〇株（八〇％）の肺炎双球菌を分離し、ロックフェラー研究所から貰つた血清で凝集反応をやつて尽くこれを型別したのであつた。マウス通過法では健康人唾液から大約五〇％に証明する。この差三〇％の追求で更に面白い事になつたのであるが、その頃にはマウスをいく分使つてもお叱りを受けなかつた。マウスと称する可憐なる小動物に向けられた大倉教授の片意地から研究の新分野が拓けたのであつた。戦争も大分あやしくなつた頃、教授室に先生をお訪ねすると葉巻が金鵄に変つていた。

「煙草も配給になつて御不自由でしよう。」

「イヤお蔭で胃腸が丈夫になつたよ。」

色つやもよくなり肥えて居られる様であつた。

原爆投下の翌日、軍隊を病気除隊になつての帰りがけ、八月十日午後道尾駅で下車して大橋、岡町、松山、山里、浜口町一帯を彷徨する事三時間、計らずも足を踏み入れた処が爆心地帯であつた。大変気になる大学を目の前にしながら爆心の余りな光景に圧倒されて夕闇迫る頃山越しに一応田舎に退散。改めて九月四日、大雨の降る日衛生学教室の焼跡に立つた。大倉教授は？福田助教授は？内田君は？鬼気迫る光景の中で人一人見えず、誰に尋ねようもない。この日の夕刻やつと広馬場の高木病院に避難しておらるゝ古屋野先生にお会い出来た。御夫人はその三日前に、角尾学長は廿二日に亡くなられた事、大倉教授は教授室でそれと確認出来る白骨となつておられ收容したのであるが、福田先生の分はどうしても発見出来なかつた事等々。始めて当日とその後の惨害に就いて承わる。申上げる言葉も無かつた。

私が教室に居た頃の人で原爆の犠牲となられたのは大倉教授、福田助教授、内田君はずつと後輩であるが十九年度夏軍医予備員として久留米の連隊で一緒に苦労した間柄。原爆当時は助教授として悲運に際会された。

福田秀信先生は私より三年の先輩、巨大なる体に無類の善意を包んだこの人と六年間教室生活を共にして苦楽を分ちあつたのであつた。その講義は名調子。殊にラヂオ放送は手に入つたものであつた。大倉教授が超俗のお人柄であつたので多くの仕事が福田先生の方に振り向けられ、年から年中忙しい〳〵で寸暇もなく、嬉しそうに動かれた。八月九日の当日も何かの用件で教室外に出ておられたのであるまいか、古屋野先生とそんな風な話もいたした事であつた。既にそれから十年の歳月がすぎ去つた。この一文を草するために大倉教授のお嬢さんお二人、やつとの事で住所をさがし当てたのであるが先生御赴任当時、六才と八才のお嬢さんで毎週一回御家族の唾液をとりよせて肺炎菌の検査を続けた頃の印象しか無いのでどの様な令夫人となつて居られるや想像もつかない。そしてお母さん（大倉教授夫人）が廿七年五月に病歿なされた由を承わる。原爆以後の苦難の中でなくなられた事と想い、御見舞もいたさず今となつてはおわびの申様も無い。

（昭和卅年八月卅一日記）

大倉、福田兩先生の思い出

茅野真一

私が大倉教授、福田助教授の衞生学教室に居たのは、太平洋戦争は未だ始まらず、日支事変が始まつた前後で、日本と英米の国力の相違に気がつかない一般民衆は一等国と自負して居たが、大学の教室員の間では、軍医予備員志願の可否が論ぜられ、敗戦主義者が、まだ優勢だつた頃でした。今はすでに、何も彼も過去と云う霧の中に包まれ、茫漠として居ますが、其の中の処々が雲海に突出した山頂の様に多くの感慨を包蔵して私の脳裡に強く印象づけられて居ます。

大倉教授は葉巻に関しては耽溺者と云つて宜かつた。朝登学して自室に入られると直ちに葉巻をくわえて夕方御帰宅になる迄放されませんでした。大変静かな方で大低は自室に閉ぢこもつて読書をしていられましたが、寸時も葉巻は放されませんでした。吾々の実験の場に来られる途中の廊下でさえ葉巻無しのお姿をついぞ見かけたことはありません。或る日曜日の午後、遅れている自分の研究を取返えそうと、皆が帰つた研究室で独り実験をしていると、とこ〳〵やつて来られて「茅野君はチェリーを喫みますね、僕は御存知の様に外国で癖がついて葉巻を喫つているのだが、強過ぎて健康にも好くない様だし、不経済であるから紙巻きにしようと思つて之を購めてみたが、どうも喫めません。」と云われて数箱のチェリーを下さつたことがありました。

福田さんは、大柄な普通の人を今一廻りも大きくした様な体格の偉丈

夫で、友人の為めには寝食を忘れ東奔西走し友情を傾け尽される方でしたが、其の相手が自分程純情でない事をも又嘆かれる善人でした。墨で和紙に字を書く事が好きで、よく他人の履歴書を書いて居られました。又人事百般、諸行事等に就いて博識で誰も気付かぬ様な事を知って居られ、特に運動競技の記録を暗誦んじて居られるのには感心させられたものでした。ところがこの物識りの福田さんにも燈台下暗しとでも云うか、次の様な挿話があるのです。長崎の商業中心地では日本軍の南京入城を祝して提灯行列をやっていると云う夕でした。福田さんの発起肝入りで、大倉先生を除いた教室全員はサーバント室ですきやき会をしました。牛肉は一人前百匁で足るだろうかとの福田さんの相談に誰も答えないので百匁宛準備した所半分も食べず、すきやきに関する人間の食慾の限度を、福田さんも此の時初めて知られた様でした。

それから二十年の歳月が経ちました。実験道具、標本、書籍等々総ては大倉、福田両先生と共に一瞬の内に消失し、今一箇たりとも思い出の品はありません。

然し其の廃墟には現在長崎大学医学部衛生学教室が蘇り幾多貴重な業績を挙げて居られます事は同慶に堪えません。

尚今回記念の文集を編せられるとの事で、ささやかな思い出話を綴って、責めを塞ぎたいと思います。

東亜風土病研究所

当時の研究所は二教室に分れ病理学科教室に金子直教授、高山吉晴助手、細菌学科教室に青木義勇助教授（応召中）才津芳雄副手、その他の教室員として雇の平山富士子、岩永ヨシエ、傭人の草野チョカ、真田篤子、定夫の山口末三郎の諸氏が在籍していた。

被爆時の状況

金子教授は小使室の移築中金比羅山麓で、才津助手は大学近くの路上で、平山、草野、真田、山口の教室員は教室内で爆死。

故金子直教授の略歴

従五位勲四等医学博士、東亜風土病研究所員（教授）

明治三十三年九月三十日長崎県に生る
大正十四年三年九州帝国大学医学部卒業
大正十五年三月同大学助手に任ぜられ病理学を専攻す
昭和五年二月長崎医科大学教授に任ぜらる
昭和十二年三月病理学研究のため欧米に留学同十四年七月帰朝す
昭和十六年一月長崎医科大学教授に任ぜらる
昭和十七年十月陞敍高等官二等
昭和二十年八月九日大学に於て原子爆弾に遭い爆死玉に殉ず

主なる研究題目

結核諸病巣に於ける粘液形成、鍍銀性線維の形成或は発生に就いて

死亡者の官職並びに氏名

官職	氏名
教授	金子直
副手	才津芳雄
雇	平山富士子
雇人	草野チヨカ
〃	真田篤子
定夫	山口末三郎

その日の金子教授

田川甚蔵談

当日金比羅山入口江平町に教室の疎開家を建築中、原爆に遭い家の下敷となりやつと這い出したが、頭をひどくやられた。その日は金子教授の家族と男女数名の人夫に病理教室の雇井手口貞市氏もいたが、井手口氏は火傷して一週間後死亡した。金子教授は幸い無傷であつたが顔色蒼白となり、傷を負つた子供さんをつれて病院の方へ行かれたまゝ行方不明、又同教授の奥様も原爆投下前に山里町へ配給酒を買いに行かれたが行方不明となられた。大学運動場附近に居住していた自分の家も全滅。その後頭髪が抜け生死の境をさまよつていたが、幸い竹内教授（当時病気のため鳴滝町の自宅で療養中一年後他界された）の計らいにより、教授の門下生で三菱病院に勤務中の某医師の診察治療を受け約一ヶ年休養後現在事務局施設課に勤務している。

元病理教室雇（現在事務局施設課勤務）

角尾内科学教室

当時、教室員は角尾晋教授の下に、筬島四郎助教授、高橋博講師、中村匡邦助手、牛島百合子副手、黄過伝、大倉一郎、土山敏夫、黄永超、吉崎励子、深見武久、尾崎哲郎、井上正良の各副手補。それに村田千秋、村上吉作、鈴木四郎の学部仮卒業生。木田橋良道、清田和之、樋渡俊夫の医専仮卒業生。江下スム看護長以下二十七名の看護婦と給仕松尾マサノ氏が勤務していた。

被爆時の状況

角尾教授外来診察室で（本館三階西端北側の室）、筬島助教授、高橋講師、中村助手は内科病棟三階の角尾内科看護室（南側）で、その他大部分の教室員、看護婦は本館三階で外来の診療に従事中、前田婦長外二、三人の看護婦は治療室で被爆した。

角尾教授は爆心に背を向けて診察中であつたため、背部に窓ガラスの破片による傷多数で大腿の傷は相当に深く歩行困難にて、裏山に救出し、後調教授の手当を受けられ、その夜は皆裏山にて、夜を明かした。その翌日背負つて外科教室横の防空壕に移し加療し、十二日夜道の尾に軍のバスにて移り、後、大神宮にて加療、死亡前一週間頃から放射能症状即ち高熱、皮下溢血、口内炎起り二十二日朝なくなられた。

高橋講師は被爆一週間後頃から発熱、口内炎を起したが治療の結果治癒。

村上吉作副手（昭二〇学部仮卒）は死体発見出来なかつた。恐らく内科病棟と外来病棟の間の木造の廊下にいたものと思われる。

村田千秋副手（昭二〇学部仮卒）は第二新患室にいて負傷、裏山迄運び出したが間もなく死亡。

鈴木四郎副手（昭二〇学部仮卒）清田和之副手補（昭二〇医専仮卒）木田橋良道副手補（昭二〇医専仮卒）は自宅に帰り、加療中に死亡した。

樋渡俊夫副手補（昭二〇医専仮卒）は高北に入院中被爆、数日加療したが遂に死亡。

黄過伝副手補も加療中、遂に死亡。

前田婦長は角尾学長の看護に長くあたつたが、後気分すぐれず帰省静養、恢復。

内尾看護婦は受傷、立つ事出来ず、一ヶ月後郷里にて死亡。

加藤、大山看護婦は寄宿舎についた頃にて死体も不明。

検便室にいた宮本、吉本看護婦は瀕死の重傷、後死亡。

緒方看護婦も外来にて受傷、後死亡。

中山看護婦は高北の風呂場にて即死。

江下看護長は高南で死亡。

故角尾晋教授略歴

従三位勲二等、医学博士、学長、内科学教授

明治二十五年十二月二十日富山県に生る

大正六年三月東京帝国大学医学部卒業、卒業後大正十一年二月まで同大学副手として内科学を専攻す

大正十一年六月内科学研究の為、欧米に留学、同十四年二月帰朝す

大正十二年四月長崎医科大学助教授に任ぜらる

大正十四年三月長崎医科大学教授に任ぜらる

昭和八年五月欧米各国に出張を命ぜられ、同九年一月帰朝す

昭和十一年七月長崎医科大学長に任ぜられ、内科学教授を兼ねる

昭和十一年十一月陞敍高等官一等

昭和十二年七月及び同十三年六月の両度に亘り満州国及び中華民国に出張を命ぜらる

昭和二十年八月九日、長崎医科大学に於て講義中、原子爆弾により受傷、同月二十二日鬼籍に列し転に殉ず

主なる研究題目

黄疸の実験的並びに臨床的研究

死亡者の官職並びに氏名

官転	氏名
教授	角尾晋
副手補	黄過伝
給仕	松尾マサノ
学部仮卒	村田千秋
〃	村上吉作
〃	鈴木四郎
医専仮卒	木田橋良道
〃	清田和之
〃	樋渡俊夫
看護長	江下スム
四年	内尾文子
〃	緒方ヒサカ
〃	加藤トシ子
〃	中山ヨシヱ
三年	本田トシ子
二年	宮本ハルヱ
〃	大山フヨ子
〃	吉本ミシヱ
一年	前田節子

角尾先生を憶う

筬島四郎

私達の懐しい母校長崎医科大学があの恐るべき原子爆弾を受けて全く灰燼に帰して、ここに十年、当時を思い浮べると涙なきを得ない。私は時々角尾先生が廻診されている夢を見る。そしてほっとするとそこは現実である。今度当時の思出が出版される事になつたが、私は角尾先生の一週忌に馬町の教会で、医局員代表として先生の御霊前でよんだ追悼の辞をその儘のせさせて頂くことにする。今読み直してみると幼稚な気のする所もあるが、先生がなくなられてから一年有余第一内科を守つていた頃、先生を思い浮べた気持はよく表れていると思う。

追悼の辞

私達の杖とも柱ともお頼みした恩師角尾先生逝かれまして、こゝに一周年を迎えるに至りました。この一年は考えようで、まことに早く又まことに長いものでありました。それ程この間に色々の事を我々は経験させられ、これを省みるにつけても益々先生の偉大さを今更乍らしみじみと感ずるのであります。

憶えば昨年七月終から八月始にかけての東京御出張の帰途、先生は偶々広島を原子爆弾投下後に通過され、重いリュックサックを担がれて徒歩連絡され、その惨状を具に見聞され、阿鼻叫喚まことに此の世の地獄であると八月八日長崎に帰られ直ちに登校、色々私達にお話をされましたが、私達はその時はどうしてもこの話を十分に納得出来なかつたのでした。然し、然し、その翌八月九日には私達がこれを体験させられる運命とはなりました。

満目荒寥、生きとし生けるものの姿は無く、紅蓮の焔は天に冲し、時々上る龍巻は物凄きばかりでこの世の終りかと思われ、結局人間は自らの手により滅亡する日の来る事を信ぜずにはおられませんでした。

当日先生は外来診察中で負傷され、直ちに病院横の小山にお運び致しましたが、蒼白となられ嘔吐等もあり非常に憂慮致しましたが、翌日からは元気になられ、この分ならばとほつと一息ついたのですが、十八日頃から三十九度以上の高熱続き、口内炎あらわれ、皮下溢血等も見られ、所謂放射線症状を起され、遂に八月二十二日午前十時逝去されました。

二十一日夜既に死期至るを感ぜられた先生は、お苦しみの中にも極めて静に且極めて明瞭に後事を遺言され、最後にさようならの一語を残されて遂に幽明境を異にされました。そのお最後は日頃のお忙しい、談論風発、八面六臂のお姿とは全く対照的にまことに淡々たるものでありました。今でもあの時の御様子が浮ぶようであります。

こゝに暫くありし日の先生のお姿を御追憶申上げる事をお許し下さい。

先生はまことに現代日本の臨床家として、将又黄疸研究家として第一人者であられた事は何人も否む事の出来ない大いなる事実であります。而して先生はその御専門の内科学は勿論、医学全般の部門に亘り御知識豊に、それぞれ一家言を有しておられました。

先生は診療を以て己が天職とされ、学長に就任された後と雖も一日としてこれをお捨てになられる事はありませんでした。その診療に当つて

は一寸も忽にされる事なく微に入り、細に入り全力を傾倒され、一見いかに簡単と思われる場合にも手を抜かれる事なく、事診療に関する限り長時間になるのも厭われず懇切丁寧を極めました。為に外来診察は午前中から午後三時に至るのも少くなく、廻診は夜の九時に至つた事もあり、電燈の消えた日に提灯を提げて廻診をされた等も今は返らぬ思い出となりました。先生は旧患を見る場合も常に新患を見るつもりで常に新しい観点から診察せよと言つておられ、先生は無言の中にもこれをお示しになりました。かゝる診療態度はその有せられる博学と共に何人も希求し得ない境地に先生を立たせたのでありました。まことに先生は診療に生き、遂に診療に倒れられたのでした。嗚呼先生は全く他に求め得られない臨牀の第一人者でありました。

一方研究方面に於ては多年黄疸の実験的並に臨牀的研究に専心せられ、今や黄疸研究の第一人者と世の斉しく認める所であり、黄疸に関する限りすべての人は先生の門をたゝくのを常としておつたのであります。

事診療、研究に関しては先生は極めて厳格で、廻診中に肩をたゝかれた者は極めて多く、又研究に当つては出来ないという事を非常に嫌われ、色々工夫してこれを突破するよう御指導されるのを常とし、講義等も一時間として休む事を非常に嫌われました。

事務、診療、研究室におられる外はいつも教授室で勉強され、東京に出張されても、早朝着かれると直ぐ登校廻診されるという状態で、ゆつくり休養される事は全然なく、私達はこの先生のお姿を思い起す度に自らを省みて恥ぢ入る次第であります。

一方平常は門下生を思われる事深く、先生を中心とした角尾内科の集いは和気靄々たるもので、先生の得意とされた浜節の名調子も今や忘れられない思出の一となりました。

殆んど壊滅状態となつた長崎医科大学の再建の困難を思う時、名学長として行くとして可ならざるなき、殆んど疲れを知られざる御奮闘をされた先生、中央にあつては学術研究会議のマラリア委員会の委員長として采配を振られ、又全国医専の内科学の新教程を編纂され不動の地位を占められた先生、お年と共に益々円熟の境地に入られた先生、戦時中は母国勝利のために学長として非常に努力されましたが、それとなく軍人が科学者を遇する道を知らぬことを歎ぜられた先生を思う時、今こそ思い残すことなく、縦横にその御力を発揮して頂ければと思いましたのに、天は先生に余命を藉さず再び先生をこの世に拝する事は出来なくなりました。

然し先生の残された偉大な感化は長く私達の中に染み、忘れんとして忘れ得ざる所であります。もとより私達は甚だ微力ではありますが、今後とも先生の無言の御教示を拝し、日本再興の一大急務たる科学振興の道にいそしむ事をこゝに先生の御霊の前に誓うものであります。

生前あまりにもお忙しかつた先生、どうか安らかにお休み下さいませ。

昭和二十一年八月二十二日　角尾内科現医局員代表

筬島四郎

原爆被爆当時の憶い出

高橋　博

昭和二十年八月九日午前十一時少し前、早朝来の空襲警報がやつと解除され、遅い朝食を附近の下宿でとつた私は、筬島助教授（現教授）、中村助手達と角尾内科三階看護婦室で談笑していた。角尾教授はすでに外来（本館三階西端北側：爆心地に向つた方向）診療をはじめておられた。筬島先生は、医専の卒業試験で学生のカルテの出来上るのを待つておられたのである。

と、突然、低空飛行のような大きな爆音が響いて来た。私達は思わず身を臥せた。その瞬間、すぐ前の庭で破裂したような凄じい爆発音が聞えた。爆風と共にあたりは真の暗闇となつた。この間は随分ながいように感ぜられた。看護婦達の泣き声とも、呻き声ともつかぬ声が聞えて来る。暗闇は次第に赤色に変り薄れて行つた。火事だという叫び声があがつた。レントゲン疎開跡が少し燃えている。部屋のなかは戸棚がくずれ、天井は落ち、窓はとび全く旧形をとゞめていない。至る所バラ〳〵になつた木片がうづ高くつもつて歩くことも容易でない。病院から見える家とゆう家は崩れ落ち、マツチの軸を散らしたように見える。たつた一発の爆弾でこのようにやられるとは今まで考えてもみなかつたことである。これは新型爆弾に違いないと思つた。

筬島先生や中村君は無事であつた。筬島先生は何か固い物があたつたと頭をなでておられた。私は手に少し負傷したが大したことはない。看護婦達は何人かゞガラスの破片で負傷していた。髪は乱れ、顔は埃で汚れていた。爆心地から六〇〇米―七〇〇米位の近距離にありながら、この程度の被害で済み誰も死亡者を出さなかつたのは、看護婦室の爆心地側にエレベータがあり、厚い壁が爆風と放射線をさえぎつたためであろう。私達は爆風は爆心地と反対の南側からはいつて来たように感じた。

角尾先生や教室員、患者のことが気になつた。私達は手分けして皆の安否をたづねた。間もなく外来から角尾先生は怪我をしておられるが、元気だとの声があり、私達もそれを聞いて安心した。当時空襲が日を追つて激化していたので、入院は必要最少限度に止め、入院患者は全部で十八人であつた。十二号室の患者が一人、自宅に帰つておつたらしく、どうしてもみつけることが出来なかつたが、他の患者は皆無事であつた。重症の肺炎患者も無事であつた。この患者は当時未だ珍らしいペニシリン（伝研試作品、五cc五〇〇単位のもの）を角尾先生が手に入れて使用され、漸次快方に向いつゝあつた患者である。然し外来治療にこられたお婆さんはかなりの怪我をして動けないようであつた。学生達がかけつけて担架で運び出そうとしていたが、飛び散つた十円札をとつて呉れと、困らしていた。廊下には見知らぬ女の人が一人倒れていた。筬島先生と私は夢中で地階まで運んだが、すでに死に瀕していた。誰かゞ、外来の様子を見に行こうと思つたが、外来に行く廊下が落ちて行けないといつていつていた。レントゲン、薬局方面の火は次第に強くなつて来た。内科病棟内でも配膳室前の廊下でもチョロ〳〵と燃えはじめていたが、筬島先生がいち早く発見し、すぐ消し止めた。然し周囲の炎は増す〳〵強くなつて行く。私達は全員、裏の山に避難することにした。

先づ、看護婦達に歩行出来る患者を連れていつてもらつた。歩けない外来患者は学生達が担架で運び出してくれた。筬島先生と私が肺炎患者を運ぶことにした。地階は木片の山で廊下はとても通れなかつた。それで私が通れる道を探すためK内科患者の死体が二、三ある廊下から、耳鼻科側の裏道にぬけると、すでに筬島先生は患者を背負つて、木片の集積した上をヒョコ〳〵と歩いておられた。私達は交代で患者を背負い、咽喉が焼けそうに熱い風をすいながら、やつとの思いで病院玄関前から山の方に出る事が出来た。

私達はどうにか患者を安全な丘の上に避難させる事が出来た。何んだか、私は非常に疲れていた。動くと非常に身体がだるかつた。私達は角尾先生の後を追つた。先生は学生に背負われていた。そして私達の無事を喜ばれた。私達も先生が怪我をされてはいるが、生命には別状なさそうな御様子なので安心した。私達は代る〴〵お臀の傷に触れないよう注意しながら背負つた。途中の道端に倒れている人達の間から「石崎だ〳〵、僕だよ」という声がするので、驚いてみると、顔が真丸くふくれ上り全く人相が違つてはいるが、正しく外科の石崎助教授だ。寒いと言うので、その附近にあつた蒲団を被せてやつた。（蒲団がどうしてこのような所にあつたか分らない。恐らく誰かゞ持つて来て、途中で捨てたものであろう。）大した怪我はなさそうだが、火傷を負つたのか顔が随分腫れていた。

小高い丘の芋畠のなかに角尾先生をねかせた。中村君や大倉君（副手補）等が、何処からか蒲団を持つて来て急造のベツトにした。時々敵機が上空を舞うので、爆風ですつかり葉がとんだ芋づるを先生の上にかけて偽装した。

黄副手、木田橋、清田副手補、岳下看護婦も一緒に集つた。角尾先生も、彼等も一様に悪寒口渇を訴えた。なかには嘔吐する者もいた。私達は上衣をぬいでかけてやり、又何かひろつて来てはかけてやつた。前田婦長は甲斐々々しく看護していた。大倉君、中村君は下の方から水をくんでは皆に与えて超人的に仂いていた。当時私達は何故彼等が特に悪寒、嘔吐の症状を訴えるのか、見当がつかなかつた。爆撃のショツクとしては可笑しいと思つた。

浦上一帯は炎々と燃え上り、焔は囂々と天に冲している。すでに内科病棟にも火が廻つている。天は煙のため暗く、時折沛然たるシュウ雨が黒い雨矢を降らしている。この世の地獄と思われる凄惨な光景である。

丁度調教授が来られたので、角尾先生の傷の手当をして頂いた。教授にはその後も度々手当をして頂いたが、御令息が原爆でなくなられた悲しみを少しも面に出さず、熱心に活動しておられるのには全く感服した。

先に避難した看護婦と患者達は、更に上の方にいた。皆無事であつたが、なかには相当の火傷を受けている者もいた。手当の材料が全くないのが残念でたまらなかつた。

角尾学長がおられるのを聞いて、高木教授が学生に負われてやつて来られた。何時も元気な先生が、どういうものか全くグンニャリしておられる。然し怪我は一つもなかつたようだ。全く不思議に思つた。角尾先生も首をかしげておられた。脚気衝心によく似た症状だがねと。

誰かゞ大学本部の旗を立てたが敵旗が度々やつて来るので、すぐさま引込めざるを得なかつた。

他の人達はどうしたであろうか、山をこえて避難したのであろうか。外来にいた鈴木君は？学生は？基礎の人達には随分沢山の犠牲者が出た模様であつた。

夕方近くなつて乾パンがとゞいた。私達は砂をかむ様な気持で食べた。下界は衰えることなく燃えつゞけている。私達の愛する教室も燃えている。私達は身をきられるように辛かつた。

私達はまだ小さい芋を生のまゝ嚙つた。又誰かゞ持つて来てくれたキウリを嚙つた。何だか少し精気を取戻して来たように感じた。

高北病棟に入院していた樋渡君が近くの丘にいるとの情報がはいつた。私は早速、彼を探しに行つた。彼はチフスのため入院していたのであるが、自力でこゝまで逃げて来たのである。其の夜は山で夜を明すことになつた。私は全く疲れきつた彼のそばの芋畑の上で一夜を過すことにした。寒がるので上衣を彼にかけてやつた。下界は天をもこげよとばかり、なお燃えつゞけていた。時折敵機が頭上を飛び、照明弾が炸烈した。

苦しい一夜が明けて十日となり、木田橋、清田両君は家族と連絡がつき、山を越えて自宅に向かつた。然しその姿には元気がなかつた。両君とも間もなく自宅で亡くなられたのである。

この日、私達は角尾先生、高木先生、石崎君を、外科教室横の防空壕にお移しして治療を加えることにした。樋渡君は高南病棟浴室に移した。筬島先生と婦長は角尾先生達の治療や看護に献身的な努力をされた。中村君、大倉君に私達は、眼科地下室、皮膚科地下室、高南病棟トンネル内に収容された学生達の治療と看護に忙殺された。無人の薬局や、各科地下室の非常箱より注射薬や衛生材料を集めて使つたのである。一、二年の学生は倒壊した教室から、辛うじて這い出し、やつとのことで、こゝまでたどりついていた。皆一様に悪寒、嘔吐、口渇等を訴えていた。当時、病院には私達内科の者しかおらず、私達は自らも苦しいなかを皆のために仂いたのである。

高木教授は十一日、石崎君は十二日に、苦しみながら死んで行かれた。高木教授は終始興奮し、石崎君もしきりと手術のウワ言をいつていた。

十一日であつたか、眼科横の防空壕に頭部を負傷された山根教授が一人でおられると聞き、私達の壕におつれした。

額に負傷されて鉢巻をした古屋野教授が、学長代理となられ、この頃から大学の指揮をとられるようになつた。陸海軍よりも救護隊がかけつけて、皆の治療に当られた。町との連絡もつくようになり、山越えした患者は新興善小学校に収容されていることも分つた。

角尾先生は壕のなかでは一番軽い患者であつた。高木教授、山根教授等の治療について、冷静に指示されていた。そして、自分は老先短い身だからいゝが、君達は若いんだから、身体を大事にせにやあいかんよと私達をいたわられた。先生は自分の苦痛は少しも洩らさず、静かに寝ておられた。私達はこんないゝオヤヂを早く元のように元気にしてやらねばと思つた。

救援隊も来たので、学生達の治療はおまかせし、十二日夜筬島先生、中村君、私、婦長は角尾先生、山根先生を陸軍好意のバスを借りて道の尾にお移し申上げた。これは調教授の治療を受けんがためであつた。当時調教授は道の尾滑石に疎開しておられたのである。

同夜は道の尾岩屋クラブの板の間の上に、角尾先生は不平も言わずや

すまれた。翌十三日、再び滑石大神宮の拝殿にお移し申したが、こゝで先生は被爆以来はじめて畳の上に、而も調教授にお借りした蒲団の上に寝られたのである。

翌十四日、私は中村君と連絡のため大学に引返した。この頃から私も発熱し、口内炎を起すに至つた。十五日には終戦の詔勅のあつたことを一同古屋野学長代理から聞き、死に瀕した学生達と共に悲憤の涙を流したのである。この頃バタ〳〵と学生達は死んで行つた。樋渡君も十五日、病棟にあてられた調外科病室（今のX線教室）で亡くなられた。

私は吉崎君や大倉君達の治療を受けたが軽快の徴がないので、帰省加療の決心をし、角尾教授にお別れの挨拶のため、再び十七日道の尾に立寄つた。

山根教授は十五日テタヌスのためとう〳〵お亡くなりになられていた。角尾先生の容態もはか〴〵しくなかつた。発熱、皮下出血、口内炎等の病状がみられるようになつていた。

私は自分の容態を申し上げお暇を頂きたいと申し出ると、先生は動かないで、こゝでゆつくり養生するがよいと引止められた。其の夜は高熱のため度々うなされた。私は遂に翌早朝、先生が、未だ寝ておられる時、意を決して、そつとそこを抜け出たのである。

先生が八月二十二日遂に御他界なされたことを療養先で聞き、最後のお別れの挨拶もしなかつたことを心の中で深くお詫び申し上げたのである。

（横田内科勤務）

思い出

前田ハルエ

九日の朝空襲と共に寄宿舎で同室の小児科中尾婦長さんと今日も無事でと廊下を左右に別れを告げた。空襲は間もなく解除となり警戒警報となつた。やれ〳〵とモンペ三枚を一枚にして、又空襲までと一同仕事に取りかゝた。

十時になると角尾教授の臨床講義も済まれる。其の後、丁度外来診察日なので直ちに外来診察室へ入られた。私は書類と物品請求書に捺印して戴くために行きますと、お茶を飲みながら、空襲があつたら僕は本部（当時学長であられた）へかけつけなくてはいけないから上衣と帽子をこゝへ持つて来て呉れ、と申されましたので、直ぐ病室へ帰り部長室（四階）に行き上衣と帽子を取つて下へおりた。看護室の前で中村先生が、婦長さん此の前からお願いして置いた若い医局の先生方の名札を今警戒警報だからちよつと書いて下さい、といわれ、私も忘れていたので立ち寄り治療室の処まで五、六歩行き、其の名札を手に取る瞬間であつた。

電光石火とはこんな事か知らんと思う。其の瞬間目もくらむ光の強さと同時に凄い音。耳も身体も飛んで行つた様な、そして背部にとても熱い爆風を感じ、丁度たゝきつけられた気がしました。それまではよく覚えて居り、其の後どれくらい時間が経過したかわかりません。目をあけても、あけてもあたりは真暗で、物は見えず、自分の呼吸しているのも

わからずこれが死んだのかなあと思つた。そのうち、段々明るくなつて来たのであゝ生きていたとあたりを見ると板や壁はくずれ、棚の上に有つた物は吹き飛ばされ身動きがやつと出来る位で名札を取る時と、反対の位置に坐つて裸足になつていた。立つてみるとモンペはほころび、髪は鳥の巣の様に、顔や手も煙突掃除でもした様な姿であつた。病室や廊下は天井板が落ちたりどこから飛んで来たのかと思う様な物が散積して、足のふみ場のない位であつた。

筬島、高橋、中村、土山の四人の先生方も看護室におられ、負傷は高橋先生がひどかつた。私は別に傷は無かつたが、どこから来たのか白衣に血液が綺麗に全体的に附いていた。それが不思議でならない。

病室を先生と見て廻つたが患者さんは一人も居られなかつた。十台のベツトは其の儘で何一つ無く唯広々として死亡者はなかつた。一同は地下室（研究室）へ下りた。外来が気になりつゝも廊下は落ちているので連絡がつかない。先生方が飛行機は飛ぶし一応待避しようとおつしやるので、日頃部長先生より空襲には必ず持つて出る様に依頼されていた大包みと座布団を持ち、地下室を通つて薬局の裏に出た。其処に永井先生がいらして角尾先生は負傷されて教室の先生方が山の上に救出されたと知らせて下すつた。

永井先生から道を教えて戴きタオルで大腿と下肢をくゝり（モンペがひら〳〵して歩きにくゝて）重い大包と座布団を持つてやつとたどりつきました。其の道々には裸の死体がごろ〳〵ころがつて目を覆ひ度くなる。中には目が飛び出したり、唇がむき出してあたかもクロンボの様な屍体もあつた。今でも仮装行列によく黒人のまねをするのをみるとあの当時が思い出されて悲しくなる。

角尾先生は傷を受けておられたが、案外お元気でいられたので安心しました。私が大包を持ち出した事をとても感謝されるので、私もそんな大事な書類が入つている物を出してよかつたと思いました。上京される時も余りにお頼みになられますので、私もやつとの思いで持ち出したのですが、責任を果したことを嬉しく思い、後でお聞きゝしましたら博士論文の原稿資料だつたそうです。

山の上に着く迄に筬島先生は裸でガタ〳〵ふるえている女の人にレインコートをやつたり、ゲートルで人を背負つて救出してこられたりされた。山の上と云つても甘藷畠でいもの葉はなく、つるばかり。又四方の山々は焼けて青いところはなくこげついた様な山々であつた。広島のあの日の様子を見て来られた角尾先生は、原爆だよとおつしやつた。

丘の上に居ると、あちらこちらで友を探す声、親を探す子、助けを求める声、死期の迫つた苦痛の声、それはさながら地獄の様であつた。永井先生は戦地に行つても、こんなひどい事は初めてだとおつしやつた。学生さんがどこからか布団を持つて来て下さつた。調教授、木戸先生方が直ちに傷の治療をして他の方へ行かれた。その後、永井先生はシーツに赤く血液をつけて旗を作り、傷ついた者はこゝへ集れといゝながらそれをたてられた。その時、薬専の清木先生が学生二三人をつれて裸身に大きい丸たん棒をついて、丁度鬼に金棒と云ふ恰好で辿りつかれ、「学長先生御報告いたします。学校は全滅です。自分たちは防空壕を掘つていて助かりましたが、入口にいた者は即死でした。」とお伝えになつて又山の上の方へ行かれた。其の時レントゲンの久松婦長さんが私を呼んだ

が見ていて返事をしなかつたので、放心したのかと思われたそうである。私は全然会つたのは覚えていません。

角尾先生の傷は、後頭部、後背部、後大腿であつた。新患室にいらした黄先生は大した傷はなかつたが放心した様な状態で落付いていられなかつた。村田先生は記載係で大傷を負つて、丘の上まで運んだ時に駄目だつた。看護婦は散り散りとなり新患付の内尾さんも傷付いて高北の地下室へ運んだ。加藤、大山さんは寄宿舎に着いた頃で死体もわからない。森下、立川さんは駅まで荷物を運んで行こうとして、表玄関で二人で行李を持つた時、一人は負傷し、一人は無傷であつた。検便室にいた宮本、吉本さんは一人は顔全体ざくろの様になり、一人は負傷してやつと歩ける位。緒方さんも傷つき、中山さんは高北勤務で当直明けで風呂に入る処らしく、風呂場で即死していたとか皆泣くにもなけない状態であつた。

木田橋先生や清田先生も負傷して、角尾先生と一緒にいられた。そこへ基礎教室の高木教授が救出されてこられた。どこも傷はなく少し頭がおかしいと思う程で、落ちつかず何にもおつしやらずにそわ〳〵していられた。

其の内雨が降つて来た。こんな時は必ず雨が降るものだよと角尾先生はおつしやつた。時のたつのも暑いのもわからず、やがて夕方となり、乾パンとおむすびを調教授から戴いた。看護婦の負傷者も出ているので気になつていたら、角尾先生が「婦長は看護婦の世話をしてあげなくてはいけないのに、自分丈についていては済まない」とおつしやつたが筑島先生初め他の教室の先生方が看護婦の世話は僕たちでするから、婦長さんは部長先生を頼むとおつしやるので、角尾先生に附いていました。負傷された木田橋先生や、清田先生は悪寒が来てガタ〳〵していても着る物はなく、カマス袋を着て横になつていられたが遂にたまりかねて「部長先生少しおふとんを着せて下さい」とおつしやると部長先生は「遠慮なしに入り給え」と云われて、一枚の布団の中へ三人で足をつゝこんでいられた。大倉先生が元気よくどこからかカボチヤを持つて来られたら角尾先生は「トウナスだね。どこから持つて来たか」と喜ばれた。夕やみとなりやがて夜となつた。寒くなつて着るものがないのでいもづるを着て土の上に一夜をあかしました。

夜中にどこの人か負傷して「寒い〳〵」と云つてふとんの中に入つて来られ一枚のふとんの中に六人位入つておられた。唯足を入れている丈ですが寒さが凌げたらしい。あつち引つ張りこつち引張りお互いに引張りあつて、傷のある人は痛みを訴えた。水を欲しがる人が出たら大倉先生は僕が汲んで参りますと云つてバケツに汲んで来て下さつたが、直ぐに飲んでしまい、又々汲みに行かれたりした。一人の方は飲んだかと思うと皆嘔吐をして朝は亡くなつていた。

角尾先生はちつとも水の事はおつしやらなかつたが、どなたか名前はわかりませんがビール瓶に水道の水ですと持つて来て下すつたので、それではと少しお飲みになつた。高木先生にもおすゝめしたが余り喜ばれなかつた。私は別に空腹も感ぜず水も欲しくなかつた。病院を丘の上から望むと次から次へと焔を挙げて風向が変る度に燃え移り、最後は内科の図書室のあの厚い〳〵図書が焼けて行つた。それを唯見る丈で手の施し様もなかつた。

土の上に一夜は明けた。部長先生を飛行機の来ない内に防空壕の中へお運びする事になり外科手術場の裏の壕へ高木教授も一緒にお運びして高い寝台の上にお寝せし、一方の穴に眼科の山根教授も運ばれて来られたが、台がなく土の上に板を置き敷布団を敷いて、又一方には外科助教授の石崎先生を石の上にお寝せした。

高木教授は何も召し上らず悄々として落付かれず、高い台より飛び下りたりなされ、一度影浦教授に診て戴く様にと角尾先生が先生方におつしやつたが、十一日の夕方亡くなられた。

山根教授はとてもひどい傷でよくも生きておられました。前額部に大きな傷口が開いてどなたか見当がつかず、お声でわかる位でしたが、とても我慢強い方でしよう、訴えは余り有りませんでした。眼科の方はどなたも来て下さらないので角尾先生は誰か助かつているだろうにと申されても仕方ありません。石崎助教授もひどく、殊に顔面はざくろの様に皮膚はむけ、お熱があり意識も混濁していられ「婦長さん熱いお茶を下さい」と申されるので「熱いですよ」と熱いのをおあげしますと、「もつ熱いのを」とおつしやる。又古屋野先生がお見舞に来られて山根先生の処へ行かれたら「あのね、果物にナイフを添えて古屋野先生へおあげして下さい。」と私にたのまれる。御自分の処には何もないのに。古屋野先生に申し上げますと、先生は「石崎君。僕の事は心配要らないから君一生懸命頑張るんだよ」「有難う〳〵。」と男泣きに泣かれました。そして翌十二日に亡くなられました。

飛行機は飛ぶし湯を壕前でわかしていてもあわてゝ火を消して壕の中へ入つたりした。あたりは変り果てゝ見当が付かず、やつと表門の処へ出て見ると病院の下の町は見渡す限り砂漠の様で何一つなく、水道も一つ丈出ていて水汲みが盛んであつた。高南病棟の地下室の処にはベットの藁を引き出してあたかも馬小屋の様で、そこへ負傷者が一杯群れて足のふみ場もない位であつた。其の中に学生さんもいられ「婦長さん、僕ですよ注射をして下さい」と次から次におつしやるが、お顔も見分けがつかなくて気の毒であつた。皮膚科の満島婦長さんとお会いしてどこも傷のない私に、自分はこんなにやられてしまつた、と青い顔をしていられたがその後自宅で亡くなられたとか。

防空壕の前に十五、六才の男の子が死んでいたが、三日目位に其の母親が探しに来て「元気で仕事に出たのにこんな姿になつてしまつて。探してもわからない筈だ」と云つて悲しまれた。丁度其日大学の電気工事に来ていたらしい。

八月十日は弟の（村葬）である事は知つている筈だから、生きていたら帰つて来ると家では待つていたが帰らないので、もう死んだものときめてお通夜をしていた。そこへ隣村の吉本さん（看護婦の父親）が見えられ、私は元気でいるが、着のみ着まゝでしかもはだしでいるから着替えと食料を持参して呉れる様に頼まれた、と話されたので家では生きていたかと喜び、私の為めに汽車の切符をやつと手に入れて、朝五時頃家を発ち長与のトンネルで三時間も待避したとかで着いたのが午前であつた。

角尾先生は「看護をして貰つて有難い」と父におつしやるので、父もお言葉に感激して無理に連れて帰れず、又来る日を約束して帰つた。

十二日の夕方軍隊にいられた松永軍医さんが軍のトラックをお願いし

てやつと道の尾の山の中へお運びする様になり夜に乗じて行く事に決つた。角尾先生、山根先生其の他学生さん、看護婦二名位であつた。

其の中に宮本さん（看護婦）は顔面をやられ、ざくろの様に表皮はとれ目丈は見えると云うが、こちらから見るとだれだかわからない。唯声でわかる位であつた。「そんなにわからないのか」と泣くし気の毒でならなかつたが、翌日家から迎えに来られて帰つた。

道の尾迄の道が悪くデコボコでしかも暗く、山根先生は帯でくゝりつけていたが動揺が激しく、帯も切れる位のひどさであつた。時間もどれ位経つたのかわからない。何んだかサワ〳〵するので見ると竹山であり、爆弾以来青い物を見なかつたので、急に生き返つた様なせいせいとした何んとも云えない気持であつた。角尾先生も「僕も見たい」とおつしやる位青い物にうえていたのでした。山根先生は苦痛らしく「まだ着かないのかね。」とおつしやる。益々気の毒でならなかつた。

懐中電燈を付けたら村の警防団に叱られた。「火をつけるとは何事だ。又こゝが空襲される」と云つてかんかんにやられた。情なくて泣けて仕方がなかつた。

着いた処は田んぼの中の一軒家で畳が一枚か敷いてあつた。そこへ角尾先生を置く様にしていたら、学生さんがねていられたので「板の間でいゝ」といわれ、そこへお二人を移した。他の人々も運ぶと水を欲しがる。井戸が近くに有ることがわかつたので、飲む人は沢山飲まれた。そんな人達は翌朝は亡くなつていた。水を飲んだ為めか下痢が起きた。次から次へと下痢症状で死んで行かれた。朝になつてみると其の附近は不潔であり、森の中が安全だろうと、又々森の中の大神宮の拝殿にお移しました。リヤカーでデコボコ道を日があたる処は日傘をさしかけてやつたりして静かな森の中へ入る。こゝならば飛行機が来ても大丈夫だろうと思つた。其の準備、夜具一切調教授のお宅から出して戴き奥様にも何やかとお世話して戴いたのでやつとお布団の上にお寝みになられた。調教授のお宅もお子様方お二人が亡くなられたとかで何かとお忙しいそうだつた。調先生は慣れない山の中に、昼間は外科の先生方や、看護婦二名と施療に廻られ、夜だけ神社の処へお寝みになつておられた。筑島先生、牛島、中村、土山、諸先生もお見えになつた。角尾先生は皆な来てくれてとお喜びになりました。別に注射はなく傷の手当丈でした。

田圃の近くに水源地があつたので飛行機の来た時は木の下に隠れながら、水浴を先生方と交代でした。被爆後初めて顔や手足を洗えてさつぱりした。

森の中にもう一軒有つたが、そこには兵隊さんが二十人位いられ、竹やりなど持つて敵が上陸する処を突くんだと意気込んでいられた。其の夜、是非其の兵隊さんの風呂に入れとおつしやる。角尾先生は「好意に甘えて入れて貰いなさい」と云われるので入れて貰いました。忘れもしませんお湯は足がやつとのことかくれる様なお風呂で気持が悪かつた。先生は「婦長お風呂でさつぱりしただろう」とうらやましそうにおつしやつた。お食事は何も召し上らず、又私も炊き出しの処までお二人の先生を置いても行けず食べない日もあつた。

山根先生の傷からは破傷風菌が入つて、ちよつとの音でも痙攣が起つた。神社ののりとを上げられる時や、太鼓をたゝかれる度に痙攣されるので、「何んとかならないか」と角尾先生は申されたが、神社を借りて

いることゝて無理も云えなかつた。益々痙攣が強くなつて水も通らず、日頃お酒が好きだつたのでしよう、鼻腔栄養で酒かアルコールを入れて呉れと木戸先生におつしやつたが痙攣が起るのでどうしても入れられない。せめてアルコールガーゼでも嗅がしてくれと頼まれるので嗅がしていられた。お食事は一口も通らないし、益々容体は悪化するばかり、苦痛でパントポンを注射して欲しいとおつしやつたが、余りにも苦痛が激しいので注射器につめて用意した。木戸先生が来られてからが良いだろうと、角尾先生がおつしやられたので、その通りにして居りましたが、遂に敗戦の発表の有る直前に亡くなられた。角尾先生は「山根君はこの報道をきかないで逝つたので幸福だつたよ」と云われた。残された先生と私は拝殿の月の光りの中で泣いた。先生は「もう泣くな」と御自分でも泣きながら敗戦国のお話をして下すつた。

其の翌日から下痢症状が出て筑島先生に連絡を取りましたら、すぐおいでになつた。便の状態をお話して先生と協議していられた。便は赤痢患者の便とは少し変つて悪臭はなく、血液もなかつた。色が灰白色に近く回数が多い丈であつた。

葡萄糖及びヴイタミンの注射薬も沢山有り、注射して居りました。頭の傷は良くなり繃帯は取れましたが、物が二つに見えると云つて目がねの一方に紙をはり、一つ目にしてかけておられた。敗戦の報でも飛行機は低空で来るので交通も思う様に行かぬらしく、全くとだえて、食べる物もなくどうしてよいかと思つていると幾年か前入院していられた吉田さんが尋ねて来られたので、角尾先生は私の為めに何か持ち合せは有りませんかとおたずねになられたそうです。それから吉田さんが食料や炭を運んで下さり、今度は私がお礼のお返しだと云つて助けて下さつた。

貯水池まで細い道がちよつと坂をなし、元気な時だつたら何とも思えない位ですが、その坂を往ききして水を汲むのが大儀になつた。このまゝしていると自分も倒れるのではないかと気になり、こゝにいて若し自分が倒れたら先生を誰がみて下さるのだろうか等と心配していたら、角尾先生の奥様が来て下すつた。それで後をお願いして家へ帰り元気になつたら又看護に当るつもりで帰らして戴くことにして、森の中の神社を後に、一歩一歩後髪を引かれる思いでお別れした。先生は私を見送ると云つてわざ〳〵起きて、目がねをかけて見送つて下すつたのが最後のお別れであつたとは、後で知り残念で〳〵なりません。

其の途中筑島先生とお会してよほど引返そうかと思いましたが、其の元気が出ませず其の儘、道の尾の駅まで行き、歯科の富崎先生とお会いし、証明書がないと汽車に乗れないとの事なので、どうしたらよいかとおたずねしたら、駅長さんにそのわけをお話したら乗れるだろうと云われたので、駅長さんにお願いしてやつと乗る事が出来た。それは貨物で、長崎から引揚げる傷付いた人々と一緒でした。言葉もなく暗い気分で乗つていた。喉がかわくので一駅降りて次の汽車と思つても、のりおりが出来なくて、其の儘十一時頃（夜）我が家にやつとたどりついた。それまでは覚えているがそれから後は暫くわからなくなつて、二三日は放心状態だつたそうです。

まだ〳〵書きたい事も沢山有りますが、八月二十二日迄の事を記して、願わくば再び原爆の惨事を見ない様に平和を祈りつゝペンを置きます。

（横田内科勤務）

影浦内科學教室

当時の教室員は影浦尚視教授、菊野晴二郎助教授、古川一郎、呉福順の両助手、森沢陽亮副手、古閑達也、柴田清学部仮卒業生、吉川清、林某の医専仮卒業生、雇の近藤次義氏、定婦の田川キク氏、それに長島一子看護長以下二十四名の看護婦であつた。

被爆時の狀況

影浦教授は諫早へ出張中で難を免がれ、菊野助教授は出勤後所用のため帰宅中（竹之久保町）爆死。古川助手は教室内で被爆、救出の後死亡す。呉助手は寄宿先で爆死。

森沢副手は長島看護長等六人の看護婦と看護室で被爆するも殆んど傷なく、室内の者も無事であつた。古閑学部仮卒業生は高北病棟で被爆。吉川、林医専仮卒業生は不在。

近藤氏は研究所で、田川氏は教室内で夫々爆死。

福田、原の両看護婦は非番で寄宿舎にて被爆し、原看護婦は即死、福田看護婦は数日後高島の自宅で死亡。山下看護婦は高北で入浴中被爆し大浦の自宅で約一ヶ月後死亡。松本看護婦は高南病棟で被爆、約一ヶ月後死亡。湯川、樫山看護婦も教室内で被爆しその後相次いで死亡す。

死亡者の官職と氏名

官職	氏名
助教授	菊野晴二郎
助手	古川一郎
〃	呉福順
学部仮卒	柴田清
雇	近藤次義
定婦	田川キク
看護婦四年	福田艶子
〃	山下栄子
〃	原衛子
三年	松本リキ
二年	湯川明子
〃	樫山フサエ

原爆当時を回想して

影浦尚視

昭和二十年八月九日午前十一時過ぎ我が長崎医科大学は一瞬にして文字通り壊滅し、同時に八百五十余名の生命が犠牲となつた。

角尾学長はその二日前の七日（広島原爆直後）東京からの帰途広島を通過し、八日（大詔奉戴日）朝八時前浦上着直ちに出勤、一同を集め訓辞をした。即ち広島を通つたのは夜であつたが、新兵器による被害状況は、実に凄惨の極みであつた。比較的軽傷の人々に、当時の模様をきいた所を総合すると、ピカツと光り、爆風のために家屋が倒潰し、続いて火災が起る、而して爆弾は落下しない、上空には異様な形の雲乃至異常な色の雲を見た者、又落下傘を見た者がある。長崎にも直ぐ来るであろう、防空の際は従来の様に只爆音のみに注意したのでは駄目である云々、而して一同一層の警戒に努力す可き事を強調したのであつた。午後の緊急教授会に於て、十日から休講にする事が決定せられた。若し一日早く九日からとせられたならば、学生等の被害は著しく少かつたに違いない。

余は昭和十九年の十一月以来県立教員保養所長を兼任し、毎週一回木曜日に諫早へ出張していた。八月九日（木曜日）例の通り諫早へ行き所員及び患者を集めて、新兵器の事を話し大いに警戒す可き事を要請した。

頭上にB29の爆音をきゝながら患者数人を診療せし時ピカツと、紫線一閃（大略マグネシウムの焔に似ているが之に少し黄色の混じたもの）余等は瞬間廊下に伏せると同時に、一大爆発音をきゝ、病院は著しく震動した。此音は附近の山上に装備してあつた大いなる防空砲がB29をねらつてせる発砲によるものであつたが時間的にみて、長崎上空に原爆落下をすませて帰るB29であつた。

病院の外の松林に出てみれば、遥か長崎上空に異様な雲を見、続いてものすごき様相の而も特種の色調を帯びた噴煙の上るを見た。その内に二つの落下傘がゆらりゆらりと下降しているのも見えた。余等は又原爆を落下せしめるのではないかを恐れ、防空壕へ退避したが、それは既に爆弾をおとし終つたので、江の浦方面へ落下したのであつた。

幸にして保養所には何等の被害がなかつた。諫早長崎間の交通機関は全く無くなつた。又徒歩で帰崎するにしても昼間は危険きわまりない状態であつたので、漸く夕方から帰途についた。幸にして一車夫の好意で人力車で夜十二時長崎についた。余の到着せる時は今町附近は真に焦熱地獄であつて丁度慶華幼稚園が焼壊するのをみた。翌朝夜の明くるを待つて、金比羅山を越えて医大につき先づ角尾学長を探した。君は病院外の横穴壕中の輸送車の上に鮮血に染つた国民服で仰臥していた。曰く「僕は大丈夫だ。高木君が苦しそうだ。古屋野君を学長として大学の再建に努力して呉れ。」見れば高木教授は学長と並んで同様輸送車に仰臥し、非常に胸苦しいと云つていた。（中一日おいて同君は死亡した）教授の大部分は已に犠牲となつた事をきゝ愕然とした。後で判つた事であるが教授は現場に居た十六名中十二名即ち四分の三死亡した。以つて如何に被害が甚大であつたかを想像する事が出来る。基礎教室のある山上に居たものは文字通り一〇〇％生命を失つた。之は爆心に近い事、木造であつた事、講義中であつた事の悪条件による。（当時空襲警報解除）病院は

コンクリート建であり比較的爆心に遠かつたためそこに居た者の大部分は助かつた。結局即死と後に死亡せるものとを合計すれば、全学人員の約三分の二を失つた事になる。

角尾学長は数日の後時津方面滑石村の或る神社に移された。それは主治医である調教授が疎開していて治療に便利なこと、又食糧を得易い事、又神社は森の中にあつて非常に涼しかつた事等によつたと思われる。

君は被爆当時外来診察中であつたが、その室はビルディングの端で爆心に向い大きなガラス窓があつたので最も悪条件の下にあつた。一見背部及び臀部にガラス破片による外傷のみであつたので、最初は生命の危険は考えられなかつた。骨髄が犯されている等の知識は無かつた。

当時不思議と思われた事は、傷創が少しも化膿せぬ事であつた。且つ肉芽は頗る不良であつた。蓋し当時消毒は甚だ不完全であつたのである。白血球計算は当時不可能であつたが化膿せぬ事は矢張り骨髄の障碍によるものと考えられる。其他口腔炎が著しく、又唾液分泌が殆ど皆無で、口内乾燥のため君は非常に苦しんだ。終り頃は食慾著しく衰え、貧血とルイソウ加わり、カヘキシーに陥つたが、意識は死の前夜迄明瞭であつた。

以上の経過の中で特筆す可き事は、即ち化膿せざりし事、著しき唾液分泌障害存せし事、及び意識は殆ど最後迄明瞭であつた事である。角尾学長は、八月二十二日の朝即ち被爆後十三日目遂に死亡した。誠に遺憾である。

然し一時再建を危ぶまれた長崎医大が今日の如く復興充実せられた事を、君は満足に思うであろう。

当時の思い出

長島一子

原子の空襲のあと早幾年もの歳月は流れ、今年は十周年記念として平和祈念像が建設され、その丘には文化会館が空高くそびえ、なんだか平和の使徒でもやつて来そうに思えますのに……

あの十年前の八月九日午前十一時二分――。長崎市民の一人である私には永久に忘れることの出来ない一つの思い出として強く〳〵きざまれ、あの当時のことを思いますと、なんだか悲しみのどん底に落された様な気がして、今なほ得も云われぬ憤りと、うら淋しい気持で一杯です。先日医大からわざ〳〵自宅にお尋ね下さつて、是非原爆当時の思い出の一端でいゝから、その当時のことを書いてくれとおたのみになりましたのでおことわりするのも悪いと思いまして、私の当時の追憶の一部分を書くことに致しました。

丁度午前十一時すぎ空襲警報解除となり非常袋をおろし、ずきんを取つた。入院患者の名札を書いて影浦先生の御部屋へおかけしようと思い私がエナメルの筆を取つていました。看護婦の池井さんが、そばに来て「婦長さん、私が綺麗に札をふきましょう」と云つて、そばに立つてふいてくれました。その横では森沢先生と、山田、内川、藤永の二三の看護婦が何か一生懸命にお話していた様に思います。その時何か「パーン！」と破裂した様な音がしました。それと共に急にあたりが真暗になつて何も見えなくなりました。誰かゞ「森沢先生！」とよんでいる声が聞え

ます。私はすぐきつと大きな爆弾が投下されたものと直感いたしました。
私は暗闇の中で椅子にかけておりましたが、すぐ立ちあがり、両手で頬をおゝいあゝまだ自分は生きていたんだなあ！と感じました。なんとかしてはい出して見ようと思い暗い所を手探りに地下室迄ゆきましたが、誰一人として室にはいません。
内科病棟へ直撃弾でもおちたと思い一人で地下室へ坐つていましたら、みんな血だるまの様な人ばかり、わん〳〵泣いて来た様に思います。角尾内科の中村先生も来られて、「婦長さん、やられたですね、今すぐ出たら、機銃掃射されるかも知れませんから、もうしばらくしてから出た方がいゝでしよう」と云われました。しばらく待つている内にみんながぼつ〳〵下りてきました。
地下室は当時レントゲン科が疎開して来ていましたので、そこで久松婦長さんに会いよかつたですねとお互によろこび合いそのまゝ別れてしまいました、その内に周囲がぼつ〳〵もえて来たので地下室にいた人に全部山の方へ逃るように云つて私も最後に本館前を通り穴弘法を経て西山の方へとにげてゆきました。森沢先生はじめ、岡野さん、内川さん、藤永さん、姉本さん等も一緒でした。――途中、調先生、古屋野先生方が元気でいられたのにお会いしました。山の中でしばらくやすんだとき、太陽を見ましたら、丁度月の様に見えました。ふだんはあんなにまばゆい太陽がこんな風に見えたのははじめてでした。
こゝに古屋野外科の大和田野先生が坐つていらつしやいました。「先生御元気でしたね」と私が申しましたら、「僕は何もわからない」と云われましたが別に大した怪我も見受けませんでしたのに諫早方面迄歩いてゆかれましたのが悪くてあとで亡くなられました様にお聞きしました。
眼科の内田婦長さんともそこでお会いしました。その晩は西山のある家の防空壕で一夜をあかしました。おそく迄飛行機がとんで来て、ビラをまいていました。
翌日私達元気な者二三人でもいゝから、医大の方へ下りて行つて見ようと森沢先生が云われましたので飛行機がとんで来る中を穴弘法の辺り迄いきました。そこには古屋野外科の岩永先生がおられて、横穴からの診療に入用なヨード丁幾、脱脂綿、ピンセット等持ち出してせめて医大関係の人だけでも治療してあげるから手伝つてくれとおつしやいましたので、飛行機がぶん〳〵とんで来る中を一日中手伝い、その晩は穴弘法の近くで周囲にごろ〳〵死んでいる人と共にすごしました。昼間はやけつく様に暑いのに晩は寒くてねられません。みんな起きて真夜中に体操したりして一夜をあかしました。
翌日影浦先生が尋ねて来て下さいました。丁度先生は原爆の日は諫早の方へ出張中で御当守でした。当時教員保養所の所長として毎週木曜日には出張なさることになつていました。先生の御顔を見ました時には思わず涙が出て、泣けて〳〵仕方がありませんでした。
当守中糖尿病患者のカルテ等非常袋に入れて空襲の時は何時も持出していましたのに今度はその一つも持出し得なかつたことは残念に思いました……。
穴弘法では薬理の祖父江先生にもお会いしました。「僕はお金を一銭ももたないから、影浦先生へ貸してもらう様に云つてくれませんか」とおつしやいました。あとで行つて見ましたら、下宿の方が迎えに来られ、

戸板にのせて運んで行かれたあとでした。その後とう〳〵なくなられましたそうで……先生はこちらへ赴任してまだ日も浅いのに、丁度原爆の為めに死を求めに来られた様なものだと思い気の毒に思いました。

大浦舎監先生にもお会いしました。丁度赤痢で高北病棟へ入院されたばかりの所でした。長男の方は自宅で爆死され、医専在学中の次男の方が先生を背負ってすくいだされました由。あとで御二人共亡くなられました。

私、川口婦長さん、今の坂本総婦長さんの三人で平戸迄御墓参りにいきました。奥様が泣いて当時のことを語られ、せめて三人の内一人でも生きてくれていましたらとなげかれ、おなぐさめの言葉もありませんでした。

三日目の夕方看護婦の山田さんの御父様がむかえに来て下さいました。「折角お元気で生き残っておられるのに三日間も御飯もたべずにいると、貴女方迄病気になってしまうよ、早く一緒に来て下さい」と云われました。御言葉にあまえ、森沢先生はじめ、山田、広瀬、内川、北村、大黒、篠崎等生き残りの看護婦と共に長崎をあとにしました。飛行機がとんで来る中を待避しながら、てく〳〵歩いて道之尾迄行きました。林先生が道之尾で三菱の寮に居られた関係で一晩とめて戴くことになりました。三日目はじめて顔を洗い畳の上で蚊帳をひいて戴き心配しながらも一夜を明かしました。翌日私と篠崎看護婦はしばらく山田さんの家に御世話になり、他の人は自分の郷里へと別れ〳〵になりました。

あまり怪我もありませんし毎日退屈なので伊木力の大浦さんの家迄尋ねて行こうと思い山田、篠崎さんと一緒に山道をタオルを冠って歩いて行きました。大浦さんとお互に元気であったよろこびに思わず泣きながら会ひました。大浦さんは少し怪我して警防団の人に連れられてかえったそうです。お内の人も大変よろこばれ、二三日泊りました。丁度終戦の日、ラジオも新聞もないので、何も分らず飛行機が低空にとんでくるのに、又空襲と間違って退避したりしているうち、警防団の方が終戦の報を知らせて来て下さいました。

又歩いて長与へかえる途中「敵が上陸する――たった今そこ迄来ている……みんな先の方へにげる様にと命令だ」などと食糧等を持ってにげてゆく人々に会い一抹の不安をいだきながらも長与へと向いました。そして八月三十一日、何の連絡もないので郷里の方へ帰ってしまいました。再び長崎医大が復興するとも思えずたゞ生きていたよろこびをいだきながら、……

それから長崎医大が新興善小学校あとへ……又諫早の海軍病院あとへと再建の途についていた二十二年の十二月に何等長崎医大復興のためにつくすことなく辞めさして戴きました。

最後に当時原爆のためになくなった夢多い若い白衣の乙女達の冥福と長崎医大の復興を祈りつゝペンを擱きます。

（当時影浦内科看護長）

古屋野外科学教室

教室員は古屋野宏平教授、石崎戊助教授、大和田野浩一講師、金武三郎助手、多田孝平副手、岩永光陸、田辺市之丞、松本淳、中村定正医専仮卒業生、溝口美津子教補、中岡茂三技術嘱託、田川元技手、小使の猪股憲一氏、給仕の小松フミ子、深堀昭規の両氏、それに山口ユリ子看護長以下二十二名の看護婦であつた。

被爆時の状況

古屋野教授、大和田野講師、金武助手、松本先生、数名の看護婦は外来診察所で、石崎助教授は、助教授室で、岩永、田辺先生はじめ他の教室員は病棟及び医局で夫々被爆す。

教室員は一応穴弘法山の中腹に避難す。この時居合わせぬのは石崎助教授、中岡技嘱、田川技手、深堀給仕、松岡、大坪、川崎、武藤、多良の諸看護婦である。更に金比羅神社近くの民家に一同登り、そこで互に治療看護す。

古屋野教授は救護打合わせのため新興善に下られる。金武、松本先生同行す。

石崎助教授は火傷ひどく角尾学長の元で治療をうけ、外科の横穴壕に移され遂に十二日死亡する。

大和田野講師は十一日夜自宅に帰り九月六日死亡。

重傷の管看護婦以下三名は避難先の岩永先生宅で死亡。

八月十八日教室員の消息を貼出す。当時勤務員三十七名中死亡者十二名。又同日松岡看護婦始め教室関係屍体を火葬に附す。

死亡者の官職並びに氏名

官職	氏名
助教授	石崎戊
講師	大和田野浩一
技嘱	中岡茂三
レントゲン技手	田川元
小使	猪股憲一
給仕	小松フミ子
〃	深堀昭規
副心主任得	松岡トシヱ
〃	菅ハルヨ
五年	大坪和子
四年	後川チヨミ
三年	川崎信子
〃	武藤ミサヱ

原爆十周年の日を迎えて

岩　永　光　陸

月日の経つのは早いものです。一時は死を明日にひかえた私でしたが、悪運強く早や十年の月日を重ねました。まだ遺された使命があつたものと見えます。

死を覚悟して、当時の状況をかいて友に送つた文中より古屋野外科教室員一同の被災状況を再録して、亡き十四の霊に捧げたいと思います。召されました恩師及び教室員家族は次の通りです。

古屋野教授御夫人、石崎助教授御夫妻、大和田野講師、雇員田川君、中岡君、深堀君、及び管君、松岡君、大坪君、後川君、川崎君、武藤君、小松君の諸嬢です。

「人の将に死なんとするや、その言や正し。」とか、八・九空襲より早や十週間よくもまあ今まで生きのび得たものだと、今更ながら不思議に思う。神の御恩寵の深さに感謝せざるを得ない。当時を想い、その後を想う。全く奇蹟の連続といつてよい。漸くにして己の身に原子爆弾の威力の現れるを知る。九月十三日赤血球二七〇万、白血球二八〇〇、生と死との岐路に立つを知る。死を或は旬日にひかえた私は、与えられた二十有余年を省み、感謝してその決算をしたい。

昭和二十年八月九日、全くいやな日であつた。悲惨といおうか、地獄といおうか、とにかくその惨状を私がどれほど大げさに述べようが、その実状の十分の一も言えない。あの日午前六時頃当直室に目をさました。先月末より病院に泊りつゞけであつた私は聊か疲れをおぼえていた。木曜日御存知の視診日だ。しかし八・一空襲のため手術病棟風呂場の傍に二五〇瓩爆弾をうけ、手術場は使われない。大和田野先生と広島空襲のことなど話しつゝその日の計画を立てた。毎日定期的に発令される朝の空襲警報も今日もまた発令された。しかし今日は珍らしく早く解除された。十時頃古屋野先生は二階繃帯交換場に御顔を出し、重症患者のみの視診をして下さつた。その後すぐ先生は外来診察に向われた。

私は八・一空襲患者の導尿を命じ、医局にもどつた。服をかえ外来治療に行こうと降りてきたとき、森田君が導尿の準備ができたと知らせにきた。全く生きるか、死ぬかは紙一重の差に驚きいる。若しこのとき呼ばれなかつたら、恐らく廊下にて圧死するか。若し助つても放射能の直射をうけ、数日中にお陀仏になつていたに違いない。

病棟一階十六号室でまさに導尿せんとしたとき、ピカリと恰も大きなマグネシウムをたいたような白光を感じた。その後は全く無意識と言つてよい。ばたりと瞬間的にベツトとベツトとの間に倒されていた。上からはコンクリートの天井が頭に背に腰にと落ちてくる。全くこのときは死んだと思つた。不思議なことにあたりは真暗くなつてしまつた。その長さは三十秒程とも思えたし、或はもつと長かつたかも知れない。

フト自分の息の手にかゝるのに気付いた。頭は一時ボウーとした感じ、そつと手を動かしてみる。動く。体はおさえつけられて起きられない。しかし何んとか身動きはできる。特別に痛いと思われる所もない。「生きている」と感じた。しかしあたりはまだ真暗だし、物音もしない。生埋めかな、と直観した。看護婦の名をよんでみる。「小崎、森田」返事

はない。更にもう一度大声にて叫ぶ。はじめてかすかな返事、彼女等を元気づけるため、そして自分に勇気を与えるため、数度「頑張れ」と叫ぶ。「先生、大丈夫ですか」「うん大丈夫、生き埋めだからぬけ道をみつけろ、俺の方にはない。」と叫ぶ。その頃漸くボーッと明るくなり始めた。火事と直覚、「燃えぬうちに抜け口を見つけろ」「小崎、元気か」「ハイ、元気です」「森田、大丈夫か」「ハイ」私は暫くあっちこっちと穴をさがした。明るさが加わったのでどうにか頭の方に出口がありそうなのに気付いた。小崎が幾分泣声で「先生、こっちに出口があります。こっちです〳〵」とゆう。声の方にベットの下をくゞりぬけて出た。そしてその破壊力のすさまじさに驚いた。

天井は皆おちて歩けそうにもない。後続弾もある。生をおびやかされることの如何につらいか、全くお話にならない。かわいそうに患者は天井でつぶされている。「足から血が出ます。先生歩けません。連れていつて下さい」と小崎は泣きだす。泣く小崎を背負つて廊下にでた。そして始めて外の景色をみてびつくりしてしまつた。

これが死の色というのであろうか。空気が灰色をしている。見渡すかぎり立つているものはない。今までうつそうと繁つていた構内の二抱えもあるような楠の大木も、すべて根元から折れている。「新型爆弾、広島」とひらめいた。とにかく後がこわい。すぐ横穴に入るか、山に逃げようと病棟入口迄よろめきつゝでてきた。中央廊下はつぶれ、多くの下敷になつた人々が声をかぎりに助けをよんでいる。しかしどうにもならない。そこに集つたもの、小崎、森田、山下、坂上、三井それに田辺先生と私、傷をうけていないものは誰一人いない。田辺先生も頭部から出血している。早速白衣をやぶつて全員に応急処置をした。

その頃すでに手術病棟二階石崎助教授室附近から火をはいている。そこに背の高い人が顔中血だらけでくる。すぐ呼んで処置をする。よく見ると耳鼻科の長谷川教授である。看護婦達が泣きだす。田辺先生としかりつゝ、とにかく火に囲まれぬうちに穴弘法の方に逃げよと叫ぶ。火はすでに教授室、医局をとりまいている。自分の持物はとにかく、委員としてクラスのアルバムだけはたすけたいと思うが到底近よれない。しかたなく、荒れはてた調外科との間を通りぬけ、高南病棟の高台に上つた。振りかえれば早や全市火と煙りの海、外科は医局そして病棟三階図書室より紅蓮の焔をあげている。想い出の古屋野外科、今一握の灰とならんとしている。愛着をおぼえ涙がでてしようがない。

外科の者はなるべく散らないようにと言いながら穴弘法の中腹に至る。谷間に古屋野先生を発見してはじめてホッとする。大和田野先生、金武先生、田辺先生、松本先生皆元気、外科看護婦諸嬢も数名いる。古屋野先生は前頭部と肘関節部に受傷、しかし軽傷にて先づ安心、先生が「婦長を手当してくれ」と言われる。診れば管君は顔面、上膊、背と全身に傷をうけている。脈も悪い。手当といつても何もない。唯圧迫止血のみである。診察着をやぶつて繃帯をするだけ、小松君も可なり重傷である。火傷がひどい。つける油など勿論ない。唯空気に触れぬようにと繃帯するのがせい一杯である。

三菱兵器工場の方より真黒な煙りがもう〳〵と上る。空一面真ッ黒、そしてその下面は赤く照り輝いている。突風が起る。トタンが舞上る。遠くではドラムカンが爆発するものすごい音、人が泣く、いや地が泣く

とはこのことであろう。穴弘法あたりのあの大木も皆倒れている。石は転び落ち、草という草は焼けたゞれている。

古屋野外科の者でこゝに見えぬ者、石崎先生（下の方で火傷の手当をうけていられたと誰かが言うので一安心）中岡、田川、深堀の三君そして松岡、大坪、川場、武藤、多良の諸嬢である。大坪君は大分重傷らしく本館診察室前で自分でアンプタでしようねと言つていた由、どうしたかと心配す。一同とにかく金比羅山を越し、治療をうけることに決定し山を登る。しかし菅君をはじめ重傷者は歩けぬと言う。一ケ所にまとめて寝せ、古屋野先生の後を追う。

金比羅神社の附近の民家に一同落着いていられる。こゝで薬品を入手。大和田野先生が悪い。山を登られるまでは元気であつたのに何故だろう。嘔気甚しく、脈も悪い。古屋野先生の御指示によりマーキュロ、强心剤、モヒ等で治療をなす。大和田野先生は自分で後腹膜出血ではなかろうかと心配される。全く八・一空襲時の患者の症状とよく似ている。しかし今思えば皆放射能のためであつた。古屋野先生は救護打合せのため勝山国民学校に降りられる。松本、金武先生も手当をうけに同行、私は後の責任をまかされ、ふみ止まることにする。

金比羅山陣地より軍医がいないから診てくれとの頼みにより兵隊約五十名を診る。上半身裸身で戦闘中だつたため殆んど全員が熱風による上半身第二度火傷である。これをすまし、再び穴弘法の方にもどろうとすると兵隊が通してくれない。上官にかけあうも許されず、ふんがいして兵隊のすきをみて山の中を下る。道のない所を約一時間にて漸く穴弘法につく。あつちもこつちもうめき声で一杯である。まだ何んの処置もしてないものばかりである。疲れた体も忘れて、治療をし、なるべく一緒の所に集めてねかす。

向うの丘に漸く長崎医大本部の旗が立つている。そこに行こうと谷間を渡る。途中誰か「岩永」と呼ぶ。見れば同級の樋渡君（角尾内科）である。「ひどかつたなあ、大丈夫か」「うん傷は大したことないが、少し寒くなつてきたので、今晩こゞえ死にはせんかと心配していた」という。みればユカタ一枚、彼は数日前不幸腸チフスの疑にて高北病棟に入院したばかりであつた。暖い所につれて行こうとするも元気なく、少し歩くと疲れる。日は暗くなる。やつと角尾内科の高橋先生に連絡し、御世話を頼む。（彼も不幸にも闘病むなしく、八月十五日御母堂に看守られつゝ昇天した。次弟浩二君は医学部二年で即死。御母堂のおなげき如何ばかりかと思われる。）

本部には角尾学長先生が傷をうけてねておられる。調教授始め角尾内科医局員がつきツきりで診ておられる。可なり御重態らしい。本部には石崎先生も居られるとの話により探すも暗くて仲々見つからない。「石崎先生」と二三度叫ぶ。すると「おい」との答、みればすぐ前の所に痛みをこらえて坐つて居られる。先生はその日助教授室にてレントゲンフイルムを窓近くで見ておられた由、原爆落下と同時に手にして居られたフイルムが発火し、頭部、顔面全部にひどい火傷を受けられている。あのハンサムな面影は全くなく、顔面の皮膚は全くやぶれ、顔は二倍位にはれあがつて、痛みも激しそう。でも何の薬もなく、治療してあげられない。

外科の横穴に葡萄糖があるから持つてきてくれと言われるが、まだ外

科は炎々として燃えつゞけていて、到底近よれそうにもない。それを言うとがつかりされるも仕方がない。先生の治療は調先生にお願いして、本部にてカンパン百人分をもらい、再び穴弘法の神社の所に重い足をひきずりながら登る。

今迄燃えていなかつた浦上天主堂も遂に燃えはじめた。幾多の犠牲をはらい建てられたこの古い建物も一夜にして廃墟と化す。兵器工場の方は今尚爆発音が絶えない。神学校、山里校ともにぐれんの焔につゝまれている。向いの稲佐岳も中腹まで燃えつゞけている。火事のためこの山の上も昼の如く明い。附近より藁を集め皆をねかしたのは何時頃であつただろうか。暫くまどろんだと思う頃ブーンと爆音がする。敏感になつた負傷者は敵機ではないかとおびえきつている。練習機のような低い音、やゝ安心して味方機だから心配するなと言う言葉の下からジュル〳〵つゞいてドドンとの爆発音。全くびつくりした。皆の怖れることおびたゞし。残酷といつてこれほど残酷なことがあろうか。生命からがら逃げのびた私達に再び爆弾の雨を降らすとは、思わず口より出る言葉は「畜生」の一言である。まだ爆音は去らない。頭上を行きつもどりつする。今迄動けそうにもなかつた重傷者が地をはつて山の中に逃げこむ。しかつても、しかつても言うことをきかない。そしてそのまゝ雑木林の中で息絶えた人々。かわいそうに誰一人看るものもなく召されてしまつた人々。

此の様にして八月九日の夜は明けた。死への驚怖にさらされつゝ全く生命の十年もちゞまる思いの此の一夜も漸く東の方よりしらみかけた。少しはまどろんだであろうか。痛む足腰をさすりつゝ薬品を何んとか手に入れたいと、専門部三年の深山君（実によく仂いてくれた。頭と腕に自ら負傷しながらも終始一緒に救護にあたつてくれた。しかるに何んたることか、あれほど元気であつた君も九月一日忽然として原子爆弾の犠牲となつた。）と病院に下つてみた。無残！一所として昔の原型を留めている所はない。想い出の手術病棟も全く廃墟と化している。よくもまあこれほど焼けたものと唯々驚くばかり、病棟の方は幸い三階と一階の一部が燃えたのみ、外来に行つてみる。本館は地下室に至るまで燃えてしまつている。治療室、診察室何も残つていない。唯、治療室に一つ、前の廊下に五つ、殆んど骨ばかりになつた焼死体が転つているのみである。性別さえ区別できない。或はこの中に大坪君がと思いながらもどうにもならない。山の上で首を長くして待つている負傷者を思い、持てるだけの薬品をもつて山に帰つた。

私達は終日救護に当つた。私に終始加勢してくれたものは学四、岩切君、専三深山君、影浦内科長島婦長を始め数人の白衣の天使達であつた。四月空襲と趣を異にし、骨折、切断創などの大物は少い。ガラス、木片によるおびたゞしい破片創とそれにも増して多い放射線による火傷である。持つている薬と言えばアルコール、ヨードチンキ、そして僅かのチンクエール（これは殆んど昨夜使つてしまつた）だけである。食物もない。畑にころがつている南瓜、芋で飢えをしのぎながら山を登り、谷を下つて負傷者を診て廻つた。

夜は畑のあぜの間に芋づるをきて寒さをふせいだ。このまゝ傷ついた人達を山にねせてはおれない。飢えと寒さにひどくなるばかりである。外科の横穴では角尾学長、高木教授、山根教授、石崎助教授の四先生

を收容、傷ついた古屋野先生、調先生などで診て居られる。四先生とも仲々重傷らしく前田婦長など数名がつきツきりである。

救護の手は延びてこない。軽い人達はなるべく帰る様に言う。私も重傷の菅君を始め家まで帰れそうにない六人をつれて十一日夜彼杵の自宅へと引きあげた。併し数日の苦闘も空しく菅君を始め三人が遂に召されてしまつた。後かたずけをすませ、十七日再び長崎へと出かけた。来てみれば尚屍体はあちこちに転つている。臭気は暑さにあてられて猛烈をきわめる。

病院に行つてみると、古屋野先生は御老体にもめげず、家には御重態の御奥様を残されたまゝ、毎日焼跡にこられ、学長代理として総ての事に当つて居られる。不幸にも炉粕町の御自宅は強制疎開のため七月始め城山町にお移りになつたばかりで、死ぬために移られたような破目になつて残念でならない。先年唯一人の御嬢様を疫痢にて亡くされ、又三男研三君をグアム島に捧げられ、そして今又最愛の御夫人を原爆のために失われてしまつた先生の御不幸、しかも肩にかゝる大きな責任、黙々として日々を勤められる先生のお姿をみると、全く頭が下るのみ、そつと後姿を伏しおがむ気持ちをどうすることもできなかつた。

先生の命により八月十八日古屋野外科職員の消息をはりだすとともに、看護婦松岡君を始め関係屍体を火葬にふした。当時勤務員三十七名のうち死亡確認七名、行方不明五名であつたが、その後放射能障碍によりつぎ〳〵と死亡者が増し、遂に十二名に達した。

石崎先生は火傷と放射能障碍強く、古屋野先生を始め多くの人々の努力の甲斐もなく、十二日昇天されました。御夫人も山里町の御自宅にてなくなられたようです。

大和田野先生は負傷後三日間山の中で過され、人の肩につかまりながら長与にでて、彼杵の御自宅に十一日夜帰られました。放射能障碍強く、口内炎、歯齦出血、下血、高熱そして脱毛と、初めてみる放射能特有の症状で種々と治療をしてあげるも好転せず、輸血すればその注射跡が化膿する仕末、悪戦苦闘の甲斐もなく、九月六日昇天されました。先生が死の三日前かゝれたお手紙を再録して、この想い出の記を終りたいと思います。

代　筆（口授通り）

八月二十九日付速達いたゞきました。

貴君が出崎される頃、頭髪が少し抜けかゝつたようだという処でしたが、其後数日を経て、殆んど脱落、引続いて高熱（三八・五度前後）及び咽頭の痛い感があり、其の翌日は咽喉だけでなく、口腔内に到る処に何か出来物ができ、歯齦は腫れあがつて、歯は浮いてしまい、便は黒い御存知の軟かい血便であり、熱は四十度を越すに至り、誰でも医者共が言つているように、そして事実亦そうなつているように、あと数日の命だと観念しました。やはり気持ちよくないですぞ！！

ロジノンやロツクでは追付かず、川棚から輸血に来てもらい、其の翌日即ち、九月一日こゝ共済会に落着きました。入院翌日迄は熱も益々高くなり、頭痛と口腔内の痛み、及びそれによる完全なる食物摂取不能をつゞけ、やはり経過は一定したものだと感心しました。今日は幾分ましなようです。この後は病院から通知がありましよう。

ピン〳〵としている人達が姿をこと〳〵くくらまして寄りつかず、数

人の教授を中心に学生、生徒何名かで「長崎医科大学仮本部」という案内所ができている由、持駒の数が少なければそれも止むを得ぬかと、結局そのようなことになりはてるかも知れませんが、実に涙なしには考えられぬことです。中略。暴言多謝。人の正に死なんとするや、其の言や正し、と訂正す。御健斗を祈る。

九月三日

大和田野浩一

最後に己れの負傷にもかゝわらず、終始古屋野先生をたすけ、疲れた体をおして、救護にそして焼跡整理にと、日々協力してくれた松本淳先生、山下静子看護婦に心から感謝をさゝげたいと思います。

廣島と長崎の原爆

栗原富士太郎

長崎原爆の災を直接経験しなかつた私に、長崎原爆について筆を採る資格は無いかとも考えられますが、次の様な理由で、原爆の厄をあわやと云う処で免れ得た幸運者の一人と云う意味で、又特別の思い出もあり、その思い出を新にして記す次第です。

原爆の前五月迄、古屋野外科に居ましたが、当時、尾道市立厚生病院の外科医長として出向いて居られた山根先生（第二解剖、外科と教室を同じくし、広島被爆の日、軍医として四国へ出張していて助かられた幸運者の一人です）が、五月応召され、その後任として井上院長自身、長崎迄来て口説かれ、古屋野教授からも亦、君は兵役関係が無いのだから召集の積りで行つてくれと言われ、当時の戦争の様相から、関門海峡を一度渡つた後は果して帰れるものやらと、一度は固辞して随分渋つていた気持に鞭打つ様にして赴任したのでした。

お陰で、大学に残つて居れば、八〇－九〇％の被爆の確率を逃れ得た訳です。人間万事、運命の岐れ路と云うものを今でもつく〴〵と身に感じます。

さて、尾道に行つて見れば、それ迄敵機からの比較的安全地帯視されてゐた中国沿岸だけあつて、防空壕も殆んどなく、綜合病院の市立病院と言うに、あるのは泉水と玄関にある家庭用の小さいコンクリート製の箱型水槽一ケが防火用水と云つたあんばいで、明眉な瀬戸の内海を前に防火演習とか燈火管制等、何処の国のことだろうと言つた至極のんびりとした防空体制でした。お蔭でこちらものんびりが感染してしまつた。困るのは食糧丈と云ふ訳で、借家の裏庭へ家庭菜園のつもりでトマトやナス、キュウリ等を植え、ささやかな牧穫を得ては淋しい食卓を飾つて喜んで居たのでした。そしてひよろ〳〵と育つた野菜を眺めては、嘗つて、長崎の解剖時代、恩師高木先生と一緒に教室の空地に苗を仕立てゝ解剖実習のくづを特大の水がめに捨てゝ置いたのに雨水が溜り腐熟したのを肥料にやつた処、葉つぱばかりが化物見たいに黒〻と厚く大きくなり、実は一つも成らなかつたこと等を懐しく思い出して、先生へも畑の成績等書き添えてお便りしたものでした。当時学内一の雷親父の称あり

入学早々より学生をすくみ上らせて居られた先生のお手紙にも、いつも風雅な教室菜園のことが書いてあり、今度はかぼちやが沢山獲れた等を書いて居られたのを、懐しく読み返したことが今でも忘れ得ない思い出となつて居ります。

処が、この、のんびりしていた瀬戸内海も、間もなく岡山が、次に呉が、続いて因島造船所が焼かれる事になり、あわてゝ家屋疎開だ、待避訓練だと騒ぎ始めた所へ、広島のピカドンです。その日は、丁度朝食をすませ出勤前、ラヂオで、広島へ敵機一（二？）機侵入、爆弾投下、被害極めて軽微の放送を聞き、気にもとめず出て行つたのですが、翌朝になると何処からともなく広島の被害が想像以上との事、ラヂオとは大分食違う噂が、伝わつて来る。その中に、ボツ〳〵、比較的軽い被害者が外来へ来始める、見ると身体にランニングシヤツの形がボツクリと残つて居る。続いて段々とひどいのが来る。聞くと、遥かな空で、ピカリと光つて、一発ドーンと来たら、身体が焼ける様に熱くなり、全市が潰滅して自分も全身火傷を受けたと云う。そんなことがあるものか、馬鹿なことを言うなと一笑に附していたが、益々避難者の症状はひどくなる。外来に来たのが、下痢を訴える、歯齦出血がある、紫斑様の皮下出血がある、訳も分らない中に待合室で、バタ〳〵とあつけなく息を引取つて行く。始めて之は只事ではないと云うわけで、色々と聞く中に、その後色々の書物等で御承知の惨事が段々と分つて来る。未だ軍でも原爆の発表はありませんでしたが、井上院長と、之は普通のものではない、伝え聞く原子爆弾（当時我国に、マツチ箱位の大きさで、戦艦を吹き飛ばすものが出来たとの希望的なデマを喜んで居た頃です）と云うものではなかろうかと、素人の直感と云うか、飛躍した当て推量をしていましたが図らずも之が当つていた訳です。

そして、原爆の翌日、県の命で広島へ救護診療に行つたのですが、市の前の前の駅から歩いて、始めて市が見える地点に来、一眼その被害の跡を見て、何とも彼とも言い様のない驚きに一時呆然とし、それ迄は尚残つていた米英への闘志も一辺に吹き飛んで了つて、「之では戦争は出来ん」と叫んだのを、そしてその次には、何の理由もなく、大変だ次は長崎だと直感したことを今でもはつきりと忘れることは出来ません。何も彼も不足だらけの応急診療をして原子野に野宿して翌日又尾道へ帰り真先に筆を採つたのが、高木先生と古屋野先生でした。

広島の状況と、色々被災者から聞いたこと、投下時の模様、それに白い衣服を着けた部分は火傷が軽いこと、ピカリと来たら、何でも良いから手近かの堅固なものゝ陰に入ること等、色々と書き連ねました。

然し、之も後で考えると、此の手紙が長崎へ着くのも長崎の原爆より遅かつたのでした。いや、永久に着いて居ない訳です。

間もなくラジオで、長崎の爆撃、相も変らず、損害軽微の見込と聞いた。翌々日には早くも長崎から被災者が病院に来、聞いて見ると、広島そつくりの話です。只詳しいことは分らず、浦上駅附近の工場でやられたとのことで、広島と思い合せて、大学も到底逃れなかつたことを想像して暗然となるだけでした。

間もなく台湾人で眼科（？）に居た人が、妻子の遺骨を持つて立寄られ、略々詳しいことが分り、その中案じて居た学部一年の妻の弟が第二解剖講堂で、高木先生の講義中に被爆し、幸いカスリ傷程度であったの

が、約十日後、下痢、出血、高熱等の原爆症状で倒れ、妹達がその遺骨を持つて郷里奈良へ埋葬に行く途中、立寄つたりして、段々と大学の惨状の予想外にひどいことが明かにされて行つたのでした。

その後広島へも数回、救護に行き、その悲惨に悲しみ憤り、之に対する医学の無力さを嘆き、又翌年十一月始めて大学の焼跡を踏み、殊に基礎の焼跡を独り歩いて廻り、懐しい教室跡に焼け残つて立つ、コンクリートの壁だけの建物、解剖実習室の屍体タンクだけが元のまゝで、中にはフオルマリン液に浸つたライへもそのまゝにあり、実習室のコンクリート床に雨ざらし日ざらしで散らばつている頭蓋骨の、ポツクリと開いた眼窩の空ろさを見た時、更めて、此の人類の悲劇は、もう広島と長崎だけで沢山だ、決して二度と繰返さる可きで無いことを、原子野で独り神々に祈つたことを忘れることは出来ません。

調外科学教室

教室員も次々と応召し、当時は調来助教授、木戸利一助教授、佐藤克巳学部仮卒業生、日高健博医専仮卒業、台湾人呉氏、研究補助員の溝田輝雄、青木カズエの両氏、技術雇の金子マサ子氏、それに村山タミエ看護長以下二十一名の看護婦が勤務中であつた。

被爆時の状況

調教授は教授室（現在放射線科二階の一室）木戸助教授と日高先生は数人の看護婦と地下室で繃帯交換中、佐藤先生と三人の看護婦は外来診察室、溝田研究補助員は研究室、村山看護長は病棟二階、他の教室員は病棟及び医局で夫々被爆す。

尚台湾人呉氏と二川看護婦は長崎市外に居て被爆を免る。

爆死者は研究室の溝田研究補助員とギブス室（現在外科手術室）に居た河田ヒサエ看護婦の二人である。

教室員は裏山に避難し一夜を明かす。

十二日調外科を主体とする救護班を組織し道の尾の滑石大神宮拝殿と岩屋クラブで角尾学長、山根教授その他教室員、学生、看護婦等の治療と看護に当る。尚此の救護班は十八日に解散し、参加した学生、看護婦達は夫々帰省した。

死亡者の官職並びに氏名

官職	氏名
研究補助員	溝田輝雄
看護学校二年	河田ヒサヱ

原爆当時の調外科追想

調　来　助

戦争が愈々酣となつた昭和二十年八月、以前は二十人近くいた教室員も次々に応召して、当時残つていたものは附属医学専門部教授の木戸君（現在田川市立病院長）と、医学部仮卒業の佐藤克己君（現在南高有馬村開業）、専門部仮卒業の日高君（現在鹿児島県種子島開業）、台湾人某君（終戦直後に帰国）の四人に過ぎなかつた。看護婦は村山婦長（現在諫早分院総婦長）を初め、佐藤、木田、本田、阿部、酒井、二川、笹山、田中、矢口、出口の諸君と生徒数人がいたが、その外は研究室に補助員の溝田君が勤めていただけで、以上の約二十人が調外科に勤務中の職員全部であつた。

入院患者は八月一日爆撃のあと大半退院したので、極く少数しか残つていなかつたが、それでも未だ東病棟（現在放射線科教室）及び西病棟（現在外科病棟東側半分）に数人宛、そのほか外科病棟地下室にも重症患者数人を收容していたので、我々は空襲警報が出ても待避することが出来ず、全員院内に頑張つて仕事に従事していた。看護婦諸君は大分不満のようであつたが、この事が却つてよい結果を齎らしたようにも思われる。

原爆の落ちた八月九日午前十一時二分には、私は教授室（現在放射線科二階の一室、村山婦長は東病棟二階の廊下、木戸君、日高君及び看護婦数人は地下室で繃帯交換中、佐藤君と佐藤、阿部、出口の諸嬢は外来診察室（現在解剖学教室南側の部屋）で外来患者の治療に従事し、台湾人某と二川嬢は長崎市外に居て爆撃を免がれたので、結局原爆の犠牲となつたのは、研究室に居た溝田君と、偶々ギブス室（現在外科手術室）で仂いていた看護婦生徒の二人だけであつた。

其後我々は調外科を主体とする救護班を組織し、滑石町の片岡町内会長に交渉して滑石大神宮拝殿と岩屋クラブを借り受け、大神宮には角尾学長と山根教授、岩屋クラブには教室員、看護婦、学生たちの負傷者約三十人を收容して、連日治療を行うと同時に、町内の民家に担ぎ込まれた数百人の負傷者達も手を分けて往診治療した。其時集つたものは木戸君と木田、本田、阿部、酒井、二川、笹山、矢口、田中、出口の看護婦諸君、其他専門部三年生六七人で、私の疎開先四尺秀治氏宅に寄宿しながら診療を開始したのが八月十二日、それから米軍上陸騒ぎの初まつた十八日まで約一週間、焼けつく炎熱の中を右往左往して患者達を治療して廻つた。今から考えるとあれでよく体が続いたことと思う。

十八日には看護婦諸君が米軍の上陸を恐れて帰宅を申出たので、残念ながら岩屋救護所の閉鎖を決意し、生残りの患者を時津、諫早、其他へ

転送した後看護婦諸君を帰宅させ、手伝つて呉れた学生諸君とは、同日夜、村中逃避して誰一人残つていない四尺家で訣れの杯を酌んだ。但し木戸君と学生二人（上野、片山両君）は二十二日角尾教授が逝去され、二十三日告別式がすむまで私の所にいて、二十四日にそれ〴〵郷里に引上げたので、それまでは何とか気がまぎれてよかつたが、其後は急に淋しくなり、原爆で死んだ二人の男の子のことが思い出されて仕方がなかつた。

木戸君や私が原子病にかかつたのは九月初めからで、二人とも幸に生命を全うすることが出来たが、村山婦長が丸坊主となり全身が衰弱して殆んど死にかかつていると云う報告を聞いたのも丁度其頃で、一時は駄目ではないかと危ぶまれたが、今日のように元気を回復したのは全く奇蹟と云つて差支ないであろう。

終戦後名残を惜んで訣れを告げた教室の人たちとは、其後全部再会することが出来た。現在教室に残つている人は一人もないが、看護婦諸君の中には芽出度く結婚された方も沢山あり、一、二健康を害された方も調外科に入院して、今では完全に癒られたようである。原爆後遺症の云々される今日、どうか被爆された諸君が末永く元気で幸福に過されるよう祈つて止まない。

産婦人科学教室

当時の教室員としては、内藤勝利教授の下に本多有隣講師、林忠実、草場正蔵、菊池秀夫助手、伊藤茂副手、田中益雄、沖洲吉博、王文其氏（昭和二十年医学部仮卒業）等が研究並びに診療に当つていた。

雇として片山幸子、田川芳枝、明田沙代子、岩永敏子の諸氏、技術雇として小笹トミエ氏、看護婦として田中米子看護長以下四十四名が勤務していた。尚八月一日の空襲により手術室、部長室、図書室に被害をうけたので入院患者のうち退院可能の者は退院させていた。

被爆時の狀況

内藤教授は草場助手及び林先生と共に病棟一階廊下で焼残りの図書文献の整理中に、本多講師、王先生は新患診察室に於て、菊地助手は旧患外来診察室で、沖洲、田中両先生は二階の入院患者治療中に被爆す。

行方不明であつた内藤教授の遺体は数日後病棟一階の熱気室で発見された。

又菊池助手は医局で、青木先生は一階廊下で、田中婦長は階上エレベータ横で、園田看護婦は二階看護婦室で夫々遺体として発見された。

尚草場助手、田中、沖洲先生は重傷を受けた。

故内藤勝利教授略歴

正六位、医学準士　産婦人科学教授

明治三十七年三月十七日兵庫県に生る
昭和二年三月東京帝国大学医学部卒業
昭和二年四月同大学副手となり産婦人科学を専攻す
昭和六年五月東京帝国大学助手に任ぜらる
昭和十四年八月東京帝国大学助教授に任ぜらる
昭和十六年四月長崎医科大学教授に任ぜらる
昭和十八年八月陞叙高等官五等
昭和二十年八月九日大学に於て原子爆弾に遭い即死転に殉ず

主なる研究題目

子宮頸癌の統計的研究並びに癌移植の実験的研究。

死亡者の官職並びに氏名

官職	氏名
教授	内藤勝利
助手	菊池秀夫
医専仮卒	青木伸夫
雇	片山幸子
〃	田川芳枝
〃	明田沙代子
〃	岩永敏子
看護長	田中米子
産婆主任	園田チカヱ
四年	岩下スヱ子
〃	金崎久枝
〃	橋本加奈子
〃	橋本道子
〃	馬渡君子
〃	峯逸子
〃	吉田静代
三年	松尾タツヨ
二年	川口シメ
〃	田中松枝
〃	光永良子
〃	武藤サトヱ
一年	白石チヅコ

産婦人科学教室原爆記

本多有隣

昭和十八年来頃より医局員の数も次第に減り、終戦の年、即ち昭和二十年一月には内藤教授以下私（本多有隣）、林忠実、草場正蔵、菊地秀夫（以上昭和十六年卒）、伊藤茂（昭十七年卒）の僅か五名となり、医局員の名札の大部分が応召中の欄に掲げられる様になつて終つた。

新卒業生を期待する訳にもゆかず何んとか之だけで切抜けようと覚悟して居た処、四月に新卒業生の田中益雄、沖洲吉博、王文其の二君、それに医専を出た青木伸夫君、合計四名が新入局されたので大いに力を得た。

其頃より急に敵機の空襲も日を追うて烈しくなり、毎日の様に大都市の被害状況が伝つて来る。然し、幸い長崎は時にB29の敵機編隊が南方より飛来し稲佐上空をかすめて行くのみであつたが、八月一日突然市内上空に現れた爆撃機が病院の建物目がけて低空飛行し、二五〇キロ爆弾を盛んに落し始めた。

屋上には前以つて赤十字のマークを大きくペンキで書いてある筈だと思つたが、赤十字も何もあつたものではない、一時間近く上空を旋回し内科、外科、耳鼻科、産婦人科と処嫌はず各所に爆弾を落され惨々たる被害、産婦人科教室も手術室、部長室、図書室等のある別館に命中し屋上より地下迄抜けてしまい、其上図書室より発火、医局員、看護婦、学生等総出動で消火に努める処へ各科の応援を得て漸く鎮火し得た。

この間よく皮膚科屋上に唯一人立つて敵機の模様を大声で報告して呉れた学生の上野君の声が今尚私の耳に残つて居る。

然し、此の空襲により貴重なる文献、図書の大半を焼失し、内藤教授の落胆は傍で見て居られぬ程で、僅かに焼残つた文献を一枚一枚丁寧に拾ひ合せ乍ら整理する日が其後一週間目に来る原子爆弾など夢想だにもせず毎日続いた。

此の爆撃に依つて急遽入院患者の整理に取りかゝる様命令があり、手術患者も早期に抜糸して出来る丈退院可能な患者は退院させ一週間後には手術不能の癌患者数名のみを残し病室は急にがらんとしてしまつた。

八月九日原爆の日、朝より真夏の太陽がぎら／＼輝き雲一つ無い。一同防空服に身を固めて各自の部署に就く、一旦出された警戒警報が解除になつたので皆教室に帰り、鉄兜、防空頭巾を解き一息して又、講義、外来、病棟等に分れてその日の日課が始つた。

丁度其日は私が新患診察の方の受持ちだつたので教室の王、青木両君と一緒に表玄関二階の新患診察室に赴き医専の学生の「ポリクリ」、内藤教授は林、草場両君と共に病棟一階の廊下で焼残つた図書、文献の整理、田中、沖洲の両君は二階の入院患者の治療など、三方に分れて各々仕事に就く。

十一時を少し廻つた頃、丁度患者の診察を終えて大きなテーブルを挟んで学生と向合い話して居た。林、草場の両君は隣の予診室の図書棚を片付けて居る。突然「ぴかつ」と光つたと思つたら物凄い爆発音と一緒に突風が襲いかゝつた。その後どの位の時間が経過したか皆目分ら

ない。目を開けて見たが全然何も見えない。真暗な世界に落込んだ様な気がする。意識だけは鮮明なのだが、大型爆弾が本館に命中し、建物全体が地下にめり込んでしまつたのではないかと想像してみたが、こうなつたら諦める他ないと観念した。

今迄一緒に話して居た学生達は如何なつたかと心配になり出し、又目を開けて学生の名前を順に呼ぶ。すると傍から返事がする。次第に周囲が明るくなるにつれて自分達の上に積み重つて居る椅子、机、戸棚、診察台、鉄の窓枠、硝子等あらゆる物の破片の中からやつと血だらけになつて起上つた。そして互に無事だつたことを知り手を握り合いつゝ窓枠の吹飛んだコンクリートだけの窓から浦上の町を眺めた時は唯々呆然自失、一同声も出ない。其処にあるものは今迄自分達が住んで居た浦上の町では無く死の街である。濛々たる土煙の中に静まり返つて居るだけだ。その中にあちこちから赤い火の手が昇り始め次第に焔が拡がつてゆく、漸く気を取戻して一同診察室に集つて見れば、診察衣、シャツはちぎれ、ヅボンはボロ〳〵になり、頭、顔、背中、手、足と言わず殆んど全身皆血塗れになつて居る。「大丈夫か」「大丈夫か」と言い乍ら次々と見るに幸い全員無事、隣りの部屋に居た両君の顔も見える。看護婦の顔も見える。

そうこうして居るうちにも火の手は次第に拡がつて行く、傷の処置を施す暇もなく一先づ病院裏の穴弘法の山へ避難することに決め外へ出る。

丁度其時隣のレントゲン室より永井先生が傷だらけの顔をおさえ乍ら血塗れの看護婦二、三人と共によろ〳〵と出て来られた。

「先生大丈夫ですか」と言えば「大丈夫だ早く山へ逃げろ」と言われる。階下に降りて表玄関に出て見れば今迄救護班としてテントを張り待機して居た筈の学生、看護婦達の姿もなく、爆風に依つて吹上げられた樹木、テント、瓦、屋根、電柱、木材等凡ての物が雑然と散つている中に黒い裸体が点々と横たわつているのみであつた。病院下よりあの国友先生宅へ上る坂の方角を見れば唯一軒の家も無く、灰色の丘がその傾斜面の赤土を露出しているだけだ。

内科病棟の裏へ廻り毎晩悩まされた犬小屋の在つた辺りと思われる処へ来ると外科、内科、耳鼻科各病棟の裏口より血塗れになつた医局員、学生、看護婦達がよろ〳〵と出て来る。どの顔を見ても誰であるか殆んど分らない、三々五々肩を組み、或はあたりに散つて居る棒切れを杖にして裏の山へ山へと避難する。

産婦人科病棟の裏口に来て一歩内へ入ろうとすれば中学生と思われる十五、六才の男の子の屍体が横たわり、内から煙が吹出して来て入ることも出来ず、止む無く北講堂の下へ廻り大声で二階の看護室に向つて呼んでみたが、寂として誰一人返事する者とてなく濛々とした黒煙が無気味な音をたて乍ら窓から噴出している。非常口より内に入ると廊下は山と積れた雑片で足の踏み場もない位だ。レントゲン室、旧患診察室、熱気室、実験室、医局と廻つてみたが誰一人見当らない、二階へ昇ろうと思つたが已に焔の海、どうする術もなく、又引返し病院裏口へ行く。途中小児科の傍で大きな荷馬車が馬諸共倒れて道を塞いで居る。馬の腹を踏んで行けば、屍体累々と横たわる諸畠、眼に入る血を手で払いつゝ一歩〳〵丘へ登る。五十米位登つた所で誰か倒れて呻いて居る、抱起して

みれば教室の王君だ。驚いて「しつかりしろ、」と言い乍ら見れば、右胸部の傷からの出血を手でおさへ乍ら「もう駄目だ」と力無く答える。無理矢理体を肩にかけ、ボロ〳〵になつたワイシヤツの一片をちぎつて傷に当て又登り始める。「病室の者は」と聞くが全然分らぬと言う。

山の岩穴に着いた頃には既に顔面土色になつて居たが、続々と避難して来た病院の人々の顔を見てから幾分元気を取戻して来た。四方を見れば、あちらに五人、こちらに六人と山の尾根に沿つてふう〳〵言い乍ら皆伏して居る。私は王君を婦人科の看護婦達が一団となつて屯ろして居る傍にあづけて尾根伝いに金比羅山に向つた。幾ら探しても内藤教授の姿は見えない。田中婦長の姿も無い、見当らぬ青木、菊池両君の姿を求めつゝ疲れた足を元来た方へ運ぶ。泣く者、助けを求むる者、水を欲しがる者、呻く者、それは宛ら生地獄の形相である。三菱の工場に狩出された学徒隊の乙女達が黒くちゞれた髪を蓬々とし、半裸の姿で続々登つて来る、見て居る中に何人かゞ途中でばた〳〵倒れてゆく。

街を見下せば殆んど火の海、病院の建物も煙の中にかすかに浮いて見える。夕暮れ近くになるにつれ、益々火勢は強まり山の直ぐ下迄迫つて来た。夜に入り左手の銭座小学校の焼落ちる物凄い音を聞き乍ら、誰も見た者が無いと言う内藤教授の顔を又想い出す。その時角尾学長が中腹の諸畠に居られる事を学生が知らせて来たので、若しや学長と一緒に避難しておられるのではなかろうかと思い、又元気を出して一人丘を下る。

途中顔面血塗れになられた北村教授が数人の学生、看護婦と共に避難してこられるのに会う、実に痛々しい程の傷だ。更に丘の中腹辺迄来た時、前田婦長に附添はれた学長をやつとのことで探し出した。相当の傷である。「先生、大丈夫ですか？」と言えばそれ迄伏しておられた顔を少し上げ「あゝ本多君か、内藤教授は？」ときかれる。やはり駄目だつたのかと思うと全身から急に力が抜けて了つた。其処で学長より古屋野教授、調教授、長谷川教授等の助かつておられること、基礎教室の全滅せることを知つた。

斯くして、大学は八月九日教授以下医員、学生、看護婦の大部分を一瞬にして失い、全機能を全く消失して終つたのである。其夜一晩中、燃え続ける大学を眺て居る時、病棟に居た筈の内藤教授以下青木、菊池の両君並に数多くの看護婦諸嬢が、あの大学とその運命を共にして居るのではなかろうかと言う不吉な予感がして、まんじりともせず一夜を明した。

翌十日早暁より始つた永井先生の指揮する救護班に元気な者だけ加わる。其の数、総員僅か四十名足らず、産婦人科教室に生存せる者、林忠実、草場正蔵、田中益雄、沖洲吉博、王文其、と私。此の中、田中、草場、沖洲の諸君は負傷甚しく動けず、生き残つた看護婦僅かに十数名のみ。私は二木君と、元気を取戻した王君と共に、行方不明の内藤教授、菊池、青木両君、田中婦長以下二十数名の看護婦を探す為山を下りて行つた。

途中、焼付く様な瓦礫の中を浦上へと尋ねて来られた内藤教授夫人に出会う。無言で立ちつくした私達に「内藤は？」と尋ねられる。一同返す言葉もなく唯頭を下げるだけ、漸く私は「何処か逃げて行つておられるとよいのですが、焼跡の方は私達が探します」とやつとの思いで言つ

た。

夫人は丘へ登つて行かれる。その後姿を眺めつゝ何処かで助かつて居て下されゝばと淡い望みを託す。それからの数日は朝から晩迄屍体探しと火葬の連続である。夫人も毎日朝早くより浦上に来られ丘と言う丘、川と言う川、畠と言う畠、くまなく探し廻り、町の焼残つた小学校に急設された救護所も、一ヶ所一ヶ所巡り、万一の希望をいだいて居たのであるが、如何しても発見出来ず、貴重な一日一日が過ぎて行つた。

そのうち菊池君を医局、青木君を一階廊下、田中婦長を一階エレベーター横、病棟主任園田看護婦を三階看護婦室に発見。今は亡き人々を焼く煙が今日も又一日中、かすかに立上つている。夜、外科手術室の裏の土手に作られた防空壕に避難して居られる角尾学長を訪ねる。入るとベットの上に頸、顔を白く繃帯で巻かれた学長がこちらを向かれる。傍のベットには外科の石崎助教授が苦しそうに呻いて居られる。

学長は小さな声で「内藤君は未だ分らないかね」と聞かれる。「はい」と答えて立つて居る時、入口から学生が来て内藤教授と思われる屍体が病棟一階の熱気室にあることを知らせて呉れた。急いで蠟燭を片手に、その学生と一緒に熱気室に行く。八月一日の爆撃でやられた図書の焼残りを、一時熱気室に運んで整理して置いた事は知つて居るので何回もその部屋は見たのだがと思いつゝ中に入る。

火災を免がれた部屋の中は紙片と机、椅子、壁土等で足の踏み場もない。学生が探して引出して呉れた屍体がその図書文献の上に横たわつて居るでわないか。一目見てそれが恩師内藤教授であることを知つた私は其処にふら〳〵と跪いてしまつた。

再び学長のもとへ確認の報告に行くと、無言の裡に枕辺に置いてあつたリンゴを二つ私に手渡され「内藤君に」と唯一言申された。私は頭を下げた。そしてそのリンゴを落すまいと、両手に一つづゝ確かり握りしめ、溢れ落ちる涙を払う気力もなく、病棟にねむつて居られる内藤先生の許へ引返した。

十年前のあの日も今日の様な蒸暑い夏空だつた事を想出し、又御見舞に頂かれたのであろう貴重な果物を故内藤教授の霊前に供えられたあの角尾学長も今は亡く、炎天下に若き生命を散らせし数多くの学生、看護婦諸嬢の御冥福を祈るのみ。

昭、三〇、七、一四

小児科学教室

教室員としては佐野保教授、浜田宗之助助教授（医専教授）森重孝助教授、佐藤昇助手、平野米雄副手、野村仲徳副手、岩崎誠彦副手、平田道子、山田英子両研究補助、富上ミツノ給仕の外、中尾ナツ看護長以下十九名の看護婦が勤務していた。

又当時は空襲に備えて入院患者はなく、只身元のない乳児三名が在室中であつた。

被爆時の状況

佐野教授は来客のため本河内の自宅に居られ、浜田助教授は疎開地の多比良で病臥中であつた。

森助教授、平野、野村副手、大宅看護婦は外来患者診察室で被爆す。野村副手は重傷を負い十二日夜中皮膚科病棟で死亡。

佐藤助手は疎開のため山里町へ帰宅中、岩崎副手は城山町の自宅で結核静養中夫々爆死。

他の教室員も研究室、教室内で被爆し、即死者はなかつたがその後中尾看護長以下八名の看護婦相次いで死亡す。

死亡者の官職並びに氏名

官職	氏名
助手	佐藤昇
仮卒業生	岩崎誠彦
〃	野村仲徳
看護長	中尾ナツ
四年	井上光子
三年	藤田和代
〃	野口寿栄也
二年	土岐富美子
〃	荒木信子
一年	川上アサヱ
〃	河野鈴子

原子地獄を見る

森　重　孝

昭和二十年八月九日午前七時半頃大学病院へ出勤の途中警戒警報をきき、慌しく自室にかけ込んで、急ぎゲートルを巻き、鉄帽を身近くおいて前夜当直看護婦の報告をきいた。八時三十分頃空襲警報発令、約十五名を容るる小児科教室横穴防空壕へ医員、看護婦、それに育児を加えて待避した。烈日のまぶしい空を敵機か友軍機が知らぬが、数機の爆音が岩屋山から稲佐山の方向へ動いて行つた。防空壕から出てカラタチの垣の辺りに潜んで飛行機の行動を見やると背に負つた鉄帽が夏日にやけて重たかつた。九時四十分頃空襲警報は解除された。

外来患者が五、六名あつたので午前十時三十分頃から医専三、四年生の外来臨床実習を始めた。平時ならば学生達はもうとつくに夏休暇である筈であつたが、戦時中は修学期間を短縮するためと、もう一つの理由はその当時毎日の如く空襲があつた為に講義がまともにできなかつたので、夏期休暇を御破算して講義がつゞけられていた。学生が予診をとつて第一番に持つて来たのは看護婦寄宿舎の舎監をしていた大浦さんの末つ子六才が、腸チフスらしい経過をとつていたので患者には入院治療を約束し、医員平野君には発病届を書いてもらい、学生達には小児期の腸チフスの症状を簡単に話した。次の患者は学生四年生藤井君の妹の長女三才が百日咳を患つてきていたので特診室で診察した。医員野村君が記載をし大宅主任看護婦が診察を介補してくれた。

診察を了えてズボンの小ポケツトから懐中時計を取出して見たときは午前十一時であつた。それから窓辺で手を洗つていた。飛行機の爆音に気がついた。と、その時「ボーン」という激しい音響と衝撃とが、私のからだを打ちのめし、診察室の土壁がおちて私に降りかゝつた。しかし四つん這になれば土を払いのけて起き上ることができた。眼は開くのだが、何物も見えなかつた暗黒の世界に、身体がフラフラして頭の中がじんじんと鳴つた。空気が重たく感じた。呼吸が苦しくなつて、小刻みに吸込む。呼気が苦しかつた。額からは生ぬるいものが湧いて頬を流れ、顎から滴り落ちる。咳が出て口中には粘りつこいものがあふれて口角から流れでた。

死のおのゝきが私の脳裏を包んだ。「呼吸が苦しい。呼吸が止るのではないか。妻子にはもう会えないで死ぬわけか。」からだがわな〳〵震え、凸凹不平の足場から平衡を失つて、二三歩前のめりに突進した。ところが高さ三、四尺の床下から足踏みはづして外庭に墜落し、ぎくつと肝を冷した。暫し立つていると視野が次第に明るくなつてきた。私は眼科病棟に面する庭に立つていた。穴弘法山に気がつくと、たつた今迄居た場所をふりかえつて見るのが非常におそろしくなつて、ふりむきもせず、左上眼瞼部の出血を診察衣を裂いた布片で圧えながら、よろめきつゝ穴弘法山の方へ歩いた。病院裏門では山崎看護婦が顔面鮮血にまみれ、眼球には硝子がつきさゝり、下肢も負傷していて、歩けないと叫びながらわな〳〵震えて蹲つていた。

その傍には小児科臨床実習にきていた川上という看護婦生徒が大腿部損傷で動脈出血がひどく、大声で「助けて、助けて」と泣きわめいていた。私は着ていた診察衣を裂いて彼女の大腿上部をぐつとしめてやつた。気力を失つてぐつたりとなつて重たい彼女を背負つて私は穴弘法山の中腹迄登つた。裏門附近では中田看護婦と私の診察についていた大宅君とに会えた。野田君は頤から頸すぢにかけて血だらけ、モンペは破れて脛がはみ出し、鮮血にまみれ、大宅君は顔面の無数の硝子破片創から血をふいていた。医員平野君は左頬の出血を圧さえ、夫々傷ついた看護婦達を励ましながら私達に続いて登つた。

山の中腹の畑に川上君をねかせ、石ころを探して止血を強力にした。しかし既に出血多量であつたためか、気力は弱り切つてからだがわなわなとふるえ、脈が小さくなつたがどうする事も出来ぬ内に彼女は夕方死亡した。

正午頃風は強い西風となり、大粒の雨がぱらぱら降つた。大学はすさ

まじい音を立てゝ燃え、図書館はものすごい火焔の渦を巻いてもえた。山里町から浜口、竹之久保、井樋口町に亘り一面火の海と化し、火焔は天をこがしていた。大学病院が燃えるときには煙が眼にしみるようになつた。畑の作物や草や木はすべてへし折れて黒く焼こげ土にはニンニク様の臭気があつた。蔓や葉の無い南瓜が黒くやけてごろ〳〵ころがつていた。

大学病院前電車停留所の近くに統制牛乳を販売していた吉田商店という店があつたが、そこの主人は「家内も嫁も孫もみんな焼け死んだつ」と大声でをめきたてた。三十五、六才の女が髪をふり乱して帯を引ずり「こわい、誰か私を抱いて頂戴」と叫びながら走り廻つた。山を上へ上へと登つて行く人、うつ伏にうめく人、仰向けに頷の傷を圧えている人、街の煙の中からは髪の毛を焦がした母親が赤坊を抱いて走り、青年が素裸で喚き乍ら坂をのぼつてくるのやら山には多数の傷者がうごめき苦しみそして火炎の音、呻き声、強風の唸り等が交錯して宗教画で見る地獄図絵そのままの有様であつた。

内科医員（不明）は不思議に無傷で服装も乱れず、救急袋を肩にかけ、私に近づいてきて私の左上眼瞼の傷にヨードチンキをふりかけ、ガーゼをあて私の診衣を裂いて繃帯をしてくれた。午後三時半頃教室の医員平野君に現場の監視をくれぐれも頼んで私は一応本原一丁目の自宅に帰つてみることにした。

爆心地より七〇〇米の地点にあつたので家は全壊し、破けた屋根に畳や柱がのりかかつているという惨状であつた。妻と二人の子どもは家の下敷となつたのであつたが、幸いに即死を免れた。隣の人々とともに横穴防空壕で夜を過したが、壕内は火傷や外傷者の呻き声で殆んどねむれなかつた。翌日隣家の人々の治療に忙しく、そしてまた十一日も方々から呼ばれた。

八月十二日子供達もようやく落着きをとり戻し妻は食器や箱類を拾い集めた。八時半頃家を出て大学へ向つた。途中本原町の防空壕の中から女が現れて私を呼び止め、十才位の女の子が高熱と血便をしていたが急に様子が悪いから診てくれという。既に気力を失い、脉搏は弱く間もなく死んだ。大学の本部や基礎教室の建物は堅牢なコンクリート建さえ倒壊全焼し教室と覚しき所には白骨が累々と横つて居た。一米四方の石の門柱も一側は倒壊し、他側は土台から五寸位ずれて傾斜していた。大学病院は全部鉄筋コンクリート建であつたため外廓丈は残り、しかし窓わくは素つ飛び内部は大部分焼失し、がらん堂となり、残つたところは天井は落ち、物品は散乱し或いは累積して惨たんたる有様であつた。

裏門から小児科の処置室を通して眼科病棟が見え、図書室と標本室との窓からは本や標本等が乱雑に累積して見えた。小児科教室は臨床教室中最も爆心地に近かつたので被害が大きく、教室内で即死したものはなかつたが傷つかぬ者はなかつた。小児科の防空壕近くでは医員平野君が土を盛り上げて作つたかまどで湯を沸かしていた。彼は声を張りあげて小児科看護婦達に私の健在を知らしてくれた。婦長は頸部に第三度の火傷を負い頷面は青黒くむくみ、背部には数ケ所の硝子破片が突きささり左耳朶は打ち貫かれて丸い穴があいていた。他の看護婦達も殆んど皆頷面や手足に傷を負い厚く繃帯をしていた。同じ壕の中では眼科の一看護婦が右下肢の皮下蜂窩織炎であつたろうか、ぶよぶよと腫れ上つて高熱

を発し排尿困難を訴え、呻くやら猛けり叫んで、眼科医が傍に附添い施す術もないという形で見守つていた。

防空壕近くの病院用水タンクの送水モーターの近くに小児科の給仕富上ミツノ嬢が頭は両頬えぐりとられて眼球が見え、右前腕骨は尺骨橈骨ともに骨折し、下肢は外観的には何の傷も見られなかつたが、一側は多分神経損傷のためであつたか、動かすことが出来なかつた。塩酸モルヒネを注射してやつて暫くねむつた後、声高く私を呼ばはり「先の注射をもう一度願います」と哀願するのであつた。同じ場所には大学一年生が三、四名、呻いたり、叫んだりしていたが、その内一名は当日日暮時、容態急変して昇天した。その学生の父親は三日間に亘り方々をたづね探し廻つたが杳として判らず、今朝古賀村の観音様におまいりした甲斐あつて有難くも引合わせして頂いたと、父子抱き合つてよろこぶ様子を見てから二時間経つていたであろうか、ひよつこり死んだ。死体は其処から四、五間隔つた芝生の上に運んで莚を被せておいた。

午後二時頃市内の婦人会から握り飯と梅干とが運ばれてきた。平野君と私とはバケツに縄をつけて用水タンクから水を汲み上げ、それが終ると湯を沸かしながら握り飯をほぼつた。主任看護婦は握り飯をほぐして粥を作り重傷者にすゝめた。小児科教室の庭を囲んでいたカラタチの垣は根こそぎ倒され、別館近くの青桐も悉く倒されていたが、淡成塔とその附近の山茶花は何等の損傷も受けず厳然と立つていたのである。建物の蔭になつていたので、お蔭様でという言葉の通りであつた。仏の力のお蔭様だつたかも知れない。教授室側の入口の階段には学生がうつ伏せに死んでいた。

教授室から廊下にかけては佐野先生の大事に保管されて居られたレントゲンフイルムや教室先輩の文献が山の如く散乱し、地下の調乳室に下る階段の近くには大きい赤牛が息絶えだえに呻いていた。平野君と連れだつて、動物小屋の方から地下室に入り、暗室に貯えてあつた葡萄糖のアンプルと滋養糖とを皆に分配して元気づけてやろうと考えた。

暗室に接する研究室の惨状は言語に絶する。専らTB菌を培養していた孵卵器、腸内細菌培養の孵卵器、遠心沈澱機、螢光燈、ガラス器具等が足の踏み場もない位に荒らされていた。此処で遭難した研究補助員平田道子嬢はよくも逃げ出すことができたものだ。教室員の脱衣箱も悉く倒れ試薬棚、大机等も折重つていた。調乳室には島津製の冷蔵庫、部屋の中央の大机や洗場がでんぐり返つて這入れなかつた。医員野村君は腹部に強烈な爆風を受けて急性腹膜炎を起し、皮膚科の地下室で苦もんしていることを聞いて夕方見舞いに行つた。外科の調教授の御診察を受けたが、施す術もない状況下であつたので、激しい渇きと腹痛とを訴え、もだえ苦しみ、死出の水を飲まして呉れと云う覚悟の言葉も実に哀れであつた。

日が落ちて無気味な大学構内をぬけて、大学グランドを通り家路についた。大学運動場の北側には各教室分担で芋畑をつくつていたのであるが、数名のレントゲン科看護婦達は除草をしているとき遭難した。誰とも見分けぬ程にふくれ上り、一糸纏わない黒い油を塗つたような死体が転つていた。

八月十三日防空壕にいた看護婦達の傷のつけ換えをすまして、小児科と眼科との間の庭を廻つて外来診察室に入れば、受付室から診察室迄が

すつかり焼けて、而も特診室の隔壁がすつかりくずれ落ちてなかつた。北側の婦長室から学生予診室、体重測定室、旧患診察室、処置室に至る迄丸焼けとなり、先輩の方々が心魂を傾けて記録した学生予診室の患者日誌、育児記録は全滅に帰した。北側は試薬標本室より東、南側は医局より東の各部屋は天井は落ち道具一切全壊したが、燃えなかつたことは大助かりであつた。殊に図書は方々に飛ばされ、中には表紙がとれたり破けたりしたけれども、大部分をとりとめたことは有難いことであつた。昨日廊下で喘いでいた大牛は昨夜の内に地下室に移動したらしく調乳室の入口に横たわり息絶えていた。

教授室は天井がおちかゝり、いろ〳〵の物品が雑然と山をなしていた。その上に私の夏服が乗つかかつていて、釘をつきさし「森助教授の遺品」と書いた紙をつけてあつた。私は行方不明という事になつていたのである。調外科が大学本部になつていたが、そこの板壁には職員の安否が記してあつた。

佐野教授　生存　　森助教授　行方不明
佐藤　昇　死亡　　岩崎誠彦　死亡
平野米男　生存　　野村仲徳　重傷

十時頃佐野先生とお会い出来、先生が固く握手して、涙を流して喜んで下さつた時の感激は今だに忘れられない。医員野村君は昨夜死亡した。皮膚科のはづれたドアの上に死体をのせて佐野先生、平野君と三人で庭に運び、石を集めて焼き場を作り、材木を拾い集めて死体の上にのせ、火をつけた。三人は合掌して冥福を祈つた。万感胸に迫つて涙があふれる。時々火加減をみると少いたきぎの間から足がやけて行くのが見えたりした。この火葬の間にも飛行機が飛来し、半分くずれ落ちた防空壕へ平野君と身をかくした。

夕方骨を拾つて花瓶に入れ、医局の机の上におき、木炭で故野村君の英霊と書いた紙をつけておいた。その時分佐野先生が来られて高木教授の御遺骨の分骨を教授室におくから粗末にせぬようにといわれた。この日から各地の救護隊が活動し始め、大学職員の重傷者を優先的に諫早に輸送することになつた。重傷の給仕富上ミツノ嬢は明るい内に運ばれて行つた。小児科の婦長以下の看護婦は明朝行くことになつていた。

十三日正午頃湯江の疎開先で病気のため静臥していられた医専浜田教授が来られて十五日に広島県の亀というところに入隊すべしという海軍の召集令状を受けたが、折尾以遠鉄道線路破壊のため行けずに困つていらるる事と、八月九日午前〇時ソ連軍が参戦したという新聞記事とを話して下さつた。誰が話したという記憶はないが、日本軍二十三機がニューヨークを空襲して大被害を与え米国人を震駭せしめたというデマも聞いた。昼過ぎ学部三年の渡辺君からカンコロ餅の一片を貰つた。その旨い味と感謝の気持ちは忘れられない。夜は小児科防空壕の入口に藁を敷き、中尾婦長と動物屋の松永という女と私と三人で一枚の毛布を被つてねた。晴れ渡つた空には無数の星が降る如くまたたいていた。角尾学長や山根教授、松下助教授等の重態の模様、安否を気使う知人の顔、顔が走馬燈のごとく浮かんで来てなかなかねつかれなかつた。翌日早朝シャツが夜露にしめつて風邪気味、鼻汁をすすりながら、精神科の渡廊下の壊れ落ちた板ぎれを拾い集めて火をたきつけ、湯を沸かしたり、昨夜残りの握飯をほぐして粥をつくつた。大宅、谷口看護婦は病院構内に唯一

ケ所水の出る水道栓があるといつて汲んできた。

病院構内に朝日が柔く日射す頃、家に帰ることにした。大学構内の石畳の通路はようやく通れる。衛生学教室の講堂には未だ焼死体が累々とし、解剖学教室にも数個の黒い肉片をつけた頭蓋骨が転つていた。グラウンドのスタンドは石垣がくずれ落ち、巨木悉く折れ、裂け、烏が二、三羽飢え迫るような声で鳴いている風景は漢詩「寒山寺」月落烏鳴霜満天をふつと思い出させた。山里教会附近は救援隊が焼死体の搬出作業に忙しかつた。手と手、足と足とを縛り、棒で担ぎ運んで行くさまは猟で獲つた鹿を運ぶような格好であつた。死体は刑務所近くと教会門前とに集められ、柴木のたきぎの上に何十という屍を積み重ねて行く。足の方はなるべく外がわにし頭を中心におくようにして。頭、胴体ばらばらになつているのも見られた。

十五日午後山里国民学校へ戦災証明書をもらいに行つた。コンクリート建の校舎がくづれ落ちて荒れ果てた校庭に長い列を作つて並び市役所の役人達から戦災証明書と米四瓩、いりこ一にぎりとを貰つた。そこで永井隆博士の消息を聞いた。頸動脈の近くを負傷して実に危険な身でありながら山里の焼跡から奥さんの骨を拾い、その足でこの山里学校へ戦災証明書をとりにきたということだつた。この日、本原町一帯にも救援隊の死体収容作業が行われ、南瓜畑の死体はどこかへ運び去られていた。夕方九大学生の甥がひよつこりたづねてきた。九大診療班として来崎したという。地獄で光明を見るという喜びはこんなものであろうか。夜は楽しく語り合いながら板の上に転つてねた。夜中俄か雨が降り出し、昼間集めておいた戸板を天井にして、四方に破れ蚊帳を張り、雨のしぶきをよけて大してぬれずにすんだ。

翌朝雨はすつかり上つてすがしがしい晴天、だがしつとりとぬれたかまどで火をたきつけるのには閉口した。温い米飯にいりこの副食という粗食ではあるが、遠来の客を交えての会食はたのしかつた。甥は夜再来を約して診療に出かけた。十時頃私も大学へ出勤、途中敵機が思いきり急降下するのには驚かされた。小児科防空壕にはもう誰もいない。壕の奥に腐爛した母子二体の屍があつた。哺乳しながらいき絶えたものと思われる。小児科廊下で平野吉に会い、無条件降伏の悲報を聞いた。昨十五日の午後、古屋野学長は諷外科の本部に全員を集めて停戦の詔勅を奉読されたということであつた。角尾学長は滑石の神社境内で重態であられるらしい。山根教授は破傷風を併発されたとか言い極めて重態、眼科病棟にねていられた。医局の整理をしているとき佐野教授が来られたので随行して病棟内を巡視した。地下室の便所汲取口の被蓋がとれて便所の中に黒いモンペを着た死体が浮いていた。仰向けだが頭は黒くむくんでいて男女の別さえ分らない。しかしおうむけに浮いている死体だから女とみるべきだろう。附近には薬局に勤めていた松岡という婦人の履歴書が散乱していた。地下室の暗室には調乳用の滋養糖が石油缶詰二、三個貯えてあつたが、これらは既に誰かに破られ、中味はすつかりぬすまれていた。徒らに潮解した滋養糖が辺りをべたつかしていた。佐野教授は調乳室から二、三斤の白砂糖が入つている缶をさがしてきて「このような貴重品は大切に保存しておけ」と命ぜられたので平野君と二人で医局の打ちひしがれた茶だんすの奥へ隠しておいた。

午後になつて本部に行つてみると医員看護婦学生十数名が治療、死亡

者の処置、事務連絡等に目覚ましく仂いてた。ここに收容の傷者達は学生及び看護婦の重傷者ばかりであつた。脳症状を呈した一少女が全裸で転々反転している様がみられ、一人残らず呻き、わめいている様は気の毒の限りであつた。裏の土手を登ると高北病棟の庭に出る。そこで死体を焼いていた。つい先程樋渡という学生も荼毘に附せられたということであつた。

敗戦という精神的打撃と終日の労仂作業とに、ひどく疲れ日暮れて家路についた。途中本原町では朝鮮人の一団が、たき火を囲んでバンザイを連呼しながら祝宴をあげていた。くやしい限りだ。戦争は終つた。敗れたのだ。男は自決を覚悟せねばなるまい。婦女子は山野に逃げかくれせねばならぬかも分らぬなど語る内に夜は更けた。

その後被爆三十五日に妻が原子病で死亡、その頃私も冷汗と飛蚊症の発作で約四十日間悩まされた。白血球は四千に減つていた。

皮膚科学教室

当時、教室員として北村包彦教授、一ノ瀬健吾助教授、金子純彦講師中山善敏助手、蕭秀河助手、楊瑤麟副手、黒木重徳副手補、技工嘱託の町田信治、間野正喜の両氏、雇の中村ハルヱ、山田春子と山田八重子、一ノ瀬睦子、崎田テル子の諸氏それに満島ユリ看護長以下二十一名の看護婦が勤務中であつた。

被爆時の狀況

北村教授、金子講師、蕭助手、楊副手、黒木副手補は看護婦数名と共に外来診察室で被爆。一ノ瀬助教授は出勤途中で被爆。中山助手は治療室で火傷を負い、一週間後、北松今福で死亡。

黒木副手補は外傷なきも翌年初め原子病のため死亡。町田氏は出勤途中の路上で爆死。

中村ハルヱ氏は医局の廊下で即死。

満島看護長は一階廊下で被爆負傷し時津の自宅で八月二十八日死亡。

野副、浜辺両看護婦は一階研究室で焼死。

肱黒看護婦は外来治療室で被爆、上半身に火傷を負い翌日皮膚科防空壕内で死亡す。

平山看護婦は一階廊下で即死。

川谷看護婦は寄宿舎に病臥中で爆死。

橋本、林、若松の三看護婦は外来で被爆し、橋本、林看護婦は北松今

福で一ヶ月後死亡。若松看護婦も死亡す。

間野、山田、一ノ瀬の各氏は研究室で被爆、崎田氏は一階廊下で被爆し上肢骨折す。

山田八重子氏は休暇中であつた。

他の看護婦は外来及び看護室で被爆し殆んどガラス破片創を受く。

死亡者の官職と氏名

官職	氏名
助手	中山善敏
副手補	黒木重徳
技工嘱託	町田信治
雇	中村ハルヱ
看護長	満島ユリ
四年〃	野副クミ
〃	肱黒サヱ
二年〃	橋本ユキノ
〃	浜辺ヨシ
〃	林末子
〃	平山タヅ子
〃	川谷ミケ
〃	若松嘉子

原爆・敗戦の年のこと

北村包彦

あれから十年経つた今、原爆落下のもとから傷つき逃れた日のことを回想すると、一生決して忘れないだろうとその時は思つた事の始終にも、ところどころ記憶の空白を生じている。その上断片的な、感覚的、瞬間的なことがまざまざと思い出される半面、複雑な事件のあとさきの経緯と云つたことはかなり曖昧になつている。

原爆の落下、それはあの灼きつくように暑い日の午近くだつた。急に起つた騒然とした空気の動揺、一種の金属音と窓外を走つた閃光。それからどの位の時間が経過したか、気が附くと濛々と立ちこめた烟の底にうつ伏しになつていた。肘を立て、頭を垂れ、その頭から血が流れ出て眼の縁へまつわるのをぼんやり意識しながら、いつまでもそうしていた。

大学の裏山の甘藷畑が爆風で土が掘りかえされ、蔓が切れ、葉が飛び散つている中に、野良着の女の人が仆れていた。この時空は曇つていた。浦上の天主堂の煉瓦作りの堂塔が焼け落ち、大きな炭の焔のように紅く輝やいていた。急に大粒の雨が落ちてきたが、間もなく止むと雲が切れ、また暑い日射しになつた。人が山の段々畑に点々とし、ノロノロと動いていた。

調教授の坊ちやんが二人も歿くなつた。上の坊ちやんが三菱の工場で背中を火傷して、同教授の世話で間借りした疎開先の近くの滑石の家へ

帰って来られた。すぐに診てあげたが一週間後に歿くなられた。それから何日かしてしめつぽい杉木立の中の滑石大神宮の拝殿へ、負傷した角尾学長と山根教授とが運ばれて来、妻に手を引かれて見舞に行つた。その時滑石の山懐ろを出外れたところの精米所で、ソ連の参戦と書いた新聞の記事を読んだ。重傷の山根教授は間もなく歿くなつたが苦しさうだつた。角尾学長の歿くなつたのはそのあと、たしか二十二日で、この時はもう戦争は終つていた。東久邇内閣の文相に前田多門氏がなつた。学長はその人を識つていると云い、これから文教はどう変つてゆくだろうなど云われた。間もなく高熱が続くようになり、見舞に来られた古屋野教授も次第に気づかわれるようになつた。古屋野教授は額を少し怪我されたゞけだが、全身的には疲労が強かつたようで、併しそれを押して、その上令閨を失われた悲しみによく堪えておられた。誰もその家族でなければその友を失つていた。その人たちは原爆落下の瞬間に原素に還り、それでなければ散り散りの場所で多くはひとり苦しんで死んでいつた。このことはその人々との繋りがあの一瞬にバツサリうち切られたように感じさせ、この感じは今に続いている。

原爆のあと数日して終戦になつた。どうもそうらしいと云う噂を疎開先の老主人がどこからか聞いてきた。暑いが暮れかけた時刻で、暗くなつてゆく庭先を見ながら汪然と湧いてくる悲哀に浸つていた。電気はあれ以来来ず、ラジオも聞えない闇の中にいつまでもぼんやりしていた。

額や瞼にはいつたガラスの破片を一ノ瀬博士に除いて貰つたが、そのうち毎日微熱が出るようになり、鏡で見ると軟口蓋に小出血斑が一つ二つ出来てきた。もうその頃には原爆症のことがだんだん判つてきた。九大の救護班に血液を検らべてもらつたら、白血球は併しあまり減つていなかつた。

長崎の町に白服のアメリカ水兵が氾濫したのは何日頃だつたろう。その連中はジープや大型車に分乗して爆心地帯を見物に行つた。大学の汽缶場の煙突が一本曲つたまゝで聳え、山王神社の石の鳥居が一本脚になつて立つていた。

少し元気になつたが、右上眼瞼の縦の裂傷の延長が角膜をも損傷したらしく、ものが霞んで見えた。それを診ていただきに、浅沼前教授のお宅へ上つた。それから少しして調教授と私とが、学生と一緒に大村の海軍病院へ休養がてら行くように云われ、行つてみると原爆患者の調査にアメリカの軍医団が来ていて、東京から外科の都築教授や、病理の三宅助教授が同行されていた。都築教授から聞いて東大の皮膚科の太田正雄教授が歿くなつたことを知つた。

いつまでも秋晴れの日が続き、コスモスの咲き乱れた丘の上の病舎の一部が大学の教室になつて、不完全な講義が少しづゝ始まつた。戦後急速度で活潑になつていつたアメリカ医学への接触が、こゝでは軍医連との接触から出発した。大村でお世話になつた泰山院長にはいま東京で時々お目にかゝるが、アメリカの雑誌へ送られた、長い英文長崎原爆始末記の原稿を最近見せて頂いた。

新興善小学校が市内での大学校舎になり、大村とバスで連絡するようになって、私は調教授と連れだっては、疎開のまま居着いた滑石から大村へ、又長崎へと通った。長い秋が漸く冬となり、新興善小学校の硝子の割れた校舎を風が吹き抜け、その中で私たちは冷たい弁当を使つた。

まだそうなる前に教室員のうち台湾出身の蘇君、楊君などが国へ帰り、入れ換えに荒木助教授などがボツボツ復員して来た。学生への講義はどうかこうか続けられたが、物資不足は日一日と深刻になり、生活は愈々苦しくなって来た。併し明けて昭和二十一年元旦、新興善小学校の臨時の講堂で、一同古屋野学長の訓辞を聴いた時は何か心あらたまる思いがした。

あれから十年の月日が流れた。今年格別の大暑は東京にあつて長崎の灼きつくようだつたあの日を思い出させる。永遠に訣れ去つた人々の安らかな眠りと長崎大学の繁栄を祈つてやまない。

（三〇、八、六）

原爆記念日におもう

土橋房子

今日も又あの日のようにちぎれ雲が飛んでいる。

涙と憤りの中に十年の歳月は流れ去つたがあの日の惨状は恐らく私達のいのちのある限り脳裡から消え去る事はあるまい。

昭和二十年日毎夜毎敵機の来襲は烈しさを加え、緊張した空気の中に私達は、ひたすら必勝を信じながら日夜病む人の看護に当つていた。

天井板を利用して重要書類や物品の疎開準備し、患者の待避訓練や防空演習を行つた。又敵機来襲の下で手術を行い、ローソクの光で重症患者の治療を続けることもあつた。しかし部長先生初め、諸先生婦長さん方の温い慈愛に包まれ、苦しい中にも張り切つた日々を送つていた。此の頃庭を耕して作つた菜園にお芋や野菜がみのり、皆で喜んだ日も思い出の一つである。そして八月一日遂に私達の病院も初めて爆弾の洗礼を受けた。

此の時は地下に避難した為何事もなく、崩れ落ちた外科や婦人科の建物に無念の涙をのみながらもほつと自分達の無事を喜び合つたものだつたが…

八月九日運命の日はやつて来た。此の日も早くから待避命令が出された。八月一日以後は病院でも特に患者をいち早く安全な屋外で待避させていたが間もなく解除になつたので直ちに病院に帰し皆それ〴〵の仕事についた。そして心の平静を取りもどした頃、突然強烈な熱さを感じ、はつとして振り向いた。一瞬、閃光に目がくらんだ。とつさに爆弾かしら?もう駄目だのがれる事は出来まいと思つた。そのまゝ意識を失つてしまつたらしい。

どの位経つたか「苦しい、先生苦しい」と云う声にふと我にもどつた。病院より小高く続く畑の中を中山先生の白衣の裾にすがり林さん（看護婦）と二人よろめきながら歩いている自分を発見した。しかし一足毎に力が抜けて行く。ともすれば其の場にすわり込みそうである。「元気を出せ此処では危いもう少し上迄登るんだ」と先生はしきりに励まして下さつたが、とう〳〵手を離し、つかれた体を其のまゝ畑になげ出した。

眼下の街々は火の海である。熱風と煙にまかれ苦しさは益々つのる。

それに激しい嘔気をおぼへ、息は苦しくなつて来てじつとしていられない、もうどうなつてもいゝ、私は畑の上にもだえ転げた。

病院も学校も街も、窓という窓からは火をふき、其の炎は天をこがしている。

真黒になつた空に太陽丈が真赤に無気味な色で西に傾いていた。其の恐しさに目を伏せておののいた。

大粒の雨が降つて来た。

何時の間に来たのか看護婦の竹谷さんが全裸のまゝで寒い〳〵とつぶやきながら身を震わせて立つている。私もはいていたはずの靴も何処で脱いだかない、足には大きな傷があつて血がベツとり流れている。幸にも予防衣を着ている事に気付き直ぐぬいで竹谷さんに与えた。ひつたくる様にしてとつた白衣を胸にかけ、倒れたり立つたりして苦しさにじつとしていられない様子だつたが、次第に気力も失せてだまりこんでしまつた。

私も又意識を失つていたが気がついた時は辺りはもう夜になつていて炎に浮び出される黒い影丈が右往左往していた。水をほしがる人、子をかばい救いを求める母親、親を探してさまよう子、友を呼ぶ者、声という声が死骸の谷にこだましている。

やがてそれら声も次第次第に細つていつた。一人二人と息絶えて行つたのだらうか、そして苦しみの一夜を明かした。真夏の太陽がぎら〳〵と照りつけて来た。

体を起して眺めて見る。何という有様だらう目に入る限り死体の山、地獄絵さながら、苦しさにもだえ死んだ人々が、眼も閉じず、髪を乱して死んでいる。内臓や目が飛び出している人、裸で全身火傷を負つて黒くなつている人、仰向けに倒れて大きく腫れて死んでいる人、しかしまだ虫の息で転んでいる人や最後のうめきを続けてる者もある。

共に生きのびた喜びも束の間、看護婦の竹谷さんも苦しみと戦つたいたましい姿で死んでいた。それにしても昨日迄の師であり、友であつた人達はどんなになつたのだろうか、早く会いたくてたまらないが、全身の激しい倦怠を感じ足がふらついてどうしても歩けない。然し私は這つてでもと其処からおりる決心をした。

畑のあぜにつかまりながら足を運ぶ。すると「助けて下さい、何処へ行くのですか、此処へ来て下さい」としきりに叫ぶ人が居る、ふと目をやると昨日迄は起居を共にした若い看護婦が変り果てた姿で放心した様にみつめている。

動く事さえ出来ない友が呼んでいる。苦しみに疲れた表情で眼の前に転んでいる。何かしてあげたい、側にいつてやりたいと思うが体が思う様に動かない、咽がかわいてしまつて声さえもよく出ない。どうにもして上げる事の出来ないのを悲しみながら縋る瞳を後にした。

こうしてあたりは動かなくなつた人と動けない人達ばかりである。水がほしくても与えてくれる人もない。元気な人はどん〳〵上へ登つて何処かへ行つてしまつた。

一番下の畠にさしかゝつた時、肱黒さんと会つた。「土橋君もやられたか、肱黒さんも其処にいるんですよ」と寝ていられた北村先生が耳鼻科の看護婦薄本さんと交した言葉が聞えたのか這ひながら近寄つて来たが余りの姿に声も出ない。大変な火傷で顔は真黒くなつて腫れ、目も口

も分らない。

後で防空壕へ担架で運ばれたが其の夕方「ガバツ」と身を起し其処においてあつた水をあほりながら息絶えた。

私は通りがゝりの人に助けられてグランド迄来た時、其処にたゝずんでいる人影を見つけた。姿は見る影もなく変つているがまごう事なく中山先生と五人の看護婦だつた。ようやく会えた私は思わず我を忘れて近寄つた。

一応病院に下りようと調理所の裏迄歩いた。此処には負傷者が次々に運ばれてひしめき合つている。其の入口に一人の学生さんらしい人が背中に火傷を受け息も絶え〳〵にもだえていた。

私も強心剤、鎮痛剤の注射を受け皆の集るのを待つた。

しばらくして満島婦長さんも来られた。放心した様な青ざめた顔、其の面に流れた幾筋かの血の跡、髪は乱れみる影もない。声をかけても気力が失せたのか苦しげな表情がかすかに動くばかり……平素婦長さんはお元気だつたが、此の頃は時々、胃痛を訴えられ休まれる事があつた。昨日外来に出ようと一階廊下におりられた時被爆されたと聞いている。

其の夜皮膚科の防空壕に移り、夜を明かした。明ければ八月十一日、敵機は尚も長崎上空を旋回しつゞけている。

私は其の日家に帰る事にした。杖を片手に父に支えられて、血液がこびりついた足を引きづりながら、かん〳〵照りつける太陽の下、異様な屍臭のたゞよう灰の街を歩いた。此の浦上一帯は爆心地に近かつた為、其の被害は筆舌につくしがたい。

火の手をさけて逃げ得なかつた人々が一塊の灰と化し、或はあちらに一つ、此処に二つ三つと転つて居る。昨日迄は家庭の主婦であり、幼い子供達の変り果てた姿でした。泣き叫ぶ我が子を抱いた母親が火が廻つて逃げ場を失い、もがきながら焼け死んだのであろうか、大きな灰の中に小さく抱かれた骨が道行く人の涙をそゝつている。

夕方ようやく家に辿りついた。

其の後次第に腹部は腫れを増し、食物や水分さえも摂る事が出来ない様になり、寝たきりの毎日が続いた。思う様に田舎では手当が出来ないので福田病院に入院した。初めは一進一退して居た病状も、九月半ば頃より快方に向い、十月の初めには退院の許可も出る程になつた。此処の病院でも手厚い看護を受けながらも、出血、下痢、倦怠等の症状が現われ一人死に二人減りして毎日不安であつた。

十月に入るともう柿も色づき秋も深い。こうした或る日部長先生からお便りを戴いた。思いもかけない先生のお便りを手にして、懐しさと、感激に握りしめた書面を何回読み返したかわからない。

先生がお怪我の身をおいといなく病院のためにお励み下さつている事を知つてからはまだ栄養もよく摂れず、健康恢復には日がかゝりそうだつたが、一日も早く病院へ帰りたい気持にかられ、準備をした。

ようやく尋ねた玄関に入り生き残つた友達と頬を合せて再会の喜びに暫らくは言葉も出ず、たゞお互にみつめるばかり……。

一瞬にして病院は廃墟と化し、多くの師や友を失つた。今はもう中山先生の何時も聞いたあの声も、婦長さんのやさしい笑いもそしてなつかしい顔もなく、ほがらかだつた肱黒さん、肥つて何時もにこ〳〵顔の野副さん、一年数ケ月で原爆の犠牲となつた六人のクラスメート、教室補

助の中村さん、ぽつりぽつりとユーモアをもらされたムラージュ技工の町田さんの姿もなく気の抜ける様な教室に唯呆然とたゝづんだ。

然し悲しんでばかりもおれない。壊滅した教室は生き残つた私達の手でもう一度建てなおさなければならない。

此の十年の歩みは此の日に始まつた。

× × ×

十年後の今も尙、原爆生存者はたえず原爆症発病の不安にさらされている。

九死に一生を得た原子爆弾生存者の一人として、全世界の人々にそのおそろしさと罪の深さを伝え、此の世から戦争と原爆をなくし、真の平和を打ちたてるよう努力する事は我々に与えられた義務と感じる。原子野は今目覚ましく復興し、平和の鐘が一きわ高く鳴り渡る。めぐり来た原爆十周年を機にあの日の長崎の姿をもう一度みつめ、犠牲となられた方々のみたまよ安かれと祈りつゝペンを擱きます。

（皮膚科泌尿器科勤務）

眼科学教室

当時、医局員は次々と応召し、山根浩教授の外、林合成、楊友香、両助手のみであつた。教室外勤務として中島、崎元、森路の各先生が居た。看護婦は内田婦長の下に十五名居り、その他に近河カズ子研究補助溝口アサノ傭人、前田五十鈴小使が居た。

被爆時の狀況

山根教授は眼科二階便所で被爆、ガラスの破片等で頸面、大腿部を夥しく負傷し、その後市外滑石にて治療中破傷風の冒すところとなり十五日死亡。

林、楊両先生は不在？

他の教室員も病棟で被爆。溝口、前田両氏と、内田婦長以下看護婦五名の死亡者を出した。

入院患者は大部分帰し、残留者は僅かで即死者もあつた。

故山根浩教授の略歴

正四位勲四等医学博士、眼科学教授

明治二十八年三月二十五日島根県に生る
大正十年七月京都帝国大学医学部を卒業す
大正十一年九月京都帝国大学助手に任ぜらる
昭和三年一月京都帝国大学助教授に任ぜらる
昭和六年三月長崎医科大学助教授に任ぜらる
昭和十一年十一月眼科学研究の為、欧米に留学、翌年十月帰朝す
昭和十七年三月長崎医科大学教授に任ぜらる
昭和十七年六月陞敍高等官二等
昭和二十年八月九日大学に於て原子爆弾に遭い十五日鬼籍に入り転に殉ず

主なる研究題目

トラコーマ性パンヌスに関する二三の臨床的並に顕微鏡的観察

死亡者の官職並に氏名

官職	氏名
教授	山根浩
傭人	溝口アサノ
小使	前田五十鈴
看護長	内田敏子
四年	小崎タケノ
〃	松本幸子
三年	西下美代
〃	山口ヒロ

父の思い出

山根孝夫

十年前の八月九日、父は朝の講義を了えて教授室へ帰り、眼科教室二階西側の便所へ行つていた時に丁度原爆が落ちたのです。全身にガラスの破片をうけ、そのまゝ地下防空壕に一夜をあかし、翌日も空襲が続くし病院の大半が壊れたので近くの防空壕へ避難していた。この頃は父もかなり元気で、故永井教授に「元気をだせ」など云つていたそうです。

その後どんなにして滑石の大神宮へ運ばれたのか、詳しくは知りませんが、角尾学長等と一緒にこゝで調教授の御介抱をうけたが、八月十四日になり病状急変し、破傷風の症状を起して死亡したと伝え聞いて居ります。

生前酒が好きであつたので、愈々望みなしとわかつてから、アルコールを口へ入れたが、もう咽喉を通らなかつたそうです。

原爆当時家族は誰も長崎に居らず父は同郷の永井教授の家に下宿して居りましたので、長崎に新型爆弾が落ちた事以外知る由もなく、新聞の報道も「損害軽微なり」という程度でしたが、三、四日すると故郷の方より医大へ行つていた学生等が帰つて来て、幾分長崎の様子も判つて来ました。しかし父は少し傷をうけていたが元気の様でしたと云う知らせなので、そんな心配もせずにいたそうです。廿日になり突然、長崎で近所に住んで居られた宮田さんが、父の遺骨をもつてこられたので田舎の家では一同驚いて始めて父の死を知つた次第です。幸にしてあの多くの死亡者と混乱の中に父の死体を焼き、はるばる島根の片田舎まで遺骨を届けて下さつた宮田氏に感謝し、遺骨は田舎の墓地に埋葬する事が出来ました。

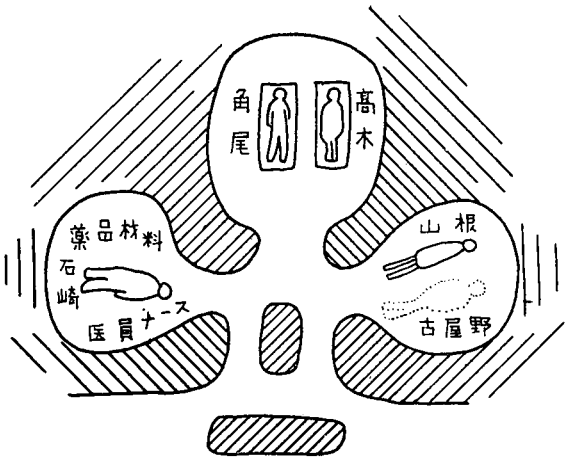
八月廿一日自宅で告別式を行いましたが、その日の朝小生は江田島より復員し、父の死も知らずに出雲今市駅へ着いて村へ帰るバスを待つて居りますと、車掌が「お宅は気の毒でした」と挨拶するので、「誰か死にましたか」と聞いて始めて父の死を知り、急に自転車を借りてやつと葬式に間に合う様に帰りました。終戦当時の混乱の時葬式に間に合つただけでせめてもの幸と思つております。

山根浩教授

古屋野記

あらゝぎ派の歌人山根浩教授は、日本眼科学全書の硝子体疾患を担当して戦前からいそがしくしていたが、漸く脱稿したところで、今度は教室員が応召で手落となり、益々いそがしくして居られた。戦争のひどくなる頃家族を郷里島根に疎開させて、保野正之助教授（病理）と共に同郷の永井助教授の宅から通つて居つた。保野君は多少健康を害していたので、原爆当日は永井邸の二階に臥せていて爆死された。

山根教授は眼科病室の便所に居て遭難され、顔面部、大腿部などに可成強い割創裂傷などを負つていられた。九日の夜は精神科下の壕中で過し、翌十日角尾、高木君等と共に外科教室の横穴防空壕に收容した。角尾、高木両君は手術用のベツトがあつたのにねせたが、山根君はあとで着いたので渡廊下用の簀子板を土間に敷き、その上に横たわらせた。何分にも未だ空襲の可能性があるので外には置けない。私もその夜は山根君と枕をならべて寝た。せま苦しいが動くと山根君が痛たがるので、身動きも勝手に出来ない。山根君の創も手当したかつたが、道具も材料もないので赤チンキの塗布に被覆繃帯が関の山であつた。その晩は時々うめくと〝痛いか〟〝水をやろうか〟と聞く位で、お互に格別の話はしなかつた。翌々日は三菱の救護班に懇請して角尾、山根両君を調教授の疎開さきである五キロばかり隔つた滑石郷の岩屋クラブに、次いで又郷社の拝殿に移した。この辺は調教授が受持たれて、角尾君と共に傷の手当



外科防空壕(横穴)

も比較的行届いたのであるが、十四日急激な破傷風を発し血清も角尾君からもらつて注射され出来る丈けのことはされた。何しろ拝殿のことだから早朝参詣人が叩く太鼓の音で痙攣を起すという悲惨眼もあてられぬ状況の下に、家族も教室員も居らぬが調教授等に看護られて八月十五日逝かれた。

たゞ御家族は無事であり、御長男は本年長大医学部を卒業されたので御安心であろう。

山根先生の回想

村田晨六

学生時代から高校の後輩と云うことだけで、親しくしていただいた。四年で臨床を廻るのに三鬼門があつた。曰く、平井小児科、婦人科清水、それに一枚林と眼科が加わつていた。それでも隔日に山根先生の診察があつたので、一同骨抜が出来、時折は閑話を拝聴出来る楽もあつた。教授になられてからは仲々ヤカマシ屋になられたとか。

いつぞや皮膚科北村先生と新京に見えたことがある。さる割烹店での歓迎会の写真は、今も手元に有るが、北村先生のビール会社のポスターの様な笑顔と、山根先生の長顔の微苦笑の対比は、見る人の口を綻ばせずにはおかない。在新京で一番若いと云うことで、翌日の下情調査は小生に任かされたが、よき時代に欧洲を廻られた先生には面白い事も無かつたろうと思う。小さなアルメニヤかモデルンかで夕食は取り、処々を歩いたが、杯の数は五対一、勿論五は先生である。最後がカフェーになる頃は十対一、遂に十対零となつた。机にもたれて大鼾の小生をゆりおこされ、自動車でなく頭車(マーチョ)で故人の永山寛さんの家へ引きあげたが、そこいらで一寸お茶でも飲んで来たと云う位の頻付であつた。今もリン〳〵とマーチョの鈴の音が聴えるようだ。

岡山の学会の折、教室で十日位遊んでいたが、その頃もう酒は手に入りにくかつたが、これも故人の後藤純孝先生の結婚の為の特配酒と云うことで二本入手し、それで福盛で盛大な(?)歓迎会を催して下さつたが、之が先生と最後の一杯となつてしまつた。

戦も我に不利、酒も同様の状態との内地の情報に、帰崎の垣山先輩に届けてもらつた特大瓶のジンギスカンウイスキー、極めて先生らしくない丁重な礼状をいただいたのは、昭和十九年の秋も深まつた頃だつた。

帰国後浅沼武夫先生から原爆の様子並に先生の最後の様子を知らされたが、酒が欲しいと一杯の酒を末期の水とされたとか、私は救われた気持になつた。

その後

小笠原長秋

人吉市の陸軍病院診療室で、広島通過の軍医から、広島落下傘爆弾直後の凄惨な有様を詳さに聞いて間もなく長崎被爆のニュースがはいつた。同僚の村岡忍軍医は、原子爆弾が、今度の戦争を左右すると、兼々話されていたが正しくその通りであつた。温厚真摯な平和主義者であり、有能な軍医であつた村岡先生（諫早市）の予言が、見事的中した訳である。

帰心矢の如く、九月初旬、愈々、四日の休暇を貰つて、長崎を訪れた。国友岳父の東陵中学の仮寓先を訪ねたところ、丁度、桜馬場の国房教授宅へ移転するところだつた。幸いに同時刻に、国友先生にと大村海軍病院長泰山少将が、救急車で、救援物資を運んで下さつたので、移転先へその車に同乗させて戴いた。翌朝電線に引つかゝり、瓦礫を踏み乍ら、浦上を訪れが、未だ電柱電線、木材散乱し、大学への坂道には、馬の死体すらころがつていた。くぐる様にして教室にはいつて行つたが、廊下を通ることもならず、茫然自失するばかりで、そのまゝ引返す外はなかつた。その夜、犠牲者の冥福を祈り乍ら人吉陸軍病院へと帰院した。

九月中旬、人吉陸軍病院を除隊になるや、急拠、長崎高商の長大本部を訪れたところ、影浦教授から現場責任者として、跡かたづけの仕事を依頼された。

幸いに、海軍より復員早々の、元気一杯の、高木聰一郎、森田哲郎、陣内久四郎君などの同志を得て、更に又、眼科教室研究補助員の近河カズ子さんや、看護婦諸嬢の応援を得て、第一に眼科教室の清掃にとりかゝつた。図書を死体安置室に、ついで長崎高商の一室を借りて、輸送保管した。当時毎日、歩いて浦上まで出かけ、昼食は畑の芋を看護婦さん達がふかして呉れたものだつた。後になつて、県庁交通課からトラックを出して貰う様になり、寝台やめぼしい器具を、新興善へ、新興善へと、幾往復した事だろう。当時の大学事務官から、表彰し度いと思つてもいるし、中食も大学から、何とか都合もするから兎に角、清掃作業を続けて欲しいとおだてられもしたが、一回、芋を御馳走になつただけと記憶する。

衛生教室で、大倉教授の遺体を発見したのも当時であり、又、或日のこと、進駐軍が、生化学教室の地下に分光器と共に顕微鏡が数十台あることを、教えてくれもした。我々のグループの通訳は、専ら Mr. Tall-tree こと、高木聰一郎君が当つた。ダイヤジン百錠瓶を米軍医から貰つて、得意満面たりし、当時の高木君を思い出す。生理教室の金庫を運んだり、或は、遺族立会のもとに、法医の金庫を破つたりしたが、

出て来たものは金指輪一個だけだつた。

進駐軍の肝入りで、慈恵病院が設立され、各町内からの徴用人夫がやつて来て、眼科の研究室の電気冷蔵庫や、皮膚科の遠心沈澱器、孵卵器などを運ぶのにも、手伝わざるを得なかつた。眼科清掃が一段落するや、清掃作業一ヶ月にして、十月中旬から、原因不明の熱病に罹り、三十八度五分前後の熱が、どうしても取れないので、止むなく帰郷せざるを得なかつた。

郷里で二週間許り就床の後、十一月初旬、再び長崎へやつて来た。

原爆地作業による、原爆症だと云う事は、ずつと後になつて分つた。

小生帰郷臥床中にも、高木君等の清掃は続き、新興善のベツトは殆んど全部彼等の手によつて運ばれたものである。

大学の大勢は大村海軍病院へ移つていたが、調院長先生が眼科主任代理となられ、小生一人新興善小学校での眼科診療に当つた。

十二月になつて、熊さんが、婦長として来られ、五島和夫君や大島桂君などの学生が、眼科診療の手伝をやつて呉れて大助かりだつた。四月になつて学生の成績表の提出を求められたのには閉口した。

当時大村病院の眼科担任者がなく、従つて小生に、再三勧告を受けたけれども、大学復興は浦上から、との一念で、どうしても、応じなかつたところ、そのうち後藤純孝先生が、川棚病院から帰られて、大村病院眼科を担当されることになつた。大村を捨てては、大学の復興はあり得ないと云うのが、当時の主流派の意見であり、森俊夫先生始め、我々新興善派と、意見は強く対立した。大村から、諫早へと、大学の復興が、道草を食つた事は、衆知の通りである。

さて廿年の暮には、山根教授の御令息が来られて、遺品としての図書を荷造りし、ついで、水産会社の専務――山根先生片眼白内障手術患者――の方の御好意により、箱を数個作つて戴いて、翌年（二十一年）六月頃までには、教授室内に疎開してあつた先生の図書全部を送りとゞけることが出来たのは幸であつた。

二十一年六月になつて、京城医専出身で、支那から、復員の嵩則雄君が、入局して来ましたので、愈々眼科診療室も活気を帯び、非常に有能・頑健な同君の手によつて、ペンキが塗られ、机が、或は本棚が組立てられ、兎も飼える様になつた。又二十一年三月末、台湾から引揚の義兄国友昇氏―現在日大医学部眼科教授―も、四月から七月東京赴任まで、小生の眼科手術を、手伝つてくれた。

同年十月、広瀬教授着任まで、凡そ一ヶ年、眼科教室を預つて大過なきを得たのは、一重に諸兄の御後援の賜だつたと深く感謝する次第である。

楊先生、林先生は長田の方へ疎開されたまゝ、帰台日時不明にして、遂に、面接の機を得る事が出来なかつたのは残念。

山根教授は被爆後手厚い治療を受けられたが、テタヌスのため道の尾で亡くなられ、土江助教授は、広島の原爆で陸軍病院応召中死亡された由。遥かに御冥福をお祈り致します。保険診療請求書提出を目前にひかえて粗雑な回顧に終つた事を御詫び致します。　合掌。

（三〇年九月二日記）

耳鼻科学教室

当時教室には長谷川高敏教授、江上薬剤男助教授、柴田精郎講師、前田豊助手、田中敏副手、林益松学部仮卒業生、技術雇北岡熊雄氏、雇の玉屋キクヱ氏、傭人の佐藤フサヱ、山口綾子の両氏、樫山タマノ看護長以下二十二名の看護婦が勤務中であつた。

被爆時の状況

長谷川教授は二階の便所で被爆し若干のガラス破片創を受け後、放射能症状起り約一年で回復する。

江上助教授は道尾滑石の自宅に、柴田講師は西上町に居て被爆を免る。

前田助手、樫山看護長は病室にいてガラス破片創を無数に受ける。

田中副手、林仮卒業生は大浦看護婦と共に外来患者室で被爆しガラス破片創多数。

北岡、佐藤、山口氏は教室内で被爆。玉屋氏は二階研究室(北側西端)で爆死。

中野、内野、倉橋、浜田の諸看護婦は数名の一年看護婦生徒(氏名不詳)と共に物療科との間の空地で材木の釘抜き作業中全員爆死す。

霜川看護婦は山里町の自宅で病気療養中爆死。橋川、長浜、峯、保家の諸看護婦も教室内で被爆死亡す。

死亡者の官職並に氏名

官職	氏名
雇	玉屋キクヱ
四年	中野キクノ
〃	霜川アサノ
〃	橋川ヤスノ
三年	内野和代
〃	倉橋マス子
〃	浜田ミユキ
〃	長浜イト
二年	峯ヨリ
〃	保家信江

原爆体験記

長谷川高敏

午後の講義の準備を終えて便所にたつた。そして、そこの入口の廊下で倒れていた。後でその場所に行つて見ると、天井から折れ曲つた太い鉄管がぶら下り、壁とそれとの間の狭い間隙に倒れていたのである。私のはつきり覚えているのは、何か落下物のグワーと轟き渡る音だけであ

る。そのほかには、朧気乍ら強い閃光が輝いた様にも思える。その時まだ便所内に居たので、風圧の為入口から廊下へ吹きとばされたらしい。そして意識を失つたものと思われる。気がついて自分の倒れているのを知つたが、眼が見えない。煙のため四辺が見えなかつたのではない。全く視覚のない無の世界なのである。深い悲しみと焦燥で、私は握りしめた拳を何度も何度も眼瞼にこすりつけた。じつとして居られない衝動にかられるが、動くことが出来ない。然し、幸い暫くすると、すつと一時に四辺が見え出した。煙が濛々と廊下に満ちているのである。それで直ぐ立ち上つて外へ逃れた。失明状態だつたのは強い光の刺戟の為であろうか。

爆風に吹きとばされて廊下の壁と落下した鉄管の間隙に倒れていたのであるが大きい傷はなかつた。ガラスの破片で背中に無数の小さい傷を受け、頭部と腕に一寸した裂傷を受けたほか、足を捻挫しただけである。しかし、熱線も受けたらしく、ズボンの大腿部に一糎直径程の焦げた孔が数個あり、そこの皮膚が赤黒くなつていた。これは浮腫も起さず潰瘍も造らずにすんだ。裂傷の方は化膿して中々癒らなかつたが、面白いことに、腕の裂傷の縁に二糎位の産毛が沢山生え出し、傷の治癒と共にこれも次第に無くなつて行つた。

被爆後私は極めて速かに消耗した。そして所謂「骨と皮」になつてしまつた。鏡に映る顔が、黒土に似て、乾燥し蒼黒いのに驚いた。暑い日が続くが、今迄と違つて汗がにじみ出ることなく皮膚が乾燥していたのである。しかし汗分泌障碍が常に認められたわけでなく、動くといつも発汗した。終戦前日の八月十四日から十日ばかり、当時角尾学長が静養されていた滑石村で私も静養することとなつたが、学長の容態が悪いと云う知らせで、数丁ばかり青田の路を急いだことがある。捻挫してふくれ上つた足に地下足袋をはき、びつこを引き乍らステツキを頼りに草いきれの路を進み、流れる汗をふいたものである。

被爆から半月余り後、微熱から八度少しの熱が出るようになつた。そして紫斑が現れて来た。これが出ると悪いと伝えられていたので、前膊、上膊、大腿とだんだん拡がつて行くのを、毎朝嫌な気で眺めていた。そして立ちくらみもし、頭が重く、胸苦しく、鬱陶しい気持ちであつた。その頃滑石から移つて天草高浜の江上君の生家で厄介になつていたが、母堂を始め手厚い看護を受けたので、これ等の症候も次第に消退して行つた。そして九月の中旬から下田温泉で保養することとなり、そこで気がついたのは血便である。便は黄色を失い蒼白色で、粘液と血液で被われている。これは相当長く一ヶ月以上も続いたであろうか。ここで十月の中旬迄滞在したが、漸く気分も晴れて、油画をかいたりした。

この間治療としては、江上君の所でヴキタミンBの注射を一週間程受け、化膿した傷をきれいにふいて貰つた。紫斑の出た頃同君や家内がしきりに輸血をすすめてくれたが私は応じなかつた。米国の調査団と一緒に仂いている人が輸血の効を放送していたので、当時の割り切れない正義心がそうさせたのであつた。私に一番効果があつたと思うのは、朝も昼も晩も沢山いただいた、あの天草の新鮮な魚肉である。

擱筆に当り、亡くなられた方々の冥福を祈り、大学の復興を願う次第である。

原爆の日

田中　敏

外来三階南面の旧患室、何人目かの患者を立つて治療していた。正面の窓が明るくなつたようであつた。一瞬、床にたゝきつけられていた。「ポカツ」と言う音を宙天に聞いたようにも思う。真暗で全く見えない、やられたと思い、僅かの間隙に伏せていた。生埋めになつたなと思つた。その内に、四角なものがかすかに見えて来たのに気付いた。次第にはつきりして来て、正面の窓だと分つた。それを目標に這い出た。周囲は薄暗いがどうにか見分けられる。「先生！」と叫んで、誰かがとびついて来た。顔には血が幾条も、ざんばら髪から流れていたが声で大浦看護婦と分つた。何やらどなつたが外に誰もいない。そろ〳〵と階段をおりて玄関より逃れ出た。建物も折れた立木も、灰色にくすんで見えた。車庫が燃えていた。大学の裏の岡に這い登る途中、道端に何人もうずくまつて、手を合わせて拝む人がいた。連れて逃げて呉れと言うのであつた。附近を見ると家は、木材の堆積になつて、未だその中に老人がいると言つていた。子供が一人見つからないがそれでも一人だけでせめてよかつたと言つて残つた子供を抱いている親もいた。これらの人々も、後日の放射能障碍のあらわれより見て、全部、死をまぬがれなかつた筈である。

私が家に帰つてからも頭の怪我や、打撲等を診てくれと言つて来た人々が、無事を喜び合つている中に、次々に死んでいつたのである。

岡の上でフラ〳〵している中に長谷川教授、前田助手と偶然おち合い、坐りこんだ。その頃病室の一角から火が出て来た。街の家々は大体その位置で、倒壊していたので遠目には全てが一様に整然と見えていた。その所々から、煙が出はじめ、やがて焔となり、次第に拡がつて行つた。始めから街全体が燃えあがつたわけではない。従つて瓦と材木の山に埋められて生きていた人が少なからずあり、この人達は生きながら焼かれていつたわけである。大学本部でも、倒壊の中から山木事務官が助けてくれと叫ぶのを聞いた人がいるそうである。そのまゝ大学本部は焼けてしまつた。

火と煙が浦上全野を覆う頃、真昼であるのに夕暮の様に暗く、太陽は赤かつた。雨が少し降つて来て、敵機が一機とんでいた。

とにかく山の向う側に行かねば危いと言う考えで、杖をついて漸く山越えした。長谷川先生は片淵町の御自宅、前田助手と私は西山の私の家にかえつた。その夜より熱発したが、翌々日、熱が下つたのでとりあえず、浦上に行つてみる事にした。天気のいゝ日であつた。一軒の家からピアノの音が響いていた。街中人気の殆んどない静寂の中に妙に調和して聞えた。

井樋ノ口を曲ると浦上の平野が一望にひらけてくる。それは熱風と赤い焼土と、焦げた死体との世界であつた。空気そのものに死臭があつた。山越えして逃げ帰る時見た木々はまだ折れた幹に僅に緑色の葉をつけていたが、今は山のいただきまで褐色に死している。

耳鼻科の病棟に行つて見た。風呂場や、手術室のタイル張りを残して、焼けていた。天井からパイプがたれ下つていた。廊下の中央にそのパイプの下敷になつて浜田看護婦が死んでいた。パイプはおそらく被爆の瞬

間おちたものであろう。パイプをとりのけるのにかなりの力が要つた。大部屋の入院室には野中君の遺体があつた。大柄の人でほとんど焼けていたがすぐ分つた。室全体が焼けている。病棟西端に近く、根元から折れた大木のあたりに内野看護婦と倉橋看護婦が倒れていた。両君は焼けてはいなかつた。それだけに炎天の下に、反つて、哀れである。この三君はその後焼けのこり破片を組んで荼毘にふした。

内科との間に、旧物療科の建物を解いた木材がつみかさねてあつたが、全部焼けおちて平たくなつていた。こゝにも何人かの死体があつた様である。

美しい花壇も見る影もなかつた。ほんとうに一瞬にして変つてしまつていた。何もなすことなく、死者に合掌して、病棟を後にした。

（当時耳鼻科勤務）

精神科学教室

当時の医局員は高瀬清教授、松下兼知助教授、寺田文彦医学部仮卒業生、傭人伊藤三雄、倉田乙一両氏で外に有村シゲ子看護長以下十四名の看護婦が勤務していた。

被爆時の状況

高瀬教授は鹿島へ出張中で被爆をまぬがる。松下助教授は精神科助教授室、寺田先生は病室で被爆。伊藤、倉田の両氏も教室で被爆死亡す。他の看護婦は病棟で被爆し六名死亡。

松下助教授は裏山に避難後帰省療養す。

死亡者の官職並びに氏名

官職	氏名
学部仮卒	寺田文彦
傭人	伊藤三雄
〃	倉田乙一
看護長嘱託	有村シゲ子
四年	浜崎ルリ子
三年	岩崎松子
〃	竹谷良子
二年	磯田千代子
〃	井戸洋子

原爆と精神科教室

松下兼知

昭和廿年八月八日午前十一時過ぎ飛行雲をなびかして、浦上の上空を旋回する超スピードの敵機一機があつた。アレアレと見てゐる内に飛行雲は円形の中に十字を描いて投爆する事もなくそのまゝ消え去つた。解剖の故高木教授は空をそりくりかえつて見上げながら「奇態な飛行機だな」とニコツと笑つておられた。十二時には大詔奉戴式が行われ、故角尾学長の訓示の中に「地上に落ちない空中で爆発する新型爆弾が広島に落ちて、広島全市は焼失し、自分達は四里近い道を歩いて、汽車に乗りやつと帰つて来た」とあつた。法医の故国房教授はその話を聞いて、日本の運命は間近に迫つたとしみじみと語られたがその声は今尚耳にのこつている。思えば運命の皮肉は既に我々の足元迄きていた。

その翌九日、私は報国団本部の企劃班長をしていたので早朝大学本部に集り、色々と防護の打合わせをし、配属将校や故福田助教授達と敗戦の間近さを話し、敵陸上部隊が野母半島から上陸するか、矢上方面から上陸してくるかその場合を想定し、私共の取るべき作戦を練つていた。然し何一つ名案は浮ばない。只横穴や防空壕にかくれて日本刀で敵兵と相殺の外ないと幼稚な作戦に終るのみであつた。大学防衛、只私共の念頭にはそれ以外には何等の構想もなかつたのである。

運命の神は私を精神科教室へ呼び戻した。午前十時五十分頃であつたろうか、外来患者が一名診療に見えておりますと電話がかゝつて来た。明日ともしれぬ日にと異様な感がしたが、私は鉄かぶと巻脚絆のまゝ病院に駈け下り、精神科助教授室にはいつたのである。鉄かぶとをぬぎ、白い手術衣を着ようとした時である。「ガラガラガラガラガラ……」と奇妙な音が十数秒以上も続いたであろうか。一時耳をすました。北側の窓である。爆弾が自分の足元に落ちつゝあるのであろう。どうしよう。しばらく助教授室を右往左往した。北側上空に星光様の閃光がひらめいた。途端にグワラグワラと土壁が落ちてきた。これは全く瞬間の出来事である。ハテナー自分には意識がある。生きているのであろうか。このまゝ死ぬ瞬間なのだろうか。考える余裕があつた。時間が経つ。アゝ自分は救われたのだと直感した。爆弾の破片が死角をはづれ、死角の外に自分の位置があつたのだろうと直感した。

頭からタラタラと冷たいものが頬に流れてきた、手でぬぐつた。血らしい。眼を見開いて見た。粒の太い灰が室内に、立ちこもつている。眼が見えない、アツ自分は両眼ともやられた。しばらくして東側にうす明るい空間が見えてきた。教室の花壇が見える。アツ眼が見えた。まだその時は全身は土壁や板や、洋服タンスの下にあつた。ガス水道のパイプにふれた。床下におちていたのである。力を出してはい出す事が出来た。狭い廊下から、イタイ、イタイとうめき声が聞えてくる。一人の看護婦が先生大丈夫ですかと駈けてきた。背がいたい、鮮血である。ゲートルをぬいで全身をまいた。

瞬間私の頭には、大学本部の御真影が気になつた。守るのは私の任務であつた。

教室をふり捨てゝ外に出た。道は壊われてない。崖をすべり下りた。

大学学生二、三名小児科と門衛の間でブルブルふるえながら、痛い痛いと飛び回つている。小児科の婦長にあつた。白い手術衣まゝで右往左往していた。

大学裏門を出た。あたりには家はない。何処が何処やらさつぱり分らない。右寄りに土手を登つて、雨天体操場の上に出た。あたりには全く家はない。人もいない、家は積木の様に柱だけ重なつてゐる。見る見る内に、ポツポツとあちこちからマツチで火をつけないのに自然発火して、燃え初めてきた。医専の学生が走つてきた。「元気を出せ」と私はどなつた。途端にドツと前方へすべりころんだ。口から白いものを吐いてそのまゝ息がたえた。御真影を安置してある壕にはいつた。深さ三、四間もあつた。そこには、数名の学生、事務職員が呻吟していた。

私はもうこれまでだと思つた。壕の裏山によぢ登つてみた。そこは元楠などの大木がはえて私共の憩の場所であつた。その大木は、放射線状に、東南方向に葉一つつけず倒れている。山を登つた十字架の墓場まできた。そこに初めて二、三十名の生命の助つた学内の人々が坐つていた。小児科の森講師もはち巻して坐つておられた。墓石は左右に飛んでいる。教務課の根元氏（？）がこゝを去りましようといつた。私は一心に山を登つた。小道に出た。私は途端に意識を失つたのである。

その後の事はしばらくよく分らない。誰れか私を呼ぶ声がする。目を開いた。北村包彦教授の足にひつかゝつたのであろうか。こゝを去るより外に道はない元気を出せといわれた。私は足をひきずりひきずりついて行つた。汽缶庫の吉村さんが私の肩をさゝえてくれた。喉が乾いて仕方がない。井戸の水を飲んだ。ギアツと吐いた。鉛糖水の様な味がした。茶褐色のこげた裸の男女が、ふくれあがつてのたうちまわつている。壕の中に父さんが生埋された助けてくれ―と少女の声が聞えてくる。

ドカンと爆弾がおちたのか、浦上教会の御堂が一瞬にして倒れた。濛塵が空一杯舞い上つた。ポツポツ小雨が降つてきた。途中に豚が死んでいる。

裸の多数の男女が呻吟している。敵機の爆音がブーンブーンと聞えてくる。私は又気力を失つた。その後の事はよく分らない。目がさめた私は道の尾の御寺の芝生の上に寝かされていた。

夜を明かした。翌朝道の尾から汽車にのせられて諫早に送られ、軍医の手当を受けて、島原鉄道で家族が疎開している島原へ運ばれた。

その後三週間チフス様の病状を呈し、徳先生、筬島助教授（当時）の治療を受けた。輸血二十三回、後で聞いたが白血球三千以下、鬼籍にいる一人と数えられていたとゆう。

頭髪はすつかり抜け手掌にも出血斑が出た。平（島原）の福田先生の毎日の注射、切開手術（ガラス破片を出した）を受けた。

病状に就いては委しく述べない。其の後私は二、三ケ年肝腫瘍の診断で医大に入院した。これは原爆によるものかどうか今だに疑問に思つている。

高瀬教授（当時鹿島方面に疎開されていた）から聞いた事だが、原爆当時教室には三十三名いて三名助つたと。医局に七、八名の医員。学生ポリクリ十三、四名、看護婦五、六名、附添人の伊藤、倉田両人も見舞にいつていた。中江講師、瀬川助手、田中、坂上、鏑木、曾、壱岐君は軍医予備員として既に召集を受けて不在であつた。

今私は大陽の田舎にあつて観音石像を立てゝ、死なれた故角尾学長初め職員、看護婦、大学学生、医専学生達の冥福を遥かに祈つている。

（三〇・五・一五）

物療科学教室

当時教室は内科と耳鼻科の間で木造建であつたので六月頃（昭和二十年）本館の二階と内科教室の地下の一室へ分散的に疎開。

永井助教授は部長として施副手補と共に、教育並びに診療に努めていた。

技術員として施景生、友清史郎、梅津純、小笹ハツエ、小笹トミヱ氏が居た。教室勤務の看護婦としては久松シソノ看護長以下十三名であつた。

被爆時の狀況

永井助教授は本館二階で受爆し、顔面に負傷、、施副手補は元気な者と共に救出作業に当る。

被爆直後、行方不明の看護婦八名の内五名、山下、浜、井上、吉田、大柳嬢の遺体は十日運動場で発見さる。その夜生き残り教室員で御通夜を営む。雇小笹ハツヱ氏は当日休暇をとつて居て家野町の自宅で爆死す。その後教室員は永井助教授の下に医療班をつくり西浦上の三山で被爆者の治療に当り八月二十二日解散する。

故永井隆助教授略歴

従五位勲四等医学博士　物理的療法科教授

明治四十一年二月三日島根県に生る
昭和七年三月長崎医科大学卒業
昭和七年六月同大学助手に任ぜらる
昭和十四年四月同大学助教授に任ぜらる
昭和二十一年一月同大学教授に任ぜらる
昭和二十四年九月退官
昭和二十六年五月一日病のため卒す

主なる研究題目

尿石のレ線による微細構造に関する研究

死亡者の官職と氏名

官職	氏名
助教授	永井　隆
雇	小笹ハツヱ
四年	山下秀子
〃	浜　トモヱ
三年	井上ミツネ
二年	吉田キヨ子
〃	大柳ツヨ
一年	淵野フヂヱ
〃	谷口チズ子
〃	谷村セツ

原爆体験記

金子マサ子

悪夢の様なあの日より早や十周年を迎え思いもあらたに云い知れぬ感におそわれる。

物療科は耳鼻咽喉科と内科に挾まれた院内で最も古い意義ある木造の建物であつたが、燃ゆる可能性があるので急に疎開する事になり、病院本玄関の外来の一部、内科の地下室に分散して間もない頃であつた。

朝礼が済むと、お互いに手を振つて夫々の勤務場所に別れる。私は調外科のレントゲン室へと急ぐ。こゝは二階の手術室の廊下を隔てた向い側で、売店の前を通る大廊下を見下していた。

この頃は最早医局の先生も技術員も次々に出征され、戦場に赴く男子に変り女子が奮闘すべき秋が目の前に来ていた。

医員は山本、浜里両先生、技術員は広島、岸川、田中、皮膚科レントゲン室の鶴山、調外科レントゲン室の長沢の諸氏が出征され、永井部長先生、施先生が講義に透視に診断に又防空演習、救護訓練指導にと日夜努力されていた。

けたたましい空襲警報が解除になり、調外科の防空壕より皆外来の方に行かれたので森閑とした手術室を通り、レントゲン室にもどりほつと一息、部厚い防空頭巾をとり救急嚢を机におろし、真向いの大廊下に目を向けて腰を降した瞬間、通つている女の人が「あゝ」と異様に叫び手を宙に浮かしたと同時に、閃光一瞬、「ゴー」と物凄い音響と共に目の

前が真暗になり、天井、フイルム棚、撮影機と共に押し潰されて了つた様に感じた。暫くするとポーと明るくなつた。あゝ生きているらしい。目をそつとあけ恐る〳〵手で首から顔を撫でゝみると、血がべつとりにじみ出ている。

隣接の古屋野外科の手術室に一週間程前直撃弾が投下されて間もないので、今度は調外科と思つた。調部長先生始め皆如何していられるのだろう。そしてレントゲン科の人々は——。身動き出来ない、息が苦しい、じつと目をとじた。暫くすると、荒々しくどなつた様な叫び声がする。はつと目をあける。「誰れも居らんかあ—」あゝ救いに来て下さつたのだ！一刻も早く自分の存在を知らせようとしたが声が全く出ない。必死に体を動かしても駄目だ。上にぬけようにもいろんな物に挾まれて動けないのである。運を天にまかせて、そのまゝ空しく目をとじて了つた。後でお聞きした事だが、廊下を隔てた看護室で婦長の村山さんが下敷になつていられるとは知らなかつた。

やがて如何程の時を経たのだろう。「ゴー〳〵パチ〳〵」と燃ゆる音がする。早やあちこちの室内より火の手が廻つたらしい。やがて熱つぽいむせる様な異様な臭と煙がさあーつと流れこんでくる。まご〳〵出来ぬと焦り始めた。

それから如何してぬけでたのか記憶がないが、気がついてみると廊下に出ていた。しつかりむすんだズツクの靴が吹き飛んでない。モンペは引き裂れ、足には血が滴つている。とにかく戸外に逃れなくてはならぬ。無意識に散乱している手術室の下駄を片方つゝかけ、狭い階段を転げる様にして外に出たとたんに、頭を血に染められた木戸先生にぱつたり出逢つた。「あゝ先生御無事で」と云おうとするが言葉にならず、唯茫然とみつめていた。

目をてんずると、物凄い光景が繰り展げられていたのである。さながら阿修羅の如き叫び！火はごーと唸つて猛り狂い、かろうじて焔の中より逃れた人、人、人、着物ははぎとられて素裸のまゝ血だるまになつて、よろめき、つまづき、あえぎつゝ、山へ山へと登つている。髪は焼けちぎれ、皮膚はぺろりとはがされ、半焼の黒ん坊が突つ走つている。これは大変な事になつて了つた。とにかく一人でも多く救助せねばならぬ。片方の素足に男の編上靴を拾い、夢中で手をもぎとられた息絶え〳〵の学生を、高南病棟の裏山へと引つぱつて行つた。その学生は着いたとたんにくたりとなつて、しきりに私の名前を聞いていた。唯一言「院内の者です」と答えた。

それにしても未だ物療科の人々に逢わない。永井先生は？そして教室の人々は如何したのだろう。かろうじて逃れた人々の親を求める声、友を求める声を聞きつゝ、しきりに捜していると、既に山の上で救護に活躍して居られる永井先生のお元気な姿を発見した。久松婦長さん、橋本、椿山さん等と逢つて、口もきけずにすわりこむと、先生が「おゝ金子君よく生きとつたねえ、よかつた〳〵」と肩を叩いて下さつた。森内さん、皮膚科物療室の崎田さん、婦人科物療室の小笹富枝さんが見えぬ。私を捜しに行つた後だつた。崎田さんは大腿骨折で皮膚科の防空壕に運ばれ、施先生、友清さんは角尾先生を救出されていた。重傷の梅津さんは施景生さんがかゝえる様にして運んでこられた。併し未だ看護婦の浜、山下、吉田、井上、大柳さんが全然分らぬ。空襲のない間をみてこの頃すでに

広い運動場も各科の畑になつていて、その手入れに行つたらしい。三名の一年の看護婦生徒は見当もつかないのである。

時も大分過ぎた頃、夕立が「ざあー」とそこらにのがれて来た焼けたゞれた人々に容赦なく、降りつけた。水々と叫びつゞけていた人々の喜びも束の間、傷口にしみ、痛み、そして寒い〳〵とふるえだした。どうしてやつていゝのだろう。私達はかぶせてやる衣類もすでになくして居る。とつさに茎だけ残つた芋づるをとつてそつとのせた。

とにかく元気なものだけでも、救護隊を編成しなくてはならぬ。永井先生は、つと立上り、誰れかゞ病室より取出した「シーツ」に流れる血で日の丸を大きく染められ、これを竹竿にくゝりつけ高く〳〵押し立てると、元気なものも、傷ついた者も、息たえ〴〵のものも這う様にしてぞく〳〵集つて来た。こうして救護活動を始めたのである。

永井先生は急いで歩き出されたとたんに、バタツと卒倒された。耳の辺より血がふきだしている。私達はびつくりして了つてうろ〳〵した。施先生が慌しく機械をガチヤ〳〵動かして応急処置をして居られる内に、早くから医員、学生と共に活躍されておられた調先生がすぐ駈けつけて下さつた。

それから男子は板を拾い集めて仮小屋の救護所を造り、女子は岩水をやつとみつけて、そこらにころがつている南瓜を鉄兜でぐつ〳〵煮て、夕餉の仕度にとりかゝつた。煮えた南瓜を調先生方と御一緒に、皆食慾がないのを「今後も頑張ねばならぬのだから」と叱られ乍らボソ〳〵竹切れでつゝいた。咽が渇くので、拇指大の甘藷、胡瓜をガリ〳〵かじつた。誰れかゞ「こんな事と分つていたら、早くお弁当を食べとくのにあ惜しい事をした」としきりに残念がつたり、永井先生が「金子君のひよろ長か頸を見た時は嬉しかつたねえ」と仰言るので、意気銷沈していた皆がさみしく笑い、少し元気になつたが、帰らぬ看護婦さんの事を思い又しんみりなつた。

すると物療科と親しかつた薬学専門部の清木先生が大きな体に杖をつき、あえぎつゝ「助けてくれ」「学生が皆死にかけとる、助つたのは自分のみだ」と涙を流して来られる。全滅の基礎学教室より脱出なさつたとは全く夢の様で、まじ〳〵とみつめていた。

日もとつぷり暮れ、空は赤黒く無気味に輝いている。敵機は今もなお低く飛ぶ。人家は燃え尽きるのも知らぬ様に燃えている。

何処からともなくソ連の参戦を耳にした。この時ほど悲壮な気持におそわれた事はなかつた。いよ〳〵本土決戦である。今度私達が敗れた時は誰れが骨を拾つてくれるであろうか。即死された方々が羨しくもあつた。

永井先生、梅津さんは仮小屋にそのまゝ、施先生始め元気な者は清木先生をさゝえる様にして、途中皮膚科の防空壕に崎田さんを励し、薬学専門部の防空壕へと急ぎ移動した。

行つて見るとほとんど吹き飛ばされ、かすかに息ある者も目を宙に向け、目の前でバタ〳〵息絶えた。シャベル、ツルハシは土深くうづもれていた。私達はその夜は壕舎で死者も、傷者も肩をよせ合つて過した。ほとんどの人は家を焼かれ、肉身の安否さえ分らぬ。唯黙々として多くは語らず思いを馳せ、じつと目をとじた。

夜明けと共にこちらへ来られた永井先生等と学業半ばにしてたおれられた学生の人々を外に運び、土をもり木片に名前を標した。その頃から

子供の安否を気づかい、狂人の様に父兄がさがし求めて来られた。今日は如何しても看護婦さんを捜さねばならぬ。数多の死体がころがつている運動場にあちこち、さがしあぐねていると山下さん等が屍体となつて発見され、立ちすくんで了つた。あゝ何故畑に行つたのだろうか。かえらぬ事を悔み乍ら私達は、トタン板にそつとのせてあげ「苦しかつたでしようねえ」につぶやき、涙と共に細々と煙をあげ乍ら焼いた。

今日は軍方面からも救護隊が出動し活躍し始めた。食糧もおにぎりが病院の方に運ばれた。皆のを貰いに病院迄、多くの死体をよけながら道なき道を、火の手をくゞり、一時間近くもかゝつてのろ〳〵行つた。

こうしているうち数日間私をさがし求めた姉とぱつたり逢い、そのまゝ皆に別れを告げ、引きずられる様にして親戚の田舎につれて行かれ、幾日か夢うつゝのうちに過した。

夏草茂るグビロが丘に佇み、木々に囲まれた基礎学教室、物珍しかつた薬学専門部の薬草園も、今はたゞ寂として声なく虫のみすだく。

最後に亡き方々の御冥福と、愛する我が長崎医科大学の発展を心よりお祈りすると共に、再びこの悲惨を繰り返さぬ様永遠の平和を叫びます。

（当時　調外科物理的療法科室勤務）

原爆受難記

久松シソノ

戦局が苛烈になるにしたがい、敵機襲来も日増しに烈しくなつたその頃、教室員は次々と召されて、教室は永井部長先生、施先生、男子の技術員三名だけとなり、あとはすべて女子が各部署を守つていた。病院唯一の古い木造だつた私共の教室は、表玄関の二階と、内科教室の地下一階へ移転することになり、約二ケ月を費して、難工事とされていたレントゲン装置も完了して間もなくのことであつた。

運命の日八月九日!!、この日も平常通り一室に集つて朝礼を終え、勤務についた。私達は、絶えまなく報ずる無気味な警報に戦きながら、不安と焦躁の息づまる様な数時間の後、やがて解除のサイレンに胸をなでおろし大空を見上げた。真夏の太陽はカンカンと照りつけて蒸し暑い。私は鉄兜、頭巾、重ね着の袷衣のモンペ等を脱いで書類の整理にかゝつた。突然すさまじい閃光、瞬間、床に叩きつけられた。しきりに目を見張るが何も見えない。目をやられたなと思つた。椿山さんが、繰りかえし私の名を呼んでいるのがかすかに聞える。返事がしたい。だが咽喉がつまつて声が出ない。直撃弾にやられたのかしら、あゝ、これが最後なのか。床に腹這いになつたまゝ心臓に手を当てる。脈を触れてみる。皮膚をつねつてみる。生きてはいるらしい。やつぱり目がつぶれたのだ！生か死か判然としない不気味な状態の中にあつて、「溺者は藁をも摑む」おもいで、手を合せていた。やがて二、三分も経つたろうか。あたりが

少しづゝ明るくなつてきた。すると不思議な落着きを取戻した。傍には誰もいない。折り重なつて倒れかゝつた天井や棚や扉の中から、やつと抜けだした。立上つた瞬間水道が勢よく流出しているのが目についた。救われた思いで、蛇口にかじりついて、含嗽し、ジヤブジヤブ顔を洗つて、廊下へ飛び出した。横倒しにたゝきつけられた棚の中から、衛生材料、医療器具、カルテ等々、あたり一面に散乱して足の踏場もない。恐ろしい爆弾もあるものだ。履いていたズツクも抜けて見あたらない。たかぶる胸をおし静めながら、ゆがんだ鉄兜を拾つて頭にのせ、下駄と藁草履を、片々に履いて、身ごしらえをした。震える手で衛生材料をかき集め、何度も、何度も取り落しながら、力の脱けた腰にくゝりつけた。そこへ、「部長先生が生き埋めです、助けて、早く早く」と橋本さんが息せききつて走つて来た。変り果てた惨状に目を覆いながら二人はもつれるようにして、本館へとかけだした。何としたことであろう。内科の建物と、本館とを結ぶ木造の廊下は、跡かたもなく吹き飛んでしまつている。波打つ胸をおし静めながら、ひきかえし、高い薬局の塀をよぢのぼつて行つた。既に先生は鮮血に顔を染めながら、患者救出の指示をして居られた。私はみるみるうちに、裸の負傷者数人に取りすがられて、動きがとれなくなつた。男も女も、着物は乱雑に裂けて尾を引いて床にたれ下り、顔も、身体も真黒に汚れその上を、真赤な血液が筋を引いて流れる。婦人の髪は一本立に逆立つて、その形相といつたら人間とは思えない程である。「助けて、助けて。」しがみつく傷者をどうすることも出来ない。しかし火が廻らないうちに安全な場所へ運び出さなければならないのだ。一ケの担架を頼りに、椿山さんと二人で、無我夢中で表玄関迄、十数回通つた。まもなく、旧レントゲン教室の疎開跡の木材に火がついた。三、四人で、バケツに水を汲んで四、五回通い、消火につとめたが、どうすることも出来ず、とうとう中止してしまつた。

今思えば、全く苦笑せざるを得ない。

市内は逸早く、一面火の海と化した。異様な音をたてゝ、稲佐山から炎々と燃え拡がるさまは、もの凄く、身のすくむ程だつた。これから何処へ逃げようか。不安でたまらない。救出作業を終えた玄関前は傷者の山である。永井先生を先頭に、学生の堤、達木、長井さんも加わつて次々と教室員の元気な顔が現われる。「よかつた。よかつた。」皆しみじみ喜こび合つた。而し五人の看護婦、三人の看護婦生徒は一向に姿を見せない。梅津さんは重傷を負い、施さん等が助けて山へ避難した。永井先生は顔面に深い傷を負われ、ほとばしり出る鮮血に顔から軍服迄べつとりと気味悪く染つておられた。片手で顔の傷を抑えながら、「戦場だ、戦地よりひどいぞ、皆元気だせ、まごまごしていると焼け死ぬぞ。」と大声で叫ばれる。いよいよ偽装していた病院の建物にも火が廻つた。真新しいトランス、フイルム、管球、機械、等すさまじく燃え拡がる。私達教室員はむせび泣きながらも、先生の指示通り負傷者を助けながら、病院裏の芋畠へと向つた。素つ裸の傷者が道一面にのたうち廻つている。「寒い、寒い」と、いつてガツガツ震える者。水を求める者。無傷なのに気を失つて息絶える者。出血多量で忽ち冷く変り果てる者。放心状態で我が子の名を呼びながらうろつく者。即死した母親の胸にすがつて、おつぱいを探す生残りの無心な赤ん坊。舌をだらりと長く垂れてうづくまつて死んでいる者。腸が外へ飛び出ている者。あまりのむごたらしさ

に語る言葉を知らない。この溢れる傷者の中にあつて、男子も女子も着ている服を裂いて傷口に当て、ゲートル、風呂敷、タオル等、すべてを繃帯に用いたが、忽ち使い果してしまう。寒がる傷者に着せかける一物もない。みれば茎だけになつた芋ヅルをグルグル巻きつけている。

折から雨がぱらついた。どうなる事かと、空を仰げば、大陽は真赤になつて、今にも地上に落ちるかの不気味な感に襲われ、思わず身震いした。診察の最中に負傷された学長先生は、教室の友清さんに背負われてこの芋畠へ避難され気の毒な恰好で横たわつておられる。傍に前田婦長さんが、声をかけても無表情のまゝ、附添つて居られる。そこにかけつけた永井先生は、いきなり大声で叫ばれた。「学長先生は此処だ。大学本部は此処だ―、皆集れ。」「学生も職員も皆集れ―。」そして内科の大倉先生が病室の火焔の中から漸く拾つて来られたシーツに、傷者の血で日の丸を染め、学生の長井さんが不気味な空に高く振りかざした。一方指揮に当つて居られた永井先生は、出血多量で遂に畠の中で卒倒された。出血はなかなか止らない。幸い山で治療しておられた調教授に止血して頂いた。暫くして、幾分気を取りもどした先生は、よろめきながら立上つて、「さあ皆元気だせ、男子は負傷者を收容する小屋を造れ、女子は炊事係」と震える声で叫ばれる。皆夢中で立働いた。畠の隅に石を立てゝ竈を造り、かぶつていた鉄兜を集めてお鍋にし、そこらに転がつている南瓜、冬瓜を拾つて、死体が横たわつている溝の水を丹念にすくつて、それで煮た。煮える間ももどかしく、皆それぞれの手に盛つてほおばつた。畠のきゅうりをポリポリかじつた。朝たべたきりだ。あゝあの味は……。

生の南瓜をくりぬいて作つたおわんに南瓜の水煮を盛つて、学長先生にもおあげした。

浦上刑務所から危うく逃げ出したと語る、青い服のまゝの二、三の囚人が、うれしそうな笑を浮べて、私共の夕飯の座に加わつていたのも一入印象的だつた。

腹ごしらえが出来たので、男子の手で築かれた仮小屋に患者を收容しようと、皆が立上つた瞬間、「助けて呉れ―」と悲壮な叫び声が聞えてくる。薬専の清木先生が、大きな棒にすがりながら、気の毒な恰好で、喘ぎ、喘ぎ、近づいて来られ、いきなり永井先生に助けを求めておられる。学生と共に防空壕を掘つて居られたところをやられたとのことで、学生は全滅に近いらしい。私達は防空壕へ引返される清木先生の後へ続いた。「今度は山へ爆弾が落ちるぞ。」皆口々に云い、又思い込んでいたので、動き廻るのが何となく怖い。真暗い中を、爆音の度に胆をつぶしては腹這いになつた。途中死体につまづいては倒れ、或は死にもの狂いで助けを求める傷者に足をさらわれたり、求められるまゝに、手さぐりで負傷者を看たりしながらやつと壕へ辿り着いた。掘りかけの横穴壕の入口は想像も及ばぬ惨状を呈していた。全身火傷と云うよりも、黒焦げの学生さん達が、数体の死体の傍で、あらん限りの力を振り搾つて、ころげ廻つているのです。全く手の施しようもありません。そして息も絶え絶えに、友の名を呼び交しておりました。「オーイ、岡本君―、大丈夫か―。」「オーイ、頑張れよ―。」「オーイ。」遂には一人絶え、二人絶え、忽ち不気味な沈黙と化したあのむごたらしい光景は……。今も生々しく脳裡に刻みこまれております。変り果てた死体に、曲つたスコップで次々に土

をかぶせ、互に呼び合つていた名前を頼りに木片で墓標を立てる作業を日沒迄繰り返した。その夜は、まんじりともせず負傷者と共に壕の中で明した。

翌十日。今日は、どんなことがあつても行方不明の看護婦を探し出さなければならない。皆夜のあけるのを待ち兼ねるようにして、壕を飛び出した。敵機が落したのであろうか、一枚のビラが落ちていたので拾つて見たが、この時初めて恐ろしい原爆であることを知つた。不吉な予感に襲われながらも、「どうか生きて居てくれるように」と祈り続けていたが、その甲斐もなく、山下、浜、井上、大柳、吉田の五名は、運動場で即死していた。素つ裸で、顔も身体も、ぱんぱんに膨脹し、泥にまみれた皮膚は紫色にウツ血して、皆目見わけがつかない。幸い、首のまわりに残つた僅かばかりの上着の柄で見分けることができた。

敵機の爆音はあとを絶たない。今度一発落ちれば全滅である。こゝ迄生きのびたからにはどんな事があつても、遺骨だけは遺族へお届けしなければ申し訳けない。途方にくれながらも励まし合つて皆立上つた。そして、五体別々にして、散らばる木切れ、藁を集めて積み重ね、震える手で私は死体に火をつけた。何としたことか。危うく失心しそうになる自分にむかつて、「戦いだ、戦争だ」と何度も何度も言い聞かせたが、溢れ出る涙をどうすることも出来ない。お骨を拾つて氏名をつけ非常袋に納めて肩にかけた。「どんなことがあつても決して手離してはならない」と強く誓つた。その夜は生き残りの教室員が壕の中に集つて、お骨を肩に掛けたまゝ、お通夜をした。そして悲しい一夜が明け不気味な朝が来た。やがて待ちに待つた遺族の方々が、我が子の安否を気づかつて尋ねて来られた。運命とはいえ、自分だけ生き残つて、亡き友の遺骨を遺族へ渡すことは、全く耐えられない気持だつた。しかし兎に角念願が叶い遺骨を渡すことが出来て肩の荷を下した。

今まで世話をして来た負傷者は本館の救護所へ送り、永井先生を隊長とする教室員十名（内学生三名）の医療班は、西浦上、三山で治療を始めることになつた。見渡す限り焼野原と化したその中に、被害をまぬがれた家族が涙ながらに死体を焼いている。うだるような暑気の中にその異常な臭気、足の踏み場もなく転がつている死体。やゝもすれば倒れそうな我が身にむち打ちつゝ、名ばかりの医療品を入れた買物籠をさげて出発した。

途中上野町の永井先生宅へ立ち寄つた。皆で案じていた夫人は台所の傍で焼け死んでおられた。と申すより生きながら火葬されていた。真黒く焼けたゞれた土の上に、ひざまづいた恰好で、骨だけが黄色く転がつていた。「やつぱり僕の直感通りだつた」と低くつぶやいた先生は、一人で黒焦げのバケツにお骨を一つづゝ丁寧に拾つて入れられた。どんなにか夫人の安否を気遣つて居られた事でしように。今日迄、只管、負傷者の救護に当られた先生。私達が夫人の安否を気遣つて口に出しても、「あれはきつと死んでますよ。生きていれば、どんな困難を冒してもきつと僕を探しにくる筈です」と答えられるだけであつた。無気味な爆音は絶え間なく続いている。山の中に隠れ、岩蔭に身を伏せつゝ、目的地に向つて進む。安全な地を求めて逃げのび途中力尽きて息絶えている者、苦しみもがいている者、惨状後を絶たず、治療しながら漸く三山へ辿り着いた。爆心地を遠く離れた小川の水はさすがにすみきつている。埃だら

けの身体、血に染つたぼろぼろの衣服を洗い、初めて生きている事の喜びを味う。久し振りに畳の上で自由に手足を伸ばして皆死人のように眠つた。すつかり元気を取戻した一行は（といつてもとても身体がだるい）着のみ着のまゝの姿で永井先生の子供さんの宿を本部に日夜をわかたず巡回治療を始めた。安全地を求めて避難してくる負傷者は次第に増加してゆく。而し、薬も衛生材料も思うにまかせず、応急処置しか出来ない。悪臭漂う深い傷。全身にガラスの破片がつきさゝつている者。全身の火傷が化膿した痛ましい姿。火傷した患者が苦しさのあまり、田の中に飛び込み、体中に泥を塗りつけて、その苦しみから一時的にでも逃れようとするさまは、痛ましくも悲しい姿である。無傷だつた被爆者が、日が経つにつれて、出血、脱毛、倦怠、下痢等の症状が現れ、水さえも飲むことが出来ず、「なぜ私達だけがこんなに苦しまなければならないのだろうか」と、苦しみもだえて死んでゆく。その死を見守りながら、原爆が如何に残酷なものであるかを知らされ、自分の身にも不吉な予感を禁じ得ない。

八月十五日。僅かの医療品はすぐになくなつてしまつたので補給の為浦上へ……。

病院も今は無慚に廃墟と化している。そこで思いがけなくも、古屋野学長先生から敗戦の詔勅の下つたことをお聞きした。集つた者は恥員学生合せて僅か十数人、皆手を取り合つて泣きじやくつた。敗戦!! 而しそれを素直に聞く事がどうして出来ようか。張り切つていた気持が一瞬にして力尽きてしまつた。それで体に鞭うちながら再び患者の待つ三山へ帰つた。私達はその夜まんじりともせず夜の明けるのを待つて又患者の治療に当る。その間にも患者は次々に死んでゆく。かくして続けられた三山の医療班は、八月二十二日、一先ず解散することゝなり、共に苦しんだ患者に気を取られつゝ、郷里に帰つたのは、八月末だつた。

人類最初の原爆の洗礼を受けて、死の街といわれてから早くも十年、原爆中心地は緑の公園に変り、原爆の丘には平和記念像が完成した。あの言語に絶した惨禍の原子野は、明るくたくましく復興して当時の惨状は見出すべくもないが、私の脳裡には今尚地獄の絵図のように生々しく刻みこまれている。

原爆落下十周年を機縁に、真に世界平和の訪れを願う三十万市民と共に、原爆の洗礼を受けあの残酷な事実の体験者の一人として、世界平和の為、大きな使命を担つている事を痛感する。

そして、世界の何処に於ても、再びあの恐ろしい残酷極まる原爆、水爆が、決して使用されることのないよう立上らなければならないと思う。

苦しみながら死んでいつた友のためにも!!

（当時　物理的療法科勤務）

薬局

薬局員として谷克巳薬局長の下に真野武男、多賀格男、川本勇、金子久和の各薬剤手、田中光清、菊野義春、原岡ミチ子、田中恵美子の各薬剤手補、雇の松岡スナ、野中富子、松永チョノ、猪口某女、野口チョノの各氏、傭人の西田昭子、吉岡美代子氏、小使の松田彦七氏、それに当時動員学生として天本貴子（神戸女子薬専）三笘（昭和女子薬専）の二嬢が勤務中であつた。

被爆時の状況

谷薬局長、多賀、川本薬剤手補は休暇をとつていて難を免る。

松岡、野中の両氏は事務室で、田中(光)、菊野薬剤手補と松永、三笘、天本の三氏は調剤室で、真野、金子両薬剤手と田中(恵)薬剤手補は薬局員室で、猪口氏は注射室で、野口、松田氏は製剤室で、西田、吉岡氏は薬局内で夫々被爆す。

真野、金子両薬剤手、田中(光)薬剤手補はガラス破片により重傷。

田中(恵)薬剤手補と天本嬢は即死し死体確認す。

猪口氏は死体確認せず。

松岡、松田の両氏は被爆後、穴弘法山中で死亡。松永氏は行方不明。

野中氏は九日伊良林救護所に收容、十七日頃上小島の親戚宅で死亡す。

局員の負傷はガラス破片創多く火傷は全くなかつた。

死亡者の官職並びに氏名

官職	氏名
薬剤手補	田中恵美子
雇	松岡スナ
〃	野中富子
〃	松永チョノ
〃	猪口某女
小使	松田彦七
動員学生	天本貴子

あの時のこと

田中光清談

私は調剤室の中央附近にいた。つい今しがた飛行機の飛んで行く音が聞えていたので、窓の側まで行つた私は「影も形も見えん、友軍機やろう」と菊野君に話しかけ乍ら窓を離れて、そこまで戻つて来たばかりであつた。ピカツとしたと思つたら、すぐにダーンと音がして、ガラ〳〵と云う音響と共に何かが頭にぶつかつて来た。よほど近くに直撃弾が落ちた様に思えた。気がついた時は自分でも知らぬうちに伏せの姿勢を取つていた。常々伏せをする練習をしていたので思わず知らずのうちにそんな姿勢を取つていたのだろう。唯、濛々として真暗な視野の中に、調

剤台の下から自分の処にさし込んでいる、一条の光線が認められる。そしてその時、誰かが遠くで私の名を呼ぶ様な気がした。それから、私の腰のあたりに何かが触つている様に思われたので、私は手をやつてみた。するとそこには誰かの手があつた。振り向くと菊野君である。そしてその時になつて漸く私の名を呼んでいるのが菊野君だつたことが判つた。菊野君は私をゆすつていたのであるが、それまで何も反応がないので、菊野君は私が死んでいるものと思つていたらしい。後で考えると私は耳が遠くなつていたのである。菊野君は「早う外に出よう」と言つた。私は「菊野君、もう一寸待つとかんかい、俺たちはこう向いて伏せたけん、入口に向うとるばい、こつちに来んな」と言つてごそ〳〵這つた、途中、菊野君と一緒に窓から出てみたが、すぐ近くに直撃弾が落ちている様なので、又次々と爆弾を落されるものと思い、二階に逃げようと思つた。菊野君は懸命に階段を探しに行つたが「どつち向いても判らん」と云つて裏手から外に出た。

私は前頭部に傷を受けていた。最初は菊野君と一緒に歩いていたが、まるで海岸か河岸の小石の原つぱを行く様で、どこもこゝもごろ〳〵していた。私はそこでつまずいた。裏の山に行くことにきめていたが、そんなことで菊野君の元気な足取りには及ばなかつた。そして遂に山道にかゝつた時、私と菊野君とは離れ〴〵になつた。

私は早く外に出ようと思うばかりで、菊野君と一緒に薬局から出たので、薬局の内部に残つた人々のことはよく知らない。そして行を共にした菊野君とも別れて、誰もがばら〴〵の行動を取ることになつたのである。

田中さんは佐賀にお嫁に行くので辞めることになつていたが、辞令はまだ下りていなかつた。それで一応佐賀に行かれていたのが、丁度その日薬局に遊びに来ていた。そして二階の薬局員室で金子さんと話していたのだつた、一緒に話に行つていた真野氏は薬局員室を出ようとして吹き飛ばされ、廊下の手すりの材料に圧しつけられ、強か腰をやられていたという。田中さんの死骸は階段の附近で発見されたそうであるが、金子さんは意識不明になつて、あちこちさまよつていたそうである。何もかも埃で真暗くなつた中をふら〳〵と歩いて行く金子さんの姿を見た人もあつたようである。金子さんはその後元気になつていられるようだが、どこかで頭を打つて何もわからぬようになつていたのだろう。真野氏はその後山にたどりついて二、三日動けなかつたのを家の人が来て連れて帰つたようである。

天本さんや三笛さんは共に希望して調剤実習に来ていたが、三笛さんは受付に近い調剤台の側に立つていたようで、ビンの破片で相当の怪我をしていたようである。三笛さんたちに限らず、薬局にいた人は殆んど放射能にやられてはいない様で、多くは物の下敷になつたか吹き飛ばされて打ちつけられてかして、打撲の為めに死んだように思われる。おじいさんの松田氏はいつも蒸気の調節をしていて、薬剤室の附近でやられたらしい。

原岡さんも谷氏などと同じく休暇をとつて休んでいた様な気がするが、今はもうはつきりとは覚えていない。

穴弘法へは私は相当に早く登つたつもりだつたが、もう人で一杯だつた。皆逃げ足が早いものだと思つた。古屋野先生とは穴弘法の麓で逢つ

た。先生は丁度ナイフで自分の手術着を裂いて負傷者に包帯をしていられた。それを見て私は非常に感動した。私はこの先生の側にいたら何か情報がわかるかもしれないと思つて暫らく一緒にいた。以前から大学には医療隊の組織がつくられていた。丁度山を登つて来られた木戸助教授がみえたので、私は「医療隊はどうしますか」と云つたら、木戸助教授は「それどころじやありませんよ。あなたの家はどこですか」と問われる。私が「西山です」と答えたら「西山ならば早くこの山を越して帰りなさい。私の家は城山だから帰られません」と云われた。

私は山越しには帰らなかつたが、一度西山に寄り、田舎に疎開していた父のところに帰つた。私はすぐに放射能の強い浦上を離れたのが幸いして、症状も起らなかつた。

あの日のこと

川本　勇　談

私は朝の九時頃休暇を取つて自宅に帰つた。それで現場に居合せずに助かつた。だから薬局内の当時の模様は知らない。午後三時過頃だつたか、私は大学に再び行つてみた。全く変つてしまつていたが、山の方に行つた時、田中君の話で、薬局員のうち、菊野君と金子さんとが助かつて逃げたという情報を知つただけだつた。

真野氏は腰を打つて動けなかつたそうだが、私は詳しい情報を知り得なかつた。田中さんはその日わざ〳〵佐賀から出て来ていたので、私共は「よか婿さんば貰うてよかつたたい」などとひやかしていた。それが爆撃で死んだのだから婿さんの顔を見たばかりの花嫁さんだつた訳である。わざ〳〵出て来なくてもよかつたのに出て来たのだから、可愛想だが運が悪かつたのでしよう。

薬局の跡に行つた時は三人の死体があつたが、誰が誰だか判らなかつた。

山に行つた時、調先生がいられたのでそこで後始末の手伝いをした。次々に死んで行く負傷者の手当は調先生や木戸先生がしていられたが、そこには医専の生徒の上野君ともう一人誰だつたかいて、その手伝いをしていた。私も色々なことに手をかしたが、死骸の処理もその一つだつた。私共はいつも〳〵死骸をかついだり、焼いたり穴を掘つたりする役目だつた。それで私共は相談して一度調先生にも死骸をかつがせようと云うことになつた。そしてある朝鮮人が死んだ時、私は調先生に「今度は焼かんで土葬しましよう」と言つた。先生は「うん、焼けば長くかゝるからそうしよう」と答えられた。それで私は又「私たちが穴を掘つておりますから先生がかついで来て下さい」と頼んだ。先生はすぐに「そうしよう」と云われた。とう〳〵先生も死骸をかつがれた。そんなことは調先生も忘れておられるかも知れない。

その後二、三日手伝つた私は下痢が起つたのでずつと家で寝込んだ、だから後のことも知らない。

（現、薬局勤務）

▽学生関係△

——追想記——

あの時を追想して

尾立源和

もうあれから十年にもなるかと今更乍ら驚かれる。当時七十五年間は青いものは生えないと云われた浦上の畠には、麦も実り野菜も青々としている。又全くの廃墟と化した我が長崎医大も、十年後の今日、病院は略〻以前の形態に復帰し基礎教室の建物二棟が浜口の丘に聳え立つている。その中で昔の様に研究にいそしみ、学業に励んでいる姿を見る時、よくもまあこゝまで復興したものだと感慨深いものがある。

丁度あの日の前日は八日の大詔奉戴日であつた。運動場に集つた全学の職員学生に、東京から帰られたばかりの角尾学長が広島の爆撃の模様を話されたのだつた。その言語も絶する惨状と新型爆弾の驚異的な破壊力とを。まさか其の翌日我々の長崎が第二発目の御見舞を受けようとは——夢想だにしなかつたのだが。八日の夜は我々の級が防空当番に当つていたので、蚊に刺されながら各自受持の教室に寝たのであつた。

明くれば運命の日、八月九日である。この日の朝の八時頃から警戒警報が発令されていた。頻回の警報発令で、大切な授業がさつぱり出来ないというので、警報中と雖も講義を続け、空襲警報と同時に部署につくと改正されたばかりであつた。従つて我々は八時からの角尾教授の内科臨牀講義を聴いた後、殆んどがポリクリに出ていた。私自身は医療隊の本部（当時の本館患者係）に残つて電話の番をしていた。暑い盛りではあつたが黒の制服にゲートルを着けていた。机の上に貴重な弁当箱を置いて其の上に制帽をかぶせていた。確か岩波文庫の「恋愛と結婚」を読んでひとり殺風景な心を慰めていたと思う。十時半頃だつたか本部に未だ警報は解除されないかと聞いてみたのだが、継続中という返事で、其後何の音沙汰もなかつた。

十一時頃だつたろう。突然ピカーツと稲妻のように少し青味がかつた強烈な閃光が走つたかと思うと、物凄い音響が怒濤のように轟いた。本能的に机の下に潜つた。八月一日同じ場所で爆弾攻撃の洗礼を受けていたので、直撃だと直感した。こわ〻〻眼をあけてみるとあたりは真暗闇だ。すつかり観念してジーツとしていると、やがて霧がはれるようにスーツと明るくなつた。眼前には、天井の梁とか何とか、何処にこんなものがあつたのだろうと思われるような沢山の大きな材木がめちやくちやに積み重つて落ちている。それをかき分けてはい出す。隣に坐つて事務を執つていた老人が倒れているので抱き起したが元気がない。引きかついで窓から玄関の方に降したが、ぐんなりしてそれきりだつたように思う。はつと大事な食糧を忘れたことに気がついたので部屋にとつて返したが、何処へ吹き飛んだのかあとかたもない。同室の他の人達は幸い出口から逃げ出したらしい。

本部と連絡を取ろうと思つて受話器をはづしたが交換手が出ない。—

其の時は既に交換嬢はレバーを握つたまゝ命絶えていたのであろうが――これは大変な事になつたぞと予感した。

外来の廊下に出る。右往左往する人の姿はあまりない。廊下の真中に白衣を着た学生が血だらけになつてうづくまつている。かけ寄つてみると専門部総代の北郷君だ。大したことはないぞ、元気を出せと言つたが、弱々しい声でもう駄目ですと言う。そのまゝにして玄関の外に飛び出す。西森君他二、三人が呆然と突つ立つている。オーと声をかけただけ。ふと眼下の街の方を見ると、これはどうしたことだろう。全くの火の海だ。家の形が見えない。人影も人声もない。不気味な一種の静けさの中で、たゞ猛々と燃え続ける火、火。この光景をみて初めてこれは例の新型爆弾に違いないと思つた。

とにかく本部に連絡をとる積りで本館から内科、耳鼻科の建物の横を通つて走つた。どの病棟だつたか、一部に火がついていた程度で、大部分の病棟には未だ火の手が上つていなかつたように思う。前の爆弾の際見事消火に成功したので、人手さえあつたら病院の方は焼けずにすんだろうと残念に思うのだが。

基礎教室のある浜口の丘も同様に火の海、もうこれは駄目だと思つた。不思議なことに火の中から逃げ出す筈の人の姿が全く見られない。――後になつて思えば、一瞬にして建物の下敷になり、その上を火でなめられたわけだから当然のことなのだが。――下級生は丁度講義を受けていた筈だが、とても助かる見込はなさそうだ。後日、焼跡に行つて見たら、講堂の跡に何十人もの整然と並んだまゝの黒焦げの死体が発見された。これほどむざんな光景がまたとあろうか。勃然たる憤怒を覚えた。然し極く少数の人は運よく逃げ出したらしいが、結局は基礎教室関係は全滅したのだ。一応危地を脱した者は、自分は助かつたのだと思つていたろうから益々あわれである。眼科教室の横に牛が倒れていた。そこで正君と会つた。彼が誰とか先生が倒れているから助けに行くんだと怒鳴つたようであるが、後日彼に聞いて見たがさつぱり分らんということ。皆が無意識の状態で行動していたのらしい。血だらけの人達が三々五々お互に肩を組み手をとり合つて裏の山の方に避難して行く。白衣の上に血を浴びているので一層凄惨な感じがする。看護婦らしい人をおぶつたり、手を引いたりして精神科の所の崖を数回上つたようであるが、頃も、名前も、助かつたかどうかも知らない。

僕等のグルッペは卒業試験で精神科を廻つていたので、気になつてかけつけたが、学生の本拠地である木造の別館はぺしやんこに潰れてしまつている。人声もないので皆んな逃げたらしいと安堵したが、よく見ると人が下敷になつている。動かない。木片を払いのけて見ると級友久保君だ。鼻や口から血が――既にこときれている。彼には妻子があつて、卒業試験のすむのをあんなに楽しみにしていたのに、可愛想にと思う。実は前日の八日の夜、我々のグルッペは調教授の外科の卒業試験を受けたのだつた。主に頭部の外傷について訊かれたが、途中で空襲警報が発令されたので試験は一応合格したことになつた。其の翌日当の久保君が頭蓋底骨折で死亡するとは、運命もあまりにいたずら過ぎる。此の精神科の建物には専門部の人達も十数人居たらしいのだが、後で殆ど死亡した。

上の畠で総代の久野君と会つた。手を怪我しているし、顔も血だらけ

だ。「俺は山の上で死ぬよ、遺言を書き度いのだが何か持たんか」と言う。あゝそうかと言つて万年筆を渡した。覚悟のよかつた彼が助かつたことを聞いて、遺言は何だつたろうかなあとあとで気になつた。誰かゞ繃帯をしてくれといふので、ゲートルを解いてそれをぐる〳〵巻いてやつた。又夏というのにがた〳〵ふるえている学生が居たので上衣を貸したりしたら、自分も半裸になつてしまつた。

畠の中にはごろ〳〵寝転んで呻いている人々、坐り込んで放心した様に下界の地獄絵を眺めている人々。あちこちで「水をくれ—、水をくれ—」といふ悲痛な叫びがきこえる。一口の水を求めて穴弘法の方へはい上る人の行列が続いている。中には一糸まとわぬ女性のあらわな姿もある。恐らく衣類は吹きちぎられたか、或は火がついたので引きちぎつたに相違ない。風は穴弘法の山の方に吹いていたが、火の手は此処迄届きそうにはない。が其の夜を此の場所で明かした大勢の人達は、燃え盛る猛火を前にしてどんなに恐怖と不安におびえたことだろうか。

僕自身は更に山を登る。途中俄雨に遭つたようである。青かつた畠もすつかり灰色に変つている。葉つぱといふ葉つぱは吹きちぎられ、南瓜等がブス〳〵くすぶつている。ひもじさのあまりこんなものを食べて、唇にぶつ〳〵を生じて死んだ人もあつたという話である。山中の大きな松の木があちこちで地上一間位の高さでボキリと折れている。物凄い爆風に驚嘆したが、それにしてもこんな高い山までやられようとは思いもかけぬことだつた。此のあたりから下を見ると、一面火焔に包まれて何処が何処だかさつぱり見当がつかない。たゞ三菱兵器の附近が、まばらに火を噴いている位のもの。全く此の世の地獄というか、世界の破滅を思わせるような光景である。

ぺしやんこになつた兵舎の横を通つて峠に出た。西山方面には火の気が全く無い。山一つ隔てゝ反対側は全くと言つていゝ程の平静さだ。ほつとしたと同時に一種の異様な感じがした。こゝで級友の古賀君にあつた。お互に無事を祝したのだが彼はあとで死亡した。鳴滝の下宿に帰り着いたのは昼の二時頃だつたろうか。未だ誰も帰つていない。

こちら方面では窓ガラス等が吹き飛んだ程度なので当座はそう大事とは思わなかつたらしい。早速握り飯を戴いた。情報を知らせる為に無理な山越えをしたせいか、そのおいしいこと。後できくと殆んどの人が飯を食えなかつたらしいから、すぐに食べられた僕などはさしずめ助かる方の組だつたのだろう。

救助の本部が勝山小学校にあると聞いたので出掛けたら丁度大島君と会つた。古屋野教授が頭に繃帯して担架を持つて居られる。金比羅山の上に大和田野講師がいるそうだから連れに行くのだとのこと、それじゃ我々が参りましようと、山上の小屋迄かけ登る。此処には大学関係の人達が大勢收容されている。調理所の裏から逃げた人達だ。大和田野先生は地面に寝て居られたので先生の言葉を伝えたのだが、体がきついから此処でいゝと言はれたので其のまゝにして、学童らしい火傷で全身水ぶくれのした患者を担架にのせて山を下りた。これが大和田野先生にお会いした最後であつた。

帰つてから小母さんに、同宿の三人の学生の中一人位は駄目だろうと話したのだが、三年の安日君は其の日のうちに無事帰つて来た。級友の日高さんは翌日やつと帰つて来たが、喉に穴があいていて息が苦しそう

だ。数日後郷里へ向われたが――いまわの際には周囲の人達に御礼の言葉を述べて従容として死に就かれたそうである。

翌日、伊良林小学校にも收容所が出来ていると聞いたので行つてみた。今村、西の両君は既に諫早の海軍病院に運ばれたということだ。恐らく委託生になつていた関係だろう。今村氏はひどい外傷を受けていたそうだ。彼がカメラを後生大事にいつも腰にくゝりつけていたのを思い出す。フアイトのある男だつたのに惜しいことをした。肥後君はやつと此処まで辿り着きはしたものゝ運動場の片隅で死んでいたということである。

未だ所々燃え燻つている中を通つて大学に出掛ける。然し中は殆ど焼けてしまつている。防空壕の中に角尾、高木、山根教授等が收容されていると聞いた。昼頃には諫早からトラックで握り飯とタクアンが沢山届いた。普通なら歓声をあげて飛びつく所なのだが、食べられる人が殆ど居ないので、勿体ないことだが腐らせてしまつた。

家族の人達が気遣つて探しに来初めたので、先ず学生の生死を調べることに着手した。生存者は数える程しかいない。情報がは入るにつれて殖えはしたが、同時に死亡者の数も増して行つた。夕方頃だつたか、汽車が開通したので、軽傷者は郷里に帰り始めた。従つて元気で仂ける人の数は更に少くなつてしまつた。

其頃久留米の衞生隊が救援に来てくれたので、多少皆の顔に安堵の色が浮んだ。何しろ病院がやられたので救急道具さえ何一つ無いのだ――実際は放射能の障碍に対しては全く手のつけようもなかつたろうと思うが――。そのうちに高木教授が死なれたといふ報せが伝つた。重傷者が次々に死んで行く。何とも言いようのない悲痛な気持だつた。藤原君がひどい骨折で参りそうだつたので、其の夜は彼の呻き声を聴きながら防空壕に泊つた。

三日目頃になると、山の上に居る人達を焼跡の建物に收容することになつた。奥君が夢遊病者の様にふら〳〵しながら下りて来たが、後で死亡した。原田君が眼科の地下室に收容されたと聞いたので行つて見たが、既に冷くなつていた。殆んど傷は無いようだつたが。新名君が会いたがつていたよと誰か知らせてくれたのだが、生きては遂に会えなかつた。

其後本館の二階で死んだと聞いたので、せめて死顔でも見たいと思つてかけつけた。結婚したばかりの奥さんが傍で放心した様に坐つていた。煙草を欲しがつて死んだそうだ。それで毎年の原爆記念日には煙草を供えることにしている。玄関前の広場に材木を寄せ集めて来て、其の上に彼のなきがらを乗せ、奥さんと二人で火葬したが、あまりのことに涙も出なかつた。今思い出してもそつとする。

彼は常々、自分は一人息子なので後継を造る為に結婚したのだと語つていたが、確か奥さんは妊娠していた筈である。今、彼の妻と子供はどうしているであろうか。永井隆先生は頭に繃帯姿で活躍して居られた。さすが金鵄勲章組だけあつて、テキパキ仕事を進めて居られた。先生の言いつけで防空壕から薬品類を引つ張り出して一箇所に保管した。山根教授はお酒好きと聞いていたし、木戸先生から言われて、消毒用アルコールを薄めそれに注射用のブドウ糖液を加えて持つて行つた。先生は繃帯だらけで頭もよく分らない程だつた。有難う、あとで戴くよと云われたが、あのやかましい先生が大変元気がなさそうに見えた。恐らく此の即製飲料も召上れずに昇天されたのではないかと思う。命によつて薬理

の祖父江教授を本河内にある佐野教授の宅まで担架で運んだ。途中下りて小便でもされたのに、後で死なれたと聞いて、いよ／＼誰が死ぬのか生きるのか分らなくなつた。

時日が経つにつれて救助体制も幾らか整つては来たが、死亡者は殖える一方だつた。調教授が滑石に救護所を開設されたので、大学関係者も多数そちらの方に送られた。二人の息子さんを失い乍ら医療に従事された先生の胸中は如何なものだつたろうか。毎朝螢茶屋から歩いて大学に行き、夜は燐光の燃える道を死骸につまづきながら帰る日々が続いた。主な仕事は死体の処理等の筋肉労仂であつた。其の或る日、片淵に級友の園田さんを訪ねた。色々心残りがある様子だつたが、遂に最愛の新妻を残して死んだ。

これでもう一発来たら愈々最後だなと覚悟はきめていたが、終戦となり、遂に里心がついてしまつた。愛刀を肩にかついで、四日三晩かゝつて鹿児島の我が家に辿り着いた。母は、死んだものと諦めて僕の写真を仏壇にかざつていた。父は、遺骨拾いに長崎へ旅立つていた。

友達のこと、学校のこと等気にはなつていたが、心身ともに虚脱状態だつたので家にじつとしていた。やつと十月、大村での授業再開に出頭して級友の動向が分つたようなわけである。死亡者三十五名で、生存者は僅かに三十二名となつてしまつた。今西君はあとになつてから防空壕の中で発見されたそうである。岩切君は五島君の世話になつて八月の末に時津で死んだとのこと、彼は大の野球好きだつた。戦時中禁止されていた野球をこつそりやつて、当時の学生主事松下助教授から大目玉を頂戴した話がある。今運動場に出て見ると所狭しと野球が盛んであるが、その度に岩切君の黒い顔を思い浮べる。若し生存していたら、どんなに喜んで野球をやるだろうかと思うと可愛想な気がしてならない。

こうして丁度十年前の惨事を記憶を辿りながら綴つてみたが、時間的な点で多少正確を欠いているかも知れない。若しあの爆発が何秒か早かつたら、生死全く其の立場をかえていただろうと思うと、生き残つている自分が未だに不思議な気がしてならない。死亡者の御冥福を心から祈らずにはいられない。

（当時学部四年　現辻村外科勤務）

原爆を顧みて

久野文次郎

思えばかの時我々は長崎医大の最高学年で九月には仮卒業の上軍医学校に行くことになつていた。そこでクラス七十数名はそれ／＼のグループに分れ、現在のインターンのように各科を廻りつゝ卒業試験をうけていた。私は調外科に廻つていた。

昭和二〇年八月九日、原爆投下の当日も、盛夏の候ではあつたが、夏休も返上して講義、実習が行われていた。当日の朝私は防空当直に当つていて、大学で眠を覚した。朝から暑い。九時頃であつたろうか、空襲警報が解除になつたので、外科の我々の控所に行くと、肥後、平井君などが見えていた。肥後とは久し振りである。というのは彼の家は鹿児島市

に於て空襲のため罹災し、父上と妹さんがこのために死亡されたので、一ケ月以上帰省したばかりであつたから。それから私はこの日の午後手術予定になつていた筋炎クランケを受持たされていたので、血液検査をしておかねばと思い、外科病棟に赴きメランジュールを以てクランケの耳朶から血液を吸つていた。この時木戸助教授の一行が廻診に見え、やがて地下室に行かれた。私はメランジュールを振つていた。

この時飛行機が急降下する時のような爆音がしたのではつと思つたが、何しろ空襲警報解除の後だつたので、友軍機かなと思つた。次いでよく知られているあの強烈な白い光を見た。この光を見て、何しろ全く経験のないことなので、「はて何だろう」と思つた次の瞬間には猛烈な爆風が来て、何かグアーンと全身を、特に頸部を撲られたような気がして、吹き飛ばされた。そして暫く意識を失つたらしい。「ハツ」と我に返ると、部屋の中といわず、外といわず、全く変貌し、破壊混乱の極みである。自分の手を見ると左手の第三指と第四指は僅に表皮一枚を残して、かろうじてぶら下り、骨が突出して出血がひどい。頭部特に後頭部も相当にやられているらしく、手をやると、ねつとりと血液がついて来る。採血していたクランケがどうなつたか明確な記憶がない。（後で聞いた所によると死亡した由）

とにかく足のふみ場もない程なので、坐ることも出来ない。何んとかして廊下に出た。そこに坐り、もはやこれまでと茲で命を終えようと思つた。学業半ばにこのようにして死ぬと思えばくやしかつた。しかし出血特に頭部からの出血が甚しかつたので必ず死ぬに違いないと思つたわけである。そこら辺に散らばつている紙切れを拾つて、流れる血潮を指につけ、遺書をしたためた。

外を見ると浦上の街はもとより、山まで全く緑を失い、変貌しているので、これは広島に投下されたのと同じ新型爆弾とゆうやつだなと感じた。

坐つていると近くに火がメラメラと燃えて来る。このまゝ居れば茲で黒こげになることが明白になつたので、渾身の力を振りしぼつて裏の山に歩みを運んだ。沢山の人が山へ山へと歩いていた。浦上の街が凡て火を発しているためか熱風が吹き上げて来る。精神科の横で尾立と会つた。一級下の海江田君にも会つた。

山で大学の燃えるのを見乍ら死に度いとの一念で登つた。空はあやしい紅に染りやがて暮れた。俄か雨が降るし、空には敵機がひつきりなしに飛んで来る。あたりには沢山の人々が避難して来ているのだが、何しろ暗くて定かでない。次々に子供が死ぬ。赤ん坊が死ぬ。母親の泣き叫ぶ声、祈りの声、私はこれらの声をきゝ乍ら畑の側のとある横穴壕の中にいた。この夜中から出血が止つたので、これまで明らかに、あきらめていた生への執着が始つた。

「生きるかも知れない」と思い始めた。傷の痛みに一睡も出来ないまゝに夜は明けた。左手は出血を防ぐため手首をしばり、指はシュルツェを破つて包んでいるだけである。無性に水が欲しかつた。水！水！と叫んだ。このような時献身的に立仂いて呉れた人達の親切が骨身にしみた。

明くれば、八月十日の太陽は全く変り果てた浦上を照らしている。山も建物も皆焼けたゞれて、至る所に死体と傷者の群れ、まさに地獄の谷間である。何んとか歩けるので、大学の方へ山を下りる。角尾学長が筏

島助教授や高橋講師などに囲まれておいでになるのに出会う。外傷は殆んどなく、只いつもの御元気があられないように見えた。「久野君に何か注射をしてやつたら」と申され、葡萄糖か何かの注射をして貰つた。握り飯などすゝめられるが全く喉を通らない。汽缶場の側の横穴壕の所に着く。こゝで調先生、木戸助教授に診て貰う。木戸助教授は頭からガラスを取つたり、左手の手当をして下つた。この時皮膚一枚を以てぶら下つていた左手の第二・四指は永久に我が身から離れた。

こゝの壕の中に同僚の青木、宮城等の諸兄が打ちのめされた様な顔つきで、しかも火傷にたゞれて横になつていた。そして再び相見ることがなかつた。お互いに最後の別れなどとは夢にも知らなかつた。こゝでソ聯の参戦、昨日の爆弾が原子爆弾だときいた。

私は午後の三時か四時頃であつたろうか、荒涼たる浦上から桜馬場の下宿を指して帰つた。二、三の人が制止したが、何んとしても畳の上に帰りたかつた。所々に水道管が破裂して水をふき出している。それらを飲み乍ら……。

その後二、三日経つて滑石の救護所に一週間ほど御世話になつた。こゝでは北郷君や手足の骨折に苦痛のひどい藤原君と一緒だつた。同室の人が血便など出してバタバタ死んでゆくので「赤痢だ」とゆうので隔離したり大変な騒ぎだつた。

父母はこゝまで来て下さつた。このような姿で両親に会うのは辛かつた。その愛の深さに感泣した。終戦の詔勅は母が買つて来て呉れた新聞により一部始終を拝読した。

八月十八日郷里である佐賀に帰つた。米軍の上陸のデマが飛び、この救護所は解散することになつたためである。佐賀では県立病院に入院したが、こゝでも同室の原爆傷患者が数名死亡した。明日知れぬ露の命。まことに自分には何時その時が訪れるであろうなど思いつゝ過した。しかし命運つきず、外傷が大体治癒したのは十月二十五日であつた。前記の肥後は八月十日伊良林小学校で死亡したと聞く。まことに命運与せず、鹿児島から死にゝ帰つたようなものであつた。結局同級生七十数名中生残三十名である。

友等は如何にして命を終えたか、何しろあのような状況のこと故詳にし得ないものが多い。

不思議に命ながらえて、かの時に思いをいたすとまさに一場の悪夢の如くである。しかし語り合わんとしても友は答えず、自分の左手も旧に復する術もない。この手故に自分が以後いかなる思いをし、どんな生きかたをして来たか、それは又一つの物語であろうが別の機会にゆづり度い。

十年一昔とゆう。確に十年も経つと、原爆投下とゆう歴史的大事件も一寸遠のいた感じである。以後戦場に於ては原爆は幸なるかな使用を見なかつた。第二次大戦終了後の世界の動きを見ても、広島、長崎に於ける原爆の炸裂が、如何に大きな意味を持つかがわかる。

人類は道徳的向上によつて戦争を止めるとゆう進み方をせず、おのが生み出した、極度に巨大な破壊力を持つた原子兵器の偉力を恐れ、根本的に戦争を回避せんとするに至つた。しかし理由はともあれ、戦争を国際間の諸問題解決の方法として使用しないことは慶賀すべきことであり、万難を排して人類はこの至上命題に成功しなければならぬ。成功すれば

栄光、失敗すれば破滅。是は今や万人の常識となつた。

長崎・広島の惨劇も、人類がこれを転機として、戦争絶滅に成功するならば、偉大なる犠牲として永久に人類の心の中に生きてゆくに違いない。そうあれかしと心から神に祈る。

（当時学部四年　現小児科勤務）

あの日の断片

西森一正

病院に居てどうして助かつたのですか、その後身体に異状は起らないのですか等と問われる毎に、原爆を受けてからすつかり頭が悪くなつてねと持前の愚鈍を原爆のせいにしてしまつている。然し頭のせいだけではない。あれから既に十年となる。色々の記憶が次第と断片勝ちとなろうとしている。

大波止で空襲警報のため電車が停つた。下車して歩いていると何時の間にか衞生の大倉教授と一緒になつていた。先生には武道部長をしていただいていたし私が同部の世話役をしていた関係もあつて、時にお話しする機会もあつたが級友の殆んどは恐らく講義と口答試験以外には先生のお声に触れることはなかつたと思う。あの温厚寡言の先生があの朝に限つて大波止から大学まで滔々と雄辯を奮いながら歩かれたのだから、今考えても不思議である。この非常事態に当局は何故最も大切な学生を疎開させないかという要旨であつた。南方の戦線でぼつ〳〵戦略的転戦が行われ始めた頃だつたが待望の武道場が完成して道場開きをしたとき、部長の挨拶を御願いしたら下書きを書いて来るよう云われたので下手な作文をお届けしておいたところ、式場で私の下書きをそのまゝ読んでしまわれたのには、赤面の至りであつたし、又その無頓着な姿に唖然としたものだつた。

あの朝病院正門のところでお別れしたのが十時前だと記憶している。登学してみると私のグルツペは橋本君を除いて皆集まつていた。卒業試験が皮ふ科の実施中で後には小内科が残つているだけだつた。皮ふ科の研究室を一部屋占拠していた私共のグルツペ七名は広島の惨状を見て帰学した角尾学長の報告を中心に、例によつて雑談に花を咲かせていた。

「俺は確に太陽を利用した特殊爆弾だと思う」「いや傘形爆弾の一種だ」しかし一人は云つた「どうしても原子爆弾だ」と。ピカと来ればそれまでか、と云つてノートや参考書をその辺に投げ出して爆弾論義に熱中した。雑談は更に続いていた筈である。筈というのは丁度北村包彦教授が医専のポリクリの試験に出かけたので、常日頃不勉強の私がどうした間違いか見学について行つたのである。これがグルツペで私一人助かり皆は恐らくあの部屋で運命の一瞬に見舞われることになつたものと思う。

北村教授の真後に立つてポリクリを眺めていた時、あの閃光そして身を伏せる間もない爆風でふつ飛ばされたのだが、実際に気付いたのは部屋の中を飛ばされて行く瞬間だつたと思う、これでこの世とおさらばかと思い楽しかつたことが頭をかすめた。その次に意識を回復した時は真

暗い部屋の隅にたたきつけられて居り、手にはベト〳〵と傷ついた人の血が触れ体は動けないまでに破壊されたもので圧しつけられている。息が出来難いのでやつとのことで屋上にはい上つた。しかし屋上は落下する破片でとても立つては居れなかつたがこの時の空気ほど有難く美味しかつたことはない。爆風で眼鏡を失つたのと、爆煙のためはつきりは見えなかつたけれど外来本館の屋上から見渡した光景はただ凄惨というか、しばし夢の様に眺めていたけれども、やがて之が現実であることを知り慄然となつた。

北村教授と外来本館前でお会いした。早速救護隊を作れとのことだが然し何から手をつけてよいか方法も浮ばない。先生も顔面あたり血が吹き出している。後になつて思つたことだが、私の背中に三十何ケの傷があることを考えるとあの時真後で先生に折重なつて飛ばされたのだから北村教授の蒙るべき破片を相当引き受けたことになるわけだ。

重傷者を引つぱり出しているうちに所々に火が出はじめたので次第に裏山の方に退避せざるを得なくなつた。裏の防空壕に非常時用のアルコールが貯蔵されていたので之を取りに行つたとき、グルツペの一人昇君に会つた。彼は外傷も少く比較的元気で、私について穴に入つた。ボインと来さうだな、など云いながら殆んど壊れた中から瓶詰数本を見付け、両ポケツトに入れ、手にさげて山に上つた。もう既に山の斜面は重傷者が折重つて居り、髪は焼け落ち、衣類は裂けて殆んど身にまとうものもない有様で誰彼の区別は全く出来ない。片足を全く飛ばされた重傷の一人が突然私にとびつき、手からアルコールを奪うと私の制止する隙もなくグーと飲んでしまつた。勿論助かる見込のある患者ではなかつたけれど……。

穴弘法に着いた頃は基礎教室の炎上は絶頂に達し天をも焦す程であつた。無念の涙が傷口を沿い、ただ茫然とするのみであつた。

本館の下で尾立君に会つたとき傷を見せると大したことはないぞと元気づけてくれたが、側頭部の創は骨に達して居りここからの出血がなか〳〵止まらない。遂に穴弘法の下で倒れてしまつた。古賀君ともう一人誰だつたか山の上まで私を連れ上げてくれた。外傷も少く元気だつた彼等だつたのに、下宿に着いて数日の後には不帰の客になつたのである。

敬愛する先生方、中でも小野助教授は私をこの大学に連れて来て下さつた同郷の先輩であり、何の相談にも乗つて下さつた方だつた。さし迫つた時勢の中でもほがらかに青春を謳歌した級友、これらの人々の面影が今は既に遥かになりつゝある。

この学び舎に真摯な勉学を続けている人々の中に今は亡き恩師の子息が、又級友の令弟が何人か居られる。その頃の又身の振りの余りにも故人に似て、過ぎし日の懐しさ傷ましさに目がしらの熱くなるのを覚えること屢々である。

（当時学部四年　現病理学教室勤務）

思い出

伊藤太郎

昭和二十年七月下旬、空襲後便りのない両親の許に、道の尾駅から夜行に乗つた私は、今度長崎に帰つた時には、なつかしい長崎の街は、焼夷弾で灰になつて居るかも知れぬと考えた。

途中、広島で知人の家に一泊し、厚情に感謝しつつ、帰途再び訪れる約束をなし、子供達が河で嬉々として、水泳している様子を眺めながら広島を去つた。

八月九日、正午頃、私は郷里で、母の墓に手を合わせていた。

八月十一日、再び訪れた広島の駅頭で見たものは、傷ついた市民、軍人、死を免れて手をとりあつて泣いている人々であつた。

長崎も同様に原爆を被つた事を知つたのは、汽車が九州路に入り、佐賀をすぎた頃であつた。

八月十二日、長崎の町で見たものは、夥しい死人、負傷者、焼野に屍をやく多数の煙であつた。

やけた教室のあとに、一定の間隔を保つて、多数の頭蓋骨、手にとれば形がくずれるかと思われる灰と化して、これが先日まで親しかつた人々のかわりはてた姿であつた。

その後、ささやかな希望を抱いて、負傷者の收容せられている建物の中を、友を求めて、歩いたけれど、遂に会う事は出来なかつた。

又、傷が軽かつたと、幸運を喜んで帰郷した友も再び長崎に姿を見せなかつた。

八月中旬、終戦直後、ある私鉄の小さな駅に降り立つた私に、大学の様子を熱心に尋ねる中年の婦人があつた。

その人の長男も、当時大学に居り、家族の人々が連日長崎に、諫早に、その外負傷者の收容せられている処を、その人の姿を求めてさがして居られる事を知つた。

毎日くらくなると、今まで休み毎にそうであつた様に、「お母さんただ今」と云つて、子供が帰つて来る様な気がして、毎日それを待つていますと、半ばあきらめられながら、なおあきらめきれない様に語られたが、それから十年、子の親となり又、親としてのかなしみをも知り、その時の婦人の、なくなられた学生達の御両親のかなしみが本当に分る様になつた。

又、当時、浦上の焼野を、子の、親の、姿を求めてさがして居られた人々を思い浮べると、今でもなお、深いかなしみと、強い憤りとを感じる。

あれから十年、焼野にも花が咲き、家もつぎつぎと建ち、大学も再建され新装成り当時の面影は殆んど認められなくなつたが、今なお、浦上の地に立てば、なつかしい恩師、先輩、親友の元気な御声がきこえて来る様な気がしてならない。

又、家族の方々の消え去る事の出来ないかなしみが、ひしひしと感ぜられる。

（当時学部三年　佐世保検疫所勤務）

原爆の思い出

―片山道生君をしのんで―

海江田芳春

早くも十年の歳月が経つてしまつた今でも、原爆の声を聞く度に、数多くの事件がまざ〳〵と私の脳裏によみがえつて来る。

学生の内では、一番被害の少なかつた吾々のクラスでも、二十名に近い死者を出したのだつたが、遺体も判らず、最後の様子さへ不明の人が大部分だつたかと思う。

偶然にも、片山道生君の遺体を処置した私は、その当時の模様を、限られた枚数で、記して置きたい。

当時、私のグルツペは大島、片山、賀来、梶原の諸兄と私の五人だつた。その朝、空襲警報が解けて、角尾学長の臨床講義も無事終り、吾々のポリクリだつた外科の予診室に行つたのは十時半を少し廻つて居た頃だつたろうか。私は前夜警報時に、足に針をさしたと云う女の予診をとり始めて居た。グルツペの他の人々がどうして居たかを、はつきりと憶えて居ないのに、只片山君だけは、窓にもたれて居た姿を、はつきりと思い出す事が出来る。或は物凄い騒音と共に、烈しい爆風がやつて来て、反射的に窓を見たその時に見た、片山君の姿だつたのかも知れない。

爆風と騒音は物凄かつた。私は半ば吹き倒される様に、伏して居た。一瞬の爆風と騒音の後は、暗黒と静寂。直撃弾による生埋めと思つた私は、体を動かしてみた。然し体は動く。「皆大丈夫か」と呼ぶ私の声に「おう」と数人の声がして、同時に何人かゞ暗黒の中を移動し始めたらしい。誰かが私の体の上を這つて行く。それを知りながら、何故か私には〝此の暗黒では何とも出来ない〟と考える余裕があつた。

永く思われた暗黒が次第に明けた時、周囲を見渡した私は、その被害の凄さに驚きつゝも、飛び散つた靴をはいて建物の外に飛び出したが、更に私の驚きは倍加した。はるかに稲佐山迄の全ての物が完全につぶれ去つて、一面の原と化して居る。前日の大詔奉戴日に角尾学長が話された、広島の新型爆弾の見聞が思い出される。右往左往する人々の姿は、完全な地獄図だつた。

早くも火を吹き出したグルンドを眺めつゝ、病院の裏山へ待避した時、ふと吾に返つて自分の着物を調べた私は、白衣の背中が血液で真赤に染つて居るのに気付いたが、自分では背中に負傷がないのを確めると、暗黒の中で私の上を這つて行つた人のあるのを思い出した。しかし、その白衣も畑の中で出血の為めか寒さを訴える負傷者にかけてやらなければならなかつた。附近は負傷者、火傷者で一杯だつたのだから。

やつと穴弘法の裏山にたどりついた時、元気なクラスの人々を発見してほつとした。賀来さんの元気な姿に会つたのもその時だつたが、同時に片山君の負傷したのも聞いた。片山君は暗黒の中を外科の診察室まで行き、賀来君の制止も聞かずに、窓の外に飛んだのだと云う。その時既に腹部に負傷して居たと云うのに。私の背中の血液はどうも片山君のものだつたらしい。

後になつて両側大腿部に三十数ケの硝子の破片創に気付いた私は、暫く静養を余儀なくされたが、終戦となつた或る日、確か八月十八日だつ

たと思うが、大学への道を歩いて居た。長崎駅を過ぎてから、一人の大学生に話しかけられ、それが片山君の兄さんであるのを知つて驚いた。弟の安否を尋ねて九大から来られたのだと云う。

未だ帰宅しないと云う話に、やはり駄目だつたのかと考えつゝ歩く道は遠かつた。大学に着いて、すぐ外科の診察室の外にある地下への階段を見たが既に何もない。遺体は本館横に集めてあるとの事なので其処を探す事にした。時日が経過し、亦全身火傷を受けた遺体はなか〳〵判別がつきにくい。しかし、やはり虫の知らせと云うのか、制服を着たゲートル姿の片山君を発見したのは、兄さんだつた。検索の結果、ズボンのポケツトから発見された五高の柏のマークの手拭は同君である事を決定的にした。八月上旬最後に帰省した時、持ち返つたものだとの兄さんの話だつた。

相談の結果、吾々も多くの人々を真似て、遺体を焼く事にした。高南病棟の高台へ上つた所の空地に安置し、周囲に四散する木材を集めて火をつけたのは午後一時過ぎだつたと思う。完全に骨となつた午後五時頃迄、私は兄さんと元気だつた片山君の追想にふけりつゝ時を過した。

あり合せの石油鑵の中におさまつてしまつた片山君をだきながら帰つて行かれた兄さんの心はどんなに重かつたかと、同情に堪えなかつた。

クラスの死亡者の内で、片山君の外には、大池未知生君が諫早の病院で死亡したのを、伝え聞いたのみで、他は何れも不確実な情報のみだつた。限られた紙数も超過したので、今はなき諸兄の御冥福を祈つて筆をおく。

（当時学部三年　現大阪大学医学部産婦人科勤務）

原爆

川野正七

原爆による学生の被害の詳細は未だに不明である。当時の書類が殆んど烏有に帰したのであるから無理もない。巻末に附した名簿はまだ〳〵修正の余地があるものと思われる。併し、被害当時の状況は生存者の記録や談話から推測することが出来る。

当時医学部の最高学年であつた学部四年生は既に卒業試験も終つてインターンのやうな格好で各科で実習中であつた。従つてその科の位置によつて被害の程度も異つたが、全部で三十六名の死亡者を出している。当日病院に居た者の総数は不明であるが、その約半数が死亡したものと思われる。

学部三年も皆グルツペに別れてポリクリ実習中であつたから学四と同様の運命に遭つたが死亡者数はもつと少く、判明しているものだけで十五名である。当日の出席者が少かつたからでなく、外来の時刻であつたので原爆から一番遠い外来病棟に居たものが多かつた為である。他のコンクリート建の病棟の蔭に当つていたので放射能による被害が少く、爆風による外傷が主であつた。但し、内科外来のやうに比較的高い位置で窓が爆心に向いている処では放射能による被害も少くなかつた。鉄筋コンクリートであつた為に火災の起つたのが遅く、火傷による死亡は少かつたようである。

それに反して基礎教室の建物は一部を除いては皆木造建築であつたので、爆発と同時に崩壊し、直ぐに火災が発生し、五分とたゝぬ間に基礎

教室全体が天に冲する火柱と化した。学部一年二年は共に授業中であつた。大部分が建物の下敷となつて生き乍ら火葬され、僅かに遁れ出た少数の学生も、数日内にその避難先でそれ〴〵息を引き取つた。当日の登校者で一名の生存者も残つていない。

専門部一、二年も同じ運命を辿つた。二年生は衞生の講義が休講であつたために全滅を免れたが、それでも百十名の死亡者を出し、一年生は生化学講義中で出席者全員が教室員と共に全滅の悲運を見た。之も判明しているだけで、百六十六名に達する。

専門部三年は卒業試験に当つていたので病院内に居た関係上、被爆の事情は学部四、三年と同様であつた。死者二十三名と伝えられる。

以上で判る通り、人命を救うことを学んでいた医科学生在籍者七九七名中の四九九名という多数が一発の爆弾によつて命を奪われたことは史上に例を見ない事であつて原爆というものの怖ろしさ、戦争というものの残酷さを物語つて余りある。直接の加害者である米国（というより関係当事者）間接の加害者である日本の軍指導者、ひいては戦争そのものを呪いたくなるが、又翻つて果して之程の犠牲を払わねばならなかつたかと問うて見ると甚だ疑問なきを得ない。第一に八月九日という日は平素ならば暑中休暇中である。夏休み返上の方針であつたとしても、学長の判断次第では犠牲を少くする為の休校或は疎開授業をすることも出来た事情にあつたことは九大の例を見ても明らかである。

広島の惨状を眼のあたりに見て来た角尾学長が、新型爆弾の威力に徴して直ちにその対策を講ずる代りに「一億玉砕」精神に拍車をかけ、「学生諸君の覚悟」を促したことは当時の空気を反映したものとは言え、人命軽視のそしりを免れ得ず、学長としての責任を問われても仕方があるまい。併しその学長も転に殉じて他界された今となつては責めるにも責められない。それにしても原爆の一週間前には大学に直撃弾を受けて死亡者さえ出し、ついその前日の八日には全学生に広島の目撃談を聞かせたばかりである。「長崎よいとこ花の街。八月九日灰の街。」という不気味な歌さえ伝えられていた矢先である。状況の危急なことを判断して独断で疎開していた学生は皆助かり、忠実に出席していた学生が受難したということは皮肉というよりも不当である。愛児を奪われた父兄が学校当局を怨んだのも無理からぬことである。

九死に一生を得た学生はコンクリート建の病院に居た者ばかりである。基礎教室も同じ耐火耐震建築であつたならと思うのは返らぬ愚痴というものであろうか。現在建てられつゝあるコンクリートの新校舎を見つゝ感慨新なものがある。

我々は学友が為さんと欲して為し得なかつた医学による奉仕を彼等に代つて果す責務がある訳である。一冊の医書を手に入れるにも苦念惨澹し、大豆を噛り豆粕に餓えをしのぎ、日曜もなく祭日もなく、夏休みさえも返上して勉強をし苦労をした甲斐もなく、原爆の犠牲となつて散つた学友達の無念さを我々以上に知る者は無い筈である。我々が彼等の素志を継ぎ彼等の願いを果すのでなかつたら、口に冥福を唱えても無意味であろう。亡き学友諸君よ、我々の怠惰を赦してくれ給え。そして君達の分まで研究に治療に活躍出来るよう励まし祈つてくれ給え。それが我々の葬い合戦である筈だから。

（当時学部三年　現辻村外科勤務）

原爆日記

佐々木　隆

米粒大のガラス片が今だに頭から出る毎に当時の記憶が雑然と思いうかんで来るが、此の度ペンをとるにあたつて十年前の日記帳とゆうにはあまりにも粗末なメモ、しかも一昨年六月の熊本の大洪水で水びたしになつたメモをとり出してみた。

四・二〇　入営延期の書類書留にて発送
四・二二　茂木での五高会警報発令の為延期
四・二三　天井外し作業
四・二六　十一時長崎駅に爆弾
五・九　今日一日一回も警報なし
六・二二　転員、学生による当直制度開始
七・一　義勇隊結成式（九時）。医専入学式
七・四　渡り廊下の屋根こわし作業
七・一二　本日より警報中でも講義続行
八・一　十一時四十分婦人科、耳鼻科、古屋野外科、生化学に爆弾
八・六　今日より電車動く。本日より講義再開、午後医専の殉職者三名の校葬

日増しに切迫している空気がひし〳〵と感じられるこうした状勢下に、今にして思えば最後の大詔奉戴日を迎えたのであつた。

八日　学長東京より帰学。広島の奇妙な爆弾の話を全学一同校庭で聞く。

しかし吾々が立つている校庭が、そしてそこから見渡せる限りのところが二十二時間後に同じ運命に曝されようとは一体誰が予測し得たろうか？

九日　十一時すぎ新型爆弾？西山を廻つて夕方帰りつく。

古屋野外科外来で閃光、熱風、暗黒。皆思い思いの方角に散つて行く。僕も夢遊病者の様にあてどもなく黙々と歩いていると後から上つて来た女学生に額から血が出ていると注意されてはじめて現実の世界にかえつた様な気がした。挺身隊で三菱の工場にいたとのこと。うちが穴弘法にあつて母が一人でいるからとに角一服していらつしやいと言われて息をきらし乍ら後について坂道をかけ上つたが家の跡片もない。いくら4Dの近眼鏡を吹きとばされたとはいえ、見えない筈はないとあたりを見まわしても一軒の家もなく、褐色の丘がつゞくばかりである。下方遥か城山から山里町とおぼしき方角から火の手があがつている。病院はと見下すと何事もない。あゝよかつた。基礎はと目をこらしたが残念ながらこの目でははつきりとは位置が分らない。時計は動いている。十二時十分だ。

片淵に下宿している者四、五人一団となり浦上の神学校の裏に出るとさかんに燃えている。黒い雨が降り出した。ハンカチ、手拭い、ゲートルは救いを求める人々の止血に使つてしまつて既にない。看護婦が吾々一行にモンペをくれたのでそれで繃帯や三角巾を作り乍ら西山の水源地へ通ずる本道に出ると、家族の安否を気ずかつて「城山は？」「大橋は？」

と叫び続け乍ら坂道をかけ降りて来る長中、瓊浦、商業などの生徒に次から次えと出合う。こちらも「西山は？」「片淵は？」と同じ思いで問いかえす。のどがたまらなくかわいて来るが、お互に水をのむなとはげまし乍ら夕刻下宿に辿りついた。夜高木教授、国房教授、一級上の藤原君を訪ねたが何れも消息不明。硝子の破片がささつているので仰臥することも枕をすることも出来ぬ。室の隅にもたれて寝た。

十日　三十七度八分。朝高木夫人、続いて藤原夫人来訪、藤原君をさがし出す。県下の警防団が大学に援助に来る。

目を覚すと少し熱があるので一日寝ていようと思つているところに藤原君の奥さんに探しに行くから連れて行つてくれと頼まれ、水筒一つ持つて昨日通つた道を再び大学へ。八月の激しい日照りの下、知人の行方を求める連呼が山にこだまする以外は全く静寂、昨日までの工場の沈黙はその巨体と共に更に一層の無気味さを加える。突然「見よ東海の空明けて」と調子外れの歌声が精神科の裏の山手から聞える。あちこちで低いうめき声。露出した背中には白い膏薬が一面に塗られている。それらの人を励ましつゝ「藤原さーん、藤原君」と連呼すること数十回、やつと下の谷間から応答があつた。奥さんが何か叫んだが鹿児島辯なので僕には分らない。と転がる様にかけ降りて行つた。早速病院に引返しそこに居あわせた乗馬部の石川さんと担架を持つて迎えに行つた。手と目の不自由な藤原君を昨夜から世話していた足をやられた影浦内科の岩永と言う看護婦の方を先にと藤原君は言つたが、重症の方をと言うことで彼女を残して担架を二人でかついだが、倒れた家や崩れた石垣で足場が悪いとは言うものゝそれにしても余りに腰がふらつき握力がなくなつているのに我ながら驚いた。

十一日　角尾、高木、国房夫人と午後から大学へ。軍隊が後片づけの応援に来ている。疲労困憊す。

角尾先生、高木先生は外科の東側崖下の防空壕内に。国房先生は皮膚科の地下室に、藤原さんも崖下の防空壕に。患者の苦しみはますます強く、看護する方も多忙と疲労とで神経がとがつて来る。薬理のある助手が水を飲ませてくれと執拗にせがむので、やかましくて他の患者は甚だ迷惑。どこかに隔離しようかとの案も出たが、防空壕の一番奥なのでどうにも手がつかない。「皆さんやかましいでしようが、あとしばらく辛棒して下さい。あの人も今夜までには静かになるでしようから」と医者をして言わしめる程どちらもどうにもならない情況があちこちに繰り展げられていた。死と闘うこの一帯に元気な蚊が出はじめた。蠅はまだ居ない。

十二日　一日休息する。

十三日　高木先生宅を訪ねる。先生死去（十一日夜七時）とのこと、道の尾の大学分院へ。夜十二時すぎ帰る。

道の尾に大学の患者收容所が出来ており、夕方からそちらへ出かけ、吾々もそこで今夜は泊めてもらうつもりだつたが、患者だけでも既に收容しきれぬ程なので仕方なく夜道を片淵までとぼ〳〵と帰る。大橋から小川町にかけて沿道にはあちこちに死体を焼く火が見えるがもうその臭気にも馴れてしまつた。

十四日　朝三十九度二分、夜七度四分、市役所に高木先生の死亡届出す。

十五日　無条件降伏？国房先生重篤、川野君のうちに寄る。元気で治療にあたつている由。

十六日　午前四時国房先生死去。大音寺に葬儀を頼みに行く。園田君午後六時四十分死去。終列車で出発。

消毒、軟膏塗布、ズルフオンアミド剤、解熱、強心、鎮痛、ビタミンといつた平凡な治療で看護していた先生方、友人が続々と死亡。今朝から僕も下痢気味になつたので、赤痢にでもなつておつてたゞでさえ少い人手をとる様なことになつてはと思い熊本に帰るためまだ心残りの多い長崎ではあつたが急遽十一時の終列車に乗りこんだ。

（当時学部三年　熊本大学体質医学研究生理学衛生学研究部勤務）

日高和郎君の書簡

瀬戸口孝夫

一、まえがき

日高和郎君と私との交友の期間は、長崎医科大学入学の昭和十七年九月より僅か三年足らずの短いものであつたが、互に意気投合し肝胆相照らす、文字通り刎頸の交はりであつた。

苦難の時、悲歎の時、何かにつけて彼との交友の思出の数々が私を鼓舞し、激励し、慰めてくれる。しかも彼の思想や生活態度の一部は、完全に私の理想とするところであり、彼の精神は妙なる霊魂の糧の如く、私の精神を養い、私の生命の中に今も尚鼓動を続けている。彼は私にとり永遠の友である。

こゝに掲げた三通の書簡は、彼が昭和十九年十一月以来病を得て帰郷している私に与えたものの一部である。文中にあるケルネルの一詩とは、翌年二月、彼が病中に読み精神療法として試みたと言う白隠の夜船閑話を送つてくれた御礼にと、私が当時病床で読んでいたハンス・ヴオルハート編の詩集の中から撰んで贈つたもので、彼は私の訳の一部を彼なりに改めて示している。当時の日毎に激化する空襲のため、九州の西と南を結ぶ交通路も障碍されて、四月二十三日附のものが彼よりの最後の便りとなつたのである。

書簡の文中到るところに見られるように、実に彼は自然の中に自己の生活を没入させ、自然と一体とならんとする自然への深い愛と高い理想とに燃えていた。そして彼はこの理想を目指して絶えず努力し実践せんとする人であつた。かくて自然こそは、彼にとつて希望と理想を与え、病弱な肉体に勇気と生気とを吹込み、霊魂を呼び起す唯一のものであつた。彼は人生を、芸術を、医学を、そして総て一切を自然と人間との関係より出発させたのである。

「自分は一日一日より良くならんとして生活している。近頃街へ出るのが嫌になつた。何処か山奥の寺にでも自炊してもつと生活を徹底させてゆきたい」と何時か真剣に洩らしたことがあつたが、常に高いものに憧がれ、より偉大ならんがために精神的に自己を精進してゆくことこそ

彼の生活の根底をなしていた。そしてそのために、彼は世俗的なこと、従つて現実的なことには餘り執着を持たなかつた。彼の精神の奥には光り輝く理想の世界がひらけていた。それは単に観念的に現実を遊離した形而上の世界ではなかつた。飽くまでも現実の中に自己を徹底させて而も辯証法的に現実を超越せんとする、いはゆる東洋的無の境地であつた。これが彼の理想の世界であつたのである。それ故に、常に雑談を好み快活そうに見える彼が、一方、自から静寂と孤独を求め、芭蕉や良寛や一茶に親しまんとしたのも実にこのためであつた。この限りに於いて、彼は単なるイデアリストでもなくロマンチストでもなく、むしろ詠わざる東洋的詩人であつた。

最後に彼との交友の数々の思出の中より、一つだけを附記することを許していたゞきたい。

昭和十九年の秋、敗戦の影次第に濃く防空警報は絶えず出て餘裕のない日が多かつたが、ある晴れ渡つた一日、私は彼と青木武君との三人で、青木君の家から炊事道具を携えて甑岩へ登つた。途中谷川の瀬で炊事を済ませ、野菊の咲き乱れた木立の間の細途を辿り、やがてあたり一面薄の穂の白く波のようにざわめいている高原の頂上に着いた。遮る雲もなく白熱した太陽の眩しい射るような光線の下に立ち、透明な秋の大気に融けこむかのような紺碧の海と、青々と重巒した山々の下に白くくつきりと帯のように続く海岸線を俯下しながら、私共は戦争の苛酷さも忘れて自然の持つ雄大な美景を心ゆくばかり味つた。その時、日高君が叢の上に寝転びながら母校の寮歌を声高らかに歌い「あゝ、若しここにゲーテかバイロンの詩集を繙いている女性があつたなら、自分は無条件にプロポーズするであろう」と絶叫した言葉は、私の胸に永久に忘れ得ない青春の感激を残している。

蓋し、今にして思えば、私共の学生時代の不幸なる記憶の中より浮び上る唯一の悦楽の思い出であつた。

二、彼の書簡

昭和十九年十二月八日附のもの

蜜柑の香のたゞよう暖い長崎にも寒い冬が訪れて来た。ノートをとるペンを握る手がかぢかんでくる位になりました。臨講にもスチームが入るようになつたのです。外気の冷たさを想像して下さい。

先日の御葉書ありがたく拝見、兄の生活態度の偉大さに触れ得たようで嬉しかつた。その後の経過は如何ですか。こんなことを尋ねるのは愚なのです。帰郷して旬日をやつと過ぎた位でベシュベエルデが去るのは早すぎると思うのです。尋ねたいのは故郷の山河の生活に真に融け込んで心身一如の日々を送つているか否かです。……略……

試験は二十二日から二十六日迄でその後は一月七日迄休暇です。この休暇もかく時局が緊迫して大々的空襲でもあれば何時解消するかも分らない。二十二日、二十三日が法医で二十六日が医学的心理学です。やつとノートの整理が出来たところです。兄は今度の試験は延期した方が良いのではないかと思う。試験など何時でも受けられるものです。寒い冬にわざ〳〵試験を受けに来ることは静養の根本精神に反するものと思う。故郷に帰つてやつと生活に落付いたと思つた瞬間に、長崎での生活が走馬燈の如く回想せられるであろう。しかしそれと共に、学友と学業に対する無限の思慕を、意慾を力強く感じて「病身」と云うことに強い淋し

さを感じているようなことは、西郷精神の漲つている南の国に生を受けた兄にはないことゝ思う。しかし色々の生活の波調をヅルヒマツヘンしたところに偉大が生まれるのではないかと思つている。苦しみを敢て消すために快楽を観ずる必要は全くないと思う。苦しみは苦しみ、楽しみは楽しむ、ここに本当の人間の姿があり、本当の美と真があるのではあるまいか。

ツベルケルバチレンは飽くまでもバチレンと観ずるのが良いと思う。敢て否定するには及ばないのです。バチレンの本態を細菌学的にではなく、同じく時間と空間とを占める一存在として見極める時、何か科学を超越したあるひらめきを感じはしないか。甘酒のあの麹の「カビ」を愛し、バチレンを嫌うところに人間の淋しさがあるのではあるまいか。

病中僕は良寛や一茶や白隠等の書物に接する機会を得た。彼等の生活を覗ひ知ることも、我々科学徒殊に医学徒には大切ではあるまいか。理屈を述べることは僕は不得手なのです。僕は颯々たる白雲に、青空に、単純な自然に、生活の真意を求めてゆく医学徒なのです。

僕は今週内科のポリクリだつた。T先生に鍛われた。K先生の指導の方がより人間的で曖昧さがあるように思われる。T先生の機械論的方法は人間の自然への対立的考察に立つてはじめて成立するのだ。しかしこれでは医学は飽くまでバチレンに嘲弄されるのではあるまいか。

今一歩の向上、僕は日々これを求めて精進している。兄よ、如何。

十二月八日　大詔奉戴日の記念日に皇国の発展を祈念しつゝ兄の恢復を祈つてペンを擱く

昭和二十年三月三日附のもの

久しぶりに貴兄の元気なお便りに接し貴兄の面目躍如たるものを想起しました。

実は十二月試験終了後にペンをとつて「時局」と「安静治療」との矛盾に心を痛めている様子であつた貴兄に、杉正俊著「郷愁記」を哲学的にでなく純粋に医学的に批判して「絶対安静とは肉体と精神の安静」であること、心身一如である故同時的ならざるを得ないこと、即ち結論として郷愁記は医学的に見て肉体の安静は保ち得ても精神は安静どころか心痛そのものなる故、郷愁記的療法は医学的に認められない、という意味の便りを書いたが自己反省をやつてみて内心忸怩たるものがあつたのでそのまゝにしておいて、「夜船閑話」の方が僕の云うことを明瞭に語つてくれるものと思つて送つた次第でした。

その後肥満した由喜んでおります。僕も二月二十日より十日間帰郷して三月二日に帰崎した次第でした。風邪で身体に何んとなく元気がなかつたのでしばらく帰省静養して、恢復したので帰崎した。その時貴兄の便りが僕の机の上にあつたので直ちに拝見しました。

学校の方は相変らずです。三月一杯で講義が終り四月より卒業試験の予定になつております。本日その試験の日割、グループの組合せも決定しました。未だノートの整理も出来ない有様で、大学の試験としてかくも忙しく追つかけられるようでは学の蘊奥どころか末梢の方も理解出来ない。しかし学も学そのもののために存在する時代は過去のことだつた。今こそ学は醜敵を撃ち破るメトーデとして初めてその生命を賦活されるように感じています。しかもこれが正しいと信じています。

大学新聞は読んでいますか、なつかしいですね。苛烈な時局の中に何

んとなく心の奥底を流れる曖昧さをこの新聞から味うことが出来ます。出陣学徒の手記、杏児、台務理作氏や柳田謙十郎氏の論説、その他の記事、如何なる生活にしろ、その生活に徹し得て初めて人の心琴に触れ得る内容を持ち得るものです。僕達はこの徹すると言うことに缺けているので不平と不満に苦しんでいるものと思つています。無の境地です。色即是空、空即是色の世界です。これが理想の世界です。この世界は東洋人にして初めて可能になつた世界です。

下宿の窓辺の梅が咲き始めた。自然こそ虚偽のない美しい世界と思つて眺めています。ケルネルの詩を思ひ浮べつゝ。

貴兄の名訳は再三読みかえしました。結論は、西洋の詩は西洋の言葉で理解するのが一番味いがある。美しい韻律が破壊され易いからです。浪漫派に属する彼の詩は美しい。俗事にあくせくとして日々を送つている我々には、彼の詩により我々の世界と別個に美しい世界の展開を啓示してくれるようです。満員電車の吊革にぶらさがつてかく思いました。国破れて山河云々の言葉も想起しました。ケルネルの詩の肯定はたゞちに祖国愛に連なるものです。詩の深遠さもここにそのαとωがあるように思つています。拙訳笑覧。

(一) うましくも汝は行く恋人の腕に
いとも幸多き男子ぞ。
吾は行く唯一人、されど共にあり
吾を幸はふものと。

(二) そは碧なす聖なる空
百花燎乱の野中
淋しくも夜鶯の囀る
ふりし夜半の森。

(三) そは悠々去り又来たる雲
湧き出づる水のせゝらぎ
波濤なす緑の芽生え
それと身軽くも舞ふ鳥。

(四) 華奢な婦人の腕に抱かれて
汝は憩ふ香ぐはしき薔薇の唇に。
唯一人吾は行く、黄昏るゝ涼風に
マントひるがへし。

(五) 道行く人の影みえず
鳥は木影に憩ふとき
吾は行く暗き夜途を
明るき夢路たどりつゝ。

最後に自重自愛一日も早く帰崎あらんことを祈る……以下略……

四月二十七日附のもの

先日の便りは餘り取急いだもので用件ばかりで本当に失礼しました。丁度難関中の難関小児科の試験を目前に控えていたので悪しからず御許し下さい。

其の後調子は如何ですか。気候も良くなりましたので日一日と元気も出てくることゝ思つています。大学の運動場の一角に立つている楠の若葉が無限の希望を秘めて萠え始めた。澄んだ青空に自然のみが——造化の神のみが出し得る黄金色に輝いている。運動場にはクローバが緑の床

をのべている。日夜激化する空襲の中にも自然はその美しさを静かに保つている。そして悪戦苦闘する人間に無限のあるものを抱かせてくれるようです。「国破れて山河なし」、私はこの大学の一角に人の目につかず静かにしかも恐らく大学の歴史をその年輪に刻み込んでいる楠の若葉に、この「国破れて山河なし」の一句をしみ〴〵と味つた。それと同時にこの若葉は無限の希望を与えてくれる。無限への憧憬の過程のさ中に真と善と美があるように思えます。医学もそうだと思つています。治療に限界があると観じた時そこには退歩があるのみです。「限界」を通りこし無限なるものへと撓まず精進を続けるところに発見があるのです。自然は人間の懐に抱かれたいのです。同時に人間も自然の懐の中に横たはりたいのです。かくして神秘は人間が撓まず精進するところに、無限への活動の中に啓示されるように思えます。コツホでもエールリツヒでも、皆これらの人々はかゝる類型の中に含めても良い人たちばかりです。勿論僕もこの類型に入り得べく努力しているのですが、タートよりデンケンが先行する傾向があつて宜しくないと思つています。……以下略

× × ×

以上三通の手紙を一部割愛して掲載致しました。被爆当時の生々しい記録によれば、彼は両親をはじめ今まで世話になつた人々に深謝した後、従容として瞑目したとあります。死に臨んでの誠実なる彼の面目躍如たるものが偲ばれます。

遥かに在天の君の霊魂の冥福を祈る。

（当時学部三年、現在　解剖学第一教室勤務）

その日お会いした方

高橋徹郎

「安らかに眠つて下さい、あやまちは二度と繰り返しませんから」之は広島に出来た原爆死亡者の慰霊碑に刻まれた碑文だと言う。一体誰が誰に向つて言つている言葉かさつぱり理解出来ない。忍び難きを忍んで、誰がいかなる誤ちを仕出かしたのか識らないと私が譲歩しても、唯これだけの事はいつどこででも言えるだろう。あの日瞬時にして散つた十万の方々の魂魄に、「安らかに眠られてたまるか」と、思えば思う程感情の昂ぶりを抑え得ない。こう言う馬鹿げたものが長崎に出来なかつた事は私にとつてせめてもの慰めである。

当日私がその最後を見届けた方の数は凡そ二十人、その中でも最も思い出したくなくて却つて一番先に脳裡によみがえつて来る幾たりかの人が居るけれども、之が小説でも脚本でもなければ更に筆にするにはあまりにもむごすぎて瞑目のほかはない。

× × ×

此度被爆十年祈念のための出版に当り、その日お会いして遂にそのまゝ二度とお目にかゝれなくなつた学内三、四の方々のその日の思い出と私の目に見た一端を書かして頂きます。

当日爆弾投下の約二十分前から学内に居なかつた私は、諸先生、先輩、同友に被爆後お会いした数が少く御遺族に対して詳しい御報告の出来ない事を残念に思います。

昭和二十年八月九日第一時限は故角尾先生の臨床講義で之が先生の最後の御講義となりました。嘗て学長室に於て、真夏の夕まぐれ、行水でもなさつたのか素裸に褌一本と言う学長先生から勉強とはこうするものだと教えて頂いてから十年あまり夢の如く無為無食に終りました。

その後昼迄の時間私のグルツペは皮ふ科の北村包彦先生の外来であつたのが、丁度その日確か専門部学生の試験のためだつたか我々は半ば自由の状態となり、此の時間中、午後二時迄二時間あまりを利用して長与から入る山の中へ出かけたのが遇然の逃避となつた。

十時三十七分かの長崎発列車が、少し遅れて浦上駅を発車したのは四五分を過ぎたかも知れない。被爆は道の尾を過ぎて長与に至る間であつた。目を射た白色閃光から約一秒後の爆風で日除けは飛び、便所の戸はそのまゝ吹き倒れ座席は傾き、その中で人が床の上を這い廻つていたのを記憶する。人々は原爆を知らず、すべて汽車が爆撃されたものと思つた。現在では万人承知の原子雲は真夏の昼近くの晴れ渡つた上空へギラ〳〵と輝きながら物凄い速さでグン〳〵上昇して行つた。人々はポカンとして見ている。たゞそれだけで何事もなかつた。三、四分の後に天日を覆うてたそがれの様に、火の粉を混じた黒煙が東南に当る山の端から押し寄せて来る迄は。

此時はじめて攻撃されたのが長崎でどうやら新型爆弾らしいと言う声を聞いたが実感としてはさつぱり分り様がなかつた。殆んど小一時間も過ぎた頃第一の避難者が三菱のトラツクに乗つて街道に現れたが乗つていたのは四、五名で何れも動員学徒の焼けたゞれた姿で、恐らくその運転手が救つて脱出したのであろう。彼も同じ様に大きな火傷を負つていた。皆口をきくのも大儀らしく見えたけれどもこの人達に依つて大凡の事を知り一散に長崎へと走つた。

その地点からは鉄道を帰るより山を越えた方が大分近いと言ふので山へ入つて迷い込み困却したが、その山道で初めての大学関係の方に会つたのは一、二年の頃から病理の教室でよく面白い話を聞かされた鼻の下に小さい髯を生やしていた上手な画工さんでした。途中で折つたらしく青竹を杖にして、頭はいつも蓬髪にして居られた様に思ひますが、その髪は灰を被り肩から頬へ傷つき衣服の一部はボロ〳〵になつて「何もかも滅茶苦茶にやられた。きつうしてたまらん」と言つてトボ〳〵と行かれた姿を思い出す。その頃から傷ついた避難者が続々とつゞき長崎の大半が一瞬にしてつぶれた事を知つた。

峠を越えて漸く恐らくは川平と言う部落のあたりと思われる地点迄来た時はすでに午後二時はあつたと思うけれども、旧道の尾街道は防諜のためか警戒厳しく一切の交通を許さずその先如何なる経路を通つたのかはつきり分らないけれども、それから先はさながらの地獄絵で、迷える霊に対してもその様を書く事は出来ない。しかしこの目で見、この手で引き出し、この背に負い、その日の一番長い時間をそのあたりで過したのである。

次に会つた学内の人は附属医専の学生二人で一人は比較的元気だつたがもう一人の方はすでに立つ事が出来なかつた。会つた場所は現在の本原三丁目の少し北側であつたがその人達は螢茶屋の人で、特に悪い方の人は「どうしても死ぬ迄に帰り着きたい」と言うのが、その後「もう之以上頑張れない」と言う迄の唯一の言葉だつた。ゲートルを解いてしつ

かり背中に縛り一人を支えてその人達が今迄逃げて来た道を逆戻りしたがまるで虫の這う様にもどかしい速度であつた。畑の中にそのまゝ焼けた南瓜を腹につめ込み一心に帰つたけれども浦上天主堂の後の岡に辿りついた時はすでに夕日は落ちかゝつていた。そしてそこで遂にその人は背中に縛られている事の努力が尽きて了つたので降ろした。

丁度その時近い所で赤ん坊が泣いているのに気がついた。場所はすぐ傍の畑の中で、畑の手入れの最中に被爆したらしい母児であつた。お母さんはすでにこときれ、赤ん坊はそのおつぱいにすがつて泣いていた。沢山の遺体の中を通つて来たけれども何とも言えない気持になつて、恐らく皆同じ気持になつたのであろう、どちらからともなくそこへ坐り込んで了つた。

しかしその頃にはあちこちに担架を持つた無傷の救護班が動いている姿も見えてお互に安堵の気持でその人達と別れたが別れ際に握つたその人の脈は恐らく瑩茶屋への念いを叶えさせなかつたのではなかろうか。

それから私は暮色の漸く濃くなつた岡の斜面を降りて行つたが大学の運動場の向ふ側に七八人の人がいてしきりに誰かを呼んでいた。少しずつ近付くに連れてそれは高木純五郎先生を探している事が分つた。更に降りると「オーイ、此処だ、高木はこゝだ」と言う先生の御声が聞かれた。しかし岡の私には聞えるが運動場の人達には聞えない。先生は天主堂の南側の崖下を流れる小川の底に倒れて居られた。私はその場から声の限り運動場に呼ばわつた。それがやつと通じて先生がその中の一人の背中に負はれるのを見穴弘法へ向つた。その後外人墓地から西坂の山手を経て東へ迂廻しお諏訪の山から市内へ入つたのは九時過ぎで県庁から発した火が中島川を挟んで必死に防がれている最中だつた。そしてその後一ケ月間その焼け跡では毎日毎日焼け残りの材木を積んで原子病の犠牲者を焼いたのである。

× × ×

„Ja, meinem Herzen am nächsten sind jetzt die Verlorenen, die, von denen ich weiss, dass ich sie nicht retten werde.“

(Hans Carossa)

(当時学部三年　現解剖学教室勤務)

八月九日

田中　稔

『光陰矢の如し』月日の流れるのは速いものであの無慙な生地獄に九死に一生を得てからもう十年にもなる。当時南国の長崎は眩しい夏の日光の下に、海は碧く、山々の緑は濃く、夾竹桃、カンナ等今を盛りと咲き乱れていた。

昭和二十年八月九日。早朝発せられた空襲警報も解除となり、警戒警報に入つたので一安心して各自の仕事にたずさわつていた。大学では講義、病院では診療が始められた。私は医学部三年で角尾学長の講義終了後、永井先生の放射線学の時間であつたが一週間前の爆撃で配電故障のため休講となり南講堂で手巻煙草をふかしながら親友今福、布引両君と

六日の広島爆撃の話をしていた。

『あの新型爆弾は物凄い威力だそうだ。一瞬にして広島全市がすつ飛んだと言うことだ』

『原子爆弾が完成されたのか知ら。』

『次に長崎がやられなければよいがな。』

下宿の昼食に帰るのも少し早いのでこんな会話をしていた時、突然飛行機が急降下接近して来るような唸音が聞えた。『そら来た皆んな伏せろ』私は怒鳴つた。その瞬間大爆音と共に周囲は暗黒となり、気付いた時は重いものが私の背に積み重つていた。

かろうじて頭を擡げ左手で頬を撫でて見るとぬるつとする。直感的に「血だ、やられたこれは至近弾に違いない」と思つた。それと同時に自分の生命のあることを再認識し、逸早く脱出しなければ焼死の浮目に逢わねばならぬと考え、全力を出して脱出せんと試みたがどうしても左足が抜けないので遂に靴を犠牲にして這い出した。辺りは次第に薄明くなつて来た。腕時計は十一時二分で止つていた。今迄すぐ傍で話合つていた親友の姿は見えない。よべども返答はない。やられたのか、それとも先に逃げたのだろうか、気に懸けながら屋外に向つて飛び出した。

講堂と云わず廊下と云わず到る処白壁は落ち、床は抜け、窓硝子は総て飛散し、机椅子等は完全に分解され、直前まで浦上の丘に聳え立つていたクリーム色の美しい医大附属病院も、鉄筋コンクリートの外部のみの哀れな姿になつてしまつた。

起きたり転んだりしながら裏庭に出て見ると、蒙古の黄塵万丈のそれと似て周囲がよく見えない。先程まで青々と繁つていた草木も、芝生も、畠もすべて吹飛んで赤土が露出している。木造建築は潰され、石塀は屏風倒しになり、「助けて呉れ」の悲鳴があつちこつちから聞え、血達磨のようになつて脱出した人、火傷で皮を剝れて赤蛙のようになつた人、衣類は吹き飛ばされて真裸体で死亡している人、無数の死体が到る所にごろ〳〵していて目を覆わんばかりの残忍な光景、将に地獄の景が展開された。

医専学生に肩を貸しつゝ裏山に登り瑩茶屋方面に逃れたが、途中数箇所に山火事が起つていた。山腹に沿う路は前も後も敗残兵のような多くの人々が長い列を作つていた。山の上から街を見下すとあつちこつちに火災が起りガスタンクは爆発し赤い火、青い火が天を衝いて大きな坩堝と化していた。浦上天主堂の高塔は無慙にも中途から折れ、下宿のあつた上野町もすでに猛火に包まれてしまつた。

其の夜は諏訪神社の高台から炎々と燃え、何時消えるとも知らぬ長崎の街を脚下に見て実に感慨無量であつた。幸いにしてあのむごい火傷は負わなかつたが頭部、頸面、左前膊等に計十数箇中の硝子傷を受けたので有合わせの白布で繃帯をし、原爆第一夜を諏訪神社境内の防空壕に明したが、色々とお世話になつた諸先生や学友の顔が走馬燈の如く脳裡を掠めてまんじりともする事が出来なかつた。

（当時学部三年　現東京都職員明石病院勤務）

Phoenix

新田一郎

あれから十年。悪夢にしても余りにも痛ましいあの日の事を想い出しては、今でも私は慄然たらざるを得ないのである。

文字通り、青天の霹靂、突如の一大閃光、巨大なる爆圧、そのあとは呪われた業火の如く浦上一帯は一晩中燃え続けた。

昭和二十年八月九日午前十一時二分。

私は精神科のポリクリがないので、中講堂で学友と談笑していた。と、異様な爆音を聞いた。危い。伏せんとした瞬間、ピカツ!!両手を当てがつた眼に鋭い閃光が射し込んだ。アツと思う間に、物凄い目に見えない大きな力が、私の五体を床に叩きつけた。同時に鉄筋の建物自体がダツダツダツダツと激しく振動した。山鳴の如き響のこだましたあとは、鼓膜を聾して暫く何物も聞えない。

何分経過しただろう。恐らく十分とは経つていない筈だ。やつとの事で抜け出して、裏山に馳け上つて振りかえつた私は呆然自失した。見ている眼の前で我が愛する大学は、我が敬愛措かざる恩師、学友は、一瞬にして一団の炎と化しているではないか。

原子雲と名附けられる巨大な雲を仰ぎ見、浦上一帯を舐め尽した紅蓮の焔を眺めて、奈落にでも突落されたかのような絶望を抱いて私は金比羅山の中腹でぶつ倒れてしまつた。

今にして想えば呪われた第二次世界大戦の最後の日。長崎浦上の聖地に燃え上つた大いなる燔祭。それは余りにも痛ましいものだつた。犠牲という言葉で片附けるには、それは余りにも大き過ぎた。

此の事実を知る人は余りにも少い。私達、幸いにして九死に一生を得た者は、この原爆の恐怖に就いてもつと〳〵声を大いにしなくてはならない。原爆は愚か水爆までが話題になつている現今、科学の悪用は人類を破滅に導くという事を唱えたい。長崎の浦上の空に炸裂した原爆をもつて永久の終止符としたいものである。

一度は完全に廃墟と化した長崎浦上原頭から私達の手でフエニツクスを飛びたゝせたいものだ。

（当時学部三年　大阪市医学部産婦人科勤務）

追憶

秦野滋

今年もあのグビロが丘に例年の様に沢山の人が集まり、花を捧げ、頭を垂れ、当時を回想して涙を流した。

既に早や十年の歳月が過ぎ、年々同じ八月九日に集まる人々の数に変りはあつても、想いは変らず、大学を見下す丘の一隅に立てられた慰霊碑も亦、宿命の地獄の業火に散華した千名に垂んとする人々の無量の思いを声なく語つている様に思われた。

この十年の間に当時の記憶も大分薄らいで来てしまつたが、奇しくも

其の日、朝から長崎を離れてあの凄絶極りない地獄絵の世界から免かれることが出来た私にとつては、身を以てその渦中に巻き込まれることもなかつたためか、尙更当時の情景は生ま〳〵しく脳裏に焼きついて、私の生命のある限り一生涯忘れることは出来ないであろう。

昭和二十年八月九日、いつもの様にゲートルをつけ、教練服を着たまゝ寝ていた私は六時頃眼を覚した。七時頃警戒警報が発令になつた。朝からカン〳〵照りつける恨めしい様な良い天気。

私は前々から思い乍ら出来なかつた衣類や医学書類の疎開を、慢然と、実に只慢然と思い立つた。前日の八月八日の大詔奉戴日に角尾学長から広島の様子を聞き、大学も近く鹿島中学に疎開する予定で、学生も何時でも動ける様に身の廻りを整理して置く様……と云う話も確かにその時慢然と疎開する気持の底にあつた。

庭の片隅の形ばかりの防空壕に埋めて置いたのを掘り出し、郷里の家が薬局なので持つて来ていたビタカンフアー、ロジノン、モヒ類をも石油箱二ツに詰め直して、之も買出し用に持つて来ていた自転車に積み、自転車のハンドルに今考えても妙な話であるが、靴類を短靴やら、ズツク靴やら全部ブラ下げて七時半頃、山里町北部にあつた下宿を出た。自転車を押し乍ら大橋を通り住吉を過ぎ、丁度、今も残つている道の尾の手前の六地蔵前に差し掛つた時、空襲警報が出た。

私は道端に自転車を立て、地蔵さんの傍らに腰を下して考えた。さてどうしたものか。毎日の様に出ている空襲警報である。直ぐ部署に着かなければならないが、今から帰つても病院迄は四十分は掛る。直ぐ解除になるかも知れないし、十時からポリクリが始つても私達は小児科で、四年生が予診をとつた残りがないと私達は新患の予診がとれない。配給のぞみをキセルに詰め一服し終つて、折角もう此処迄来たのだからと云う気持が先きに立つて、慢然とサボルことに決め、目的地の時津村に向つて又自転車を押して行つた。

この時が私の運命の一つの岐路だつたのであるが、それから数時間も経たぬ後に、あの凄惨な情景が繰り拡げられようとは神ならぬ身の誰が予測し得たであろう。

長崎の東北方一里半程も離れている時津村に着いたのは十時頃だつたと思う。

原子爆弾が落ちた時、私は大学の艇庫の鍵を預けてあり、以前から時々行つたことのあつた堀口さんと云う家の戸外に居た。

殆ど雲一つないと云つてよい真昼の空が、突然、稲妻が閃く様に一瞬輝やき渡つた。何か判らないが胸を衝く予感があつて、思わず地上に伏せた。何事もない。爆音も聞えない。数秒、十数秒たつて顔を上げようとした時、だしぬけに耳もとに雷が落ちた様な物凄い空が引き裂ける様な爆発音がし、頭の上をザーツと風が吹いて行つた。

見ている前で艇庫がグシヤリと潰れ、田や畠の肥料小屋が長与村の上へ順ぐりにバタ〳〵と倒れて行つた。

ふと気がつくと長崎の方の空に真白な入道雲が見る〳〵拡がつて大きくなつて行くのが見えた。微かな爆音がし、高い〳〵上空を銀色に光る点の様なB29が一機頭上に見えた。

人々が集つてガヤ〳〵云う。誰も何が何やら全然見当がつかない。兎に角長崎の方から風が吹いて来て、長崎に面している方の窓ガラスが皆

割れたのだから、長崎に何事かあつたに違いない。私は昼食を食べて直ぐ長崎に帰ることにした。出掛ける用意をしている所に村の人が私を呼びに来た。

何先生と云う開業医の家にトラツクで怪我人が運ばれて来ているから直ぐ来て呉れと云う。行つて見ると、マグロでも積む様にゴロ〳〵重ねられた怪我人がトラツクの上でうめき叫んでいる。聞くと三菱兵器工場に居つた人達らしい。何先生は道の尾に往診して留守だつたが間もなく帰つて来られたが、丁度帰省して居られた古屋野外科出身の亀井先生も馳けつけられて、私も一緒に手伝い時間の経つのも忘れて治療に当つた。次々に怪我人が運んで来られるので、長崎に戻ることも出来ない。

皮膚がペロ〳〵に剝げ、焼けたゞれた人々が多く、男か女か判らないのもあり、口々に浦上のガスタンクに直撃弾が命中して破裂したのだと云つていた。勿論中には既にこときれたものもあり、息のあるものは例外なく、水、水を呉れ、と叫んでいた。

長崎の上空の白い雲は黄色くなり、褐色となり、やがて空一面どすぐろくなつて来て、夕暮の様な一種異様な景観を呈して来た。

七時頃と思うが、兎に角、大学に行こうと思つて、負傷者の一部を万行寺と云う寺に移し、自転車で飛び出した。道の尾附近に行く迄に、皮膚の剝げた人相も判らない人や、怪我をした人が、杖にすがり、或はよろ〳〵とよろめき乍らゾロ〳〵来るのに何度も会つた。聞くと住吉から先きは家が倒れて道を塞ぎ、道路も何も判らない様になつているから迚も長崎には行けないと云う。怪我人達には時津村の万行寺に行く様に話して、道の尾駅を過ぎて見て驚いた。

右は稲佐山の山続きから、左側は穴弘法の山続き迄谷の様になつている。城山から浦上一帯一面火の海である。黒褐色の煙りは長崎上空一帯を覆いその情景は何とも形容の言葉がない。之では稲佐山の峯づたいにでも行かなければ迚も長崎に入れないと思つて断念し、再び時津に帰り徹夜で負傷者の治療に当つた。電燈はなく、提灯のあかりで縫合したり、副木を当てたりした。

十日の朝、空が白みかけるのを待つて、今度は長与村の駅附近から浦上水源地に抜ける山道を通つて、今の昭和町附近に出、旧神学校の方から浦上天主堂の方へ降りて来た。長与からの山道は以前騎道班に入つて居て、よく遠乗りに来た道であつたが、其の途中、峠から長崎の街、浦上一帯を見渡した時は呆然として言葉も出ない程のショツクを受けた。真先に見える筈の天主堂がない。大学の基礎の建物が全然ない。只一面の焼野が原……。長崎の港迄何一つさえぎるものもない。

浦上の天主堂を過ぎ、大学のグランドを通り、薬専の水タンクの傍で故永井教授に会つた。頭に繃帯をして居られ、ソ聯の参戦を報せて頂いた。学生も何人か居た。道の途中も、大学に着いてからも、焼けたゞれた屍体がゴロ〳〵転つていた。不思議に涙も出なかつた。

救急袋から出して附近の人達の手当をして病院の方に行つた。

神学校から降りて来る時、大学の裏山から穴弘法にかけて、無数に点々と白いものが畠の中に見えていたが、近付いて見ると、皆それは医局員、学生、看護婦達がイモ畠に倒れている姿であつた。小児科の裏の入口にも学生が五六人倒れてをり、佐野教授が色々世話して居られた。高瀬教授も元気に馳け廻つて居られた。外科の裏に行くと古屋野教授が居

られ、兎に角裏山の怪我人を降す様に云われて、丁度居合せた耳鼻科の江上講師と一緒に担架で、頭から顔から一面火傷をして居られた石崎助教授を先ず見つけ出して降した。それから裏山に上り降りを幾度び繰返したか判らない。知らぬ間に暗くなり、其の夜は外科の附近の建物の中で寝たが、籔蚊と、興奮とで、殆ど眠れなかつた。翌十一日も同様に過し、怪我人運びと水運びをしている中に、学部四年の石川武彦氏に会い、時津村に同伴した。石神氏も時津村に辿りついて私達と一緒になつた。

其後は時津と大学と行つたり来たりし、同じ下宿だつた二年の津和惠吉君が長与から連絡して来て連れに行つたが、彼は其後血便を出し始めて十七日に逝つた。病理教室から屋根を破つて這い出し、一旦は元気の様であつたが、ロヂノン、カンフル等の手当の甲斐もなく、本堂の一隅で永遠の眠りに就いた。

万行寺の本堂一杯になつた患者は、迚も一日に一度のつけ替えも出来ない程で、真夜中に提灯のあかりの中を高熱のために脳症を起し、うめき、叫び、果ては血だらけの繃帯のまゝベラ〳〵に剝げた顔を眼鼻口だけあけて油ガーゼを当てた患者、二人も三人もフラ〳〵とさまよい歩き、這い廻る有様は、これが現世のものとは到底思えない程の凄惨極りないものであつた。朝になると、鐘撞堂の下に幾つも〳〵屍体が並べられる日が続いた。殆ど徹夜が続き生きている身も辛かつた。

ラヂオも無く、新聞も来ず、デマは乱れとび、終戦を確実に知つたのは十七日だつた。

二十何日か、道の尾の岩屋倶楽部に居られた角尾学長が亡くなられたのを人伝てに聞いた。張りつめていた気持が、桶のタガを外した様にガタ〳〵に崩れた様な気がした。悄然と汽車に乗つた。

郷里の仙台迄一歩でも近付きたい気持から、デツキにブラ下り、機関車の前部に乗りして、小田原で兵隊さんに握飯を御馳走になつた外は、殆ど飲まず食わずで四晩五日目の夜遅く家に辿り着いた。靴はバク〳〵に破れて縄で巻き、シャツとは名ばかり袖はなく、四合瓶の栓のないのを細縄でくゝつてぶら下げて学生乞食そのまゝの格好だつた。

帰つて一週間か、十日程経つて少し気持が落付いてから、色々なことを考え、前途に希望も光明も見失い、再び大学に戻ることはあるまいと思つても、仲々諦めがつかなかつた。放心と虚脱の幾週かを郷里で過した。

十一月頃迄、遠い故もあつて大学の様子は全然判らなかつた。その頃同級の松崎から講義が始つていると云う報せがあり、私は直ぐ長崎に出て来て、級友の消息を始めて詳しく知つた。原爆直後長崎に居る間は誰がどうなつたものやら一寸も判らなかつた。併し級友の半分も出て来ては居なかつた。十二月に入り休暇になつて家に帰つた。そして翌二十一年二月、大村海軍病院に大学が移つたことを知り、再度西下した。

その前、当時は食糧事情を理由に大学間の転学を認める旨が新聞に出て、周囲から近くの東北大学に転学する様すゝめられたが、廃校になつたのなら兎も角、母校がある上は迚も自分だけ転学する気持などなれなかつた。この時も私の運命の一つの岐路だつたのであろう。

やがて大村での学生生活が始つた。生き残つた者は皆集つた。講義、ポリクリ、新らしい希望に満ちた生活が始つた。全寮制度の様で、環境も申し分がなかつた。夜は死んだ級友の憶い出話が幾度び繰り返された

ことか。平和な日々が続き、四月に入り休暇になつた。大部分の学生は帰省したが、私は遠いので寮に残つた。

・そこに降つて湧いた様に突然に諫早海軍病院への移転問題が起つたのである。私達学生には事情は判らなかつたが、追出される破目になつたことだけは確かだつた。学生は当時残つていたのは鴨打君と私だけだつたが、愈々移ることに決定して、四月十八日トラツクに米、畳、毛布などを大村病院から借りて各科医局員と一緒に初めて諫早海軍病院に下検分と先発隊を兼ねて来て見て驚いた。

全く病院とは名ばかりの幽霊屋敷である。寝台の形をしたものはあつてもマツトは引き裂かれ藁だけが散乱し、電燈のコードも、硝子も全然ない。大村の環境設備が比較的良かつただけに、皆悲憤慷慨やる方もなかつた。併し致し方もなく、設営して整理することになり、私は其の晩から板の間に畳を敷いて泊り込んだ。各科からは交替で整理に来ることに決り、二十人位宛来ては方々の片付けや整理をしたが、始めは釜も鍋もなくて大きな海軍のヤカンで飯を炊いたりした。後では杉田老人が来てやつて呉れたが、それ迄の苦労は大抵なことではなかつた。

木戸、荒木、原、柴田助教授、薬専の横山教授や、赴任されたばかりの中沢教授等も泊り込まれて色々指揮をされていた。

五月十一日より診療開始と云うことも決つて私達の作業は一段と拍車をかけられた。近くの村から作業員が連日四五十人も来たが、事務当局の責任者は誰も来ず、夕方賃金を支払う段になつて長崎に電話したり、転業紹介所と交渉したり、色々心配させられたが、併しどうにかこうにか診療開始の段取りに漕ぎつけられることが出来た時は、貧弱な汚い病院ではあつたが、それはそれなりに床を水で洗い流しなどして、兎に角一応の形が出来て嬉しかつた。

私達は学生本部を作つて、集まる学生や、新入生の宿舎の世話をしていたが、当時の新入生は陸士や海兵出身者が多く、落付く間も無く大村病院や、元の航空隊跡に机や椅子、各科の荷物の運搬に連日トラツクで五回も六回も往復し、在学生と共に実によく仂いて呉れた。あの当時は全く全学生が一丸となつて各科の医局員の指示の下に精魂を尽して協力したものであつた。

確か五月二日と記憶するが、別掲の檄文を今は亡き級友の渡辺信近君と稿を練り、諫早分院の玄関に張り出して学生の奮起と協力を願つたのであつたが、当時の悲壮な意気込みは今になつても尚偲ばれてならない。

其後は毎年の様に浦上の焼跡の整理が学生の奉仕作業によりなされ、遂に二十五年に至り待望の浦上に復帰出来たのであつたが、原爆後十年の今日、漸くにして大学本来の面目を取戻して、嘗つて待ち望んだ真に明るい将来が確実に現実に近いものとなり、更に希望に満ちた毎日を過しつゝある事を思うと、只々感慨無量、万感胸に迫るものがある。

当時、自分が怪我一つせずに生き残り、大学の裏山を担架を持つて馳け廻つた頃は、自分の身が無事だつたことが呻き叫んでいる人々に対して申訳けない気持で一杯であつたが、其の後のことを振り返ると、生き残つた私にも何か残された務めがあつたのであろうし、又今後もそうであろうと思つている。

あたら春秋に富む身を浦上の野をくれないに染めて散華した先輩、学

友の魂の平安を心から祈り、永久の平和をこい願つて追想の筆を擱きたいと思う。

（昭和三十年八月十五日記　当時学部三年　現調外科勤務）

檄

新入学及び在学の全学生諸君

我々が愛する母校長崎医科大学は昨年八月九日午前十一時二分、忘るべからざる原子爆弾の一瞬の閃光と共に、荒涼たる廃墟と化し、角尾前学長以下教授学生其他千名に垂んとする尊き生命を失いました。

呆然たる虚脱的絶望の中に起つた悲痛なる敗戦と打続く社会的大混乱の渦中に彷徨いつゝも、我々の母校は敢然として再建の努力を継続して来たのであります。

本年二月から大村市に一時安住の地を見出し、希望に満ちた勉学も僅かに二ヶ月、依然たる官僚の頑迷と、些々たる個人的感情のために突如たる移転命令の儘に、当時無人の廃屋たる本院に四月末日を期して移らざるを得ませんでした。是が非に破れ、感情が理性を圧伏する悲しむべき運命が、今尚我々を左右しているのであります。

祖国敗亡の今日、敗戦の窮乏如何に甚だしく、再建の障害如何に数多くとも我々の務めは、我が眼にて視、我が耳にて聞いたあの凄惨極りない地獄図より高らかに、我々の不死鳥を飛ばせることでなければなりません。精神と肉体に於けるバーバリズムによつて敗れた我々は、各自の道義的自覚の上に立つて、創業の苦しみの中に創造の歓びを求め、自主的に明るく美しい、そして正しい自由に満ちた大学を創るために努力することが、死んで行つた先輩、学友に対する我々の唯一の餞けであり責任であると思います。

戦時たると戦後たるとを問わず、如何に困窮混迷の時代、如何に変幻極り無き世相の中にあつても真理は遂に真理であつて、一点一劃も異る所はありません。

人間社会に於て、無私誠実が尊いものであるならば、我々の夫れを大学のために捧げましよう。努力精進が尊いものであるならば、我々のそれを大学のために捧げましよう。我々の精神と肉体に於ける最も善きもの、最も美しきものを、各々が大学の中に結集して一日も早く過去を凌いで立派なものに仕上げようではありませんか。戦時中、祖国に対して若き情熱と力の全てを捧げたと同様に、今此処に漸く安住の地を得、新らしき希望に燃えて立上らんとする母校の再建に、再び夫れを捧げようではありませんか。

勿論、学生の本分は勉学であります。而もその勉学は生涯を通じての全人間的努力であり、精進でなければなりません。殊に医師たるべき我々の学生々活はその本来の第一コースであつて、単なる受動的聴講者、資格獲得のための受験者ではありません。

大学の最重要なる構成員として大学本来の機能を十二分に発揮するために、我々の責任と自覚の重要性を改めて深く認識して欲しいと思います。

殊に新入学の諸君は大学の現状に就て失望や落胆を感ずることでしよ

う。併し祖国敗戦の現状が如何に悲しむべきものであつてもそれが冷厳なる事実たると等しく、我々の大学も現在最も不幸なる現実の中に立つているのであります。

至難なる再建の業を此処迄漕ぎつけるだけでも、全学を挙げての美しき協同と偉大な犠牲的精神が如何に大きく仂いたことでありましようか。

此の機に当り、我々は新入学の諸君に対しても衷心よりの協力を期待するものであります。

大学は真理探究の殿堂であり、我々を俟つて為さるべきことは眼前に山積しています。

全学の学生諸君、心を協せ、手を執り合つて共に学び、共に仂きましよう。明るく美しく、そして正しい自由に満ちた我々の長崎医科大学の建設のために。

昭和二十一年五月二日

長崎医科大学学生本部　責任者　学四　秦野　滋

良明の霊に捧ぐ

母　加藤　梓

原爆落下して早くも十年の歳月は流れ今日八月九日を迎え思いは亦も新になり、あの悲惨なりし当時を偲び実に感慨無量の思いです。

過し拾年の九日の朝、警報発令され十時近く漸く出掛ける良明を、その朝に限り玄関先まで見送り、「では行つて参ります。」「用心なさい」とお互に手を振り合い、につこりと笑い乍らもう一度ふり返り送り出したのが此の世のお別になるとは……一時間後にはあの恐しき原爆の急に、只一塊の真黒な灰と変り果て、いとしの良明の亡き骸とは只々唖然として涙さえ出す事を知らず、暫し呆然として漸く吾に返り、余りにもひどい此の惨劇に身動きさえも出来ぬ思いでした。

父なき後は杖とも頼みし良明もわづかに廿四才を一期として此の世を去り、余りにも儚き短い一生悲しむと共に母は命の限り永久に忘れきれない淋しい思いです。

今は只冥福を祈りつゝ静かに過して居ります。

終りに望み此の残酷極る態に直面した今は、只平和を祈ると共に三度かくも悲惨なる原爆の禁止を世の人々と共に大いに叫び度いものと思います。

十年祭を迎えて八月九日

故　加藤　良明　（当時学部二年）

長男淳一のことゞも

父　田中　淳直

あれから十年の間、一日として淳一の事を想わぬ日は無かつたのに、夢に見たのは如何して斯うも少なかつた事だろう。

被爆現場の病理学教室焼跡に、うづ高き瓦の間に頭蓋骨が幾つとなく

出て居り、大きな骨格の学生の焼姿や、ペンの跡も判然と読む事の出来る焼けたノートの紙片の散り〳〵に飛んで居る痛ましい光景と云い、被爆と共に即死した人、倒壊した教室の下敷となつた人、痛手を被つて尚懸命の脱出を計つた人等。火が廻りやがて鎮火する迄の残酷、悲痛の状況を想像して、ただ〳〵合掌冥福を祈り、分骨を頂き山上の慰霊塔に参拝を終り、あの混雑の汽車を彼杵で降り、三里の道を家内と徒歩で悲痛に疲れ切つた重い脚を引ずり乍ら我家に辿り着いたのは夜の二時半であつた。

所が二学期が始まるや、九大医学部二年で淳一が佐高時代の親友松田一夫氏より、当日淳一は、百崎、藤井の二氏と、被爆直後教室を脱出、何れかの方向に避難の途中、先ず百崎氏が耳が聞えなくなり、他の二人に、俺に構わず逃げて呉れと云われたのが、最期だつたらしく、行を続くるうち、淳一が突然倒れ後藤氏が驚き馳けよつた時には既に息を引取つて居たとの事。

斯くて後藤氏は有田の自宅に帰つて亡くなられ、藤井氏の事は詳かでないが、同じ運命を辿られた事と思われると。之は長大田中通敏氏の言で、高校以来同クラスである関係上信を置いてよいと思うとの手紙をお貰いしたが之の田中氏は大学被爆を聞いて出崎、業火の鎮まるのを待つて病院横穴に逃避されたのに会い、以上の事実を聞き得て後、有田駅迄後藤氏を送り届けた人である。

其より幾日か経つて、次男を淳一の下宿迄荷物受取りに寄越した処、下宿で実は淳一を火葬したから遺骨受取りに本原町山中迄、直ぐ来て呉れとの警防団員の知らせがあつたのを、具合が悪くて到頭行かずに済まなかつたと云つた相で、私は再び出崎本原町一帯を尋ね探して見たが遂に判らず実に残念に耐えなかつた。其も之も未だ昨日の出来事の様であるのに、早十年の年月を重ね、此の間世界の情勢も著しく変つて来た。

彼の憎むべき原爆更には水爆に因つて起る惨禍の如何に恐るべきものであり、事に因つては全人類の絶滅すらも考えられる様になり、原水爆に対する世界の関心は頓に昂まり来り、其の全面的禁止さえ叫ばれる今日幸にも其が実現せられ併せて永遠の世界平和がもたらされるならば全人類の欲び之にしくものはないと思う。

私共は茲に未だ嘗て無き原爆の残酷なる犠牲となり終戦間近にして篤学の諸教授と共に、燃ゆる希望を抱き乍ら若くしてあの静かなる学園に敢なくも散つた数多くの学生、生徒達の御霊を慰むる為に現に我大学に後進の指導の任に当られつゝある諸先生の一層の御尽力に由つて国の力に於て大学の完全復興を見る日の一日も早からん事を切にこれ願うものである。

故田中淳一　（当時学部二年）

原爆十周年に際して

服巻光子

生者必滅の世の習いとは云いながら、我子に先だたれる程、悲しいことがあるであろうか。

二男勝之は原爆の為めに尊い生命を一瞬にしてうばい去られた。しか

もその死に方のむごたらしい事、筆舌に尽されぬ有様を見て失神してしまつたのである。病気もせずに丸々と肥え、潑剌として勉強中の青年、殊に来月は卒業という間際の出来事である。（戦時中故、一学期早めて卒業させらるゝ事になつていた）

一瞬の間に何万と云う屍の山を築いた此の世ながらの生地獄であつた。

この惨事の三日目に、私は三男清を連れて行つたが、爆心地浦上は一軒の家もなく、勝之の学んだ医大も姿を消していた。糸山の奥様とあてもなく狂気の如く我子をさがし歩き、ようやくにしてお昼頃地下室の暗い土の上にころがつたまま、まだ生きて居た勝之にめぐり合つた時の嬉しさ、只涙にむせぶばかりであつたが、それも束の間次第〳〵におとろえて、遂に動かなくなり冷たくなつてしまつた。

悲嘆は怨恨にそして悲憤に変り原爆を落したアメリカ人を突刺して八ツ裂きにして自分も死にたいと思つた程である。果ては戦争さえなかつたなら死んでは居なかつたろうにと思えば軍人がうらめしく天皇陛下までもうらみ、我と我身を海深く沈めてしまつた。

狂つている私の側に勝之は何事もなかつたかのように、まことに安らかに泰然自寂として眠つて居る。「大聖釈迦牟尼世尊でも、生死の掟は免れ給わぬではありませんか」と静かに教えてくれるようであつた。

私はいつもおきかせ下さる貞包先生の御法話をふと思い浮べた。「苦しみは慾より出でて身を悩まし……」と御仏前でおよみになつた事を思い出した。やつぱり私は我子の愛慾におぼれている、其為めに苦しみの海に沈んで居るのだろう。此の事実が若し全く知らぬ他人の子供だつたら、こんな苦しい悲しい思いも起るまい、何と迷の深い私であろうとも思えて来ていつの間にやらお念仏申させて頂いた。

この原爆で親を失い子を失い家を失つて、私以上に苦しい思いをして居らるゝお方々も沢山おありであろう。広い世界に日本に限つて二度までも原爆を受け剰え水爆までも蒙らねばならぬとはよくよくの因縁に由ることであろう。

近来世界平和運動などお祭りさわぎのように各所で行われては居るものゝその内容に至つては種々複雑なものがかくされていたりするようであるが、この苦々しい実際の体験者同志が結束して再びこんな惨事が人類の上におこらぬような新な因縁を作り出して行くべきだと思う。

げにやこの世に親子という不思議の因縁を結び、愛別離苦のおもい深く、怨むまじき人を恨み、悲しむまじき身を歎きて、恩愛の絆たちがたく苦しみの海に沈む私である。

孔子様もその子鯉魚に別れては悲しみの火を胸に焚き、白楽天も病中に三才の幼児を失い、枕辺に残る薬をみて、なげき悲しまれたと云う事である。

世の中を思ふも苦し思はじと
　思ふも身には思ひなりけり　（玉葉集）

うば玉の闇の現はさだかなる
　夢にいくらもまさらざりけり（源氏物語）

よしさらば思ひ出でじと思へども
　涙は絶えぬ袖の上かな　（新千載集）

実に愛別離苦は万人共通の思いである。

原爆を落した人も鬼畜ではなかろう、西洋人といえ、やはり仏性を持

つ人間にちがいない。何と理由をつけてみても善い事をしたと思うまい。必ずや呵責の責苦に遇うべく自ら蒔いた因は自ら刈り取るべき日が来るに違いない。月日は流れてもう十年も経つた。伝えきくところによれば原爆を落したアメリカ人は其後、修道院で懺悔の生活をして居らるゝと云う事である。

自分の悪かつた事を悔い、神仏の御前に御詫びするという事は何と尊い事であろう、其の宗教的なお姿が目の前に見えるようである。其尊い人を私は鬼畜とうらみ、のゝしつたが今更お恥かしい。殺すも殺さるゝも深い因縁あればこそである。敵と思つた人こそ、そのまゝ法の友であつた。お互に許し、はげまし合つて今後世界に平和な日暮しが永遠に続くようつとめたいものである。

勝之は、大正十二年九月、関東大震災の時に生れ、昭和二十年八月、原爆で亡くなつた。

生れつき健康で、兄弟仲むつまじく、一度も喧嘩をしたことはなかつた。学校へ行つても競技会へ行つても、いつも両親を喜ばせて居た。

親の御恩もさる事ながら、私にとつては子の御恩も大変大きいものであつた。子を持つて知る子の恩とでもいうのであろう。

村雲幼稚園、佐賀師範附属校、佐賀中学、佐賀高等学校、長崎医大と順調なコースを進んだ。彼は佐高卒業後は京大へゆき、哲学を学びたいと言つていたが、父はそれに反対し、とう〳〵医科に入れてしまつた。彼が京大の西田幾太郎先生に私淑して居たことは死後彼の日記を見てわかつた。こんなに哲学が好きであつたのに本人の思い通りなぜ京都へ出さなかつたろうか。京都は原爆も落されず、戦時中も実に平和なところであつたのに、と愚痴るのも人間の悲しさである。

当時は毎日空襲がつゞいた。八月六日広島に新型爆弾が落ちたとはきいたが「被害は軽微」とのラヂオ報告のみで、遠方ではあるし実状をつぶさに知る由もなかつた。

ところが九日には、その爆弾を長崎にも落した。私は其日、丁度十一時頃南側の縁の柱にもたれ何げなく庭の方を眺めて居たが、急に勝之の事を思い出した。其時稲妻が目もくらむやうに光つて続いてガラス窓か何かこわれて落ちるやうな、ひどい音をきいた。白昼に、きつねからつまゝれたようで、夢か現の思いで、家の人にもきいてみたが、「何だつたでしようか」といつて知る人もなかつた。貫通道路のまがり角で自動車でもつき当つたのだろうか、などゝ自分一人妙な事とばかり思つていた。

丁度同じ時刻に附属小学校で六年間勝之の受持であられた米倉先生が監視の順番で望遠鏡で西の方を見て居たら、茸型の白い雲が現れたので「新型爆弾が落ちた」と報告されたら「うかつにそんな事云うものではない」と或人からしかられたと仰しやつた事を後できいたが、やつぱり真実の報告であつた。

所もあろうに長崎に落ちた、ときいた時は、びつくりして早速佐高に問い合せた。（その日は佐高から学徒動員で長崎へ行つて居られて帰校された翌々日であつた）。

「ラヂオでは被害軽微と云う事ですが、どんな風だつたでしようか」とお尋ねしたら「今からすぐお出でなさい」とばかり云つて一向くわし

く話して下さらなかつた。「でも、もう日も暮れようとして居ますので明日でも参りましよう」と申しましたら、「そんな事云わずに今すぐお出でなさい」としきりに、すゝめられた。

何だか不安の念におそわれ乍ら、近所の糸山の奥さんと相談の上、すぐに弁当を作り、終列車から三男清をつれ出かけた。心は急ぐのに警戒警報の中を汽車は這うように、のろ〳〵と走つた。

道の尾駅に着いたら「こゝで皆降りて下さい。こゝ迄しか行きません」との駅員のさしずで皆降りた。夜中で暗く手さぐりして降りた。駅の前の道一面に藁が沢山散らばつて居た。闇を通して、かすかに見える前の家は藁ぶきであつた。「此辺は風がよほど強かつたですネー」と側の人に尋ねたが誰も返事してくれるものもなかつた。本当の事を言つてはいけない世の中であつた。

知らぬ家を夜中起すわけにもゆかず、道端に積み上げてある材木に乗つかゝつたり、田圃の畔道に腰かけたりして一夜を明かすことにした。星のきれいな晩であつた。夜の明けるのが待ち遠しかつた。それでも疲れの為めか、うと〳〵として居たら早や明けそめて、気付いてみたらモンペが夜露で、しつとりぬれていた。側の小川で顔を洗ひ知らぬ道を浦上へと急いだ。

だんだん遠くまではつきり見えるようになつた。誰一人通る者もない。四方を見渡すと、おどろいた事には、今迄の長崎と全くちがつた景色である。遠くから眺められた浦上の天主堂はこわれ、町には一軒の家も見えず、山は茶褐色に変じ、樹木も悉く無残に枝は裂け一葉もない、文字通りの焼野ケ原である。

大橋の辺りで道に黒いものがねて居る。近づいて見ると、疎開荷物を馬に引かせたまゝ車は横にひつくり返り、馬は歯をむき出し、車につながれたまゝ死んで居るし、馬車引さんは手づなを持ちながら、残念そうに死にたえて、破れた地下足袋から親ゆびが出て、足は真黒にやけ、腫れあがつて居た。「あゝ、どこの小父さんだろう」と思わずお念仏せずには居られなかつた。辺りの家は半分倒れかゝり、千切れたふとん、こわれた箪笥の間を、やせこけた野良犬がうろついて居た。町に近付くにつれて、死人が益々多くなつて、足のふみ場もない様になつた。赤ちやんと母親、老人、青年、子供、誰も彼もが手と足を走つて居る格好のまゝで全身真黒に焼けたゞれ、ふくれ上つて、中には男女の別さへわからぬ真ぱだかの人、腹の臓腑がとび出た人、種々様々の死様で、断末魔の苦悶を物語つて居た。

私は身も心も消え入るばかり驚いた。そして狂気の如くなり「ごめんなさい。なむあみだぶつ」と言いながら、屍の上を、ふんだり飛び越えたりして我子をさがし歩いた。先ず教室に行つてみようと思つたが、大学はどこをむいても見えない。学校の裏の山が岩山であつた事を思い出し岩山を目あてに登り始めた。どこからか、ふと鶏の声がした。それがとても気味が悪かつた。人さへ死んで居るのに、どうして鶏が生きて居るのだろうか、と不思議でもあつた。

大学の正門近くに登つたら、石畳だけは元のまゝであつたが木造建であつた大学は、瓦一枚もなく荒野と化してわずかに附属病院のコンクリート建は外観だけ残り窓ガラスなど一枚もなく、こなみじんになつて居た。二本のコンクリートの大煙突は、一本は「く」の字型にまがつて居

た。どなたの御親切か、屍の上に、むしろを、かぶせてあつたが、むしろは少く屍は多く、小さい子供の足、地下足袋をはいた足、ゲートルを巻いた足、女の足、男の足や手が四方にはみ出して居る。修羅場といおうか、此の世の生地獄と云おうか言葉も知らない。

軍人らしい人に出あつたが、「ほんとうの戦場でも、こんなに死人の多かつたところは見た事がなかつた。あなた方は、昨日お出でにならずによかつたですよ。昨日までは大部分の人が断末魔の苦しみで、両側から『水をくれ水を』といつて、すがりついたり、ズボンを引張つたりして通れなかつた。何と恐ろしい有様でしよう!!」と仰しやつた。その悲痛な声が、今にも耳の底に残つて居る。私共も数時間の後には、こんな死方をせねばならぬかもしれないとも思われ夢に夢みる心地であつたが、勝之に逢いたいと云う一念で又登り始めた。少し行つたらお母さんらしい中年の婦人に出逢つた。も一人お伴れがあつて、筵をはぐりながら一人〳〵の死体を横になしたり、ひつくり返したりして自分の子をさがして居られた。門の少し手前の方で角帽をかぶつたゲートルを巻いた学生風の人に出逢つた。「もし、服巻勝之は御存じないでしようか」と尋ねたら「服巻君は生きて居ます負傷の程度は分らんが、今眼科の地下に收容されて居る筈です」と云われた時の嬉しさ、「生きて居る、生きて居る……」と、ひとりつぶやき乍らも負傷して居るという言葉が気にかゝつた。「有難うございました」とお礼をのべた。

あたりには、頭や手に繃帯を巻いた幾人かの負傷者が、石に腰を下して居たり、竹の杖をついて足を引ずりながら危げに歩いて居る者も居た。消防団の制服を着た人が、担架をかついで通つて行くのに出逢つたが皆元気がなく誰でもがつかれに、つかれ、弱りはてた様子で其上大変よごれて居る人ばかりだつた。頭に繃帯を巻き頬にかすりきずのある若い学生が、生存者の名簿を手にしながら、勝之の收容されて居る眼科の建物を教えて下さつた。糸山さんも生存者の中に書いてあつたのでお母さんは大変よろこばれた。

私達は、こわれた木片がうず高く重なり合つて居る中を通つて教えられた眼科教室に向つた。糸山さんは、もつと上の山の方へさがしに行かれたが、しばらくして、「隼人は山の上で倒れて死んで居ました。屍の上に小犬が乗つて遊んで居ました」と涙ながらに話されお気の毒で御慰めの言葉も出なかつた。眼科の地下の入口に若い女の方が居られたので、「服巻…」と云つたら「あーつ」とびつくりするように云われて、すぐ内の方へつれて行かれた。真昼だつたが真暗で何も見えない中から、「あゝこつち、こつち」と誰か叫んだ。よく見ると二人並んで寝かしてある向側の人が手を振つて居る。

〝あゝ勝之だ〟私達は走り寄つた。

「あゝ勝之さん!」「おゝお母さん」「おゝ清も…」涙が流れ出て何から話してよいか声も出なかつた。闇になれた眼でよく見ると、きれいな、レースのカーテンを着せ下には白い毛布を敷かせてあつた。どなたの御心遣いか、こんな貴重の品を、と有難くて涙がこぼれた。

地下室とは名ばかりで眼科教室の床の下で土がゴロ〳〵して居た。自分の学生服を丸めて枕にして居た。勝之は苦しそうに呼吸しながらも、傍の人を紹介した。寝て居る人は級友で、若い女の人は其奥さんであつた。「今迄大変親切に看護して下さつた。そちらに三、四人居らるゝの

も同級生でよく看護して下さつた」と云つたので、私が丁寧にお礼を云うと、静かに頭を下げられたが、薄暗い地下室で、まるで黒い彫刻みたいだつた。頭の繃帯から血がにじみ出て、苦痛に堪え兼ねて居らるゝようだつた。一番元気にして居られたのは尾立源和さんと云うお友達でなか〳〵しかつりした青年で、此のお方はどこかのお寺さんの坊ちやんではなかろうかと思つた。大変落ちついて、よく皆さんのお世話をして居られた。

勝之は、とぎれ〳〵の息の中から苦痛に堪えて語るのであつた。「爆弾が落ちたのは九日午前十一時頃だつた空襲警報が解除され警戒警報に入つたので学校では授業が始まつて居た。私は大きな煙突の下で監視をして居た。突然煌いた一大閃光に、『異様な光だ。お互に注意』と言つた。」はつきり勝之君の声をきいたとお友達も話された。「一閃光に伏せたと思つたが、其時人事不省に陥り、しばらくして気がつき横を見たら青木君（親類の同級生）が倒れて居たので〝青木〳〵〟と呼んだが何の返事もなかつた。天地も裂けんばかりの音と共に、たちまち大火となり火の手が迫つて来たので無我夢中で裏山に走り登り弘法大師をおまつりしてある穴弘法と云う岩山のところで一夜を明かした。血だらけの顔と頭、焼けたゞれた学生服、パツタリ倒れて居る者、グツタリなつた友を背中に負う様にして引きずりまわつて居る学友、両側の友人に抱かれて居る者、山をはい登ろうとして力尽きて死んでゆく友、あの恐ろしい有様は一口には言えぬ。あゝ背中とお尻が刺すように痛い、伏せた瞬間背中にこげつくように感じた」と云うので、よく見ると服の背中は焼けて布はなく、ズボンは外側が両方共焼け落ちている。髪も、ろうそくの炎で焼いた時の様にちゞれて居た。尚も勝之は語りつゞけた。「翌日の夕方級友に助けられて、やつとこゝに收容されたが動けない体で、真暗な地下室にねて居ると夜の明けるのが待ち遠く長い〳〵一夜であつた。原田君は昨日夕方死んだ。私と並んでねて居たが死んだのでそちらに移された」と指さす方を見ると真赤な毛布に全身包んであつた。

元気な時、度々遊びに来ておられたお姿が目に浮んで思わずお念仏申し上げた。勝之と大の仲よしであつた。こゝまで話した勝之は苦しい中にも、ホツとしたようになつて水をほしがつたので、清は正門の下まで水道の水くみに行き、途中で恐ろしい死体を見た時の様子を次の様に物語つた。「それは異様な死体であつた。黒い木材の間に下半身は隠れ、焼け太つた両手を大きく開き一本の髪もない頭は、顎から切断され両手の間にぶら下り切断面は真白である。妙な格好だと思い、こわ〳〵乍ら近づいてよく見ると両手だと思つたのは両足で頭と見えたのは、はち切れそうに、ふくれ上つた睾丸である。腸が外へはみ出している。其人は、腹ばいになり上半身は材木に、はさまれて居た。其左、十米ばかりの所に横たわつて居る死体の手が動いた。其の人は上半身裸で国防色のズボンをはき、素足でおゝむけにねて居て、火傷も外傷のあともなく、肌の色も普通生きて居る人と変りなかつた。おや！生きて居るのか、と思つたら、やつぱり動かない。併し、さつきは確かに動いたのだ。

真夏の太陽はギラ〳〵と照りつける。あたりは千々にくだけた瓦と、木片で、死体は累々と重なりあつて居た。天地は森閑と静まり返つて居る。私は血の凍るような恐怖におそわれて、両足はワナ〳〵と震え出した。其の人が今にも立上つて助けを求めて私に飛付いて来る様に思えた。

震える足をふみしめながら、正門の下まで行つたら、こわれかゝつた水道から、不思議に水が出て居た。其辺りにも人影はない。又恐ろしさがこみ上げて来た。水筒に水を満たす三十秒たらずの時間のもどかしさ、それが終るなり数十米を一気に走りながら、チラリと横目で見ると、さつきのまゝの姿で横たわつて居る。今にも私の服をつかんで引きもどしそうだ。水筒をほゝり出して力一ぱい叫びたい気持ちだつた。そこへ幸い人影が見えたので、やつと落ちついた。汗がどつと流れ出た。こんなことでようやく水を兄に飲ませることが出来た」と云うのである。

被害が、こんなにひどいとは思わず、勝之に逢えばハイヤーか汽車で佐賀へ連れ帰ろうと思つて着のみ着のまゝで出て来たが、ハイヤーどころか、食べる物も飲むものさえもない有様である。一刻も早く佐賀へ帰り、養生してやりたいと思い「勝之さん佐賀に帰ろうのー」と云つたら、「佐賀迄は、とても行ききらん」と云う。「そんなら矢の平迄行こうか」ときいたら「あっこ迄なら行けそうなもん」というので、疲れて居る清に「矢の平の叔母様宅は無事であるかを見てきて勝之のことを連絡して来て下さい」といつたらすぐ出かけた。途中何度も空襲にあつたそうである。県庁あたりまで行つたらやつと見えたそうで（矢の平は金比羅山の向側故、山でさへぎられ被害少なかつたが）窓ガラスや壁は落ち家はゆがみ荒れては居たが建つて居たのでホツとし、着くなり勝之の容体をくわしくお話しゝたら、丁度迎えに出かけらるゝところであつたと云うことである。

昨日も今日も勇叔父さんが原爆地まで出かけ、力いつぱい声をはり上げ、昭三さん（叔父さんの一人息子さん）や勝之をさがされたが遂に見当らず、裏山の方で角尾学長に出逢つたら、全身にひどい負傷をおいながらも生き残つた学生を鼓舞して居られたそうである。勝之が眼科の地下室に收容されて居るときゝ伝え、重要品や担架を車に乗せ秋子叔母様も一郎さんも清と共に迎えにお出下さつた時は大変嬉しかつた。今日も、もう日は暮れかゝつて居た。

佐高から一緒に入学した久野文次郎さんや其他の方々が各々頭や手足に繃帯しながらお見舞いに来て下さつた。「服巻、頑張れよ、死んでたまるもんか！」と元気づけて下さつた。勝之は有難うとは云つたが、苦しそうなので何か注射して下さつたが痙攣を起した。勝之さん〳〵と呼んだが意識がないようである。今度はカンフルを続けざまにうつて下さつたら、フー〳〵と息をふき返し意識を取りもどしたので急いで担架に乗せた。発熱四十度を越えて居た。お友達は〃これは勝之君の靴だ、カバンだと取そろえて下さつた。靴は全く変色しこげて居たが、カバンはきれいに元のまゝにして居たのが不思議だつた。中をあけて見たら此前帰省した時渡しておいた真宗聖典や非常時用の品々、学用品、お米もはいつて居た。

有難く受取り御礼をのべ名残を惜しんで皆さんと別れ矢の平へと急いだ。途中熱を計つたが八度に下づて居た。疲れて居たせいか重い事〳〵人間一人がこんなに重いものかと幾度か悲鳴をあげたかつたが代つてくれる人もなく我慢に我慢してやつとのことで何キロかの道を四時間もかゝり夜になつて無事に着いた。早速きれいなおふとんを敷き静かにやすませて頂いた。今迄ゴツ〳〵の土の上にねて居たのが、ふんわりとした絹夜具にねせてもらつた勝之は大変よろこんで、皆さんの御親切を感謝

した。青木の御祖母様も御出になり何くれとお世話して頂いた。夕食を少し頂いたが熱は益々昇り一刻々々悪化してゆくのが目に見えて、じっとして居られぬようだつた。

「代られるものなら代つて上げたいなあー」と思わず言つたら勝之は「イヤお母さん達は清達の事にまだ責任がある。私が死んだ方がよい」と云つた。其声が鼻にかゝつて悲しくきこえた。突然右の手を前に出し「まだ手は動く、早く紙と鉛筆を」といつたので書かせようと思つたが「そんなにつらいのに書かんでも、あなたの心持ちは、よく皆がわかつて居るから無理しなさんな」と青木の御祖母様はおとめになつた。外傷のやけどはよくなつたが排尿排便に苦しんだ。其夜は私と清と側にやすんだが、疲の為めか清はいつになく大きないびきを立てた。勝之は「清のいびきはB29のごとあつた」といつたので清は大変すまなかつたと気の毒がつて居た。

ほのぼのと又夜が明けた。清は佐賀に食糧やお薬をとりにゆき勝之の容体の報告に出かけたが、その留守中に勝之はグツタリなつてものも云わなくなつてしまつた。

原爆は火傷ばかりでなく内臓も骨も否、骨の髄までおかす恐ろしいものとは知らなかつた。首をじわり〳〵と絞めつけて、ついに絞め殺すようであつた。どうにも、ほどこす術もなく親としてその残酷さを側で見て居らねばならなかつたのが何よりつらい事であつた。

佐賀ではうちが医者であつたのを幸い、色々と沢山のお薬や食糧を取りそろへ長男保正と清と折返し走りつけて来たが、それも間に合わなかつたのは残念であつた。

深町家でも秘蔵のお薬まで出して来て色々と御親切にお世話して頂いたが原爆には、どんな高価なお薬も何のきゝめもなく、とう〳〵空しくなつてしまつた。詮方なく火葬しようと思つたが火葬場もこなみじんに焼け落ちているので附近の小学校の校庭に行き、保正と、私と清と三人で木材を拾ひ集めお正信偈をくり返し〳〵誦しながら涙ながらに火をつけ一握りのお骨を抱いて佐賀に持ち帰つた。

実に御文章さまの教の通り、〃朝には紅顔あつて夕には白骨となる〃厳しい諸行無常の人生相をまのあたり体験せしめられ唯念仏申すのみだつた。

故服巻勝之　大正十二年九月三日生
昭和十八年佐賀高等学校卒業（当時学部三年）

やさしい子

溝口陽介

昭和十九年だつたかと思います、自分（父）が風邪の気味でやすんで居つた所、哲郎が帰つて参りました。

唯今と云つて、枕元にどかりと坐ると、「はい」と云つて差出したものは、巻煙草八、九〇本位でした。途端に嬉しいよと云つて、目頭の熱くなるのを覚えました。当時愛煙家にとつて巻煙草が、如何に貴重なものであつたかは想像の外です。

そして「この半分は山高の米沢先生に上げる、先生の坊ちゃんが冬の寒い朝早くから煙草屋に行列して居られるのを見ると気の毒でたまらぬ」と申しました。

「どうぞ持つて行くがよい」そんなことで二、三日後に山口に行きました。どんな偉い子供になるよりも、この心やさしい子は、私と共に未来永劫に生きてゆく事でしょう。

故溝口哲郎（当時学部二年）
山口高等学校卒

日記

百崎欽一

昭和二十年八月九日

午前　淵田氏来宅。

午後　ラヂオを放送局に持参検査を請ふ。服巻看護婦来。早朝芳子桃川行切符を求めしむ。入手。

スマ子（長女）等四人高木瀬行。

警防課より材料薬品持参。

八月十日

唐津線にて桃川行。夜樋渡宅着。ハマ既に起床せり。持参のブドウ糖注射。

記念短冊を認む。

汽車中、角田衛生課長同車浜崎へ行く。

昨九日長崎の爆撃被害は大なる由早朝県より長崎県知事の要請により応援救護班三班を送る。鹿島、白石、武雄よりトラックにて長崎市行。

八月十一日

早朝帰宅。車中又角田氏在り、長崎救護の再度必要なるが如し。医師会館に立寄り帰宅。次で応援班三班の出動要請来る。神埼、西松浦、小城より出動せしむ。

知次郎の消息全く不明不安愈々加重し来る。中ノ小路糸山は家族本日長崎行の由。

八月十二日

早朝芳子長崎行切符を求めしむ、道ノ尾迄発売。

知次郎を尋ねて長崎行。

佐賀駅にて待避中銃撃、弾撃の音近し。

午前十一時一四分汽車出でず。午後一時過ぎ出発。佐賀鉄工所側、牛津本町爆弾にて破壊せり。車外待避一回。午後七時前長崎駅迄汽車行く。徒歩にて片淵町知次郎の宿所松尾宅を訪ふ。知次郎は帰らずと。嗚呼、一縷の望みも絶ゆ。

夜野上方にて松永に逢い他の学生等より情況を聞く。惨想像に絶す。松尾宅泊。

八月十三日

松永の心配にて同級生長田学生を依頼大学へ案内さる。道も幾度か路傍の壕に待避しつゝ午後一時半大学跡に辿りつく。空漠一物も止めず。

病理教室の跡に佇ち線香をたき涙の中に点々たる黒焼白焼の頭蓋骨を拾ふ。此中に知次郎も在す可し。附近に樹影とてもなし。炎天下弁当を開き学生と共に昼食。帰途大学病院に立寄り本部に今後の処置を問ふ。行方不明者は追つて死亡確認の上通知す可しときく。学生に別れ単身長崎仮駅に出で切符を求む。無し。証明を貰ふ。又幾度待避をつゞけて宿所に帰る。一応知次郎の遺物を整理す。馬島は予より先に兄貴来崎せるが本日夜佐賀へ帰る。

夜浦川を訪ふ。無事。

八月十四日

野上、松尾の女達外学生に依頼衣類、布団、荷造り、書冊整理再び長田学生を煩はし運搬車にて荷物を長崎駅に運ぶ。チツキは救護材料として受付く。

手に重きトランクを持ち乗車。午後一時頃発車、長崎を外へ、思い出の知次郎最後の地、学校を偲びつゝ合掌。

あゝ、知次郎は帰らず。何といふ可愛いゝ子なりしぞ。純真なる母思いの姉思いの子等思いの、無垢清浄の邪念を持たぬ、衒ふ事が嫌いな我子乍ら出来過ぎた子なりし。扨て之より何として淋しき生活を送る可きか。

午後六時頃帰宅。家族一同を集めて報告只声をあげて泣くのみ。

されど知次郎は帰らず。されど知次郎は犬死はせぬ。学生が学校に登校し授業を受けつゝ教授と共に同僚と共に一瞬運命を共にしたるは学生の本分を全ふしたるもの。予が平素の教訓も此点にありたり帰宅すれば我家も十二日十一時頃機銃掃射を受け二階三畳の窓ガラスは破れ弾丸は一ケは瓦に落ち、一ケは中庭に落ちて其儘にあり。県警察部にて部長外三名殉職B25六機の襲撃による。

故　百崎刀郎遺句

子を探す残暑の焦土弁当下げ

妻かなし亡き子の友に蜜柑もぐ

花を売る露店も出来て原爆忌

耶蘇の鐘仏の鐘や原爆忌

子の墓へ花のかはりの豆の飯

故百崎知次郎　大正十三年七月二十二日生

昭和十九年　佐賀高等学校卒業

（当時学部二年）

あの日のこと

父　山田義夫

爆弾投下の前日八月八日は当直だと云うので夕方登校した。今度広島に落された新型爆弾は大変なものだ、爆撃されたら自分の書物は一まとめにしてあるから持出して呉れ、と妹に云いつけて出かけたが翌日大学で原爆にやられた。

十日夕方連絡の学生が敏夫君が助かつたと知らして呉れたが其日は遂に帰らなかつた。翌日は待ちきれず妹の百合子と二人で穴弘法方面にさ

がしに出かけ漸く大学で治療中を発見し、全く死んだ子が帰つて来た喜びを味つた。本人の語る所によると受講中、「ピカツ」「ドーン」鳴ると同時に屋根が落ちて出口は閉され、自分は梁を伝つて屋根の破目から飛び出し穴弘法に避難した。怪我は大してして居ないが疲労甚しく食慾はないとの事、又下痢が止らないので医書を引出し自己診断して居たが、どうもこの下痢は不思議だ、姉が加津佐の栗原医師に嫁して居るので加津佐に行つて研究すると云つて居た。

十三日から発熱し輸血カンフル等手当したが及ばず十五日の終戦放送に日本の敗戦を知り落胆。

十六日午後九時三十五分呼吸はげしくなり「もういかん〳〵」と云い乍ら見守る家族達に幾度も、うなづきながら新中川町六九の自宅で息を引とつた。行年二十二才雷鳴の中を伊良林小学校々庭より昇天した。

十一日帰宅した翌日は見舞の友人達と語り合い煙草を吸う位ですぐ元気になる事と思つたのに。運命か、ああ、生者必滅。せめて世界平和の礎となるならば医に志した学徒の本懐とあきらめん。

故山田敏夫　（当時学部一年）

死亡者名簿（医学部）

(イ) 仮卒業生

岩崎誠彦　大嶽乙哉　柴田清
鈴木四郎　寺田文彦　村上吉作
村田千秋

(ロ) 四年生

相川清澄　相羽正　青木武
今西章　今村喜人　岩切達
上原利之　梅原正幹　大津昇久
奥和夫　鬼塚正英　清崎裕之
久保哲雄　古賀典志　蘇百齢
園田哲郎　戴懐徳　谷口誠
土肥達一　徳山達人　中尾守男
永見敏樹　新名清隆　西憲治
昇雅夫　原田清巳　服巻勝之
日高和郎　肥後実　平井達也
穂坂純一　宮城美津次　宮本精一
毛利元次　林中鳳　脇川恭一

(ハ) 三年生

赤松雅弘　和泉哲朗　臼井進
大池未知生　大浦裕　奥田光男
片山道生　神木晄次郎　滝口薫
陳克振　野口修　花田紀
古川一郎　三島俊夫　山崎静夫

(ニ) 二年生

荒木宗雄　五十嵐國人　生駒晋助
池西清　糸山隼人　稲垣明彦
江口宏　小川三郎　大場次郎
大東弘　太田祐司　奥田滉一郎
奥村巌　加藤良明　何振欽
風早哲郎　川上平蔵　岐部謙治
桐原研一郎　久保道也　黒田省作
小西淳　古賀洋一郎　後藤祐碩
酒井克次　坂中善視　治村広三
白川清志　新開常弘　須沢俊吉
菅道之　鈴木俊夫　田中喜八郎
田中淳一　平良浩　高木劉一郎
竹田実　谷村新二郎　津和恵吉
飛沢寛治　豊田正倫　中尾敏行
中山謙吉　羽立俊雄　馬祖詒
林喜保　樋渡浩二　東秀昭
深江久一　藤井伊織　堀家潤
堀部健　三村寛　溝口哲郎

簑田正勝　村田司　百崎知次郎
森芳信　森内薫　山田邦久
山田滝雄　山本克弘　米沢健治

(六)一年生

青山賢治　浅井明　浅山明生
伊藤裕夫　猪股信安　石井一徳
石塚等　石橋忠　石橋若月
市川幸男　植田泰輔　上野弘男
大西欣二　大西俊夫　大原健
片山登　金宮賢治　金山禎祐
川口賢一　川崎正之　吉良信明
桐山真克　草野肇　古賀宏次
古賀光毅　児玉望　高妻秀夫
佐賀章生　篠原邦夫　島田秀三郎
菅原寮二　鈴木盛男　瀬口恒雄
高橋浩二　竹本文亮　立石和生
谷山哲夫　近石哲夫　鶴田十四夫
中川二郎　中瀬博　中司和夫
中村清一　西田英司　西谷重
新田寿男　野口健一　野津恭
箱田吉清　肥田栄一郎　百野秀雄
平川栄一　藤田襄　藤野祐一

古坂光毅　前橋裕　松井日出雄
松浦重信　松浦勤　溝口常一
嶺脇秀雄　宮地信義　村田修策
桃原敬太郎　山田清孜　山田敏夫
山根繁　横山嘉夫　吉岡忠幸
吉永亮　米谷襄　龍頭集
和田正人

この中で日本名を名乗っていた台湾人学生とその本名

学年	日本名	台湾名
四年生	徳山達人	羅時達
三年生	和泉哲朗	楊炳煌
二年生	神木晄次郎	李釣光

▽ 看護学校関係 △

長崎大学医学部附属看護学校沿革

創立　長崎県立病院附属看護婦養成所として発足、修業年限二ヶ年で看護婦科並に産婆科を置く（創立年月日は其の資料、原爆の為め焼失判明せず）

大正十一年四月　長崎医学専門学校附属医院看護婦養成所と改称

大正十二年四月　長崎医科大学附属医院看護婦養成所と改称爾来二十四回卒業生を送る

昭和二十年四月　長崎医科大学附属医院厚生女学部と成り第一回生一〇〇名入学

昭和二十年十月一日　文部省国民教育局長通達に依り厚生女学部卒業者を入学者検定第十一条により高等女学校卒業者と同等以上の学力を有するものと指定さる

昭和二十年十二月　原爆の被害を蒙り病院と共に大村国立病院に移る

昭和二十一年　諫早市永昌町海軍病院跡に移りその間看護婦生徒の養成は続行され修業年限三ヶ年に延長教育内容の拡充を図る

昭和二十三年三月　官立医科大学附属厚生女学部改組要領に基き本校は乙種、甲種の二本建となり乙種を普通科甲種を専攻科と名称し保健婦助産婦看護婦令に基く新制度看護婦の養成始まる

昭和二十三年六月　厚生女学部専攻科（甲種看護婦）修業年限三ヶ年生徒定員四〇名

厚生女学部普通科（乙種看護婦）修業年限三ヶ年生徒六〇名となる

昭和二十六年三月　厚生女学部普通科として最後の卒業生三八名を送る

昭和二十六年二月　曩に長崎大学看護学校として指定申請中のところ甲種看護婦学校として承認され今日まで五回の新制度による卒業生一〇六名を出している

（附　記）

昭和二十三年七月三十日　法律第二〇三号を以て保健婦助産婦看護婦法成るこの法律において甲種看護婦、乙種看護婦の二種となる

昭和二十六年四月十四日　法律第百四十七号を以て甲種、乙種は廃され看護婦、准看護婦となる

元来、看護婦養成所は二年制度で生徒は卒業後の二年間大学附属医院に勤務の義務があつた。

昭和二十年四月、従来の看護婦養成所は厚生女子部となり第一回生百名を迎えたばかりであつた。

四月に入学した一年生百名は、午前中七、八名ずつ臨床各科に分散して実習を、午後は一緒になつて講義を受けていた。

二年生は十九年四月に八十名入学し、当時は各科に固定配属されて教育を受け、一堂に集つて講義を受けるのは、週に一、二時間位であつた。

尚右の厚生女子部の生徒を除き附属医院に勤務中の看護婦は百八十余名で、その内の一部は報国隊として事ある毎に出動していた。

被爆時の状況

一年生は各科で実習中、被爆す。二十三年三月の卒業式に卒業した者は百名中三十二名で、残り六十余名の大部分は爆死したものと思われるが、入学後日も浅く又資料も焼失のためその詳細は不明である。

二年生は八十名中四十四名が卒業し、残りの大部分は各科病棟或は寄宿舎で爆死したものと思われる。

生徒を除く百八十余名の看護婦のうち五十余名が爆死した。

死亡者名簿（看護婦）

(イ) 看護長

内田敏子　江下スム　田中米子

中尾ナツ　満島ユリ

(ロ) 看護長嘱託

有村シゲ子

(ハ) 産婆主任

園田チカエ

(ニ) 副主任看護婦

菅ハルヨ　松岡トシエ

(ホ) 看護婦五年生

大坪和子

(ヘ) 看護婦四年生

井上光子　岩下スエ子　内尾文子

緒方ヒサカ　加藤トシ子　金崎久枝

小崎タケノ　霜川アサノ　後川千代美

中野キクノ　中山ヨシエ　野副クミ

馬場君子　橋川ヤスノ　橋本加奈子

橋本道子　浜トモエ　浜崎溜吏子

原衛子　肱黒サエ　福田艶子

松本幸子　峯逸子　山下栄子

山下秀子　吉田シズヨ

(ト) 看護婦三年生

井上ミツネ　岩崎松子　内野和代

川崎信子　倉橋満寿子　竹谷良子

長浜イト　西下ミヨ　野口寿栄也

浜田美幸　藤田和代　本田年子

松尾タツヨ　松本リキ　武藤ミサエ

山口ヒロ

(チ) 看護婦養成所生徒二年生

荒木信子　井戸洋子　磯田千代子

大柳ツヨ　大山フヨ子　樫山房枝
川口シメ　川谷ミチ　河田久枝
田中松枝　土岐富美子　橋本ユキノ
浜辺ヨシ　林末子　平山タヅ子
保家信江　光永良子　峰ヨリ
宮本ハルエ　武藤サトエ　湯川明子
吉田喜代子　吉本ミシエ　若松嘉子

(リ) 厚生女学部生徒一年生

岩永君枝　江林キヨノ　小川和子
大久保夏江　川上アサエ　河野鈴子
五嶋マチ子　品川ジツエ　白石チヅ子
早田タカエ　谷口千鶴子　谷村セツ
塚本秀子　中村六江　野田ツキ子
野田マサエ　半泊ハマ子　福島スギエ
藤井セツ子　藤山ハルノ　藤山ミキエ
渕野フジエ　古巣ヒサ子　前田節子
増山貞子　松園節子　松藤マサ
松本綾歌　光井チヨル　山下栄子
山下ハル　吉本キミエ

二、附屬医專の部

丘に立ちて

――原爆体験記――

長井道郎

烈！　昭和廿年八月九日午前十一時二分。

日本の悲劇に終幕を告げる第二号原子爆弾は長崎上空五〇〇米に炸烈し、長崎医科大学は教授の⅔、看護婦、学生の大半を瞬時に失い、その偉容を誇つた白堊の医学殿堂は全機能を喪失してしまつたのである。

それから、十年間の歳月は過ぎ、今感慨も新たに十周年を迎えんとしている。

今、静かに、まぶたを閉じ、十年以前を回顧し、その記憶をたどつて惨々たる様相を綴り、今後未来永劫に亘て、再び斯くの如き、集団殺戮の行われざる様、世界の平和を希望して止まない。

一、その日

吾々医専三年生は、繰上げ卒業試験第三週に入り、七乃至八名のグループに別れ各科に配属されていた。その日、早朝より空襲警報は発令されていたが、間もなく解除され、警戒警報下に医療隊本部では敵機の情報を検討した結果、待避を解き、夫々各学年共、講義に入る様指令したのが、午前十時頃だつた。緊張から解放された学生は、各自教室や、各科へ散り本来の学生生活へ帰つたのである。

私も、医療隊本部（本館）より影浦内科へホツとした気持で引上げた。そして堤、永田、中島、琴尾、田尻の級友と共に、緊張のほぐれた一種の虚脱感から来る空つぽな愉快さをぶちまきながら、内科一階廊下に入り、鉄カブトを取り、防毒マスクを外して二階影浦内科学生控室に入つた。

翌十日は愈々内科の卒業試験と云うので皆参考書をひろげ、試験問題のやまかけに大童。あれでもない、之でもないと騒ぎ乍ら、学生特有の時間前の昼食をひろげる者さえあつて、いつもの変てつもない学生生活に返つて行きつゝあつた。

丁度十一時をすぎたかな！と思う頃である。一瞬、直撃弾を受けたと思われる様な爆発音と無気味な青みがゝつた閃光と共に、吾々の体は嫌と云う程、南側壁にぶちつけられていた。

同時に天井は落下し、級友や二、三人の看護婦はその下敷となつてしまつた。

二、三十分間も続いたであろうか、爆発音もなくなり一瞬此の世のも

のとも思えぬ様な静寂が、吾々を支配した。

私は、その静寂の中から耐えきれなくなり、只当もなく、誰を呼ぶでもなく、「オーイ」と二回大声をあげてみた。

すると、すぐ控室の横の廊下附近から「オーイ」と云う返事があつた。堤君の声の様だ。私はそう思うと、「堤」と呼んでみた。するとすぐ「長井か」と応答があり、お互い無傷であることを大声で知らせ合い、体を覆つているものを押しのけて走りより手を握り合つた。逃げようと思つて、本館へ通ずる廊下をゴミだらけの真暗な中で、手さぐりで探しびつくりした。廊下は無残にも後型もなく、押しつぶされていてないのだ。私は堤と一階から出ることにし、一階へ通ずる階段を下りようとして又びつくりした。

病室からは、傷だらけの患者が這い出し、廊下にうごめいているし、看護婦達も、動けない様な者ばかりである。

窓硝子は一枚余さず破れてしまつていて、北側の窓は皆内側にへし曲つている。

その窓から見える空は、もう〳〵たるゴミで夜のように暗く、而もゴウ〳〵と唸つて、渦を巻いているのだ。

その時初めて私は、つい前日の大詔奉戴日に角尾学長から聞かされた広島の新型爆弾を思い出し、戦慄を覚えた。

私は一階へ駈け下りた。そして本館西角を曲つて二度びつくりした。大学から見渡される坂本町、岩川町一帯は全面火の海と化し、その熱風と渦巻く爆発の余波とがかみあつて、ゴウ〳〵と唸つているではないか。その時私は初めて我に返り、諸所方々から聞える助を求める人達の声、子を、親を、兄弟を呼び求める悲愴な声を耳にした。

本館入口前の築山に、二、三人の人を見付けて私は走り出した。

レントゲン科の永井助教授、久松婦長、椿山看護婦、友清技手、角尾内科大倉副手等である。永井助教授は負傷されたらしく、コメカミの附近から血が流れている。それをうす汚れた布で、巻いて居られた。そして私を見てニツコリされ、「怪我はないか」と聞かれた。私は全く無傷であると答えた。そして、皆でお互いの無傷を喜び合つた。

その間にも、あちこちから、元気な者、一人で杖をついて歩いて行く者、怪我人を背負つている者、歩けなくなつて這つている者、果ては、精根もつきはて〻倒れている者、全ての人が、何かにつかれた様に、無表情であり、無言である。私は永井助教授の指示で留まつて、患者搬出に全力を挙げることになり、何時又空襲されるかも判らないので対空監視を命ぜられ、堤と共に、内科に引き返し屋上に駈け上つた。

やつと渦巻くゴミの様なものはへつたのであろう。薄明るくなつた様であつたが、異様な大地へ吸い込む様な渦巻と、大つぶの雨みたいなものとは依然として変りなかつた。

私は時々下で懸命に患者搬出に駈けまわつている人々へ、異状のないことを連絡しつゝ、対空監視に当つた。

基礎教室は、全くその影を認めないまでにおしつぶされ、只、病院の外廓だけが、無残な残骸となつて白つぽく旋風の中にさらけ出されている。

高南病棟東側に聳えていた煙突も、真中附近から南へ折れ曲つてしまい、その下の汽缶室は屋根をはがれてしまつて鉄骨だけが残つている。

ふり返つて城山・山里・岩川町等の浦上一帯は一面火の海と化しつゝあつた。やがて病院も南講堂附近から火がついて次第に燃え広がる様である。

大体〇時三十分か一時頃だと思う、火の広がるのを見て、私は、本館前の救護隊に引き返すことにした。その時、筬島助教授が患者を背負つて救護に懸命なのに会つたが、お互に無言で目礼しただけであつた。筬島助教授も御元気の様であつた。私も岩永看護婦、藤永看護婦を助け乍ら薬局の壁をのり越えて玄関へ出た。その時は、火も大部まわり、患者の搬出も困難な状況と判断された。

一応玄関前に搬出した負傷者を、今度は病院裏の丘へ夫々かつぎあげることにした。

最初、山王神社境内へと夫々動き出したのであるが、此処も火がまわつて危険状態になつたので引き返し、結局全ての負傷者は裏山へかつぎあげられた。

木という木は殆んど吹き倒され、芋畠の芋の葉は高熱を浴び、しなびてしまつている。到る所に負傷者や死亡者が、三々五々と折重なる様にして水を求めている。

吾々は、水を与えるべく探したが、本館前の水槽にボーフラのわいた水を探し当てることが出来たにすぎなかつた。止むを得ず、その水面をたゝきボーフラの沈んだ後の水を鉄カブト等に汲み、配つたのである。

角尾学長も丘の中腹に負傷の身を横たえて居られ調教授、永井助教授、大倉先生、前田婦長がつきそつて居られた。

椿山看護婦や、友清技手、それに小林、堤の級友と共に、水を汲んでは負傷者の間を駈けまわつた。

一方私は、学長の健在を皆にしらすと同時に、皆の志気を鼓舞しようと思い、畳二枚分位の白布で血染の日章旗を作り、それを丘の中腹―学長のねて居られる位置に立てた。そして、元気な仂ける者は、日章旗の下に集るよう永井助教授と共に声をからして叫び続けた。

その間にも夫々負傷者を背負つたり、肩を組み合つたりした幾組もの列が、金比羅山を越えて避難して行つた。

午後四時頃私と級友小林は、負傷者の今夜の食事を県本部に依頼する為に出発した。勿論、街中火の海なので、山を越え、立山町にある県本部防空壕へとひた走りに走つた。途中で数えきれない位の死傷者を追い越し乍ら、元気を出して下さいと叫びつゝ走つた。咽をからすと、附近の畠にとびこんで胡瓜をかじつた。

県本部では私が医大から連絡員として参謀室にいたことがあつたので、溝越課長（現市選管委員長）にお会いして、医大の状況を報告し、五百人分の食糧をお願いした。その結果カンパン五百人分を頂き警官の応援を得て医大へ引返した。

五時頃からカンパンを配布して廻つた。

又、調教授は穴弘法のお寺で握り飯を作り之を配布して廻つて居られた。

その頃は病院も、殆んど火の海と化してしまつていた。永井助教授の下に集つた医員学生看護婦は、夜の準備に小屋を作つたり、鉄カブトで小さな芋やカボチャを久松婦長がもつていた塩を入れたりした。一通り食物の配布を終つた者達が集つて来たのは日も暮れてしまつてからで

あつた。

暗闇の中に大つぶの雨が落ちる中で、畠の縁等に腰を下したり、転んだりして、塩炊きの芋やカボチヤを食べた。そして、皆の耳にひゞけと、私達は永井助教授の音頭で、「海行かば」と「御民われ」とを泪にむせ乍ら、その泪に負けまいとして声を限りに歌いつゞけた。その間もあちこちで、友を、師を呼ぶ声は、悲しく、暗闇の中をこだましていた。

私達が居る所から五十米位の山かげに、石崎助教授が殆んど全身火傷されて寝て居られた。永井助教授は自分の傷も忘れた様に、甲斐々々しく看病されていた。

私は級友の小林・堤・田島と共に、夫々の科に別れた他の級友のことなどを話し合つた。

浜崎は大腿骨折で、附近にいる様であり、野上も負傷しているが元気の様であつた。

麻生・朝倉・伊藤・有富等は精神科であつたが、此のグループは殆ど駄目らしい。

深山は高木に背負われて山を上つて行くのを見たというものがいたので、大丈夫らしかつた（後に二人共に死亡したことがわかつた）。

此の様子では、半分大丈夫だろうかと懸念された。

時々稲妻のような閃光が道の尾方面で上るのを見て、まだ油断がならない。皆疲れているのだが、眠れないのであろう、ゴロ〳〵と転がりまわつていた。

此の様にして、夢の様な、又夢でない様な、恐怖の一夜は裏の金比羅山から明けて行つた。

火の海は一夜の中に、何物も残さず、焼きつくしてしまい、只、方々から紫白の煙が、幾筋も真直に上つているだけである。静かである。無気味な程に静かであるが、陽光の中に元気な者も、負傷者も、夫々動き始めた。

角尾学長、山根教授、高木教授は高南病棟下の防空壕内へ移され、調教授により手当が施された。然し、一寸の物音にも、山根教授、高木教授は痙攣を起される状態で危険であつた。

吾々は調外科を整備して、そこへ大学関係の医員・学生・看護婦等の負傷者を搬入した。私の記憶では、調外科の此の部屋に搬入されたのは次の人々である。

級友では、麻生が頭部に約十五糎位の切創を受け而も既に半狂乱の状態で、あわれにも、一糸まとわず転々として転げ廻つていた。「麻生」と呼びかけると「オー」と異様な返事をする。彼は終戦と同時に昇天した。一級下の永井も居た。何の外傷も認められなかつたが、彼も終戦前日に昇天して行つた。

医員では、村上先生、平野さん（医専先輩）が記憶にある。村上先生は終戦も知らず、奥さんの名前を呼び乍ら、さも奥さんが側に居られる様な話し振りで、子供は頼むと云いつゝ昇天された。

看護婦では堀江、正味、田島、西下、岩永、藤永、小児科の給仕さん等が記憶にある。

其の日、薬専の防空壕に午後行つたのであるが、壕内には水がたまり其の中に薬専の生徒は、殆ど全部が火傷を受けてしんぎんしていた。此の人々も殆ど調外科へ運んだ。担架も急造のものであつたが、大分役に

立つた。

医専二年、一年は夫々生理学教室、解剖学教室で机についたまゝ、受講中のまゝの位置で、無残にも骨と化してしまつていた。

恐らく受講中に、非常な圧力と高熱とによつて一度に木造の講堂は圧しつぶされ、逃れることも出来ず、夏の乾燥しきつた材木は一度に火となつてしまつたものなのであろう。

今更の如く新型爆弾の威力に驚歎すると共に其の使用を呪うものである。

当時三年

洋ちやん

首藤さく

洋ちやん。あれから十年。きのう今日と思つていましたのに、泣き〳〵重ねる八月九日、十年もの歳月がたちました。でも母さんは、やはり昨日、今日の様な気がします。

町を歩いていても、後姿のよく似た人を見ると、もしやと思い急ぎ追越してみれば、ぜん〳〵違う人、何度がつかりした事でしよう。あなた位の人を見ては道を歩きながら泣きました。あれから母さんは泣き虫です。もう三十才になりますね。健在ならば子供の一人や二人はあつてもいゝ年頃ですね。昨日、慰霊碑の中にそつとしのばせた花嫁人形さんの写真を見て下さいましたか。裏にかいてあるお手紙もね。

今年一月やつとの思いでお前のなつかしいふる里、盛岡山にあなたのお墓を建てましたのよ。其の時、学校より戴いたお骨と、中学時代のお習字と共に埋葬した花嫁人形さんの写真です。生前、はにかみやさんのお前にしかられるとは思つたのです。こんな事で一瞬にして悲しい事になり、おろかな母の願いかもしれませんが、来世は長い〳〵寿命をもつてきて、こんなお人形さんみたいな人と幸せに暮して貰いたい一心です。母さんの意のあるところを汲んで手を差延べて受取つて下さいね。

色々とお前の幼い時の思い出にふけりながら、本当に気だての優しい母さん自慢の子でしたのに等と、又十二年前入試受験に来たとき安否を気づかいながら、宿で待つていた時の事等々思い出はつきぬ。「母さん、出来たよ〳〵」とにつこりと得意になつて帰つた時の事がまざ〳〵と瞼に浮ぶ。

あゝ追憶にふけりながら、只涙のみ流れる。

今年は十年祭。山河遠くはなれていれば母さんも年をとつて、参拝も出来なくなるので悲しいけれど……最後の魂と心の対面に参りました。昨日は終日思出の校庭を、お前と歩いた道を逍遥しました。文化会館で当時の惨状をみてこのむごたらしさ、母さんの憤り、腹立しさ、誰に訴えんすべもなく泣くより外は……

あなた達の大きな犠牲によつて戦争は終つたとは云え母さんは終生忘れる事は出来ません。再びこんな残酷な事を繰りかえさない様に祈るのみです。

洋ちやん!!今迄は又来るよと云つて帰りましたが、これからは参拝は

出来ませんが、心はとんで参ります。
洋三さん、安らかにお友達の方々といつしよに御瞑目して下さい。
さらば洋ちやん、思い出の長崎を泣きながらあとに、只々冥福を祈るのみ。

故首藤洋三　　当時二年

原子爆弾

村田四郎

また恨めしいあの日が近づきました。今年も、定めて皆様御集いの事と察します。去年の今日は居られた人の中にも缺げたお方もあるでしよう。死ぬるまでに今一度長崎に参りたい様な気も致しますが、私には再び長崎を見るだけの勇気はありません。
せめて此の一書を御集いの皆様へも御披露して頂けば此の上もない供養です。

年経なば忘れやせんと思ひしに
老の涙のかわく日もなし

『安らかに眠つて下さい。過ちは繰返しませぬから』
これは広島に建つた原爆碑の文辞です。原爆に関わりのない心なき人によつて書かれた文句だと思つて、私は当時憤慨抗議した事でした。
所で、最近御地の絵葉書を入手致しました。
『原子爆弾落下中心之標』
何と言う表現でしよう。私は重ねて驚きました。
何でハツキリと『米軍第二回原子爆弾投下中心地標』と書かれないのでしよう。日本軍閥の迷夢を破る為には広島の原爆は止むを得なかつたとも言えます。然し、然し、其の反響をも待たず旬日ならずして、長崎へ投下した事は天人倶に許さざる行為です。長崎の方々は如何に解して居られるのですか。
『其の罪を憎んで、其の人を憎まず』
こんな人類を欺瞞した聖語?を尊重すればこそ、此の世に犯罪がたえぬのです。若し、この語が成立するならば他人に恩を受けても
『其の愛を感謝して、其の人に感謝せず』
報恩の思想がなくなるのも当然です。
無条件降服によつて前非を悔いる国民を戦後十年猶戦犯として抑留する相手に何の遠慮が要るでしう。書き改めるべく運動して下さい。

逆縁の人にしあらで誰れが知る
今日の恨みをこの悲しみを
綿々として追憶はつきません。

故村田由之　　当時二年

思い出

川上クニ

子供が小学四年生の時主人が亡くなり、其の後は親一人子一人にて、とても親思いの子で御座いました。

一番忘れられぬのは合格の発表が新聞に出た時、私の体に飛びついて親子共に喜んだ事、それにあの角帽が又嬉しくてあの喜び方、大変で御座いました。

長崎に行く時に私に向つて、お母さんーお父さんは死んでいないけど何一つ不自由もなく自分の思う学校に行かしてくれたのでいつ死んでも思い残す事はないと、私に感謝して行つた言葉は永久に忘れられません。

八月十三日に長崎に行き、あの広い〳〵校舎の焼跡に、我が子をさがし求めてあるいたあの時の気持ちは、言葉には云い表わす事は出来ません。

只今は一人ボツチで淋しい日を送るにつけ子供の事ばかりです。今の様に病気中は尚更、思い出しては涙ばかりです。

故川上　允　　当時一年

昭和二年三月九日生　昭和十九年筑紫中学校卒業

弘治の思い出

調来助

『コージー』、『弘ー治ー』、私の呼声が穴弘法の丘にこだまして、高らかにひびきわたつたが、耳に入るのはあたりの騒音だけで、何処からも何の応答もない。丘を越え谷を渡つて隈なくさがし廻つたが、見る顔は弘治の学友か、みじめな姿をした看護婦達ばかり。たしかに基礎の教室で聴講中だつた筈だから、逃げたとすればこの丘か天主堂裏に違いないが、或いは元気に滑石までたどりついたのかも知れないと、はかない望みを頼りにして、またもとの丘に引き返した。

昼間に治療してやつた永井助教授と枕を並べて一夜をあかし、角尾学長はじめ丘で野宿した負傷者達を病院の焼跡に運んで、念のため今一度基礎教室の跡からグラウンドまで一巡した私は、十日の午後疎開先の安否をたずねるべく、徒歩で滑石に向つた。途中で十八銀行の和田氏から、二人の男の児の中一人は帰宅したが、今一人が未だ帰らない由を聞き、どちらが帰らないのかと打ち沈みながら道を急いで我家にたどりついた時、それが弘治であることが判つた。

其後は負傷者達の治療で、弘治の行方を探す暇もなく、近所の人たちから『少し心当りを尋ねてみましようか』と親切に云われた時も、『若し生きていれば何処かで手厚い治療を受けているでしようから』とお断りして、十数日を目のまわる程の多忙の中に過した。学生達が心配して、長崎市内は勿論、諫早、大村までも色々探索して呉れたが、背中に火傷

を受けて帰宅した長男の精一が、訳も判らず死んで行つた十六日にも、角尾学長が滑石大神宮の拝殿で他界された二十二日頃になつても、風の便りにさえ弘治の名を聞くことは出来なかつた。

原爆直後の混乱が一片ついた八月二十八日、私は家族（家内と女児三人）をつれて基礎の焼跡に弘治の骨拾いに出かけた。たしか当日は解剖学講義の最中だつたと云うので、腐肉をあさつている烏の群を追いはらいつつ講堂に行つてみた。立派だつた昔の階段講堂は見る影もなく、ただ台石だけが無残に残つて、所どころに白骨の山がうず高く築かれいた。恐らく崩壊した屋根の下敷きとなり、心細さに十数人づつ集つて焼け死んだためだろう。

私達は暫し呆然とこれをうち眺め、やがて涙を払いつつ各々の山から二つ三つ宛の白骨を拾つている時、突然講堂の中心部にあたる当りから『一寸来て御覧、ここに妙なものがあるよ』と惇子の呼ぶ声がした。すぐにかけつけた家内も『あツ、これは弘治の洋服だわ』と叫んだ。見ると、講堂の真中に倒れた金属製のドアに、黒ズボンの前の部分が長さ約十糎、巾約十五糎だけ焼け残つてこびりついている。裏の白布が上になつて、それに『山本』と云う字がはつきり墨で書かれていた。山本と云うのは私の姉の嫁いだ家の姓で、甥が九大医学部を卒業して海軍々医として応召したあと、弘治がその学生服を貰つて着ていたもので、当時国防色の洋服ばかりの中に、一人黒い服を着て得意になつていたものだ。家内は、これはきつと仏様のお引き合せだろうと喜んでいたが、私は、いつかひよつこり元気に帰つて来るかも知れないと思つていた空頼みが消えて、しばし悄然と焼布を手にして佇んでいた。

あれから十年、弘治は勿論永遠にあの元気な姿を見せては呉れない。今生きていれば今年満二十六歳十ケ月で、最早一かどの青年医学徒になつていることであろう。

故調　弘治　当時一年

昭和三年十月十五日生

昭和二十年三月　長崎県立瓊浦中学校修了

長崎医大原爆七周忌を省みて

関家花子

忘れも出来ぬ昭和二十年八月九日午前十一時二分は長崎の浦上を中心として原爆を受け数多の市民及び医科大学生八百五十余名の貴き命を一瞬にして灰と化した怨み深き日である。

長崎で戦禍を受けた事を知り、吾子の便りを今日か、明日かと鶴首して待てど通信は不通となり遂に手にする事が出来なかつた。

一ケ月位過ぎて、主人と、兄とで医大へ行く。広島に相次いでの被害にて残る物は、只白骨のみであつた。雅俊の友人庄司様に（一級上の二年生）教示され戦没場所へ行く。其の場所は第一解剖学教室と、第二解剖学教室との間にある解剖学講堂で、国友名誉教授の居られた建物の西側の木造建築に居たので、殆んど即死だつたとの事。

雅俊は第一小隊の第四分隊長をしていたので座席が特に分り易くその

あたりにて遺骨を拾つて帰つた。

昭和二十六年八月五日午後一時より医大では大音寺にて盛大な慰霊祭を執行される旨の招待を受けた。松山の伊賀久子様、主人、それに私も加つて三人で出席しました。祭壇には原爆犠牲者の霊を迎え殊の外厳粛である。鮮かな供華を生け、「医科大学殉没者八百五十余名の霊」と記された位牌が祭られていて読経の声は粛々として、本堂に集つた遺族は不動の姿勢で悲しいものが漂つていた。昔から大和魂をもつて敗戦の憂目を知らなかつた日本も、原爆にあつてはどうにもならなかつた。

天皇陛下には再度の原爆を御心配遊ばされ、遥かに、人民の身辺を御心痛になられ、「朕の一身如何あろうとも国民の斃れるを見るに忍びず、赤子地にひれ伏して深謝せよ」。(昭和二十年八月十六日大阪新聞より)と御前会議に賜つた御言葉にて、ついに降伏に至つたのである。終戦の犠牲者であり、同時に平和再建の柱となられた貴い霊前にて、新たに袖絞る父母の誓いこそ只々平和再建、長崎医大復興に他ならないのである。

供養一時間半、慰霊祭終了二時五十分。其の後、遺族の先生方と懇談致し、当時のお話し等承り同情し慰めあう。

若原助教授に案内され、医大の焼跡へ行く。気味悪いばかり、漠々たる荒原は、静として私達を迎えた。彼方、此方には元の鉄筋建が籠の様になつて残り、在りし日を物語つている様だつた。

先ずグビロが丘の墓地へいつてお参りする。

碑には「慰霊碑」と刻まれ、

八百五十余名のわが師わが友

平和の先駆者としてこの丘に散りたまひぬ

おもふ事みな遥かなりこの丘の

裾のべにしてミサの鐘鳴る　　星葉

と、お心をこめられた先生のお歌が刻んである。又、後には生き残つた友達が小刀で、「友、此処に眠る」と刻んだ石が横たわつていた。

自分はあまりの淋しさに、「夕陽の霊碑赤くそむる時いずくともなくきりぎりす啼く」と、一首詠んだ。感慨無量にて、しばらく冥想に耽る。

其後、毎年八月九日には遠路ではあるが、つとめてお参りする事を楽しみにしている。如何に科学が進歩したとはいえ人類を滅亡して如何なる世界が生れるのであろうか。現在原水爆禁止運動が盛んに行われている。

(松山市御幸町一四五在住)

おもうこと

関家貴美子

〃光〃　〃ひかり〃　〃光〃

光栄に輝いて居るすき透つた水晶玉のようだ。太陽の光が、浦上の夏草に、家々の屋根に反射していた昭和二十年八月九日十一時二分。

瞬間の光があつた。

みる〳〵地上に展がつて行つたものは何か!!余りにも突然に下界を荒れ狂わせ、うめき返らせて、そこには涙の余地も無い程残酷すぎる反応

を残して飛行機は去つた。

あれから十年……

グビロが丘の記念碑の辺りには同じように夏草が茂つている……

松山の地に警戒警報が時々ある頃、群青色の空に謎のように浮いていた雲を見て、素早く、「怪しい、早く隠れろ」と言つた眼がはつきりと残つている。

「犬死はしたくない」と死ぬる数日前に書いて寄こし、謎の様に浮いていた雲に敏感だつた兄が謎のように死んでいつたのだ。

海を隔てた長崎の地から「人間の体はとても複雑であり、なか〳〵うまく出来てるものだ」と、解剖学講義を受けた日の喜びを細々と記して来た。その解剖教室辺りで、くねり合つた鉄や、巨大な石、材木に覆われ、遁れる術なく死を決意した学生達が、〝海ゆかば〟〝君が代〟の大合唱をしながら襲い来る烈火の中に消えていつた記事を読んだ時は自ら頭がさがつた。

キサミ、ゴータミの言葉に「生きものは死ぬるものだ」とある様に確かに死ぬるのである。けれども、大きな対象をもつていた若人の生命が、余りにもむごたらしく圧しつぶされて了つた後には未来などもう何処にも無いのだ。多くの若人の死に対して「生きものは死ぬるものだ」の言葉を噛みしめながら心中には尚、押えがたいものが右往左往しているのである。

兄が出発の際、何か言い交したいまゝに別れた。どんな言葉か？確かに「健康に留意する様に」とは言つた。二番目に言う事は、これだとも、あの言葉だ〃とも、はつきり分らない。唯不透明なまゝに……最後に

「もう忘れ物は無いか」も言い得ず、総べてが静止しているかと思われる午後の薄い陽ざしの中に立ち去つた。リュツクサツクを背負い、トランクを持つて弾んだ歩調で長崎に向つた後姿が浮んで来る。死ぬなんて誰も思つてなかつたのに、今年盆燈籠には黒い筆で、十回忌と記すのである。……

一昨年だつたと想う。久々に墓参りを終え夕焼の彩に染つた山寺の石段をゆつくりと降りた前は、共同墓地になつており、その内の未だ新しい墓表に「復活」の字をみつけた。地上に姿はないけれども、この世に生きている我々と別な境地に活きているのである。

〝終戦〟〝敗けた〟の言葉は人間を気抜け状態にしてしまつた。全国民の必勝の夢も信念も、無茶苦茶になり、一体何に向つて歩を進めるのか、まるで夢遊病者のようになつた。世の中は、ぐらつき、なげやりと、不安の充満となり、日々の流れに無抵抗に流れ、漸く落着きを取りもどした今、平和の言葉をふり撒きながら、原水爆の密談は何処かで脈打ちつゝ形成されているのである。人類の滅亡、否地球滅亡と脅かし合つているのは人間である。

世界平和の犠牲となつた原爆死の人々を想い、みんなが、原水爆の恐ろしさを識り真心から世界の平和に手を取り合うことを願うのである。

合　掌

原爆にて死にたる兄の写真ブツク開けば余白が淋しく目にしむ

再びは姿まみゆる術もなき境を隔てし兄の顕ち来る

夕映に応うる如き反射有りて彼岸中日の墓に参り来ぬ

密度増し我に去来する様々を瞳の位置を定めて想う

〝ふるさと〟は亡兄の好みし歌にして何時か二重唱に変りて居りぬ

故関家雅俊　当時一年

大正十五年四月二日生

昭和十九年三月　県立松山中学校卒業

あの日の思い出

隆杉正孝

有史以来、残虐無比の原子爆弾が浦上の上空に炸裂したのはつい近頃のように思いますが、隙行く駒に関守なく早や十年の昔となりました。

あの非人道な兇弾の犠牲となつて、一片の白骨と化した肉親の遺族として、一日も忘れることが出来ないのでありますが、今日の記念日を迎えるに当りましてのかなしみは又一入で、当時の悲惨な光景が、まざ〳〵と瞼に浮び、胸がうづくのをとゞめる由もありません。

罹災の当日、夜ふけて猛火を冒し、又其の翌日は炎天の下、敵機を避けながら、死屍累々の焼野ケ原に我が子を捜し歩いた数日は、余りに災害が大きかつたのと、至る処罹災者で満ちて居たので、いわゆる放心状態となつたせいか、つらくもなく悲しくもありませんでした。

しかし日が経つにつれて、心の落付を取戻し、万感交々脳裡を去来して、夢なり難い夜が続きました。

雨につけ風につけ老妻のこぼす愚痴の繰言を、たしなめながら心の底では泣かずに居られぬ私でありました。

爾来年移り星変り原爆十周年の今日、篤志の方々の尽力で、グビロが丘に盛大な慰霊祭を営まれまして、老生もその末席に加わり諸精霊を弔い、御冥福を御祈り出来ましたことは、せめてもの心遣りでありました。

帰途、亡き子終焉の現場をおとない、ありし日をなつかしみ低徊去るに忍びず、腰折れを詠み、駄句をひねくつて、思わず時を移しました。

年毎に亡き子の思いやまさる
　原子兵器ののろはしきかな
夏草のしげみに鳴くや
　きりぎりす

故隆杉悟郎　当時一年

昭和三年九月二十五日生

昭和二十年三月　長崎県立長崎中学卒業

（長崎市矢ノ平町三一四在住）

茂

長谷コト

茂は五人の中の真中で一番成績が優秀で、大いに将来を期待して居りました。医学によりいくらかでもお国に尽させたかつたのでございました。

あの日私がもう戦争はいやになつた早く平和にならぬものかとなげき

ましたところ母たる人がそれではだめだ僕たちを励まし力づける役だろう、戦争はこれからだ必らず勝つと申し、元気でいつてまいります、帰つてから角帽を注文しようと申しながら出かけました。

登校してから三時間位して原爆投下。先生、友人共々に極楽まいりをいたしましたことでございましょう。

姉が角帽を買つて、仏前にお供えしたいと買いに行きましたが、どうしてもなく、うちも全焼いたしましたので、茂のものは何一つございません。

私は時折りグビロが丘の慰霊碑におまいりいたしますのが、せめてものなぐさめでございます。

戒名は、「願求院医学精茂居士」とお寺の方丈様がつけて下さいました。日夜礼拝するばかりでございます。

故長谷　茂　　当時一年

履歴書にかえて

待山嘉代

昭和二十年八月九日。あの日おそろしき原爆のため元気一ぱいで出かけました俊も、とう〳〵帰らぬ人となりました。

俊は県立長崎中学を卒え時節柄の事とて両親はもとより本人も地元の学校をのぞみ、七月一日長崎医専に入学致しました。

喜びもほんの束の間あの様な事となり、私共親として一生忘れる事も出来ません。

けれども宅一人ばかりの事でなく一家全滅の方や兄弟もろとも亡くなられた方を思いうかべ、殊に俊は昭和三年八月九日生れで丁度お誕生日に当りますので満十七才の短い一生だつたと思い、よく〳〵本人についた宿命だつたとあきらめております。

故待山　俊　　当時一年

昭和三年八月九日生

昭和二十年　長崎中学修了

習也のこと

村部やゑ

思い起すと十年前の八月九日、あの忌わしい長崎市に原爆落下の日は、一生忘れようとしても忘れる事は出来ません。

習也は大正十二年三月岡山市で生れ、主人の転任で広島に移り、生後五ケ月目に父を亡くすとゆう生れ乍らに不幸な子でありました。

その後すく〳〵と成長し、大村小学校、大村中学校を経て長崎医専に入学、長崎市より通学していましたが、病気の為め多少休み、食糧事情其の他もあり、大村に疎開し、当時医専の一年として大村より通学中でありました。親の口から申すと、親馬鹿と言われるかも知れませんが、

習也は真面目な研究心強く、且つ親思い姉兄思いの誠に申し分ない立派な子でありました。

今から考えますと、虫の知らせとも言うのか、京大に在学中の長男も四、五日前から帰省し、兄弟仲睦まじく語らう姿を見乍ら、この世に自分程幸福なものはないと思うほど又とない楽しい日々でありました。併し一夜明けた九日の朝、習也は登校前兄が帰れば休んで良いと申しておりましたが、長男はどうも帰りたくないというので、平常通りでかけましたが、一番列車が二時間延着のため、一旦帰宅し、三人で楽しい一時を過しました。その時長男は「一日位さぼれ」と言うのに、試験前だからとにつこり振り返り乍ら登校した姿は、眼前に今も髣髴と浮びますが、それがこの世の見おさめとは、神ならぬ身の知る由もありません。

十年後の今日も私と長男の眼前に浮び、胸に迫るもの切々たるものがあります。十一時二分頃、原爆は落下し、あの衝撃は大村の家もゆるがし、不安の念にかられ新型爆弾ではないかと思いましたが、その威力も知らず、自ら心に大丈夫と言い聞かせておりましたが、落ちつかずに迎えに出た駅頭は、この世の生地獄の様相を呈し、思うだに身の毛もよだつものがありました。徹宵駅頭に立ちつくし、一日長崎市の医大その他の收容先及び、各地の被爆者の收容先を五、六日逍遥しましたが、習也の面影はなく、その後も毎日風の音、木の葉の音にも耳を立て、習也の帰りをひたすら待ち暮しました。又私を慰める長男も、自分が九日に大村を発つていたら習也は死なずに良かつたのにと落胆し、男泣きに泣くのを見て、兄弟の情に泣かされました。

新学期の登校もあるので兄を京都に帰した後の習也亡き一人暮しの寂しさは形容できないものでした。その後医大より連絡があり、十一月に分骨を願い、亡主人と一緒に納骨を終りました。

世の中には戦争で親兄弟子供をなくし、孤独に泣く不幸な人もあり且つ私がめいると長男が、習也の死は自分の責のように苦しむのを見て、気をとりなおして暮す中に御蔭様にて長男も卒業、就職することが出来ました。現在は長男も嫁を貰い、嫁が良くしてくれ亡き習也の再来かとも考えられ、長男夫婦の許で習也並びに原爆罹災者の方々の冥福を、心から祈つて暮しております。

故朝長習也　当時一年
大正十二年三月生　大村中学校卒業

ミサの鐘鳴る

有富星葉

おもふ事みな遙かなりこの丘の
裾の辺にしてミサの鐘鳴る

故有富重康
（当時三年）

死亡者名簿（付属医学専門部）

(イ) 教授

小野直治　保野正之　松尾京哉

(ロ) 仮卒業生

青木伸夫　木田橋良道　清田和之

野村仲徳　樋渡俊夫

(ハ) 三年生

青木茂　浅倉多計久　浅田勝孝

浅田昇　麻生弘　足立幸男

有富重康　伊東国光　岩永達雄

大浦治　大島喜八郎　香月健

近藤金一　島田地香生　高木邦憲

高木恒信　高原繁巳　永見幸夫

芳賀久　深山隆　横手貞衛

李集鏞　渡辺雄三

(ニ) 二年生

間野千春　赤崎安孝　秋月栄

芦沢正徳　東輝男　荒牧貴敏

安楽芳照　井水信夫　池田博実

池之子肇　石井立夫　石塚充

石本和良　犬塚喬二　妹塚道俊

岩瀬充　江藤久国　大槻秀雄

沖勲　郭芳徽　金子幸雄

川床隆　河村万喜生　黒井啓

古賀敬賢　児玉正嘉　佐藤直方

下崎俊水　首藤洋三　田中精

田辺清隆　高橋茂　玉崎昭宏

武内健　土岐宗次　中尾武人

中島正武　永井保

岩永千引　小出石行夫　大野明

落合潔水　梶原辰巳　兼氏一郎

川野正章　木元又男　鍬先清四郎

古森泰而　坂本博之　謝遜英

菅原三善　田中秀雄　高永宏

高橋二郎　塚本孝允　富永誠之

中島之彦　中山喜昭　永島順三

臼坂俊行　大谷豊治　岡本陽一

片伯部勇　亀井宏　賀来潮

河添正行　倉本武　小島惇一

児玉進　佐藤恕一　里崎永二郎

生島一夫　鈴木一男　田中祥生

高橋清　高平伸吾　竹浜吉和

竹下正七　寺田重治　朝長和夫

中島静雄　永井正一　永田信夫

並木輝夫　成松英明　仁志川禎一

西田豊　昇昭二　畑原睦夫

原浩巳　樋口匠一　深堀進

福田彰一　福田博之　藤川繁文

本多四郎　前川泰成　益田良和

松尾宏　松岡登　松元武紀

三宅治信　村田玄英　村田由之

森猛　森村哲行　横田健

林栄主　和田弘行　渡辺正守

(六)一年生

阿部琢磨　青木昭三　秋口明海

秋吉敏郎　浅田典昭　荒木寛一

安藤俊光　井上政治　井田成事

池崎雅裕　磯永利夫　出田昭二郎

犬塚彦夫　今村義徳　岩田昭夫

岩永功　岩永八洲　岩永要範

上村輝人　梅木敏郎　浦上康則

浦川幸弘　蛯原守　尾崎雅男

大久保彰　大楠泰正　大隈亨

太田和男　奥野昭　甲斐靖敏

片岡哲夫　片野哲男　角川肇

金尾敏也　兼信光世　蒲原静男

川上允　川崎勝次郎　川頭琢磨

川原俊吾　木村重彦　草野家通　小玉雅昭　相良和雄　重松肇　柴田勝三　嶋田博之　白石仁　杉山克巳　田川昭義　田中清視　多田正幸　高月博　滝川益一　鶴武俊　土橋直行　轟木汎　中尾泰三　中村正明　永田嘉瑞　西村昭治　野田武光

河野明　北野陽一　草野祐次　小森巌　相良弘道　篠崎兵衛　柴田正人　嶋村治　調弘治　関家雅俊　田代正　田本利道　隆杉悟郎　高比良公昭　竹原豊　哲翁元寿　東内正雄　飛永唯三　中島欣一　中山昭之　長谷茂　西村弘　長谷川脩

木戸将之　北村昌臣　桑原真司　古味房雄　崎永哲男　篠原昇　渋谷隆資　下垣弘知　杉本勝成　摂津定昭　田尻達郎　田吉正英　高崎惇佑　高比良房男　立石希男　土橋弘基　時沢大郎　朝長習也　中島禎三　中山三郎　西大雲　野口陽一　橋本良平

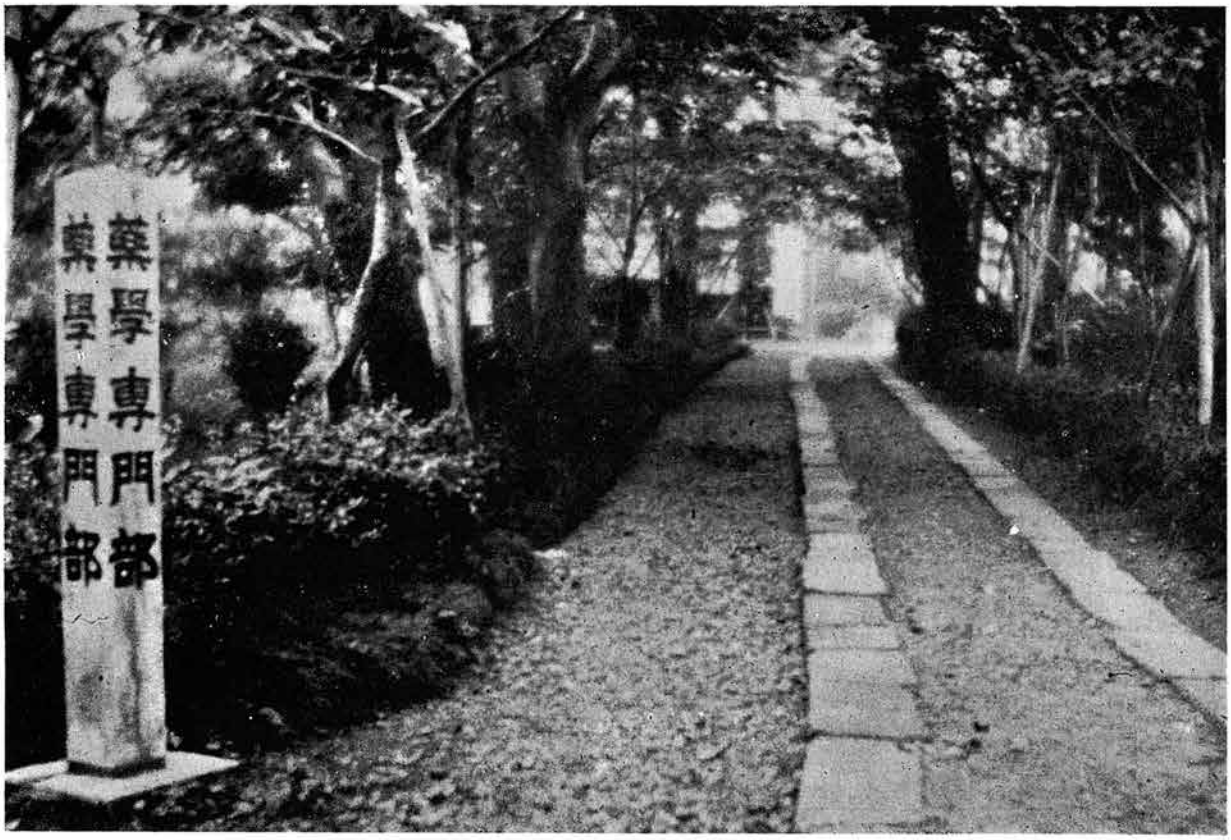
浜口恭三　浜崎菅男　林田新太郎
原　襄　日高康隆　久松鶴市
秀島克巳　平山勝康　平山真之
平山　貢　深江寛男　福田武麿
藤田正義　藤原元輔　藤本栄治
古田弘久　馬島孝徳　前川茂樹
前田信也　松鵜　璋　松田藤祐
松永久一　松本亀人　松山常雄
待山　俊　丸田脩造　三浦修造
三重俊夫　三島清和　三宅紀男
水田　肇　溝口　渉　光岡喜一郎
光永応美　峰　寛　宮本幸弘
牟田五十夫　室園重義　森　敏之
森尾勝磨　森山晃二　山口明次
山崎邦雄　山崎寿治　山下　繁
山下正之　山下嘉計　山之内正信
山領正夫　吉岡　董　吉田和郎
吉野　克　吉村竜男　米　精一
力武豊和　和田　弘　若杉　正
渡辺陽一

この中で日本名を名乗っていた台湾人学生とその本名

学年	日本名	台湾名
仮卒業生	野村仲徳	劉有徳
三年生	高原繁巳	范秉挙
一年生	永田嘉瑞	劉嘉瑞

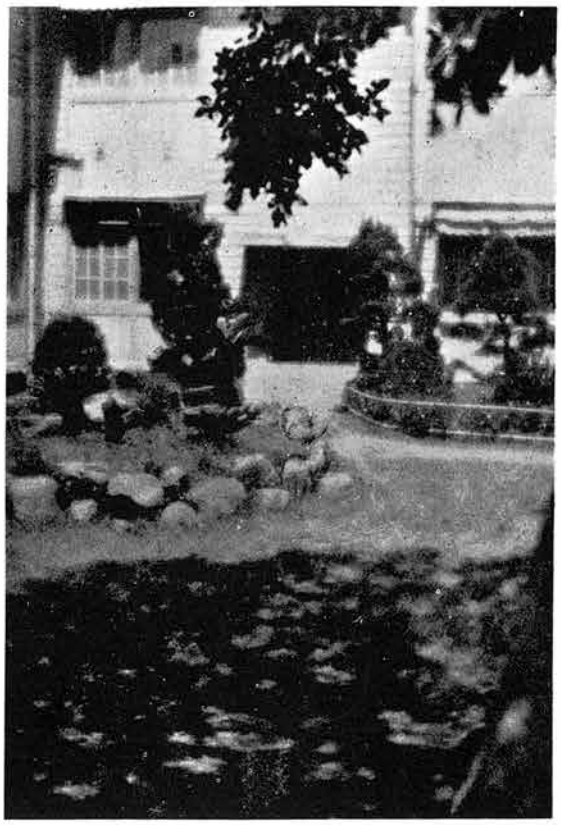
この中に二十年八月一日の爆弾で爆死した者が三名いる

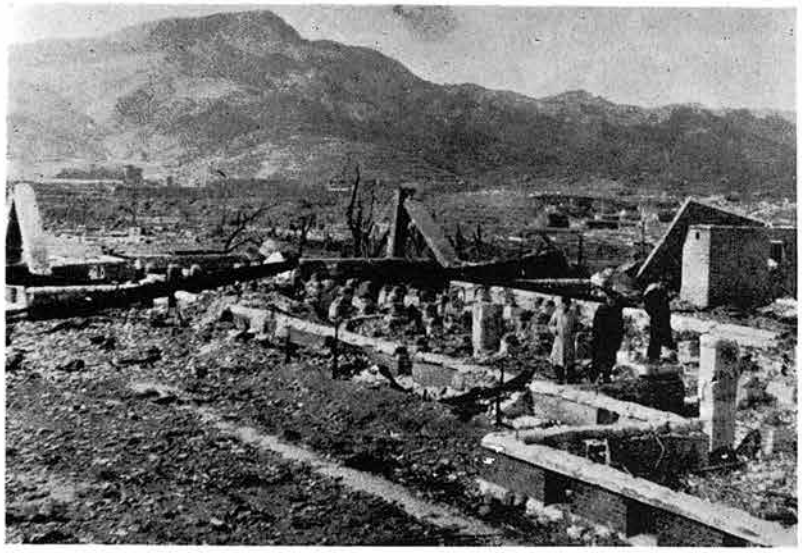
学年	日本名	台湾名
三年生	永見幸夫	
二年生	犬野　明	益田良和



旧 薬 学 専 門 部 入 口

旧薬学専門部校舎正門





被爆直後の薬学専門部教室

復興途上の長崎大学薬学部（昭和30年）

三、附屬薬專の部

沿革

薬学部は昭和二十四年五月三十一日新制大学として長崎大学の一学部として発足したが、その前身たる長崎医科大学附属薬学専門部の校歴をたずねると、実に明治二十三年六月十八日文部省告示第七号を以て第五高等中学校医学部に附設された薬学科に始まり、明治二十七年九月勅令により第五高等学校医学部薬学科と改称、更に同三十四年三月三十一日長崎医学専門学校薬学科と改り、大正十二年三月三十一日勅令第九十三号を以て官立長崎医科大学の設置に伴い同大学附属薬学専門部と校名を改称すること四たびにして昭和二十四年新制大学の薬学部となつたものである。

大正十二年四月一日附属薬学専門部教授加藤静雄同専門部初代の主事に補せらる。同十四年四月加藤静雄の辞任に伴い教授川上登喜二主事に補せらる。昭和二年十二月川上教授の辞任により教授高島清新たに主事に補せらる。同七年四月高島教授の辞任に伴い川上教授再度主事に補せらる同十一年三月川上教授主事を被免、教授大倉東一主事に補せられる。昭和十四年三月大倉主事に替り教授植田高三その後任として之に補せらる。同十七年三月植田教授主事を免ぜられ、教授江口虎三郎主事に補せられ、同十九年四月一日主事江口虎三郎薬学専門部長となる。

昭和二十年八月九日原爆により全校舎倒壊炎上し職員学生四十有余名の尊い犠牲と共に一切を灰燼に帰した。昭和二十年十月佐賀市田布施町元青年学校跡に疎開授業を開始。同二十二年一月諫早市小野島町元航空機乗員養成所跡に移転。同年三月江口虎三郎部長病気のため教授一番ケ瀬尚部長代理となる。同二十三年十一月川上登喜二文部教官に任ぜられ部長に補せらる。同二十四年五月三十一日長崎大学薬学部として発足。同年同月川上登喜二初代学部長に補せらる。同年八月文部事務官平井吉次郎事務長を命ぜらる。

同二十五年五月長崎市片淵町長崎大学経済学部の一部を借用し新制大学第一期生を収容し授業を行う。同年十二月下旬より長崎市昭和町の元長崎師範学校々舎を使用することゝなり、同本館東側（二八七坪）の補修工事に着手。同二十六年二月末第一期工事の完了に伴い、諫早市より移転し、同年三月旧薬学専門部最後の卒業式を同校舎にて挙行し、四月片淵町経済学部よりの移転も完了。

昭和二十六年十二月本館西側片袖（三二九坪）を第二期工事として着工、翌二十七年三月工事完了。同年七月川上登喜二退職に伴い教授高取治輔部長事務取扱を命ぜらる。同年七月本館正面玄関から西側（二五五

坪）を第三期工事として着工。同年九月教授高取治輔事務取扱を免ぜられ学部長に補せらる。同月ガス引込工事（住吉より一、二〇〇米）に着手完了す。同年十月第三期工事完工す。

昭和二十九年九月教授高取治輔学部長の併任終了し教授梁井光二学部長に併任せらる。文部事務官平井吉次郎転出により文部事務官西山淳次事務長を命ぜらる。同年十月本館正面玄関より東側（二七〇坪）の第四期工事に着手翌三十年三月第四期工事完了。

当時の概況

当時、薬学専門部は江口虎三郎部長の下に、清木美徳、田中欽二、若林善兵衛、横山復次、山下次郎、杉浦　孝、一番ヶ瀬尚の各教授、河野喜美彦、秋山恒雄の両助教授、大島亀治講師が在籍し、このうち若林教授、大島講師は休職中、河野助教授は応召中であつた。

この他講師として医大、高商から数名の先生が招かれていた。

在席生徒数は二百一名で、七月に入学した一年生九十二名は市内飽の浦の三菱電機製作所に動員し、二年生六十名も熊本県葦北郡水俣の日窒工場に動員中であつた。

三年生四十九名は九月卒業のため、動員先の福岡県築上郡吉富町の武田製薬吉富工場、山口県小野田市の田辺製薬小野田工場から七月末に帰校し卒業までの日々を学業に専心していた。

事務関係では河野通雄氏、松尾滝子、内野輝子、井手篤子、酒井美智子、真崎久子、野中京子の諸氏、小使の岩本偵吉、山本利吉、横瀬久吉の各氏が在籍、勤務していた。

被爆時の状況

当日、江口部長、田中教授、横山教授、一番ヶ瀬教授、秋山助教授は出張中で難を免る。在校の清木教授は防空壕掘り作業の指導中壕内で被爆負傷し、杉浦教授は薬草園で被爆即死。山下教授は大学病院に入院中被爆し死亡す。

在校中の三年生は防空壕補強工事中で二十三名が死亡。又健康上動員に耐えぬことで学校に残っていた二年生九名は図書整理中被爆死亡す。一年生四名も被爆死亡す。

事務の河野氏は当日休暇をとつていて被爆を免る。松尾滝子氏は自宅で爆死。内野、井手、の両氏は校内で被爆し死亡す。酒井、真崎、野中の三氏は在校中であつたが詳細は不明である。又小使の岩本、山本、横瀬の各氏も校内で被爆死亡する。

斯くて教授二名、生徒三十六名、事務関係者六名、計四十四名の犠牲者を出すと共に校舎、図書、器材はすべて灰尽に帰したのである。

▽原爆前後△

原爆までの記

秋山恒雄

八月九日、唯一人として夢想だにしなかつた、運命の日、あれから早や十年の才月が流れましたが、幸にも手もとに当時の簡単なメモがありましたので、薬学専門部の記録を辿つてみようと思います。

昭和二十年三月二十四日、午後一時より一年生の及落判定会あり。原級者四名決定す。五時半頃、東京乙卯研究所に戦時研究員として、上京中の田中欽二教授、突然の来校を見、東京の空襲、食糧事情などの状況を聞く。（尚田中教授は九月三日、終戦直後の混乱の東京にて急死、此日が先生最後の登校日となる。）

三月二十七日、一年生五十名、大橋電車停留所に九時集合す。浦上上水道を見学、杉浦、副島の両兄も同行し、緩速濾過法による上水道を見る。十一時警報発令、見学を中止して、大学に生徒等と共に急行帰学。途中敵機の来襲に逢う。

四月十日、九時より二年生教室にて副島助教授の在校生へ退任の挨拶あり。同助教授は広島文理大化学科へ入学、江口部長佐賀帰省中不在の為、清木教授の紹介にて行わる。三年生は工場動員中の為不在、二年生五十余名出席、淋しい生徒への別れの挨拶となる。

五月九日、午後より教官会議あり、軍の要請による国内医薬資源確保の為の研究要員、嘱託の件に付種々協議す。

（尚八月八日本件に付西部軍の指命により福岡市にて最初の協議会あり。之に出席の為、江口部長、一番ケ瀬教授等は九日は学校に不在、原爆の災害を免れらる。）

五月二十五日、杉浦教授、田辺製薬小野田工場に動員中の三年生々徒を監督の為本日、小野田市へ出張す。又半数の生徒は武田薬工の吉富工場に動員中。

六月七日、小生杉浦教授と交代の為、九時半、長崎駅発の列車にて小野田に向う。駅にて同期生の本田正広君（国立佐賀療養所勤務）に逢い、中原迄同行す。鳥栖付近から雨となるも、夜小野田に着いた頃は雨も上る。

六月八日、寮より八時出勤、工場側の伊藤氏と逢い、生徒の動員打切りの件に付き協議す。後刻、生徒の作業中のフェノール合成工場を巡視す。

六月十四日、未明、B29来襲。退所式の日時に関し工場側と相談する

も、伊藤氏廿一日を固持す。班長の田崎君と相談し、江口部長に〝部長か生徒主事来られるや〟の電報を打つ。

六月十八日、早朝副島君宿に来訪、一緒に工場に行き朝食を済ます。しばらくして江口部長も見える。部長昨夜当地着、駅前桜井旅館に宿泊の由、午後工場側と協議し、廿日に退所式を行う事決定す。

江口部長宿泊中の桜井旅館に夕食後生徒全員集合、九月卒業後の就転の件に付生徒と懇談す。

六月二十日、十一時、退所式を工場食堂にて行う。学校を代表して挨拶。式後、一応当地にて全員解散す。

六時五十分、小野田駅発下り列車にて帰途に付く。途中門司にて乗換え、夜半博多を通過、空襲にて駅附近の炎上するのを見る。

六月二十七日、各都市の空襲状況から、当地への来襲も必至と予想され、在校全員出動して、学校の一部の図書、器械等の疎開準備に忙殺される。校舎の天井をはずした板を梱包材料とし、十四ケの梱包を作る。

七月一日、新入生の入学式あり。式後小雨中を運動場にて学徒隊編成式行わる。途中空襲警報発令の為中止、十一時解除後、角尾学長の下、闘兵分列式を行う。

七月十一、十二、十三日三日間で薬草園の物置小屋に二年生を指揮して学内の常時使用の分を除き図書、薬品、ガラス器具等を全部、分散疎開さす。

八月一日、十一時近く空襲警報発令、全員横穴防空壕に待避す。約三十分後敵機来襲、爆音、機銃掃射間近に聞え壕内の電燈も消ゆ。附属病院産婦人科建物に数個の爆弾投下、大穴をあけられ、医専二年生二名、三年生一名死亡す。

八月七日、日本窒素水俣工場に動員の二年生を監督中の横山教授と交代の為水俣に出張す。この頃より長崎への空襲しきり。

午後五時二十分発上り列車にて長崎駅を立つ。鳥栖附近の車中で江口部長に逢う。

八月八日、車中にて数次の敵機来襲を受け、熊本、日奈久、田の浦等で途中停車の為水俣午前三時着の列車、十二時間延着して午後三時に着く。

日窒工場に行き横山教授に逢い、連絡、事務引継等をなす。当工場も七月末と昨七日の空爆で操業停止中、又生徒宿泊の尚和寮も七日の空襲により一部を残して全壊し、生徒等は目下自己持物等を掘出作業中との事、本日より宿舎を湯の児温泉の昭南館に移転す。

六時、水俣市より約四キロの湯の児温泉の宿舎に落付く。此処は海岸近くの空襲下にしてはやゝのんびりした小さな温泉町で、天草の島々をすぐ間近に見る。

八月九日、八時トラックに生徒達と分乗して一昨日空襲により破壊された寮に行き、掘出作業にかゝる。九時半警報発令の為作業を中止して海岸近くの壕に分散して待避す。十二時半解除、一部の生徒、十一時頃長崎の方向に巨大な茸型の雲煙を認めた事を報告す。午後工場本部と連絡し長崎に新型爆弾の落ちたのを知る。生徒一同の不安は拡がり家族の安否、下宿の事等を心配す。

八月十日、全員トラックにて工場に行くも九時警報発令され、午前中作業不能、午後工場に焼夷弾落下、生徒全員出動して消火にかゝる。

夕食後、宿舎のラヂオニュースにて日ソ交戦状態に入るを知る。

八月十一日、本日より工場本部に常駐す。九時半待避壕に入る。内部は山上の監視所との電話連絡、壕内放送等立派な設備に驚く。昨日帰校予定の横山教授本日夕刻発の上り列車にて帰校。

八月十三日、数次の空襲にて当工場も操業不能の為動員中の生徒達一時帰休さす事に決まる。

八月十四日、朝工場に行き相談の結果明日夕刻当地発引上げる事に決定す。尚空爆の為九州本線は不通個所が多い為田の浦迄工場の汽船で行き田の浦から汽車利用の予定。

夕刻工場側から生徒達の面倒をよくみて頂いた三沢氏も見え送別会を行う。アルコールも入り学徒の意気大いに上る。

八月十五日、生徒代表と工場に行き工場長、次長に別れの挨拶をなす。十一時すぎラヂオは重大発表のある事を数回知らす。正午、君が代放送の後、玉声にての大詔を拝聴す。全員炎天下脱帽粛然として聞く。余り良く聞きとれず、しばらくして終戦の事が判る。

午後湯の児の宿舎に帰り、帰路の弁当を宿舎の主人に依頼せしも承諾を得ぬ為、坂本君を工場迄派遣し亦田の浦迄乗船予定の船を島原迄の延長方も依頼す。

五時坂本君帰寮、万事好都合に事が運びほっとす。鹿児島に帰省の福井君を残し七時三十九名の生徒、工場の第二水俣丸に乗船、しばらくして出航、夕やみの湯の児を後にす。風なく波静か、十時頃三角に寄港、三角の街の火点々と見ゆ。

八月十六日、予定を変更して、大牟田に向う。同港に深夜頃着、港外に仮泊す。夜明を待ち、寄港して糸山君外十八名（佐賀福岡方面の生徒）下船。全員校歌を高らかに合唱して別れる。

七時半湯江に着き、船長に昨夜来のお礼を云つて下船す。当地にてやつと長崎の原爆の被害状況やゝ判明し医大附近が中心地らしい事を知る。十一時島原線深江駅発上り列車に乗車す。諫早駅にて隅然にも杉浦教授夫人に逢い、薬学部の被害状況と共に杉浦君の被爆に逢うを聞かされ慰めのすべを知らず。又清木先生は薬専横穴壕にありて、九死に一生得られしを知る。二時道の尾着、此の附近より周囲の山も木々の緑も褐色に変つてゐるのを見る。三菱兵器附近から原爆の威力に目をみはる。大学附近を中心とし一面焼野原と化し、医大病院の巨大な煙突もくの字に曲り悲惨を極む。プラットホームのみの浦上駅を過ぎ、焼失し尽した長崎駅着。出発の時に比べ、余りにも変り果てた長崎の姿に暗然となる。

以上はメモがありましたので転記してみました。

帰崎後二、三日して、医大本部に出頭し、各地よりかけつけた生徒遺家族の応接に当りましたが、御父兄の御悲歎の様子に顔をそむける事幾度かわかりませんでした。

清木先生、富田君等の手により仮埋葬されていた薬専生徒数名の遺体を伊藤、田崎君等（長崎在住）とで横穴壕の近くへ運び、何一つとして思う様にならない当時でしたので、焼けのこつた鉄製のベッドにのせては冥福を祈りつゝ焼きましたが、腹部はなか〳〵やけなかつた事を記憶しています。終日かゝつて遺骨を集めましたが、勿論骨壺などあるはずはなく、生徒名を聞いては石油缶におさめ、木札を立てゝ埋葬する有様で、此の焼野原では一本の草花すらたむける事が出来ませんでした。

八月二十日頃より医大本部は桜町の商工会議所の一部を借用、再建の一歩を踏みだしました。

八月末、雲仙にあつた海軍病院の薬品、医療品等を接收のため、富田、池田君、薬局の菊野君、医専の生徒三名等と共に愛野より徒歩で雲仙に登りました。宮崎旅館に宿をとり、雲仙の数ケ所のホテルに分散していた元海軍病院薬品等を旅館からリヤカーを借用して、有明ホテルの近くにあつた三菱造船所の寮に集積しました。之の作業も二週間余りで終了したので、トラツク数台で長崎に運びました。被爆後の医大病院再開に、この時の薬品、医療品は大いに役立ちました。

九月に入り、長崎在住の生徒もぼち〳〵集合しましたので、薬専の焼け跡の元薬品庫地下室に焼失を免れたバイルシタイン等の図書の運搬にかゝりましたが、医大校内は焼け残つた建物、樹木等の為校内に車が入らず、運び出すのに大変苦労しました。此の際、生化学研究室の地下室に其儘放置して、散乱していた化学関係のベリヒテ等の文献も一緒に運び出しました。之等は勿論医大医化学教室所有の図書でしたが、私達が運搬せず、其儘放つていたら多分一冊も利用出来ず散逸してしまつたでしよう。之の地下室に入つた際は沢山の書籍が土足のまゝで踏み荒されていましたので、見るにしのびず運び出したのでした。

九月末、新興善校の一室で、昭和二十年度卒業生の卒業式がありましたが、卒業生の半数、二十三名が原爆の犠牲となり、此の式に列席し得たもの二十名余りで、悲しみに包まれた淋しい卒業式となりましたが、此の様な卒業式は二度とないでしよう。又此の式の際、清木先生と共に横穴壕に残り、吾身を省みず、原爆に斃れた同窓の友を最期迄よく面倒をみた富田恒夫君に特別の賞状が授与されました事を附記しておきます。

以上たど〳〵しく書いてみましたが、記憶がうすれてしまつて、前後している事もあると思います。

以上

（国立兵庫療養所）

忘れ得ぬこと

江口虎三郎

本日梁井長崎大学薬学部長より御手紙を頂きました。早速開封いたしました所長崎が原子爆弾被爆後此の八月九日を以て満十周年になる。就いては原爆十周年紀念事業の一部として記録を作製する事になつたので、私に原爆当時の史実に就いて執筆を頼むとの事でありました。

当時私は附属薬学専門部長の職にありましたので、私に此の依頼をされた事と思いますし、又御希望に答える事は私の義務と考えます。所が私は被爆の時公務の為め出張して（後で記載）長崎に居らず、帰崎いたしましたのが十二日午前二時でありましたので被爆時及び其の直後の状況を知る事が出来ませんでした。

又可愛い生徒諸君の現世の別れにも居合わさず、此の事は十年経つた今日尚ほ自らを責むる胸中の桎梏となつています。

以上の次第でありますので私は十二日帰崎の後聞いた事見た事を基とし其の前後の学校の様子、私の行動を記してみたいと思います。

言葉に表わしようもないあの時の惨憺たる地獄絵巻の記憶は未だに生

々しく終生私を悲しませる事でありましよう。

昭和十二年七月勃発した支那事変は同十六年八月八日米英の参戦と共に第二次の世界大戦となり、戦況は日を追つて苛烈なものとなりました。

学生、生徒（医科を除く）も国を挙げての護国の一端を担う事になり、学徒動員の名の下に各工場に配置され、生産の一翼を分担する事になつたのでありますが、戦は日々に不利を重ね敵機の来襲は頻繁を極め、全国都市の殆んどが破滅の淵に臨む状況となり、昭和二十年に入つては悲しくも我が国の敗戦は愈々濃くなりました。

当時我が薬学専門部は角尾医大学長の下に私が部長を勤め、清木、横山、一番ヶ瀬、杉浦の諸君が教授の坂にあり、河野、秋山両君が助教授で、医大の方より薬理、解剖、生理、細菌、衛生の先生を、高商より修身の先生を講師に御願い致して居りました。

生徒は一年生が長崎飽の浦の三菱電機製作所に動員。二年生は熊本県葦北郡水俣にある日窒工場に動員して居りました。三年生は福岡県築上郡吉富町にある武田製薬の吉富工場と、山口県小野田市にある田辺製薬の小野田工場に半数宛二班に分れて動員して居りましたが、卒業期が九月でありました為め七月末工場を引き上げて帰校し、卒業迄残る数十日を学業の整理に専心して居りました。

私は此の三学年の諸君の事を思うと胸がつまる。

在校二年有半、それも苛烈な戦争の最中の事とて学業に専念する事も出来ず、工場に動員して工員にもおとらぬ労苦を嘗めねばなりませんでした。

それでも卒業をほんの間近に控え、楽しい学び舎に帰つてノートの整理等にいそしむ諸君は過ぎ来し労苦も楽しい思い出ではなかつたろうか。

譬え短かかつた学生々活とは云え卒業後の夢も胸中去来するものがあつたろうに。十数日の後生命の危厄に逢わねばならぬ事を諸君の誰が想像し得たであろう。

私は涙が止め度もなく流れる。

敵機の来襲は益々其の度を加え長崎は八月一日B29数十機の爆弾攻撃を受けました。

此の時大学病院にも数発の250キロ爆弾が落下して医科の学生に四、五名の犠牲者を出しました。

薬学専門部では兼ねて玄関向うの狭尺射撃場標的の所と其の右横の両所に出入口をつけ、山の中央に向つて防空壕を掘鑿して居りました所、実際爆弾攻撃を受けて不安が増し専門家にも尋ねてみました所、我々の壕では250キロ爆弾に対しても不完全だとの事でありましたので、在校中の三学年の諸君に命じ急を要する所から昼夜兼行の意気込みで防空壕の再掘進にかからせました。

当時私は一番ヶ瀬、横山両教授と共に軍の研究員を命ぜられていて、八月八日福岡の西部軍管区司令部で、初の打合わせ会が開かる旨の通知を受けましたので、最初の会であるから上記両教授と共に三名揃つて出席する事にいたしました。

一番ヶ瀬教授は学校にいましたので此の事を告げ、水俣の日窒工場に二年生に付添つていた横山教授にも此の事を電報で知らせ、交代期にもなつて居りましたので工場の方へは秋山助教授に行つて貰らう事にいたしました。

私は防空壕の掘鑿並に留守中の校務を清木、杉浦両教授に依頼し、六日長崎を立つて福岡に向いました。

八日は午前八時西部軍管区司令部の会場で一番ケ瀬教授に直ぐ逢いましたが、横山教授はついに出席しませんでした。何か支障が生じて来る事が出来なくなつた事と私達は想像するのでした。

同日の会議は研究事項に就いての外、生徒の動員に就いて軍より塩が非常に不足なるにより製塩に生徒を向けて呉れないかとの話がありましたので、其の要請を受け入れ其の頃唐津の草場君(長薬昭和六年卒)が製塩事業を始めたとかの噂を聞いていましたので若しそうだとすれば唐津の同氏工場に生徒を向け度いと思い此の事に就いて軍の諒解も得ました。

同日の会議は夕方七時頃迄続けられたと記憶する。

会議を了えて直ぐ福岡を立ち三田川の私宅迄帰り父の下に一泊しました。

明けて九日昨日の会議に於て打ち合わせた製塩工場動員に就いて草場君の所の状況等速かに知る必要がありましたので佐賀県庁に行つて調べてみる事にし、十時二十分頃だつたでしようか靴を履きかけて居りました。

其の頃小型敵機が不意に出て来て、汽車を撃つ事がよくあつて汽車で佐賀迄行くのも安心はして居れませんでした。

丁度靴を履きかけている時ラヂオがけたたましく鳴り出して、長崎の……と云ひかけましたのでハツトして聞き入りました。

長崎市民は早く退避せよ、早く早く早く、

長崎附近の者も早く退避せよ

と繰り返えし非常な緊迫感を以て告げるのでした。

之を聞いて私は突嗟に、長崎は今艦砲射撃を受けているんだなと思つたのです。所が暫時のラヂオは今敵が原子爆弾を以て長崎を攻撃中と報じ、次で、

長崎市民は早く防火につとめて下さいと云うのでした。

此数日前の八月六日に広島が原子爆弾で壊滅しましたが、此の時軍や政府では原爆の如何なるものであるかに就いて発表する所か、国民にはひた隠しに隠す事に汲々としていたようである。広島の壊滅的打撃は全然発表せず、

敵が広島に新型爆弾を落した。之は而し恐るゝに足らず蛸壺を掘り其の中に入つて上から湿つた布か蓆を被つて居れば大丈夫。

之れが其の時新聞等に出された当局の言だつたと記憶します。従つて原子爆弾が如何なるものか当時私共はよく知らず、殊にあれ丈ラヂオが注意したのだから、長崎市民も今度は完全に待避した事であろう。生徒諸君も私の長男宏(医大二学年在学)も妹親子四人(此の中長男一馬は薬専二学年在学)も無事であるに違いないと固く信じ込むのでした。

私はどこに行つていてもラヂオが長崎空襲警報発令を知らせると心配でならず急いで帰崎するのが常でありましたが、此の時ばかりはラヂオの「長崎市民は早く待避せよ」と云う言葉がいつもとは違つて強く響いたので、全部完全に待避したものと思い込み、佐賀県庁に用件もあるので早速帰崎する事をしませんでした。

翌十日には切符を売らず、十一日道の尾迄の切符を入手して午後五時過ぎの汽車で長崎に向いました。

時間表の上では五時何分ですが、前日の十日に鳥栖駅が爆撃を受け、此の日も汽車は中原駅より折返えし運転をして居てダイヤは崩れて居り、約二時間遅れて七時過ぎに発車したように記憶する。途中でも亦非常に遅れましたが、湯江駅で人が乗り込んで来て私の隣の席に掛けましたので、早速其の人に長崎の様子を尋ねました所、自分はまだ長崎に行つていないけれ共浦上方面は言語に絶する惨状で何んにもない様になつてしまつているとの事、又居た者は全部死んでしまつている相だとの話、私は此の時全身氷りつくような震えを覚えました。

之迄大丈夫と信じ切つていたのに此の一言は一瞬にして私を奈落の底に落したものでした。

学校は全滅しているのじやないか、先生も生徒も皆なくなつているのではあるまいか、等々思案に耽つて諫早駅に着きました。

ここで又女の人が私の側に乗り込んで来ましたので、直ぐ又尋ねました所此の人は竹の久保の人で原爆々発の時幸運にも防空壕を掘りつゝあつて其の中に入つていた由。

ところがピカツとして耳をつんざく音がしたので壕の口のあたりに爆弾が落ちたのだと思い、入口の所に行つてみたが其の様子はなく外は視界が暗黒になつていた。間もなく浦上一円方々に火の手があがつてそれからあちこちと逃げまわつたが、あの時はほんとうに地獄も斯くやと思われたとの事でした。

ここで私はもう何も彼も駄目だ。学校も焼けている。先生も、生徒も、宏も、妹達も皆死んでいると悲しくも信ぜざるを得ませんでした。道の尾に着いたのが午前一時頃であつたろう。

下車しようと思つて頭上の棚に乗せていたカバンを取ろうとした所ありません（車中は消燈していて真暗）、どう探してもないので駅員からランプを借りて来て探したけれども遂に見付かりませんでした。

此のカバンには之ればかりは焼いてはならぬ必要な書類を入れていて常に身辺に持つていたものです。

之れで私は又ガツカリして縁起を担ぐのではないけれども一層暗澹となるのでした。詮方なく午前一時半頃道の尾駅を出てトボトボと長崎に向いました。

長崎の方を見ればまだあちこち燃えている様である。

長崎の方よりリヤカーに夜具をのせたりして三々、五々やつて来る避難者に行き交う。

西浦上のあたり迄来たら被爆の跡は生々しく、家はなく、道には瓦礫散乱、電柱倒れ、家の焼跡、瓦礫の堆積せる間より青い火を噴いているのがあちこちに見える。人間が焼けている様な臭いが鼻に来る。城山方面にはまだ燃えている所がある。大橋を渡る。

私の住んでいた松山通りに来た。勿論一面焼野が原で、矢張あちこちに青い火がポツポツと出ている。妹達が（妹親子も私と同居）あの火の中で焼かれているような気がして合掌する。

私は松山通りから浦上の教会の方へ入つて行き学校に辿り着く積りであつたけれ共、そんな生やさしい状況ではなく、道などありはしない。

下の川橋迄来たら橋の上に四、五人の人が話して居らるゝ、私も煙草の火を借りて暫らく爆発当時の模様を此の人達から聞いた。

八日の午前十一時一寸前、其の時は空襲警報が解除になつて警戒警報

発令中だつたとの事で、防空壕に待避していた者も外に出た矢先であつた。而し空には少数機の爆音がブンブン聞えていた相である。

私が佐賀で聞いたラヂオの放送ばかりでなしに、空襲警報が解除になつて市民も壕より外に出、やれやれと汗を拭いて間もなくの事、黄紫色の怪光一閃、あつと云う閑もなく家は皆な押し潰され、其の範囲は北は殆ど道の尾の近くから、南は長崎駅の近くに及んでいるとの事でありました。倒された家からは間もなく火を出して火の海と化した由。

人は爆発時の数千度に達する高熱に晒されて即死した者も多かつた。半死半生の者が水を求めて川辺に這い寄り、あちこちから「助けて呉れ」と救いを求める様はほんとうに生き地獄と云う外云い表わし様がないと云つて居られました。

此の人達から聞いたのですが病院では炊き出しがあつている由。それで病院に行つてみる事にし浜口停留所の所迄行きました所、又四、五人の人が担架を担いで話して居ました。

私が丁度そこに行つたので「あなたはどこに行きますか」との事、病院に行くと答えた所、其の中の一人が此の人達は島原の人で子供さんが負傷して病院の裏門のあたりに寝ているらしい、此の人達をそちらに連れて行つて呉れませんかとの事でありました。

それで一緒に参りましようと云つて病院に向いましたが、真暗がりの中であつたけれ共病院に上る石畳の道も別に物に蹴躓く事もなく玄関に着きました。（此の朝顔洗いに病院下迄下りました所此の石畳の道に人間の死体五つ六つ、大きな馬の死体が一つころがつていたのには驚きました）玄関前に蓆を敷いて寝ている者があるので、学生諸君と思い起した所それは兵隊さんで久留米から兵隊さんが救護の為め来て呉れているのでした。私は先づ島原の人達を裏門迄送らねばならない、それで兵隊さんに裏門に行けますかと尋ねた所自分達が道を開いたので行けますとの事、私は突嗟にそれは元通路であつた崖下の道であろうと思つてそつちの方に案内して行つたが通れる道にはなつていない。

瓦礫は散乱電柱や針金も錯綜し、動物の腐敗臭が鼻をつく、とても通れるような所ではない、島原の人に非常に気の毒な思いをしつゝ眼科の処迄どうにか辿りついてやつと裏門の所に出た。近所に呻き声が聞える。島原の人が探して居らるゝ子供さんの名前を尋ねて其の名を呼んでみるけれども返事はない。

何度も呼んでいた所女の声で「直ぐそこの防空壕の中に大学生がなくなつてそこに人が居らるゝから行つて尋ねてみなさい」との事、何せよ真暗でどこがどこやらわからず、仕様がないので夜の明けるのを待つ事にし、暫らくやすみましようと云つて地べたにゴロリと寝ました。午前二時半になつていたろうか。

一寸ウトウトしたように思う。東の空が少し明るくなつた様な気がしたら学生らしい者の話し声が聞えて来た。

私は直ぐ起きて其の声の方に行つてみた所矢張大学の学生でした。それで二年生の江口宏がどうしているか知らないかと尋ねました所、知らないらしく、こちらに幾人も寝ていますから見に来てみなさいと云う、ついて行つた所は眼科の地下室である。

ここに二、三十名の学生が收容されていましたが既に事切れている者もあつたように思う。

ひどい負傷の者、苦悶に堪えず呻く声。
誰が誰だかわからない。
蠟燭をつけて一人一人調べてみたけれ共宏はいない。
ここに思いがけなくも解剖の佐藤助教授（現教授）が居られた。
それで早速宏の事を同氏に御尋ねした所「江口は無事でいますよ玄関のあたりに居りましょう」との事、
此の一言は私をどれ丈け喜ばせ元気づけたかわからない。宏に関する限りすつかり安心して、夜が明けるのを待つて玄関に行つてみる事にし暫らく佐藤氏と話し、明るくなりましたので玄関に行つてみました。所がここで又思い設けぬ松永君に逢いました。
同君は昭和十五年薬学部卒業後医科に進学され、卒業後軍医になり久留米に勤務、今度こちらに救護の為め兵隊を引卒して来ているのでした。
同君は出会頭に私に「先生御心配ですねー」と云う。
私は又電撃を受けたような気がして「どうしてか」、
佐藤氏は先刻「江口は無事でいる玄関あたりにいる」と云つたので、負傷者の世話をしてやつているのだろうと思つて「今探しているのだが」と申しました所、松永君は「それがー」と云うのでした。
どこにいるかいる所につれて行つて呉れと云つて同君について行たのですが、それは高北病棟の地下室でした。
ここにも二、三十名の負傷が收容されていたでしょう。中には既に息絶えて居る者もありました。又全身火傷の為め誰であるかわからないような者もあり、苦痛の為のたうちまわつて半狂乱の叫びを上げている者もあり、阿鼻叫喚の巷でした。

宏はここに寝かされていましたが、見た所一点の傷もなく私も大丈夫だろうと思い胸をなで下すのでした。
而し普通じやないと思いましたのは小用にも一人立つのに困難の様であり、私が支えてつれて行くのですが全身がビリビリ震えていた。
之れはどうもただ事ではないかと私も内心心配でした。私は被爆直後の学校の様子に就いて非常に聞き度かつたのですけれ共宏の元気回復を待つた上でと我慢して尋ねませんでした。宏より聞いた事は「ねーお父さん、あつと云う暇なかつたよ」と唯之れ丈でした。
ここに病院薬局の真野君も寝ていました。
又私の側に全身ひどい火傷で誰だか判別出来ぬ学生がいました。私が宏と話をしているのを聞いて此の負傷者は私に「江口先生でありませんか」と云うのです、其の声で私はハツとして「君は野口君じやないか」と云うと共に涙を止め得ませんでした。
同君は昭和十八年附属薬専卒業で、直ぐ医科に進学し三年生だつたと思う、同君が私に云つた最後の言葉を私は忘れる事が出来ません。
「先生私は死にませんよ敵を打たずには私は死にませんよ」と叫ぶのでした。私も「そうだしつかり元気を出せ」と心から同君の回復を祈りつゝ激励いたしましたが間もなく原爆の犠牲となつて行つた事と思います。
宏の直ぐ側に宏の同クラスの学生が寝ていました。同君の姓名を聞き洩らしましたが江口江口と宏を呼びつゝ息を引き取つて行きました。
此の情景の中にあつて宏の心中はどうであつたろうか。
それを思うと私は堪え難い。

やがて間もなく自分も同じ運命を辿るであろう儚しさを悲しまなかつたであろうか。私は学長に帰学の報告をせねばなりませんでした。

学長は負傷して外科病棟側の防空壕の中に寝て居られましたが、顔、手、足に繃帯を巻かれ血も少々滲んでいるようでしたが、ひどい負傷ではないように思いました。

こんな事とは知らず帰学が遅れてすみませんでしたと申しました所、原爆の恐ろしい事を述べられ「学校はすつかりなくなつてしまつた。なる可く早く仮校舎を見付けて授業をするようにしようねー。又君の方は宏君がやられている相だから十分手当をしてやりなさいよ」と云われました。それで私は「先生も元気を出して一日も早く達者になつて下さい」と云つて辞去しましたが之れが学長との最後の別れになつてしまいました。

学長は此の日夕刻道の尾の或る神社の社務所とかに軍用バスで移されました。

学長は以上の如くでありまして、学校壊滅と共に基礎の先生達は全部犠牲となつて居らるゝとの事でありますし、古屋野先生が学長に代つて采配を下して居られましたが驚天動地の出来事に全く手のつけられぬ状況でありました。

宏は十三日高北病棟の地下室から小児科病棟の地下室に移しましたが、容態は急速に悪化し、高熱を出し、次で猛烈な下痢が起り「お父さん心配ばかりかけてすみませんでした」と御礼を云いながら遂に十四日の午後九時五十分息を引きとりました。

思いも設けぬ出来事で突如として杖、柱と頼みに思つていた長男を失つた私は茫然として自失、魂も抜けた如く唯子供の死骸に縋り付き抱きよせ一夜を過ごし、十五日朝海江田博士父子に御世話して頂いて荼毘に付し、遺骨を携えて郷里に帰りました。

突然遺骨となつて帰つて来た宏の姿を見て祖父、妻、子供等の驚愕譬うるに物なく祖父は気を失つてしまいました。

宏の遺骨を安置、正体もなく疲れた体を数日養つて長崎に帰りましたが角尾学長が死去された事を聞きました。

先に十二日朝学校に帰つたものゝ私の留守中を頼んで置いた杉浦教授は爆死を遂げた様子であり、清木教授は負傷して長崎をはなれて居るらしく、病院収容者の中に専門部の生徒は一人も居らず、外の先生ともよく連絡つかず、一方宏は命旦夕に迫りつゝあると云う様な訳で、焦躁に駆られつゝも専門部の状況をつかむ事が出来ませんでした。

今度帰崎し調べた所によりますと、数日前より引き続き八月九日も私よりの依頼の旨に従い、三学年の生徒も清木、杉浦両教授が監督して防空壕の掘進をやつていた、人数の都合上二班に分けて作業時間を定め一班が掘れば其の間二班は休憩する仕組だつたとの事、丁度午前十一時二分頃原子爆弾は爆発したのであつて、其の時外で休憩中の諸君は不幸にして原爆の直撃を受け即死又は瀕死の重傷を負い、間もなく総て犠牲になつてしまつた。

壕内にあつて作業していた者は幸いに難を免れました。

清木教授も壕内で作業していられた相で軽傷を負われた丈でした。

不幸にして若き生命を失つた者は卒業するばかりの三学年の諸君二十三名、二学年で病弱の故を以て工場に動員せず学校にいて研究の手伝を

していた四、五名の諸君でした。

私は之等の諸君の事を思うと真に断腸の悲しみにひしがるゝ。未だ桜も蕾、やがて学業を了え各々の理想を胸に描いて社会に雄飛の日を夢みていたろうものを。

又私も御父兄最愛の子息を預り、奇しくも師弟愛の縁を結び、微力とは云え我が子も同然に毎日を共にし立派な社会人としての成長を願い期待して来たものを。

私の甥（妹の子供）も二年生で病後の故を以て工場に動員されず、学校に残つて研究を手伝つていて被爆死去いたしました。

此の方は遂いに死体の確認も出来ませんでした。

私は戦況益々不利を重ねて参りました頃、長男宏と此の甥を呼び今度の戦争は重大な結果を招き相である、負けるのではあるまいか、愈々と云う段になれば学生生徒も戦線に馳せ参んずる事にならぬとも図られず戦線に立てば生死の程はわからない、国の為め是非なき事とは云いながら、おまえ達は年老いた私より先に死に臨む事なきにしもあらず、不断の覚悟肝要だと云つてきかせるのでした。

而し斯る死に方を誰が想像したでしようか。あんな事を云いきかせていた私を私はうらめしく思う。

私の愛する二十数名の生徒諸君も、宏も、唯無念であつたろうと又胸がつまる。

先生では山下教授が病気で精神科に入院中でありましたが病室でなくなつて居られます。

杉浦教授は聞く所によりますと学生諸君と共に防空壕を掘つていたが来客があつて溫室に案内していた由。

何の用件だつたか知る者がないのですが、溫室の外から窓を開いて手を入れ何か取り出す積りだつたらしい、其の時、被爆、手を窓枠に挟まれたまゝ死去したのでした。

後で此の手を窓より外ずそうとしたけれ共どうしても外ずれず同君は其のまゝ茶毘に付されたと聞きました。

永く薬学専門部の事務室に勤めて呉れた人に松尾滝子さんがありました。同女は九日朝疎開の為の荷物を車で時津に運び、将に自宅に帰着の寸前被爆死去。

小使が二人小使室で死去。

私は呆然として唯夢の如く現世の出来事とは思えませんでした。而し又一方から考えてみますと、私共は之れでまだ幸いだつたかもわからないと思う。あの日のあの状況の下に於て例え防空壕を掘つていなかつたとして全部が壕中に退避していたろうとは思われません。皆外に居たに違いないと私は想像する。

又福岡で会議がなかつたとすれば先生達の様子も違つていて全体として被害はもつともつと大きかつた事と思います。

校内を一巡しますと、建物では薬品庫が半壊のまゝ残つている丈けで外に一物も残つて居らず、焼跡には一面に純白雪の様な結晶状物質で被われ、足を踏み入るればザクツザクツと云うのでしたが之は何か？

防空壕の側ここは壕掘りの際生徒諸君の休憩場であり悲しくも亦死場所になつた所でありますが、諸君はこゝで茶毘に付され各々父兄に引き取られて我が家に帰つて行つたのです。

中央に少しく土を盛り上げて小さな木片の墓標が立てられていました。私は香花を供え諸君の冥福を祈るのみでした。

十五日正午終戦の詔勅は煥発されていました。

私共は悲しみに打ちひしがれてばかり居られませんでした。

三年生は九月卒業です。学校は跡形もなく潰え去つたとは云え一、二年の生徒諸君がいます。

学校を如何にするかと云う事が私共に取つての重大な課題でありました。残存教授、助教授諸君全員集合、此の問題について協議を重ぬる段取りとなりました。

教授の中には斯くなる上は我々の薬学専門部は解散する外なく、生徒は他薬専に分割收容して頂くようにする外なしとの意見を抱く者もありましたが、私は其の意見には絶対反対で、一日も早く仮校舎を設営し、授業再開の目標に邁進する事と致しました。

大学としても其の方針は同様でありまして、桜町市役所に事務所が設けられ古屋野学長代理の下に頻繁に協議を重ねられて行きましたが、迂余曲折を経て薬学専門部が佐賀に仮校舎を設けて授業を開始したのは同年十月一日であつたろう。

▽体験記△

きのこ雲の下で

清木美徳

昭和二十年は大戦が始つて四年目の年である。戦の容相も次第に深刻になつて、ラジオの放送は刻々と不安さを伝えるようになつた。

今年は酉の年であるから元旦には探幽の竹鶏の軸をかけてみたのであるが、この日本の古さを見るにつけても、今年はどのようなことが起るのであろうか、非常に心配で又そら恐ろしい気もする。月が進むにつれて果して不安は増すばかりである。吾々の毎日は何かと言つて目が廻るように多忙であるが、防衛については何一つ安心の出来るものがない、このままであつたら大学数百名は爆死を待つようなものだ。学生主事として学校防衛を担つている自分には、それは耐えられない責任と思つた。そうだ吾々の力で思い切つて待避壕を作ろう。こう考えて教授会に提案した、皆も快く賛成してくれた。だが時は二月の初で霜は厳しく氷のはつた水溜りに泥まみれになつて壕を掘るのは仲々である。

場所は図書館の横の松の小山の下の狭尺射撃の監的壕の底から十米の横穴四本と、その先端から直角に二本、これも十米位で弓道場の的の裏に抜けるようにした。先生達も生徒もよく協力した。

或る日泥にまみれて学生と作業をしていると一通の電報が届けられた。それは日頃より病を得ていた兄の死報であつた。永い間苦楽を共にした兄の死であつて見ると、居ても立つても居られない。だが一日の作業が遅れると思うと又たまらない。こんな気持で帰郷、棺を送り出すと同時に家を出た。遅れ勝ちの汽車を待つ間に近くの火葬場の煙が見えた。

六月頃になると爆撃は愈々盛になつてきたが、その頃壕は大体完成していた、学長も大変喜んで視察された。そこで愈々第二期工事の話が定まつた。

長崎の空襲は四月頃一回と七月三十一日、（この時は川南の壕で助かる）八月一日と三回あつた。八月一日のは相当な被害で自宅の附近や病院が爆撃され学生も死んだ。この日三菱電機に出動中の学生を見廻りにも行つたが途中は所々に大穴があき、竹の久保あたりの電車レールはへし曲つていた。病院へは土まみれの女の死体等が次々と運ばれ、学生が一人々々手当していた。

昭和二十年八月九日（木）この日朝より天気晴朗で空には薄い白雲が点々として浮いて、気温は二十七、八度位で可なりの暑さがあつた。大学構内の老樟、栂檀、桜の並木には耳を聾する蟬の声である。午前九時頃薬学専門部に通ずる石畳の道の桜の青葉のトンネルの中から杉浦教授が国民服に弁当箱をぶらさげて登場、氏は今日、三年生を引具して壕掘作業の主役を引き受けているのである。今日三年の作業は一部は薬品庫地下室の外国図書の整理、他の一部は薬草園の手入れ、その残りは全部壕掘作業になつている。江口、一番ヶ瀬、横山の諸教授は福岡市で軍との研究打合せの為めに出張中で学校には自分と杉浦氏が当守番である。一年生は三菱電機工場に、二年は水俣の日本窒素工場に動員して不在で

あつた。

その外学校には小使の山本、横瀬の二老が居るだけで事務の松尾氏はまだ出勤していなかつた。後で聞くと道の尾にミシンを疎開させて帰つて家に上つたとたん被爆したとか父君が語つていたが十日許りで死んだ。

午前九時三年生は例の校舎前の広場に二列横隊に集合、級長の荒木君は杉浦教授に人員二十九名と報告して、全員と共に敬礼した。教授は短い手をちよろつと挙げて答礼した。次に人員の割当である壕掘の出来ない者は前に出よと命ぜられ重本、松本（忠）、武田、岩本、川浪、臼井の六名列前に出、彼等は薬品庫の図書整理に向つた。又薬草園に極小数と残りは壕掘に向つた。

被爆後図書組と壕掘の一部が助かつたのであるが、このようにして死ぬ者と生残る者が知らず知らずに生別したわけである。

このような有様は自分の研究室からよく見えたのである。その日、自分は九時より十時まで医専一年の第一組の数学の時間で、黄色の麻の服を着て新講堂で講義をした。授業中、警戒警報が鳴つたようだ。

玄関左脇の六坪の自分の研究室は昨日三年生が模様変をしてくれたので何となく珍らしく広々とした気がする。十万ボルトの大変圧器も高机の上に上げ寝台も持ちこんだ。一米角位のコンクリートの微量天秤台には電気コンロをかけ中食の用意をした。三十分後に充分出来上るのである。こんな用を済して気に掛る壕掘に出掛けることにした。出来れば皆と一緒に少しでも掘りたいと裸体になつてパンツ一着に及んだ。この時何と考えたか自分でも解らないが、待避でもないのに薬品や通帳を入れて救急雑嚢及鉄カブト等を持つて出掛けた。

このようにしていつもの通り壕の一番乗で交代に壕掘る順番を待つた。そこにはベンチがあつて左より寺戸、清木、椎名、富田、池田と並んで広島に特殊爆弾が落された話をしては真疑を疑つた。掘り番は柏君でその前は田中君であつた。これより先柏君は水飲みのため銃器庫の前の水道栓の処に行つた。すると銃器手入れの岩本君が鎌を研いでいた。柏君を見ると「あんた方はきついですね」と愛想を言つた。これが恐らく岩本君何十年かの学校と盛衰を共にした奉公の最後の姿である。壕へ帰る時上半裸体の学友が一名宛都合二名柏君の傍を過ぎて正面玄関より校舎に入つて行つたが惜しいことにその二人の名前が思い出せないと残念がつた。それは後に述べるように被爆後この内一名は突当りの応接室に、今一人は事務室の出口の処に焼け死体となつて現われたからである。

水飲みに約五分を費した柏君は裸体のまゝ壕に帰り田中君と交代して二三回鍬を振つた頃、そして田中君はようやく壕を出たとたんの事である。この時それまで遠くでブーン、ブーンと音をたてていた飛行機の音が一層はつきり聞えたので自分は皆の話声を制した。それと同時に、ゾー、ゾーという落下音が聞えるではないか。「皆身体を屈め」と命じた。一同腰掛板より下りて身を屈す。一秒二秒……柏、富田君は黄味を帯びた異様な強光を感じた。そのとたん「ズドーン」と大地が一時にくづれ落ちる様な音が壕内に響いた。皆一時にワーツというような、異様な大声を出したようであつた。壕内の電球は爆発して真ツ暗、壕の内張の板で頭をいやという程打つた。落磐のように土の雨が降る、眼鏡は泥で真ツ黒に曇つたが不思議にふつ飛びはしなかつた。富田君の伏せた上には池田君がのしかゝる。柏君はポカーンと立つている。（勿論このような

有様は何一つ見えないが後で調べてわかつたことである。）

その時富田、池田の両君が「先生出口はあいています」とさけんだ。見ると出口がぼんやりと黄褐色の埃の中に見えた。自分や柏君は出口である排水壕の方に馳け出した。この時松本（登）君が「ヤラレタ」と言つて、よろけるように入つて来た。そして壕の一番奥にいた富田君にしがみついた。富田君が気付いて薄明りで見ると全身火傷の同君は人相が全く変つてる。早速射撃場側の壕の通路に運び敷板の上に寝せた。

彼は「痛い、ユツクリヤツテクレ」と言つた。

壕の外を見渡すと、外で土運びをしていた学生は足を投げ出し、髪、眉毛は焼けて土にまみれ足の皮は桜の木に空砲を打ちかけたようにはげ、それが足の裏側だけにくツついてわらじをはいたように見える。

皆口々に「先生やられました」と呆然としている。向うには谷薬局長の娘さんが髪もおぼろに口から血を出して実に悲惨である。大学の建物は柱を取り去られ地に落ち伏し処々に煙が立ち登つているし、後の松山の木は皆倒れている。大気は日食のように暗く気温は二〇以下であろう。柏君はこわれた医化学教室の階段教室の側を通つて専門部の方に急いだ。同教室では授業中の学生が階段にずらりと並んだまま首をかしげたようにして死んでいるらしい。「オーイ」と声を掛けたが返事は勿論身動きする者も居ない。

壕の出口に立つた自分はこれはいけない。「君等は早く壕内に入らんか早く、早く、焼け死するよ、早く行こう。」とはげました。それでも立上る学生は一人も居ない。目も見えないようである。仕方がないので一人一人を担いで壕内に運ぶ決心をした。壕の入口の段々には釘のさゝつた板が爆風で沢山運ばれ、それが素足に一寸程もさゝるが少しも痛くない。何本もこれを抜いた。こんなにして大体運んだように思われた頃火は倒れた建物に拡がり、そのため入口から熱風が吹き込んで来た。まるで壕内は火焔噴射器の攻撃を受けているわけである。このようにして壕の外に居た者は或は山の方に逃げ或者は壕に收容した。山の者はその後死亡したのにその場所が不明で実に残念である。

壕内の負傷者には水が飲みたい、傷が痛い、寒い寒いと叫ぶ者もいる。だが泥水より他に与える水もない。壕内に居て助かつた五名の学生は皆自分の着物を傷ついた学友に与え、一片の布も着けていない者も居る。自分は壕内に渦巻く火焔と共に吹きこむ木材を掴んで壕外に投げ返していたが火勢は愈々つのる許りである。

この時身体を木材でしたたか打たれた様な気がすると共に急に力が出なくなつた。万事休す、裸のまま壕の角に横たはり天井に沿つて走る火気をさけた。又火の粉をさけるため全身に泥を塗つた。壕内は負傷のうめきと外の火の燃え盛かる音丈けで他には何一つ聞えない。今まで音響で彩られていた外界は無声映画の様に死の底に沈んで行くのである。

自分はこの悲痛な時の移りを時計で調べて見ようと思つて時計を探したが先程脱いで与えたパンツに入れていたのでそれを求めたが学生はしつかりそれを抱いていたのであきらめた。

何時間たつたかそのうち火勢は次第に弱つて来た。負傷者も疲れがひどく、静かになつたので富田君と二人で救いを求める為、大講堂裏の本部壕に出掛けることにした。それは先程一、二の連絡学生を出したが、そのまゝ帰らないのが気になつたからでもある。

途中にある、被爆前足の踏入れも出来ない程繁つていた松、雑木、茨の林は灰で覆われた裸山になつている。誤つて足を踏みこむと火の粉混りの熱い灰が脛を埋める。苦心の末本部壕に行つて見ると、中は暗く誰も居ないで、唯金庫が見えるだけである。外に出て附近を見渡すと食堂前の坂道に鉄兜の男が焼けずにいる。松尾学生主事らしい。又石段に頭を割られて死んでいる人も居る。まだ血が赤く生々しい。

本部壕の山に登つて病院の方を見ると、町も病院も唯黙々と燃える許りで実に静かで人の声一つ聞えない。時々爆音が聞える。二人で「オーイ」と二声三声呼んでみた。すると病院の方から助けてくれと女の叫声が聞える。

穴弘法の下の山には日の丸の大旗がひるがえつている。附近の負傷者にきくと、大学の本部だという。それに近づく為、一度堀割道路に降りた。そこには材木が積んであつて、その間には沢山の負傷者が倒れている。近づくと皆「水をくれ」といつて、うつろの目で、じつと見つめているが「先生ですか」と力ない声でささやく。あゝこの見る影もないルンペン姿の男は、先程まで角帽の医学生であるらしい。もうこうなると涙も出ない。「水を飲んだら死んでしまう、元気を出しなさい壕に行きなさい」と言い残して出発する。自分の素足には容赦なく釘がさゝる。止むを得ず死人の傍にぬぎ捨てられた破れズツクを拾つて片方だけはく。釘だらけの垂木の角材を杖にした。大旗までは起伏の岡が続き、その曲りくねつた細路には、うなだれた、血や埃りで物凄い顔のぼろ着の男女がダンテの地獄図のように点々と列をなしあてどもなく歩いて行く。辺りの甘藷畑は葉も引きちぎられたり燃えたりして赤土の肌である。

旗に近づいて見ると火の海で近づけそうにもないのだが学生の救援は鎮火を待つことを許さない。残念だが引きかえそう。帰つて見ると学生の様子は一層深刻であるが手の出しようもない、そこで再び大旗に向つて救いを求める決心をした。今度は身体は疲れているが先刻よりも、時間が過ぎているので大旗までようやく辿りついた。大旗を見ると永井隆助教授がテーブル掛に自分の血で描いた日の丸であつた。そこには調教授も居て思わず手を取り合つた。調教授は盛んに生藷を掘つて食つている。少しくぼんだ処に永井レントゲン教室の誰彼が居る。永井さんは動脈を切つて相当疲れて横になつている。「おゝ先生、生きていましたか」自分は四角な垂木の杖を投出して坐り込んだ。永井さんは暫く「サルマタ」一つの自分を見ていたが、「それではいけない、これをあげよう」と自分の黒ズボンを与えようとする。「それには及ばん、あんた困りましょう」と言うと、「いや二枚はいているので一枚はよい」と言つて脱いでくれた。それは腹のあたりに血が、べつとりとついた黒いズボンであつた。婦長は誰かのカツターシャツを貸してくれた。永井さんはこの先に角尾学長が寝て居られると言う。早速近寄つて薬学部のことや御真影の金庫のことを報告した。これで一使命は果したものゝ壕に残した学生の大問題が残つている。永井さんに相談すると「何とも致し方がない」という。勿論附近に看護の人も居ない。こんな話をしている間にも学生が気になる。大急ぎで帰つて見ると、前にもまして手の施しようもない。それかといつて、じつとしてはいられない。そこで殆んど絶望とは思つたが三度救援を求めに行くことにした。大旗まで一キロもないが行く丈けで一時間はかかる。又富田君と二人で出掛けた。大分暗くなつた頃である。

行つて見ると先と大分様子が変つていて大旗は山の下の谷に移り、そこには藁も集められ、鉄兜で南瓜を水で煮ている者もいる。人数も相当増えている。永井さんに救援を求めると「まあ南瓜でも食べなさい」という。乾パンも貰つたが、殆んど咽喉を通らない。「そんなに疲れていてはいけない、暫く休みなさい」。もうこうなつては、もがいても仕方がない、言われるまゝに藁の上にころがつたが、次の瞬間壕のことが目に浮かぶ。前と変つて救援も出来そうに見えたので、永井さんに是非何とかして学生を救援して欲しいと言つた。それならと言うので少い救援隊の中から婦長始め三、四人の看護婦もつけて貰つた。飛び立つ思いで、とつぶり暮れた為めに畑を飛び降りたり吹ツ飛んだクロスの墓につまづいたりして山を降つた。

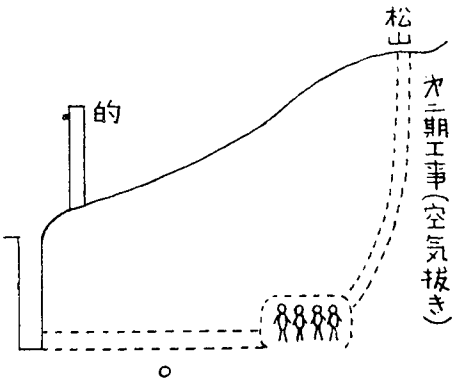
婦長さんは燃えさしのあかりを持つて暗い壕の中の学生にカンフルを注射して廻つた。又医者も一人来てくれたが殆んと皆絶望といつた。これを聞くと張りつめた気も一時に弛み昼の疲れでねむくて仕方がない。学生の最後の手当をして、傷ついた学生、壕で助かつた学生と一緒に壕の中で寝ることにした。八月の上旬とはいえ夜の更けると共に寒くて仕方がない。裸体の者、シャツ一枚の者が踏板の上に抱き合つて寝るのである。壕の奥からはうめき声が遠く家の燃える音に混つて聞える。十二時を過ぎたと思われる頃負傷者の声も消えたが、自分の横の田中君が息切れたか冷い身体がさわる。

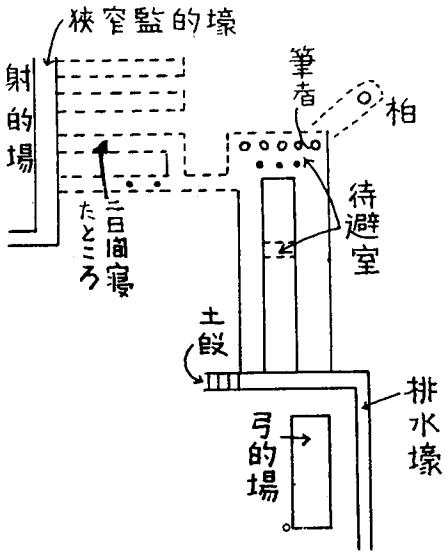
このようにして八月九日の夜は明けた。悲しいことに負傷者の大部分は死んでしまつたが各所から負傷者が集つて来る。今日は燃え残りの木材を集めて前の射的場に仮小屋を作ることにした。その中に生きている者を集め死体は矢場の砂の処に埋めた。負傷者の父兄も一、二駈け付けて死を見送つたり、モルモットの籠の焼けたものゝ上で死体を火葬する者もあつた。昨夜の寒さの経験で皆は被服を拾いに出掛けた。山の手を見ると燃え残りの木に女物の晴着や帯が引ツかゝり、溝には男物といつた具合で、皆はそれらを見付け次第に身につけた。長い着物をぞろぞろさせている者、女物の広帯を身体に巻きつけている者、素ツ裸に絽の羽織を着ている者もある。そのうち山から永井さん一行が降りて来て手当をしてくれた。敵機が来る度に壕に隠れた。何回かの待避のとき一人の学生が壕の前に立つた。低空飛行の敵機に見付かるとうるさいぞ、と叫んで良く見ると血眼になつた江口君であつた。講義中に被爆して九死に一生を得たと言つていた。この夜は永井さん一行と壕にねた。だが足を伸ばすことも寝がえりも出来なくて苦しい事限りない、それでも学校よりいくらか温かく過ごせた。唯夜雨が降つたのだろう。明くれば八月十一日、地方の消防組や各救援隊がぼつぼつ訪れてくる。又汽車も浦上爆心地附近まで通うようになつたらしく汽笛を聞く、その汽車で負傷者を運んでいるとも聞いた。そこで生存者を病院の燃え残りの処に運ぶことにした。尤もこの頃は殆んど薬科の学生は死亡し医科の人々が数人居る丈であつた。処が道がない、燃え残りの木材や乱れた電線の蜘蛛の巣の中を行くのに担架も充分にない、そこで仕方がないから大声でどなつた。「吾々はこゝを引上げる。諸君も連れて行き度いが今は運ぶ道具もない、已むを得ないが歩ける人は歩行して貰らい、動けない人は止つてよいが救援はいつ来るか今のところわからない」。すると今にも死にそうな人が一歩々々列を作つて、小石につまづき倒れながら動き初めた、何と言

ふ痛ましい姿であろうか、これが永年苦楽を共にした誰、彼の別れの姿である。最も重傷の人々は急ごしらえの担架で運ぶことにしたが、その中には数十分の生命しかない人もあつたので、姓名を尋ねたりしたが、それも待たずに死ぬ人も居た。壕の中や、薬品庫の書物整理中助かつた連中は傷ついた学友を病院の焼け跡に移つた本部に送つたり、死んで行つた者の仮埋葬をした。自分は板ぎれを拾つて炭で名を書きつけて墓標とした。又貯水タンクのセメント壁に炭で尋ねて来る人のため死者の名前を書き付けた。

これで一応仕事は終つたし学生は大変疲れているので、此の上引き留めていては又どんな事態が起るかわからないし、又家族の心配も察せられる。そこで全員集合して最後の君が代を合唱し、生残つた吾等には更に大きな天命があることを自覚しようと語つて東方を拝して別れた。それが終つた頃柏君が先生の荷物が薬品庫の地下室に焼け残つていますという、そう言われるとまだあの方に学生も居るのかも知れないと思つて行つて見ると荷は若干残つていたが学生は見当らない。それから薬草園に降りて見ると、誰かゞ杉浦教授の死体があるという。馳けつけて見ると裸で温室の前で新聞記者と話していたらしく手を温室のレンガにはさまれて死んでいた。どうしても手を引き出せないので、そのまゝ記者とゝもに土をかけて埋葬した。又学生の死体があつたが生残りは居なかつた。自分はこゝから引きかえして先程負傷者を送つた病院に行つてみることにした。途中で川南高等造船の生徒が三、四人自分を見舞いに来てくれて、何か手伝いたいと言うので薬品庫の荷物の小さいのを託した。病院には引率責任の学生も見当らず、薬専の負傷者がどこに居るかもわからない程混雑していた。皆出来る丈けのことはしてあるがこれ以上は出来ないと言うし途中で倒れて居る人も居なかつたので、とにかく沢山の患者のどこかに居るものと思つた。ここで学生と高木教授を穴に見舞つた。仕方がないので、一度自分の家の焼け跡に廻り道しながら附近に残つている唯一の壕である坂本の壕に学生を探しても見た。それから病院に引返えして見ると永井さんがボイラ室の横で素焼の鉢を拾つている、そのわけを聞くと運動場の諸畑に行つていて被爆した看護婦や自宅でなくなつた奥さんの骨を入れるのだと答えた。こゝで永井さんの家族の一部の疎開地三山での再会を約して別れた。それは食物と休眠をとるためである。それから薬専の焼跡を見ると子供二人と学生二人の黒焦げ死体があつた。自分の室の天秤台は引抜かれて何米か吹きやられていたし、永年使用の研究器具や材料はむざんに焼けていた。四方の山は赤く枯れ上り山火事が方々に見える荒涼たる運動場を望むと薬理の教授が寝巻姿で薬理の地下室から疎開品を出しかけていたが力尽きて呆然としているのが見えたので声を掛けたが近づくことも出来なかつた。

ついに失礼して三日三晩燃え続けた浦上の天主堂の下を通つて坂道を登りかけた。腹はへり咽喉は渇く、傍の井戸をのぞくと水はあるが釣瓶がない。残念そうに眺めていると軍服姿の人が「水ですか、水なら僕の所にあります」そこで水やら握飯を貰つた。それに味噌汁まで出されたときはまだこのようなものがこの世の中にあるものだろうかと思つた。礼を残してこの家を出ると、煙の中から全身負傷の女が現われ「稲佐に行けましょうか、私はそこに数人の子供を残していますが」と聞いた。恐らくこの人は道路の困難と疲れで到着は出来そうにもない。この頃か





ら日は暮れ、見えるものは方々の火の手で、古壁土の香いが死体の焼ける生臭い臭と混つたのが鼻をつく、黒焼の死体にも躓く、このようにして五〇歩、百歩と目的地に向つたが力尽きて、他家の濡縁で一夜を明かし次の朝、永井さんの仮寓についた。

今日は八月十二日学生の行方が気になるので下山していると途中で永井さん一行と出会つた、それで家に引き返し全員谷川で身体を洗つた。この部落は古い教会もあるキリシタンの村であるが沢山の負傷者が流れこんでいるという、その中には学生も居ることだろう。全員治療の用意をして電燈もない古ぼけた家に充ちている負傷者の手当をして十二時頃まで方々を廻つたが学生は少かつた。

八月十三日今日も朝から治療、午後より町に下つた。町の入口に沢山の死体があるが多分重傷の家族が仮家を作ろうとして力尽きて死んだのだろう、大小五六人が黒く焼けながら焼け材木を抱きしめているのが目をひく。又炎天下の死体は鼻をつく。これから町に出、学生を探してみることにした。坂本の壕では沢山の負傷者を昨日の手並で治療したり、病院へ連れて行つたりした。この日の夜はこの辺りの壕で一夜明かす。八月十四日、朝から治療をしたが焼けなかつた本町で学生を探すことにした。行つてみると何をするにも金なしでは困るので町の銀行に少しの金を出しに行つたが、銀行は大体の見当で心持良く支払つてくれた。だが学生は見当らない。このようにしているうち次第に身体は弱つてくる食欲は殆んどなくなつて来た。早く此の地を去らなければいけない。それには罹災証明書が必要である。人の話では井樋の口に市役所の出張所があるという、行つてみると附近の兵器廠の外人捕虜がはしやぎながら食事を取つていた。だが出張所では浜口町の人は城山小学校で事務を取つているという。仕方なしに爆心地下の川を通つて城山に向う。道は電柱、電線、木材の散乱で仲々歩行は思うようにいかない。浜口町では沢山の死体のうちに腹から赤ん坊が飛出して胎盤が長く尾を引いていたし、松山局の近くでは老人を背負つた痛ましい焼け死体もあつた。踏切の処には特に沢山の死体がある。又城山橋から学校への川沿に黒焼けの者や沢山の水死人を引揚げていた。学校には諫早から応援

に来た巡査が忙がしそうに食料を配給していて、証明書は山里校でやるという。

電車庫の焼け趾の横から山里に向いようやく証明書を得た。これから里郷を通つて病院前に出る道は壕の中こわれた塀の上到るところ死体のみである。病院では死に近づいている江口君と割合元気な国房教授を見舞つた。自分は此の夜長崎をたち翌日徒歩で鳥栖、久留米に行き午後に久留米で終戦を聞いて呆然とし疲れが一度に出て歩行も出来なかつた。

（当時　薬専教授　　現在広島大学教授）

忘れ得ぬ日

富田恒夫

人間の理性は如何なる困難に
面しても必ずそれを貫く道を
見出すものです。
今の現実は私の心を悲しませて
いますが、人間愛が人間の優れた
理性を勇気づけ、必ずやすばらしい
道を切り拓いてくれるでしょう。

——武谷三男〝暗い日〟より

戦禍による社会の不安は人間の童心を劫かすものらしい。一時的にしろ、かゝる不安から脱れて自分のみの忘却の時間がほしい。これは当時の誰もが描いた夢であつた。

運命の調べは十たび来り去つた。思い出の地長崎のあの無残な空虚の中にも、十数万男女の犠牲を基にして静かな生活が流れているが、私は、この時、今一度、八月九日午前十一時二分前後の記録を忘れつゝある思い出の中からひき出して見たいと思う。

ふつと蚊帳の中で眼をさます。暗夜の空に今日も亦敵機の襲来。一つ、二つ……もはや数える気力さえない。ラジオのブザーは夜となく、昼となく敵機の動静を伝えはするが、国民の心の中には既に浮足たつた敗者のあきらめに似た姿があつた。時折の軍艦マーチは血ばしつた国民の悲愴な眼ざしに一抹の休息を与えはするが、最早や完全に民衆は疲弊の極に達していたのである。

昭和十九年の暮、私は母校で級友八名と共に覚醒アミンの新合成の仕事を手伝わせてもらつていたし、他の友は学徒動員で山口県小野田の田辺製薬と大分県中津の武田化成に日夜徹宵の重労仂をしていた。年は明け、戦局は愈々末路を辿りつゝあつたが、私共は卒業が繰上げられ九月に学窓を離れることになつたので六月学生動員を解除され、一同間もなく元気一杯で帰つて来た。暫らく学窓を離れている内に、既に自己本来の反省を忘れ、社会の悪染を汲みとつた同僚の姿ではあつたが、しかし尚、青年の若々しさ覇気は失われてはいなかつた。当時騒然とした学舎も間もなく元の静かな真剣な学生の姿にかえり、少しでも多くの知識を吸収せんとするが如く、講義を受ける姿になつた。

江口部長以下の教授会は連日開かれ、講義を続行すべきか、図書、薬品の疎開を完了すべきかが討論され着々と実行に移されつゝあつた。一方、薬学の大防空壕は既に半年がかりで粒々として築かれていたのである。校庭に隣接した狭尺射撃場の溝から更に東南の丘を目がけて、刳抜かれ、当時、奥行十米、高さ一、五米の円形壕は入口を二つにして丘の中で会合する相当に頑強なものとなつていた。そして講義終了後、或は昼休み、研究の余閑に誰かしらスコップ、鍬、鶴嘴をにぎつては、岩に挑んでいた。清木先生は、何時でも、たゞ黙々として壕に向つておられるのだつた。あたかもブルトーザーの如し、ひたすら壕の完成へと自ら範を示されていた。学内では、或は陰口をきく者、職員の中にすら罵詈する人も出たりしたが、生来の温厚な眼ざしに微笑さえ浮べ、あたかも来るべき惨事を予感したかの如く、それこそ真剣な労仂を続けられていた。この間一度も、強要される如きことはなかつたが、同志は次々と集つて、互に生命の安全をこの壕に託するのだつた。

教授会の決議は遂に私共三年の講義を六月一杯で打切り、只管に壕の突貫作業を強行することになつた。その頃、学内は一、二年生の学徒動員で、全く淋しいものであつたし、私共、三年を除いては、僅かに病弱な学生が数名居残つている丈だつた。薬草園も私共が入学した頃は、実に美しい芝生と、薬草で学園に一つのオアシスを与えてくれたし、講義が終つた後や、独逸語で追い出された後等は、芝生に寝ころんで放談もし、笑いのたえない庭園だつたが、手入れもされず、雑草園の名、そのまゝになつて、それどころか、さつま芋で一面が芋畑になつていた。

浦上天主堂は薬草の葉陰から何時も美しい姿を見せていた。あの特異な練瓦作りの塔からアンゼラスの鐘が鳴り私共に一種の慰めを与えてくれたりもしたが、戦局が急をつげるようになつてからは一層憐れさを加えて行つた。天主堂を見おろす丘の一面には芋畑が山の頂まで敷かれていたが、丘を横ぎつて信者の白い葬列が日、一日と数を増していた。実に長い葬列であつたが、頭は白絹をかざし、口に聖書の一節を唱え、何時迄も続くのであつた。

西日が斜めに稲佐山にかゝると、紫色に染まつた山脈を通して陽光が夕暮の教会の十字架をキラツと黄金色に染めては消えた平和そのものの浦上。その姿は既に私共の中から消えて、長崎古来の風情も楽しむ余裕は殆んどなくなつていた。かゝる空虚の気持は、連日九時から午後四時半に亘る壕掘りの労仂によつては、いさゝかも満たされはしなかつた。笑いを忘れた道化師のように、ただ汗にまみれ、泥によごれ黙々として仂くのではあつたが、一刻も早く戦列につき度いという焦りを如何ともすることは出来なかつた。陸軍幹候や海軍予備学生として一人去り二人去つて、その送別会も空襲下のこととて個別に送り出さねばならず、街では何処でもやけくその祭りさわぎが行われていた。その間にも同僚の中から一人さぼり、二人休みして、総員四十九名の三年は、八月頃には三十数名になつていた。全国の各都市はその年頭から連日の空爆で、も早や無傷の都市は五指を屈する程にしか残つていなかつたが、長崎も最後まで空襲から逃れ得た都市の一つだつた。

初めて長崎が敵艦載機の襲撃を受けたのは八月一日だつたが、正午頃造船所への銃爆撃も一時鎮まつたので、私は末永と一緒に壕の裏山へ登つて見物していた。丁度その時突如として東の穴弘法の頂から超低B17

が七機音もなく病院目がけて滑り込んで来ると同時に黒いものをポロポロと落して去つた。一瞬にして病院は火、煙の中にかくれ、私は草の上に頭からつっこんだ。初めて私は死の予感を体験した。〃末永生きとるか〃〃富田大丈夫か〃二人は一目散に転ぶようにして森の中を壕え逃げ帰つた。〃誰だつ。今頃、入つて来た奴は〃杉浦さんの叱声。〃ははん、富田と末永だな〃秋山さんの声、〃馬鹿野郎、皆の命も考えず、敵機襲来下に壕に入つて来る奴があるかつ、我々の居所が敵に知られたらどうするか〃これは大きな頭巾を目深にかぶつた江口主事の声。病院では相当数の死傷者が出たが、この日を契機として学生は連日当番で宿直にあたることになつた。蚊が多くてとても眠るわけに行かない。私は大実験室の長椅子によく寝たものだつた。この室は薬品の臭いで蚊が余り、寄りつかない為だつた。又大低の者は教壇の上で寝ていたらしい。台が高いので、蚊に喰われる率も少いわけであつた。私はその頃、良く末永の家に往き来した。彼は実に器用であり分析が特に巧であつた。絵画にも相当趣味があり、その当時、余り有名でなかつた清水崑氏と親戚であつた為、私も一、二枚崑氏の漫画を戴いた事があつた。

八月八日、角尾学長は全学の職員、学生を運動場に集めて、広島の新型爆弾について医学的立場から実に適格な注意、処理法を数時間に亘つて述べ、今後、我々のなすべきことについて説かれたのであつたが、その惨状は殆んど想像もつかないものだつた。この学長訓辞を聞いたその夕刻、むし暑い長崎の夕風に、私は兄（当時熊本医大に進んでいたが暫らく帰省していた。）と末永の家に招れていた。奈良崎、多田の両君と五人で酒を飲み、久振りに大騒ぎをしたのだつたが、十一時半別れぎわに多田は〃どうも明日頃、俺は死にそうな予感がしていかん。淋しいから俺を見捨てんで一緒に居てくれ〃とて長崎会館の玄関前で寝てしまつた。私は兄と無理に起して終電車に乗せたのであるが、翌日の運命は、私と兄を残して皆死んで行つたのである。

明けて九日は、朝から雲少く、幾らか乾いた夏空。常に変らぬ一日であつた。

昨夜の痛飲は今朝の気持を爽快にした。この日、私は何時になく身体の調子が良かつたので、早目に起きて登校したら、未だ二名しか来ていなかつた。常々なら定刻より十五分程遅れて作業に就いていたので、大低は比較的楽な土運びだつたが、この日は、二列横体の右翼から三番目の後列に私は入つたのである。正九時荒木は何時もの如く、右翼から四名指名して鶴嘴をわたした。ところが、清木、杉浦両教授が〃今日は一寸馬力をかけてやろう〃と提言された為に、私の列まで計六名は壕の中え入つて行つた。私の他は、池田、奈良崎、田中、柏、椎名の五名であつた。私の左の列には山崎、江島が居たが、私の列を界として、その後、二時間目に生死を異にしたとは誰が想像し得たであろう。

〃さあ、今日は大分つらい役目にあたつたぞ〃と内心うんざりし乍ら、鍬をとり笊をとつて壕へ入つて行つた。皆一様に褌一つの裸であつた。九時二十分作業は始められ、清木、杉浦両先生が加わつて総勢八名となつた。池田、奈良崎、椎名、田中、私の順に約十五分づゝ交替で鶴嘴を振つた。私は鶴嘴を止めて壕の最も奥の板張りで囲んだ椅子で一服している間に柏が鶴嘴を振つていた。裸電球をさげた所からもう先は大分曲つて柏の姿が見えなくなる程午前中の作業は進んでいた。この間、奈良

崎、田中は水を飲みに壕を出ていたし、杉浦先生は西日本新聞の記者の来訪を受けて薬草園の案内に出て留守だつた。私は清木先生、池田、椎名と列んで休みながら互に雑談を交えていた。丁度十一時を針が指した頃、清木先生は突然〝あの音〟〟静かに〟と叫んだ。幽かなB29の金属音がひゞく。〝誰か壕の外へ出て皆に木蔭で暫らく休むように言つて来なさい〟と云われ、池田が飛び出して直ぐ戻つて来た。私は田中、奈良崎が早く帰ればいゝがと思い、皆声も出さず耳を欹てている時だつた。急激な雷鳴と地鳴りと共に猛烈な激震が起つて、目も潰れるような尖光が頭の中をかけ巡り、ズズズと地底に引込まれ、地上に私はたゝきつけられた。先生も学生もなかつた。生物も無生物もなかつた。先生の体にドツとぶちあたり、一間程飛ばされた。耳はガーンとして何も聞えず、呼吸は苦しく、数十秒の間何も憶えず、顔は呼吸苦しさにほてつて来た。

〝壕の入口にB29が落ちたらしい。入口が塞がつたぞ。俺達は生埋めに会つたぞ。〟と目前の窒息死を感じとつた。先生は真先に気付かれたのか〝おい、皆大丈夫か、傷はないか。鍬をとつて入口を掘り出さねばならぬ。ぐず〳〵しては生埋めだ〟と叫ぶ。池田、柏の両名が真先に飛び出す。私はそろ〳〵両手を頭から離した。すると何処からか冷い空気が流れて来るではないか。〝先生我々は助かりました。何れかに出口は開いているにちがいありません。〟正に歓声だ。入口とおぼしき方向をすかして見ると、段々と明るくなつてボツカリ入口は開いている。〝あゝ助かつた〟すると外から池田の声。〝先生！外は大変です。皆のものは見わけがつかない。建物は何もありません。早く。早く〟〝何つ、何もないだと〟先生は飛び出した。私も出ようとした時、入口から真黒い人影が飛び込んで来た。〝やられた。俺は残念だよつ〟私は両手でだき上げ顔を見た時、ぞつとした。これが人間否動物の顔だろうか。全身皮膚はぬるりとして血がにぢみ、頭髪も眉毛も焼け落ち、顔面は焦げ爛れ、正しく埴輪の形相で、この世の姿と、どうして言えよう。〝君は誰か〟私は失礼とは思つても聞かざるを得なかつた。〝松本登だ〟あゝ、彼の美青年を今にして誰が想像し得よう。私は肩につかまらせて壕の奥へ横たえてやる。〝俺は残念ぢや。B29一機から三個の色のついた落下傘を見た時、一寸普通の落下傘と様子がちがうがと思い、若しか広島に落ちたものぢやなからうかととつさに想像して壕の入口まで逃げたんぢやが、も一度見上げた時、アツと云う間にたゝきつけられた。痛い。何とかしてくれ〟意識は判つきりしていたが、興奮は非常なものだつた。その間に、清木先生や椎名が、大火傷の友を壕へ運ぶ。私は壕の中へ順々に導いては横に寝させてやつたが、一人一人、名前を聞かねば見さかえがつかない状態であつた。〝君は誰な〟〝池田（敏）だ。富田、わいは全然怪我ばしとらんね。おいの姿はどげんな。眼蓋が焼け着いて、眼がよう開かんが…〟あゝ、何と云うことか。無傷の私を見なほした時、私は皆に相済まぬと思つた。一応、瞞しては見たが何の薬にもならない。僚友が皆、両手を前に上げて手首からただれた薄皮をだらりとさげたまゝ火傷の苦痛を耐えしのんでいた。私の頭を見上げている姿に接しては、じつとして居れず、先生や椎名等と皆を励まし廻る丈だつた。荒木は真正面からペニスをやられ、その苦悩の姿は見るに耐えない。宮本は既に内部の食道を犯されている如く、〝富田、俺の下宿に行つて征露丸をとつて来てくれ〟と泣き叫ぶ。約十二、三名の友を壕内に引き入れた。この間にも

壕の外では、十一名の僚友が池田、椎名の後をたどつて穴弘法の山肌さして登つて行つたと云うが、全身の苦痛と熱線傷のために、悉く中途にして悲惨な最後を遂げたと思われる。

爆発後十五分か二十分経つてであろうか、一陣の風は生温く吹き始めた。風は風を呼び、見る見る壕の外は火焔の坩堝となつた。一かゝえもある材木は風に乗つて飛来し、烈風と豪火は刻々と壕の周囲に近づいていた。

椎名は〝富田君、俺達はこのまゝ居ては蒸し焼きになる丈だ。逃げよう山へ〟と避難をすゝめてくれたが、私は、この十数名の友を横に見てどうしても逃げ出せなかつた。〝俺の家は既に無いだろうし、孤独になつたから、こゝで死んでもいゝ〟と壕の奥で坐つてしまつた。彼は一瞬、ためらつたが〝では元気で〟の一語と共に固く手を握り合つて、煙の中へ消えて行つた。彼が飛び出したと同時に壕は全く火焔につゝまれたのである。一丈もあろうと思われる大木が空中を飛び、三畳もあろうと思われるトタン板が紙片の如く舞い落ちた。くすぼつた木片が壕の入口を埋めて行き、熱風がごーつと中へ巻き込んで来る。壕内は全くの煙になつて一尺先も判らなくなつた。私は褌をとつて泥水に浸ませて口を被う。傷つける友の泣き叫び、むせぶ姿を見ても私と先生では何のほどこしが出来ようか。入口に埋る木材を壕の外へ投げ上げていた時、清木先生の背に焼けた大木が落ちて一瞬、先生は失神された。〝もう僕は駄目だ。後の事は呉々も宜敷く。出来たら病院に応援を依頼して来なさい。私より、学生を。一人でも多く助け出す様に〟先生は昏睡の状態にあつた。〝先生眠つちや駄目です。皆をそのまゝ死なせる積りですか〟私はゆすぶつた。だが先生は点頭く丈で声が出ない。一時は生けるもの只々一名になつたかと心配もしたが、間もなく蘇生されたので、先生を横に寝せてあげた。壕の奥から渡辺が、とぎれの声で〝先生。人間なんて、なか〳〵死なないものですね。死にきれるということはむつかしいですな〟と声をしぼつて叫んだ痩身の渡辺の身体から、どうして、斯かる美しい言葉が出たか不思議でならない。目を転ずれば田中は壕の入口で既に絶命していた。彼は野球の投手だつたが、手に確かと石を握つていた。恐らく、数秒の差で壕に戻るのが遅かつたと考えられる。村山は壕の入口でうつ伏せになり、地下水を口と鼻からすつていたが、既に意識はなかつた。米田と江島の両巨人は壕の一番奥の椅子に寝かせていたが、苦しいとも何とも云わなかつた。たゞ平穏な顔に苦痛を耐えているのが可愛想でならなかつた。

既に二時間の苦斗を経て一風吹き去り、焼き尽された跡には一物の生物なく、火焔に徐々に流れ去つた。先生を見るとズボンもはいて居られない。横に池田（敏）が猛烈な痙攣を起し出したので、自分のズボンを被せてやられたらしい。〝富田君、時計がない。探してくれ〟と先生が私を呼ばれた。この場になつて何で時計なんかに未練があるのかと私は少々あきれもしたが、真赤な溜り水の下を探していると池田（敏）の身体の下から泥にまみれたロンジンの時計が出て来た。まだカチカチと動いていた。後から考えて、矢張り時計が出て来た御蔭で時の経過を知り得たのは貴重なことであつた。

〝どうやら火も治まつたようだね。一刻も早く病院に報告せねばならぬが。さき程、柏君を伝令に出したのに帰つて来ないが途中で火にまき

込まれたんぢやなからうか。さあ出発しよう〃と先生はフラフラ立ち上られた。私も先生も、さき程の猛火を防ぐ為、全身に泥を塗つていた為、お互に泥色の姿だ。

私は被爆後二時間もしてから初めて外の異変を見たのだつた。全く驚愕以上の恐しさを見たのである。山里、城山、松山の一望の廃墟の彼方に稲佐の山々は焦げていた。壕を包んでいた美しい森には一本の木蔭もなかつた。径一尺もある大木の森だつたが悉く地上二尺の根本から薙倒され燃えつくしていた。太陽は舞い上つた塵芥の彼方に黒い車輪の如くかゝつていた。ゴーギヤンの絵のようだつた。清木先生は焼け残つた五尺の棒材を杖にして、たゞ落涙されるのみである。私はうしろから先生を押して歩く、土は灼けてじつと止まつて居れないのである。二人共裸足であつたので、ガラス、釘、につまづくこと限りない。

生化学の図書館が猛烈に火を噴き出していた。私の父が粒々として收めた数々の図書も、一冊一冊燃えては、ひらひらと舞い散つていた。火焔の中に、学部各教室も次から次へと落ちていつた。生化学の横を這い上り、本部へ下りて行つた。本部の横には歪んだ鉄カブトや女事務員の白靴が散乱し、当時の惨状を物語つていた。只々一人の生存者もなかつた。勿論本部の防空壕には御真影も入つていなかつた。私等二人は病院を見おろして、第一、第二、第三病棟が火焔に包まれ、構内が瓦れきの山であるのを見た時、救援の望みを失つてしまつた。その頃の先生の姿は歪んだ鉄カブトを被り、一方の足には半焼けの地下たび、他方には底丈のズツク靴をつゝかけて居られた。私は丘の上の芋畑でちぎれた、ゲートルと片足の地下たびを拾つた。〃富田君、これではとても病院の者は助かつていないよ。困つたね。誰に救援を頼むべきかな〃先生の頭には壕に残して来た学生の頭のみ浮んで去らぬらしい。その時、土手の上から全裸の四十男が下りて来た。

〃ああもしもし、大学病院の医者、看護婦を見ませんでしたか〃

先生は早速尋ねられた。

〃あゝ病院の人でしたら、この畑を三つ越した向うの山腹に赤十字の旗を立てて避難していますよ。〃〃あゝよかつた。どうも有難う〃私等は助かつた。急いで土手の上からとぼとぼと山肌を穴弘法を左にして登つて行つた。芋畑の中腹に来て私は足がすくんでしまつた。幾千名という全裸の男女が身悶え、子供をかばい、既にこと切れた乳呑子とも知らずに無数のガラスの刺つた乳ぶさから飲ましている母親、夫を、親を友を呼び続ける狂乱の姿。寔にこの世のものとも思えなかつた。

彼方、此方には恐らく学生と思われる若者の今を境いとのたうち廻り、天に拳を振り上げそのまゝバツタリ倒れるもの。〃水ー。水ー〃絶叫して息をのむ者数知れなかつた。私共が側を通ると〃先生。水を下さい。私は大学の学生です。講義を聞いた事があります。外科に救援を求めて下さい〃腹からしぼり出す声は咳となり、のどに詰つて聞きとれない。

〃よし。苦しいだろうが、暫らく待つていなさい。直ぐ呼んで来る〃先生も私も、周囲から這い寄る数十の人々を前にして、このように答えて逃げねばならなかつた。我々の任務は壕に残して来た十三名の生命の上にある。

やつと赤十字が判つきりと見えた。旗の下は黒山の人の群であつた。よく見ると血染の赤十字である。頭を相当に傷つけられた学生が一名、

雄々しく旗を保持していた。教授連の横たわつて居る中に、学長を見出し、清木先生は薬学部の報告をされた。学長は顔面蒼白、頭から血が流れていたが静かな姿だつた。私にも〝御苦労さん。よく学生の面倒を頼む〟と云われた。次で私共はレントゲン科の永井グループを見出した。さすがこの一団は永井先生を囲んで次々と指令を出されていた。

〝永井さん。〟〝おゝ清木先生ですか。貴方も無事で何よりでしたなあ。〟固い握手をかわされた。〝いや。薬専の学生を壕に残している。私はどうでもいゝ。誰か助けて下さらんか〟手を合せて哀願された。見渡す所、元気な教授も、助教授も居なかつた。私は疲労のため、草むらにぶつ倒れた。うつらうつらしていると、〝富田君、眠つている時ぢやない。直ぐ戻らう。途中で山水を探すんだ〟私ははつとして飛び起きた。帰りは水丈を探して歩くが何処にもない。やつと見つけた谷間の水も幾百という死者の群で埋められていた。山肌の中途まで来た時、大学事務官の筒井氏に会つた。一升壜に大切な水を詰めて、つゝ立つていた。先生は事情を話され、氏の好意によつて、早速戴くことが出来たのである。私共は、これで級友に少しでも償いが出来ると感涙し乍ら、焦る心で壕に飛び帰つた。

壕の中は号泣、怒号の声。しかし既に呼吸絶えた友もあるらしく、声が少かつた。入口の既に死んでいた田中の口から順々に僅かの水を十三名の友の口へ注いでやつた。この愛すべき、正に呼吸を引きとらんとする友への最後の詞に、さゝやかな奉仕だつた。それでも水を口に含んで全く満足げに再び横になる友の笑顔ではあつた。更に多くの水を飲ませてやれたらと空虚な私の頭は、たゞそれ丈しか考えなかつた。その時、清木先生は〝今思い出したぞ。我々は何をしていたんだらう。この壕の横にはタンクがあつた筈だ。必ず水があるにちがいない〟と洩された。その時まで、あの急激なショックで私共は全く忘れていたわけだつた。タンクへかけつけた。既に蓋は開けられ、学部の学生らしい二名の水死体が浮んでいたが、水は満々とたゞよつていた。私は躊躇する暇もなく側の鉄カブトで汲み上げ、壕の友へ、一人一人に心ゆくまで飲ませてやつた。天の与えてくれた唯一の慰めだつた。友は泣いた。狂喜した彼等は一呼吸に飲み乾した。大低二杯の水を飲むのだつた。大火傷に水は禁ぜられているが、今の私に他に何が出来よう。たゞ無上の歓喜と満足感を与え、安らかに死につかせるだけである。水に生死の境を求めた友は満足げに死んで行つた。生命力の旺盛な友は、母を呼び、兄弟を呼び、苦しみから身を避けようとするのだつた。

夕陽は斜にかゝり午後四時頃だつたろう。私と先生は再び医療班の旗の下へ走つた。如何にも医者と看護婦を呼んで来なければならない。出来得れば注射の一本でも打つてやり度いとの一念だつた。清木、永井両先生の努力で外科の助教授一名と看護婦四名に同行して戴くことが出来た。壕への帰還はもどかしかつたが、それでも私は嬉しかつた。途中、芋畑で敵機の低空射撃に会い何度も畑に伏せねばならなかつた。〝今度爆弾が落ちたら仕舞いだ。殺すなら殺せ〟と覚悟をきめた事もあつた。壕に帰つた頃は既に暗く、壕内は明りが必要だつた。看護婦さんが紙片を束にして火をつけてくれた。実に親切な助教授と看護婦諸姉の取扱いで一人一人診断して下さつたが、既に半数以上の友は処置なしと断ぜられ、残りの者に一本づゝのビタカンフルを注射してもらつた。麻薬があ

る時ぢやなし、むしろ苦痛を増すと考えられたが、この場合私等に出来る最大の医療だつたのだ。被弾後既に五時間以上を冷土の中に横たえた十三名の友は皮膚から浸み通る地下水に震え出した。〃寒い。寒い〃と叫ぶ。私達は看護婦諸姉に手伝つてもらい、未だ元気でいる負傷者を壕の外へ出してやつた。松本（登）は〃あゝ空気がうまい。気持がすーつとする。この上に美しい水が、きれいな水があつたら他に何の望みもないがね〃と満足げに言うのだつた。確かに壕の外は穏やかに風が吹いて、あの大火も今は穴弘法の上へ上へと這上つていた。私達は助教授及び看護婦諸姉に厚く礼を述べ帰つてもらう。夕陽が西に傾く頃、私達も寒くなつたので壕の中の方が温度変化も少く、風当りを防ぎ得ると考えたので、再び友を壕の中へ運び入れた。夕日は西に沈み、薄菫色の夕もやに閉されんとしていた。空は紅に変り、赤褐色の灰を降らせていた。浦上の一きわ小高き丘には真紅の焔を挙げて燃える天主堂があつた。赤練瓦は大音響と共に散り、ギヤマンのガラスが火焔に映えてきらつと輝いては消えゆくのが淋しく望まれるのだつた。夜に入ると共に何らか連絡の便宜を計る上に、どうしても永井教室グループと合流する必要を感じ、三度山を登つていつた。血生臭い風で呼吸が止まりそうになりながらも暗い畑を通つて行くと、眼前に一人の婦人が立ちはだかつた。皮膚は焼けたゞれ、綿屑を一杯つけていた。〃誰か医者を呼んで下さらんか〃弱々しく頼まれた。先生と私は婦人に従いて或る石室に入つて見た。初めは血の臭いだつたが、目が闇になれて来ると、何十という白い眼玉が我々の方を凝視している。誰も声を出さない。それこれ、ぎつしりと幾十人かの男女が立つていたのだ。亡者の群とはこのような姿だろうかと膚に寒をおぼえ、私共は黙つて外へ出た。外は又、風が吹きはじめ、風のあいまに、遠く、近く、親を子を呼び叫ぶ数万の声が木霊して、愈々悲惨な光景を呈していた。山の頂から風に乗つて来る母親らしい女の声。これ程、はつきりと肉親感をおぼえたこともなかつた。私はこの頃、既に家は失つたものと断念していた。母も兄も弟も亡きものと諦めていた。

〃海ゆかば水浸くかばね……〃の合唱が聞えて来た。先生は〃恐らく永井グループの歌声にちがいない〃と云われたが正しくそれだつた。私は〃あゝやつと助かつた〃と思つた。

永井先生から乾パン一包をいたゞいた時は、泣ける程嬉しかつた。重本、松本（忠）両君は被爆の際薬品庫の地下に居つた筈だつた。或は助かつているかも知れず、若しかしたら火をたよつてこの辺に来ているかも知れないと清木先生はおつしやつた。私は彼方此方を大声で呼んで見た。どのくらいしてか、幽かな声で〃清木先生――〃と呼ぶ者がある。〃誰だ―〃又、静かな闇になる。〃重本です〃あゝ彼は生きていたのだ。松本（忠）君は怪我をして倒れているとの事。私等は永井グループを混えて一応壕に帰ることになつた。

壕では既に静まりかえつていたが、私と先生は竝んで横になつたが寒くて眠れず、うとうとする丈だつた。夜明けが待遠しかつた。不思議に一匹の蚊すら飛んで来なかつた。長崎名物の夕凪に飛んで来る蚊群も羽をたゝき落されたのだろうか。

明けて十日は、昨日の悪夢を忘れたかの如く、コバルト色に晴れ渡つた。私等は生存せる僅かの友を壕の外へ出してやつた。この朝、生存せる者、僅かに数名となつていた。米田、江島、村山、渡辺等は既に死に

絶えていた。未だ六時頃だつた。遠くから〃松本さん〃〃松本さん〃と叫びながら泣き度いばかりの声で歩いて来られた夫婦があつた。松本登君の下宿の人だつたが、買物籠に握り飯や果物、生ナスビ、キウリ、ジヤガイモを一杯詰めて恐らくこの新鮮な野菜を松本に喰わせるためにと親の如く駈けつけて来られたのだつた。今や生死の境を放浪う松本のうわ言を聞き、尚一心に看護に当られる姿を見て私は落涙をどうすることも出来なかつた。彼もこの下宿の夫妻に気がついたのか、笑顔を見せ感謝の手を握り合つた。十時半頃、〃お母さん。お母さん。万才〃と幽かに叫んで呼吸を引とつた。

この頃、最後の生存者は岡本省三君ただ一人だつた。彼は、何処かに死場所を探すべくとぼとぼと歩き廻つていた。恐らく両親を想い出し、最良の温かい場所を求める如くに。ふと私の傍へ寄つて来て〃おい富田。俺が死んで行くまで傍に居つてくれ。こんなみじめな姿で犬死するのは全く淋しい……。あゝ一寸疲れた。横にさしてくれ〃弱々しくさゝやいた。私は彼に着せてやる上衣類の無いのがはがゆかつた。友としての償いはたゞ心の結合だけだつた。私は左腕に彼の頭をのせ、少しでもやわらかな枕の代用にと彼を寝せた。彼も次第に疲労が増して来ている様子だつた。出来る丈け直射日光を受けぬよう私は身体で蔭を作つてやるより他に手段がなかつた。彼はじつとして居れなくなり、左に右に転々とした。やがて虫の知らせというか、〃おい。富田。何処に居るや。眼がかすんで何も見えん。貴様の顔の形丈がかすかに見える丈ぢや。もう駄目らしいな。母や親父に会つて死にたいよ。母はきつと俺をさがしに来て呉れる筈だ。その時、若し会つたらこの時計を。……この時計を。……渡してくれ。……ああ〃そのまゝ首が動かなくなつた。眼は開いたまゝ虚空に両親を探し求める如く、顔には笑顔さえ浮べて、遂に十二時四十五分哀しく息を引取つたのだつた。共に学びつゝ労仂に励んだ友の最後の一人を失つてしまつた今、私には何の興感もなかつた。余りにも青年の命の短かく散つて行つた姿を見て、青春の何たるかを疑わざるを得なかつた。

夕刻には久留米師団から軍隊の出動があり、負傷者の收容がはじまつた。その頃、私等の壕は大学内で一番堅固を誇つていたので、生き残りの大学々部の学生が数十人、一様な惨な姿で壕の周囲に転々としていた。兵隊がやつて来て重傷者を大学病院本館まで運ぶようにと伝えて来た。私は比較的元気な学生の肩をかつぎ、打ち折られた大樹、電柱、全壊した病棟のコンクリートの山を越えて一人、二人と運んでは戻つて来た。正に重労仂だつたが、私は飯も喰い度なかつた。握り飯を見ると吐気をもよおすのだつた。兵隊は私の姿を見て驚嘆していたし、一人の将校は賞めてもくれた。私は江口主事の令息（学部二年）を運び終えた後、そつと病院の薬局に入つて見たが、薬は何もなく、灰の山だつた。二階から三階への階段には、五、六体の焼死体が当時の惨状そのまゝに、或は抱き合い、或は手すりに寄りかゝつて仆れていた。頭をさわると、ぽろぽろと灰になつて散つた。全く男女の区別さえつかないのであつた。

その晩、私は壕が寒いので病院本館入口の、死体の灰の上で寝た。適度の温りがあつて、当時としては別天地の寝床だつた。

明けて三日目の十一日は、朝から市民が病院本部につめかけ数千名を数えるようになつて、身動き出来なくなつたので、幾らか冷えて来た本

館建物の中に重傷者が整理されて行つた。私の同僚で当日運よく休んでいた友が続々とかけつけて呉れた。中でも態々熊本から本田君が帰つて来てくれたのには感謝した。皆は当時の惨状を茫然として私から聞く丈だつた。私は病院本部との連絡をやつていた時、期せずして病院食堂の前で弟に会い、家の様子も大凡判つたし、母も無事だと聞いていたので気持は大分落付いていた。同僚の手をかりて、私と清木先生は壕の中から亡き友の亡骸を運び出している時、私の兄は穴弘法を山越えして私をさがし廻つていた。壕に辿りついて私が生きていることを知つた時には、さすがの兄もぽろぽろと涙を流し泣いていた。

皆で壕の外に友の亡骸を埋葬し、私は木片に炭で各人の名前を記し位牌の代用にしてその上に建てた。かくして、一応は皆の埋葬を終えたので、清木先生は、〃こゝで解散しよう〃と提案された。一同、亡き友の前に整列し、先生の指揮で最後の別れを告げ、茲に私は三日目に家路をさして帰つたのであつた。新大工町に橋本の下宿していた洗濯屋さんがあり、私の家とも懇意だつたので寄つて見たが、橋本は帰つていなかつた。壕の土運びをしていたので、恐らく同志十一名と山を越えて逃げるべく辿つて行つたのであらうが、途中で動けなくなつたのではないかと私は伝えて置いた。

家では母が私を見て卒倒したりしたが、二、三日寝ていてもあとの整理が気になつて、再び十五日頃から大学へ出て行つた。八月下旬になると全国から遺族がかけつけられ、私は毎日、同僚の御家族を案内して共に骨を集めたのだつたが、壕の十三名は兎も角として、行方の知れない十一名の家族の方々には何としても気の毒で慰めの言葉を知らなかつたのである。

原爆体験記

寺戸寿雄

今を去る十年前の回想であるから時間的には多少の記憶のズレがあるかも知れないことをお断りしておきます。

原爆投下に先だつこと旬日（？）、長崎市は敵機の空襲を受け附属病院の一角に被爆し、患者、看護婦等数名の犠牲者を出した。この状況に鑑み、当時射的場の小山を利用して防空壕が作つてあつた。その壕は一旦地表から地下に掘り下げて地下室式の作り方であつた。この壕の奥行が浅かつた為にもう少し深くする為の作業を医学、薬学交代でやつていたわけであつた。丁度被爆前日即ち八月八日より引き続き作業をしていたのが当時薬専の三年生であつた我々である。

壕の中は狭く多人数入れないので大体四―五名が中に入つて掘進していた。私は前日迄掘つた土の運搬係りの方をやつていたが、当日は交代しようということで私は希望して他の友人数名（池田、椎名、田中、富田柏？の各君）と壕中に入つた。

交代したことが後で思えば運命の岐れ路になろうとは神のみ知ることであつたのでありましよう。

暑い最中ではあり皆上半身は裸体であつた。時は丁度空襲警報が解除になり警戒警報になつていたので医学、医専の人々は授業を受けていた。ところが又直に爆音が聞えたが何大したことはないだろうとタカを喰つていた。

その時である、壕の最も奥の方にいた私の感じはピカツと閃光を感じ、ドカンという二大音響を聞き、それと同時に壕の中に引き込んであつた電燈は消え、猛烈な爆風を受けた一瞬耳がガン〳〵して何も聞えず目も勿論見えない。しまつた!!テツキリこれは壕の入口辺りに爆弾が落ちて壕が塞がり生き埋めになつた。もう駄目だ!という死の直感が頭に閃めいた。その時は後で分つたことだが午前十一時二分であつた。

この時のこの気持は戦場に於ける死に直面した兵士の場合も同様であろうと思い何とも形容し難いものである。そうした場面に遭遇した言葉の表現は文学者にお委せしましよう。

暫くすると壕内の薄煙もはれてきて友人も元気にしているのを見て何となくホツとした気持ちになる。何とかして穴を出ないことにはと相談してツルハシ、スコツプ等を握りしめた。ところが何か知ら先の方が薄明るいのでオヤ穴は塞がつてないぞ。シメタ。呼んでみようとてオーイと呼んでみたところ外の方でも応答があつた。

急いで出口にかけつけてみると穴は異常ない。先程の感情とは反対にヤレ〳〵助かつたぞ、よかつた〳〵と喜び合い乍ら外に出てみて驚いた。外で待つていた学友は、即死者はいなかつたようだが、放射熱と爆風の為であろう。黒く焼け焦げた皮膚、その皮膚が厚くむけて下の赤味がまる出しであり、乞食がボロ〳〵の布をブラ下げたように、立つて歩く様は、まるで俊寛僧都ではないがオドロを身に纏いさまよい歩くが如しで何とも無残此の上もなく、正視するに耐えない有様である。

空には未だ爆音が聞え、猶危険を感ずるし、負傷者を先づ壕内に收容した。殆んどの者は自分で歩いて入る位の体力はあつたように思う。負傷者はひどい火傷のため渇を訴え、口々に水をくれと叫べども水は無く、動ける者が自ら壕内の泥水を飲む有様、又ひどく悪寒があるのであろう。今度は寒い〳〵何か着る物をくれと叫べども我々も同様裸ではあるし、手の下しようがない。

外の光景はどうかというに倒れた木造校舎は、倒れると同時に放射熱で燃えだし、その熱風が風向が変るとドツと壕内に吹き込み、たまつたものではない。その度に壕内をあつちこつちと逃げ廻る始末であつた。

火勢も漸次衰えて周囲の様子を眺めてみると又々驚きの外ない。一望千里ではないが、目にうつる所一面の焼野原、校舎は勿論一般民家も樹木も焼けたゞれ浅ましい限りである。竹林は全部が地面にベツタリはいつくばつたように寝てしまつているし、浦上天主堂のあの威容も現在残つているような見るかげもない有様である。

壕内に寝ている寒い〳〵という負傷者のために焼け残りや、風に吹き散らされたボロ布を集めてくる。それを少しづゝ分け与えるがホンの気休めでしかない。

病院の方は鉄筋コンクリートだから大丈夫だろうとは思つても、天主堂があの通りだからとても駄目かも知れない。病院自体が被害を受け、各自も医薬学を学ぶ者であるが一旦被害者の立場になると何と情ないことか、医学が病院が我々の身から遠く離れて行くのをどうすることも出来ない。之を思うに医学は治療に第三者的立場で初めてその機能を十分に発揮できるものであることをつく〳〵感ぜられた。

その間にも壕内で負傷者を励げまし乍ら一緒にいたが、何せ手の施しようがない。その中あちらで『天皇陛下万歳』と最期の言葉を発する者

があり、こちらで『お母さん助けて』と弱々しい声を出す者もあり、ウメキ声も次第〳〵に高くなり死の陰が漸く皆を押し包みつゝあつたのであります。この頃は大体午後三時—四時位だつたかと記憶します。被爆後四—五時間経過していた。

同じく壕の中で作業していた田中君は、どこをやられたのか外見上には見るべき傷もなかつたようであつたがひどく弱つていたようだつた。後ではこの田中君も死亡者の一人となつていた。

何しろ生存者よりも負傷者の方が多く、それに手当はされず、全く弱りぬいてしまつたが、今度は気持ちの上にも時間の経過と共に少しゆとりが出来て来たので我々生き残りの者が急に空腹を覚え、このまゝでは徒らに皆を死に至らしめるだけだから、山を越えて脱出し、救護所に応援を求めようと意見が纏まつたので富田君一人又は二人であつたか判然としないが、残つてもらい畠の芋など掘つて食べ乍ら金刀比羅山に登り出した。

ところが登り始めてからが又大変だ。学友のうち壕に收容し切れなかつた者は自分で山に脱出口を求めて登つたものもあり、行方不明の者も沢山いたし、患者、看護婦、一般の人々等数え切れぬ人々が登り口辺りの山の中腹に至るところゴロ〳〵と転り、中には大きな包を背負つた中年の女性が立ち上ろうとするそのまゝの姿勢で、中には子供をしつかり抱いたまゝ倒れている若い母親、虚空をつかんで憤怒の形相すさまじい男、こういつた者は何れも即死者か被爆後短時間の間に死亡した人々である。我々数名は裸であるが身にかすり傷一つ受けていないので、我々を見ると助けてくれ、水をくれと哀願する者数を知らず、いつそのこと我々も同様に被害を受けていた方がどれだけ気が楽で、実際身の置きどころのない有様とはこんな場合をいうのではないかと思つた。まさに此の世の生地獄、地獄の責もかくばかり、戦場でも多分こんな凄惨な光景は見られないかも知れない。

又登り出した山の光景がすさまじい。小さい樹木は云うに及ばず、周囲二尺も四尺もあるような大きな松の木が地上三—四尺位のところからヘシ折られて、登る道もない様に折り重なつている。実にその威力や恐ろしい限りである。道なき道をかき分けて行けども行けども数限りなく人がたおれている。大方登りつめた頃学友の松野君を発見、倒れているのを助け起し肩をかし乍ら頂上に辿りついた。

そこから眼下に見下せば浦上、道の尾方面の工場地帯は黒煙、白煙を吐き乍ら燃えており、長崎駅方面も煙が望見せられ、山上より眺めた様は又凄惨さが一層深く感ぜられ、土地の起伏が見えるだけで燃え易いものは皆燃えてしまつて何もない。あちこちポツン〳〵と燃え残りがつゝ立つているだけである。山の上には木にとまつていた蟬がポタリと落ちてひつくり返つて手足を動かしミン〳〵鳴いている。

動物も昆虫も原爆の威力の前には問題でない。併し畑の茄子などは倒れもせず実をつけている。松野君が渇を訴えるのでその茄子を取つて与える、しかし大して渇を医す手段にはならなかつたようだ。

その中にも負傷者で歩行の出来る人々、動員学徒、婦女子あらゆる者が皆御承知のように全く二目とは見られないような格好でドン〳〵上つて来る。

こゝで他の学友とは家路の方角が異なるので別れ、松野君は下宿先が

私と同じ方向だつたので彼を助け乍ら途中何回も休み〳〵やつとのことで下宿に辿りついた。早速下宿の家の人々と応急処置をして彼の看護を依頼して我が家に待つている母が心配になり、急いで帰つてみた。不幸松野君も不帰の客となつたのであつた。

私の家は相当に被害を受け隣近所ではその程度が一番大きかつた。尤も家が大きいせいで風当りが強かつた為かも知れない。様相は哀れを止めているが、母も隣人と待避壕に避難し、微傷だに受けず全く無事であつた。何という奇蹟⁉母子とも無事であつたことを神に感謝せずにはおれない。私の家は金比羅山の被爆地の反対の側にあり直線距離にすれば三千米位はあるかも知れない。長崎の場合山が高かつたお蔭で被害も案外少なかつたようだ。

防空壕も家の中に掘つたり地表に横穴をあけた位のものは何にもならない。一旦深く掘り下げて地下道を作つたものなら勿論長く深く抜け口も用意したものなら私の体験上、或程度難を避け得られるようだ。今考えると体の工合が悪く、我々のように壕掘りが出来ず学校の薬品庫の地下室で書類等の整理をしていた学友松本忠、重本、川浪、竹田の各君も無事であつたように思う。

翌日生き残りの我々が連れだつて又山越しに学校へ行つてみたが、山に倒れていた負傷者は殆んど十—十五時間位の間に全員死亡しており、夏の太陽に照りつけられて哀れを一入深くすると共に敵国に対し限りなき憤りを感じた。よしこの仇はきつとうつてやるぞと深く心に期し乍ら……。

学校へ行つてはみたものゝ、元気な者は大分登校していたが、なすべき手段は何もない。直に解散して遠方より来ていた者は各自郷里に引き揚げた。我々も卒業を九月に控えてのことだつたが、卒業式までは生存者は自宅に引き揚げてその日を待つた。

死亡者の取扱、負傷者の応援に各地より馳せ参じた肉身やその他の多数の人々の中には、被災地に来たばかりに原子病に斃れた人も多いと聞く中に、我は爆心地で生き残り、被災地にも出入し、負傷者の手助けをしたことにも不拘、それらしい症状は出なかつた、之も不幸中の幸かと思つていたが、何日頃かはつきり記憶しないが、下痢が始まつた。当時の症状としてはそうした人も多かつたので、これはてつきりやられたと観念して市内病院で診察を受けたが一週間位したら次第に下痢が止つた。その後何ら異常がないので之なら大丈夫だろうと思つた。又々こゝで命拾いしたわけだつた。母は私と違つて全然異状は認められないようだ。

終戦後一—二ヶ月間は非常に雨の多い天気が続き、私の家も雨洩りはひどく、傾斜もひどく、修理するには大変だし、思案にくれていた。幸い唐津市に住む親戚に事情を話したところ、こちらに出て来たらよかろうとのことで世話になることにして、多年住み馴れた長崎を後にして唐津市に転居した。時は昭和二十年十月十日頃である。その後現在地に住んでいるが別に体の具合は何ともない。

この分なら大丈夫だろうと思い、昭和二十七年十二月結婚し、翌年十一月一女をもうけたが子供には何ら異状は認められなかつたようだ。被爆者の子には奇形児が出来るとか、男の場合は生殖能力がなくなるとか、女の場合は不妊症になるとか色々聞いていたのでそれを恐れていたが、幸にその心配はなかつたようだつた。

併し乍らごく最近になつて（三十年五月頃より）いさゝか貧血気味で、軽いメマイを覚えマスチゲンB12錠など服用していたら気持の上からか少しは良いようだが完全ではない。十二指腸虫もいないようだが。

原子病の特徴である白血球数の減少、骨髄炎等の恐るべき前徴ではないかと疑い、又肝臓の辺りが何か知らシク〳〵痛みを感じ、腹が変に圧迫を感じたりするようになつたので、私は煙草は全然喫まないし、酒も少ししか飲まないが、肝硬変、潰瘍、肉腫、癌と勝手な自己判断をして今のところグルクロン酸、メチオニン製剤等服用しているが、之もハツキリした効果は見られない。何処か一寸異状を感ずると直ぐ悪い方に原子病と結びつけて考えたがるので気持が落ちつかない。現在のところ食慾はある。

広島の被災者の中に十年を経過した今日でもなお犠牲者が出ていることを新聞等に報道されているし、四、五年前生き残りの奈良県出身の学友竹田君が胃腸疾患で死亡されているのであれこれと思い合せて、今度は自分の番かなと取り越し苦労をする次第である。

原子病が表面に出ず内臓機能を侵すので猶心配である。一度原子病に関しては権威ある母校の教授先生方に綜合的な診断をしていたゞけたら納得が行くのではないかと思い、こゝに勝手なお願いをしたわけであります。

以上とりとめなく思い出づるまゝに書き立てましたが、この拙文が何かの参考になりましたら幸甚に存じます。

若き命を散らした多数の学友の冥福を祈りつゝ……。

村山君の事ども

村松正俊

其の朝は快晴であつた。私は賀茂海軍衛生学校の学生として、調剤実習室の前の広場に同僚と共に整列し、〝課業始め〟の合図を待つて居た。此の学校は海軍の名とはおよそ縁の遠い広島県の山中に建てられ、我が長葉からも私の他松尾、松原、高取、奥野、寺田、の諸君が入校して生活を共にしていた。突然右背後から光圧を受けた。光圧と云う言葉があるか否かは置くとして、私はそう感じたのである。例えるなら写真のフラッシュを間近に受けた感じであつた。皆一齊に振返つたが、その方向には朝の夏空が青々としているだけで、とぼけた雷のいたずらかと気にも掛けなかつた。〝おいあれは何だ〟一人の指示す方に再び振向いた眼に飛込んだのは、何時出来たか巨大な薄桃色の南瓜の様な雲であつた。青空にもく〳〵と脹れ乍ら昇つて行く、其が何であるか皆の意見はまち〳〵であつたが、やがて地に伝つて来た響によつて何かの爆発であろう、と云う事だけは一致した。此れが広島が受けた人類最初の原爆である事が分つたのは、夕方近い頃であつた。〝広島が一瞬にして無くなつたそうだ〟〝死骸がごろ〳〵しているそうだ〟〝兎に角想像出来ない惨状だ〟などの話で、冷静沈着であるべき海軍士官の卵が、その夜消燈後も興奮して寝就かれなかつたのを覚えている。

その頃、長崎では勤労動員先の小野田で袂を別つた級友達が、最後の学業仕上げの為、母校に帰つていた。それも半分は防空壕掘りに時間

を喰われていた由、八月九日も快晴で彼等は朝から防空壕掘りに精を出していた。横穴式の防空壕であつたので後に数名の生存者を得たのはせめてもの幸であつた。壕は奥がせまいので数班に分れて交替で壕を掘つていた。

理数の清木先生が一番奥で土を掘り、富田君外数名がその土の運搬に当つていた。富田君がザルに土を盛り外の方へ数歩進んだ時、彼の身体は後へ突飛ばされ清木先生の上に折重つて倒れた。〝どうした〟。清木先生の大喝、（理数の時間この一喝にはよく参らされたものである。）何が何やら分らず土煙の中を這出して見ると、此れは又夕暮の様な薄暗さの中で潰れた校舎の屋根は既に火を噴いていた。

其処ここに今迄一緒に作業していた級友達が倒れている。岡本君は腹が裂けて既に事切れており、村山君は〝水、水〟と云いながら喘いでいた。竹田君と松本君はその日身体の具合が悪るく地階にある図書室の整理の方を受持つていた。竹田君はものすごい重圧を感じたとたん本棚がガラ〳〵と倒れ伏す中でやつと身一つを守り得たが、モウ〳〵たる埃で見当が付かずしばし茫然としていたが、松本君が元気なのに力を得、天井の一角に破れ目のあるのを見つけそこからどうにか抜出して九死に一生を得た。その竹田君も数年後に郷里の奈良で亡くなつたのを知つた。

村山直行君は名筌順が私の直ぐ後なので何をするにもよく一緒であつたし、郷里が共に福岡県であるのも親しみを増した。家では一人息子で坊ちやん育ちのせいか我儘なところもあつたが其の一面人なつこくて良く行動を共にした。彼は文学が好きで読むだけでなく大作を書くのだと大いに力んでいたものだ。何でも千姫を主題にしたもので書き上げたら読ましてやると云つていたが遂にその機会は得られなかつた。勤労動員で田辺製薬の小野田工場に行つていた時も同室であつた。私が海軍薬剤見習尉官に応募し福岡に受験に行つた時、なれぬ町ではあり、終戦間近の時で旅館が少なく、あちこちで断られ途方にくれた事があつた。ふと彼が丁度帰省中である事を思い出し呼び出したが、彼の小野田へ帰える時間が迫つており、二人で博多の町を走り廻つてやつと旅館を見付け出した事もあつた。又私が衛生学校へ入校の際形見を呉れとの事、その頃あまり大びらには読めなかつたアメリカの小説本を見付け出し、此れが良いとその裏表紙に、〝海軍薬剤少尉村松正俊、之を村山大兄に贈る〟と遮二無二書かされたのには参つてしまつた。かくしてその頃銃前銃後の区別は殆どなかつたとは云え一応死を覚悟して軍籍に身を置いた我々がそのために原爆の災厄をまぬがれて生き延びているのを見ると人の運命の不可思議をつく〳〵と感じるのである。願わくば若くして散つた友の御魂よ、再びあの惨劇を地上に見ざる様世界の人々を導き給え。

あとがき

今度の御企画、誠に結構と思い無才をかえり見ず拙文を草した次第ですが、何分小生長崎の原爆は体験しておりませず生き残つた友人達からその時の有様を聞いて記憶致しておる次第です、しかし折角記録を残す以上は一寸した事でも、同じ事でも多くの人からの投稿を得て編集された方がと、小生の記憶の誤りをも恐れつつ書きました。若し事実に反している様な処がありましたらよろしく御処分下さいます様御願い致します。

（昭和二十年卒）　村　松

原爆の体験

柏　　司

十年前の事を回想してみると、ある一場面だけが妙に生々しく甦つて来るが、その前後は霧に包まれでもした様にボンヤリして了つている。

昭和二十年八月九日午前十一時頃、私は壕の一番奥で鶴嘴をふるつていた。と言うより、ついさつき休憩で水を飲みに奈良崎君と二人で出て、一緒に咽喉をうるおした後、彼は教室の方へ行き、私は引返し、今まで掘つていた田中君と交替したばかりであつた。鶴嘴をとつて一打ちか二打ちかしたとき、「オヤツ、静かに!!」と清木先生が大声をあげられたので、手を止め、耳を澄した。圧しつけるような金属性の爆音を立てて、急降下するらしい飛行機の音、どうも日本のと違うようだなと思つているうちに目も眩むような閃光が幾曲りもした壕の最奥である筈の私の目を射た。〝アツ〟と二秒位の間を置いて、左の耳の上から平手打を喰つたようなショツクとともに裸電球がパーンンンンと尾を引く様な音をたてゝ爆け飛んだ。キイーンンンと耳鳴りがするが、そのときは殆んど、それは意識の表面には浮び上らなかつた。忽ち闇黒に包まれて、第一に思つたのは、壕の入口近くに爆弾が落ちたに違いない。生埋めになつたのと違うかしら。手に鶴嘴があると心強く握りしめて未だしばらく呆然とつツ立つたまゝであつた。暫くして池田君が「オーイ、入口は開いてるぞ!!」。この声を聞いたとき、しめた助かつたと思つた。そろ〳〵と湿つた粘土質の壁を手探りしながら、入口の方へオズ〳〵と足で地を擦るようにして進んだ。誰かの掌に触れた。思わず確かり握り合つて黙つて入口へ進む。入口からボーツと薄暗い妙に赤茶けた又は毒々しい黄色の光が射して来る。壁土か又は乾いた粘土が爆風に捲上げられて、霧のように立込めて視野が効かない。それと真暗な所から出て来た戸惑いとで、壕から出て暫くは眼をパチ〳〵していた。段々四囲の状況が判つて来るにつれて驚愕に打ちのめされそうになる。径三十——四十センチの雑木が繁つていた山が、たゞ赤茶けた粘土質の丘となり、刑務所みたいだね、と評していた高いコンクリート壁は飛ばされて、見馴れない風景が直に向うの山陵へと続いている。樹木、家、電柱そういつたものが滅茶苦茶に倒れている。二抱えもある椎の倒れ木に妨げられながら薬専の教室の方へと視線を向ける。土煙りとも火煙りともつかぬ煙につゝまれて、ペシャンコに、まるでマツチ箱を圧しつぶしたように、たわいなく我が校舎が潰れて見える。

ふと目を足下にやると、目も鼻も土ぼこりに厚くまぶされて、泥人形のようになつた級友達が、両足を投げ出し、両手をついて上半身を支えるような姿勢で蹲つている。余りに激しい変貌に、之がさつきまで冗談を言い合つていた級友なのだろうかと訊かずには居られなかつた。最初に口をきいたのは江島君だつた。「やられた。落下傘の爆弾だ。痛い」。ぽつん〳〵と言う。「しつかりしろ、大丈夫だ」と口だけでも力附ける。「ウン」と一つうなずいてみせて、後は痛むのか黙つて了う。仰木君、渡辺君等は割と元気な声で話し掛ける。何を話しかけられたのか、今は全く思い出せないが、兎に角、意識の確りしている点で大分心強く思つたのでした。壕へ負傷者を運び入れ始めた。腕をかかえて、抱き起

そうとするとズルリと焼け爛れた上膊部の皮膚が剝げる。「痛い〳〵」と思わず手を放して呆然と級友を見下して、つツ立つ。杉浦先生は薬草園の方だつたと思い着いて、そちらへ行うとしたが、余りにも無残な倒壊物の障壁に思い直して壕の方へ引返えす。壕の裏手の講堂の方から真ツ赤な焰と黒煙が迫つてくる。

医大薬局長谷さんのお嬢さんが血まみれで髪をふり乱し、煙の向側から駈登つて来、いきなり清木先生にすがりついて泣き出す。先生はよしよしとか何とか、子供をなだめるように背中を撫でて居られたが、後をふり向き「誰か病院に行くものはないか」と叫ばれた。一番無傷なのは、多分自分だろうと自認していた私は早速、連絡をとるため、病院へ向つた。講堂のあの不断の道は火で、とても通れなかつたので、銃器庫の上手あたりから、畑を横切り、グビロ墓のある丘の方へと大迂廻して病院の横手へ出た。すでに病院は煙でかすみ、血に染んだ看護婦や学生の姿が二三見受けられた。車寄せの方から上つて行くと丁度頭に繃帯を巻いた永井先生（或は翌々日のときと混同しているかも知れぬ）を見受け、薬専の方も怪我人が多いので、誰か寄してくれるように頼んで、直ぐ引返した。来る途中、三センチ位の板についた釘で踏み抜きしたのが鈍く痛む。大きく迂廻しながら学校の方へと倒壊物を避けながら丘と丘との谷間へ出た。そこで一生懸命になつて柱を持ち上げようとしていた十四五位の男の子が、私の姿を見るなり血相を変えて、飛んで来て、腕をぐつと摑み早口で何か、わめき散らし、ぐい〳〵ひつぱりながら、倒れた家の方を指す。半白の老農婦が柱の下敷きになつて、あえいでいる。その少年と二人でウン〳〵と柱を持ち上げようとしたが重くて、とても上らない。仕方がないので、瓦や、その他を一つづつ取除けて行き、やつと柱の下から、その婦人を引出すことが出来た。

私は婦人を出すや否や駈け出すようにして薬専の方へと歩いた。この当りは余り歩いたこともなく裸足のため用心しながら倒壊物を避けて歩いたためか、仲々学校へ帰えれない。やつとの思いで校舎のある附近に来たときは、濃い煙とメラ〳〵と赤い焰に包まれて、全く近寄ることは出来ず、否それどころか火はだん〳〵拡まり、煙が目にしみて来る。清木先生や皆はどうしたのだろうかと、気に掛かるが、どうしてよいのか判らず、ウロ〳〵火の廻りを歩いていた。そのうち、よろめきながら三々五々と山の上へ向つて歩いて行く人達に気付いた。そうだ愚図々々していたら自分も火に包まれて了うかも知れない。この人達のように山へ逃げよう。

一先ず下宿のある片淵へ山を越して行つてみよう。そう決心して歩き出した。そうして自分の身を眺める余裕が出来てみると、作業中のことだつたので半ズボンだけで裸足、裸というのは、どうも具合が悪い。キョロ〳〵見ながら歩いて行き、草履半足とお婆さんのものらいしチャンチャンコと杖とを拾つて段々痛みが強くなつて来た右足を労りながら山道を登つて行つた。

途中二年の吉田君が真ツ赤に血走つた目で、一升瓶を抱えて道端に坐り込んで休息しているのを見掛け、声をかけたが、返事もせず、ヂツと宙を見詰めていた。

一抱えもありそうな木が地上三十センチ位から吹き飛ばされているのを見乍ら、多分新型爆弾だろうと脅威を感じながら、とぼ〳〵歩いた。農

家のおかみさんらしい頑強な身体付きの人達が四五人手と手をつなぎ合つてワアーン〳〵と、まるで子供のように、大声を上げて泣きながら、血を滴らせて歩いている。その後から三人の男女の子供達が余りの恐怖に泣くことを忘れたように黙り込んで随つている。そこの叢、ここの道端にと血にまみれた人達の苦しそうな、うめき声、時々「水、水」と弱々しい声を出している。むつとする血の生臭さゝに包まれながら、私は心のうちで「畜生〳〵〳〵」と念仏のように繰返して歩いていた。山の上へ登れば登るほど、その惨禍の煙と火とが広く視野に入り、余りのことに地獄図絵を見るように呆然と立ち止まつたことが屢々だつた。

頂上近くには高射砲隊の横穴壕があつて、自からも繃帯をした兵士達が、次々に登つて来る負傷者の中、重症の者だけを收容し、色々と手当していた。「水、水」と求める。私もヒリ〳〵焼けつくような渇きを覚えた。勿論余分の水のあろう筈もなく、とぼ〳〵山を越して行つた。私も間もなく市街の見える筈の道を曲りながら。必死になつて神に祈つた。どうか下宿の方は無事でありますようにと、何度も〳〵心の中の神に祈つた、また一方、それはとても虫の良すぎる注文だと失望を余り大きくさせないように自分の心を叱つた。

そして山の向う側で初めて青々と茂つた芋畑と木々と、その間にチラ〳〵見える屋根を見たときは、嬉しくて〳〵そこに坐り込んで動けなくなつた。

すぐそばに夏大根の畑があつた。夢中で駈け寄り、一本グッと引抜いて泥を拭うのも、もどかしく、ガリ〳〵咬んだ。泥でジャリ〳〵すると生大根を三分の二位も嚙つたのは、生れて初めてであり、多分最後のことと思う。

休息していると、白鉢巻の女子挺身隊らしい女学生等が二三人無言で通り過ぎて行つた。

夏シャツが縫目の生地の二重になつた部分を残して無くなり、真白な肌が露出し、漆黒の髪からポトリ〳〵と血を滴らせて、無表情に通り過ぎて行く。真昼の幽霊を見たように戦慄が走る。何と無残な美しさだろう。

下宿に帰つてみたら、天井は破れ、部屋に掛けていた衣服その他爆風に飛ばされ、窓枠も拐ぎとられて了つている。暫く休憩した後富田、寺戸、松野三君の自宅又は下宿をそれぞれ訪ねた。富田君は学校へ行つたまま、寺戸君は欠席していて無事、松野君は逃げ帰つた由。今度は食糧を持つて、山越えして学校に帰ることにした。市役所附近まで燃え上つた猛火に不気味に夜空が明るい。遠くで又近くで「何々やーい」「お父さーん」等と呼び交し、呼び求める声が、胸に喰入るように聞えて来る。真暗な山道を学校の方へと出掛けたが、気が転倒しているせいか、道を迷つて、さつぱり何処に居るのか判らなくなつた。そのうち踏抜きにした足が腫れ上り、うずいて歩けなくなつて来た。そして下宿に引返して来たときは、朝も近くなつていた。

翌日は足が痛くて、まるつきり動けなくなつていた。

十一日（或は十二日）再度諏訪神社の裏山から、学校へ出掛けた。下り道で、木の根にすがりついた姿勢のままで死んでいる少年を見た。パッチリ眼を見開いたまま。暑い日から照りつけられ、すでに腐臭を漂よわせている。

壕にたどりついて、清木先生、富田君、重本君、富田達夫君等と逢つた。そして壕に残つた負傷者達は一人残らず死んで了つたと聞いた。そして色々富田君から話を聞いた。

（二十年卒）

原子禍

天野敏夫

昭和二十年八月九日、南の国異郷の国と唄われた長崎が、世紀の武器原子爆弾によつて一瞬にして灰燼に帰し、皮肉にも頬笑みかけた三つの花。桃色の落下傘瞬時にして屠る都市と人命、生きとし生けるものの総ての生命を奪い去り長崎七万の市民の霊は炎と共に昇天し、放射雨と共に大地に浸透し去つた。峻烈なる放射線の中に奇蹟的にも立尽した私達の運命と遭遇。今は亡き恩師と級友の雄々しき姿も其の花の散りて跡なく、露の消えてはかなく、想ひ出は今此処に懐しき声聞く心地すれど、思えば更に思ひ乱れて逝く水の更に還らぬ現世の習とも夢か現か十年の歳月流れ行く夜空の星の空しくも夢の過去となり過ぎんとしている。川のせせらぎ返す日の光に夏は今年も変らねども真夏の太陽は再び当時を想起させる。

紙白の僅少なるを憂えつゝも拙文を弄し世界恒久平和を祈りつゝ今は亡き学友の霊前に捧ぐ。（私の想出〝原子禍〟より抜萃）

クローバーの草息の中に真夏の太陽はまぶしい程照り映え、立つている身体に焼けつく暑さをじつと我慢して大詔奉戴式に参列していた。十二時四十五分より角尾学長の訓辞になり新型爆弾について語られた。丁度東京出張の帰途広島にて列車不通となり歩いて次の駅まで行く際大きなリュツクを背負つていたが市中には生々しい死体が無数に転がり爆弾の破片もなく落ちた大きな穴もなく谷底の一軒屋まで被爆されるといふ実に不思議な爆弾でありこの様では我々は一時でも緊張をゆるめてはいけないといふ話であつた。

教室に帰つてからは学友間に其の話で一ぱいであつた。既に広島から長崎へ逃げ帰つた人々もあり直ちに被害の状況は大体に於いて知れた。臼井君が昨日村山君に遭つたら村山君が博多からの帰途、列車で被害者と一緒に乗りその状況のすべてを話して呉れたと語つてゐた。教室内は喧々ごうごうとして広島の話に尽ていた。神だに知る由なき時の運の来るや来ずや若き学徒のさゞめきの中に誰か明日の運命を予期した者があろうか。明けて九日学校内では万全を期して清木先生の指揮により完全待避の出来る壕の作業が此処数日前から行われ講義は全然中止であつた。その日私達病弱組（動員にて身体を損した者）は薬品庫の中に疎開した書籍の整理虫干であつた。頽触れは私、臼井君、川浪君、岩本、竹田、山田、松本（忠）の諸君であつた。これはすべて杉浦先生の指導で行われた。学友の大半は荒木君の指揮で二手に分かれて壕掘作業をやつていた。時十一時を過ぎたと思われる頃急降下音を聞いた。また敵機が来たと舌打をした、とそれと前後して一大音響と共に物凄い爆風と熱を感じた。瞬間的に伏せたが時既に遅かつた。外へ出ようと言う声に頭を上げたが全然視野がきかなかつた。暗中模索の気持で這い上つた。真ツ暗な中に

物凄い黄塵が立ち登り本校舎と思はれる地点に青紫色の焔がちよろ〳〵と燃えさかつていた。あたりを見廻わしたが眼に止る範囲に立つているものとては何一つなかつた。人の流れがあちこちより起り始めた。何処へ行くとなく半ば皆失神状態で唯人の流れに自己の意識を失つてついて歩いた。ふと我に返つた時は運動場に出ていた。あたりは盛んに燃え始め砂煙を混ぜた風さえ起り始め、身の置き処とてない有様で松本(忠)君と共にグビロが丘に避難した。人影は次第になくなりいづこともなく去り一帯は自然と燃え盛かる市中のみであつた。上空の雲は白、黒、赤、黄、紫と色とり〴〵の色調になつて行つた。一人雨にたゝかれて我にかえり教会の下を流れる河に降りた。畳の上に高木医専部長が横たわつていた。夕方五時過ぎ頃であつたであろう校舎の跡に行き学友と連絡を取る予定であつたが今朝まで元気の学友は半ば死体となり壕中に横たわつていた。荒木君はまだ意識があつた。仮本部が穴弘法の下に設けられてあると聞いて救援隊を組織する積りで火の中を歩いて行つた。清木先生と連絡がとれて其の後全学友の救護にあたり六日間を壕内で過し亡き学友を射的場に安置し、その図面は江口部長に渡し時津、長与方面に行方不明者を探しに行つた。

(二十年卒)

原子雲を仰いで

広島　至誠

原爆十周年記念事業としてその記録を出版すると云うので私に書けと云われましたけれども原爆を直接体験しない私故と一応御辞退はしたのですが、長崎を離れて居た私達がどうして原爆を知りそしてその被害をどの程度に想像していたかを述べるのも意義ある事と教えられて筆を執りました。

なお本文の資料は当時長崎在住の同級生のメモ及びその記憶によるものであります。

戦火も益々熾烈になつた昭和廿年六月の或日、旧薬学専門部第二学年生の我々は集合していました。そして其の時、熊本県第七〇四二工場(現熊本県水俣市新日本窒素水俣工場)への学徒動員令が申し渡され、同時にその場で学校戦時研究動員として

郡家淑郎、田中幸三郎、田村時男、一番ヶ瀬忠政、安本、吉田一馬、吉田功、岡部利成、中岡秀男、伊丹陽、平湯司、中川原、福田一男、青木、大谷義郎

の諸君が決定したのでした。

その日は共に手をとり合つて喜ぶものあり羨やむものもありで悲喜交々でありましたが、それが彼等にとつては死への宣告であり、五十五日の後この幾人かが永遠の別れになろうとは誰が想像し得たであろう。

六月廿日午後五時、水俣駅前に集合した我々三十八名はそれより祖国

の必勝を信じ連日の作業に若人の情熱を傾けたのであります。
然しその反面寮窓の下に咲く宵待草を眺めて郷愁に駆られたものでした。
我々と初めから起居を共にされた主任の杉浦先生は、
「君等の生活をよく長崎の友へ伝える。君等も最後まで頑張つてくれ」
との言葉を残して帰崎されたのも此の花の咲く頃でありましたが、この言葉は我々に残された先生の最後のものとなつたのであります。
その後空襲が益々苛酷になるにつれて吾々の意気は更に高まつて行きました。
八月七日の襲撃には二名の学友が負傷し、その血を見て「こゝは前線に直結しているのだぞ、我々の死は戦死と何の代りがあるか」と憤り合つたものです。之も我々が動員されている工場が火薬原料工場であつたからで、この点で長崎より危険だと考えていたからであります。
こういう話があります。
学園に残る親友が休暇をとつて帰郷したある学友に長崎駅頭で別れる時、
「どちらが先にたおれるだろうか」
「それは工場にいる俺さ、死んだら後を頼むぞ」
「よし、引受けた」
と言つたそうです。
之は研究室に残る友もまた我々と同じ考えを持つていたことを裏づけるものでありましよう。
「広島に新型爆弾が投下されたそうだ」の報道を耳にしても工場の復旧や崩潰した寮の片附けや、其処に埋もれた身廻り品の掘出しに寧日無き有様であつたので、山の彼方の出来事としか感じられませんでした。
昭和廿年八月九日午前十一時二分
空襲に会つて待避していた我々は突如遠雷の如き音を聞きました。
何ごとかと振り向くと天草の上にかゝる雲を突き破つて有明海の尽くるところに龍の様な一条の白雲が真直に〳〵昇つて行くではありませんか。やがて雲はその頭をひろげたが雲の脚は途中よりプツツリ切れた。とみる間にそれは急速に昇つて一つの塊りとなり、真青な大空を赤に青に将又黄に緑に彩り、さながら夢に見ている虹の様に、真昼の太陽に輝きながら我々の頭上を横切つて行きました。
あゝこの美しい虹の下で地獄絵巻が繰り拡げられていたとは……。
やがて空襲がとかれ、三々五々と集つて来た我々の話題はこの異状な雲でありました。そして誰かは「雲仙の噴火だ」と云い、或者は「日本の新型空雷の実験さ」と言い会つたものでした。
ところが何処かで待避していた学友が最後にもどつて来て「長崎市民は全員待避せよ」「全員消火に勤めよ」と放送された事を云つたのです。
之を聴いた長崎出身の我々は喫驚し興奮しました。
更に這入つた情報は「長崎四里四方総て人なし」でした。
「デマだ、我々の工場だつて全滅的打撃を受けているぞ。だのに我々はこうしてピンピンしてるじやないか」
「たつた一発の爆弾で人類が亡びてたまるもんか」
当時の我々には想像も出来ないことであり、又想像したとしてもそれは現実の長崎の姿の万分の一否億分の一にも過ぎないことでした。でも

国家存亡の機に吾々が戦つているのだと思うと無事である筈の恩師を、級友を、家族を、一瞬でもいゝこの目で見たいという願望も断ち切らざるを得ませんでした。

来る日も来る日も長崎の安否を気遣いながらの作業に工場長も我々の心情を察して呉れたのかやがて特別休暇を与えて下さることになりました。

然したゝみかけて終戦の詔書が降されたので動員解除となり工場を離れることになつたのであります。

若き情熱の限りを傾けつくした戦も終り虚脱した我々は涙と共に「海行かば」を齊唱して水俣の海と別れました。

日がすでに不知火の海に沒し、島々の影が夕靄の中にうすれてゆく頃、甲板で我々は何を想い何を考えたことでしよう。

明くれば十六日、早朝十八名の友を三池港に残し、我々十九名が島原の湯江に上陸したのは九時を少し過ぎていました。

そこで我々は悲惨な長崎の片鱗を見せられたのです。

片腕は焼けただれ膿さえあふれ出ている一少年の姿。

彼は何処へ行こうとしているのか。

ただ一刻も早く長崎から離れたい一心で斯くして来たのです。

彼から聞き得た長崎の実状はたゞ「廃墟」「惨澹」でありました。

それだけで我々が満足出来るはずがない。

土地の人、車中の人をとわず長崎の情報をわずかでも知つた人があれば誰かれの容赦なく聞き糺そうとしました。

然し結論は話より事実が大きいということでした。

我々は色いろと長崎の実状を想像して見ました。でもそれは思い半ばに過ぎるものでした。いよ〳〵汽車が道の尾を過ぎると我々はじつとして居れず車窓から身を乗り出して車外を凝視いたしました。

あゝ何と悲惨だ。

何と残忍だ。

之があの緑の美しい長崎か、万目茶褐色ではないか。工場の鉄骨は飴の様にひん曲り、へし折れている。

灰燼の中にポツンととり残されたあの痛々しい姿が大学附属病院か。

母校は見えない。消えて仕舞つているではないか。

恩師は、学友達は……

骨を拾う人か、それとも一かけらの家財を求める人だろうか。点々と蟻の様である。

あゝ、之が夢にえがいたあの長崎の姿だつたのです。

線路の側に眠つている白いお骨を揺り起さぬためか列車は静かに〳〵浦上、長崎へと進みました。

（二十二年卒）

同郷の亡き学友を偲ぶ

奥野　正治

十年一昔とはよく云つたものだ。あの悲惨極まる原爆が長崎に投下されて一瞬にして戦下悪環境裡に苦楽を共に分ち合つた級友の半ばを失つ

てより早や十年、誠に口惜しく悲しいことで、私の脳裡から去り得ない事の一つである。就中我が山口県より共に笈を負つて長崎に学んだ松本登、岡本省三両君の爆死を耳にした時、両君の生前より交友を厚くしていた私は非常な衝撃をうけた。思えば昭和十八年薬学を志し、単身未知の長崎へ行つた私には不安と頼りなさで一杯だつたが不図も両君をはじめ、同県の先輩、同僚に遇い、その好遇を得て不安も吹飛び、勉学にいそしむことが出来た。両君と私の下宿先もそれ〴〵余り遠くなかつたので、実習を終えて帰ると集つて漫談の花が咲き、松本の弾くギターに併せて歌を口吟み夜の更けるを覚えぬことも屢々、両君のユーモラスで円満な人格に接し、迎える日々が楽しく有意義な連続であつた。二年生の秋戦争の激化と共に、学徒動員が行われ、岡本君と私達は小野田市田辺製薬工場に仂くことになり、松本君は研究室に残ることゝとなつて、共に語り、共に笑う機会を失つたことは返す〴〵も残念だつた。小野田へ行くに当り松本君が私の下宿まで来て、荷物の取まとめ、駅までの運搬に加勢して呉れ、互に今後を励し合つた時のことは未だに感激の極だ。又岡本君とは田辺工場に於て共に仂き寮では同室に起居を共にし戦時中の物心両面に於ける窮乏を分ち互に激励し合つて来たが、昭和二十年四月私は海軍衛生学校へ入学することになり、遂に訣別の日が来た。今も尚小野田駅頭で日の丸の旗を打振つて送つてくれた岡本君の姿が瞭然と思出される。二年有余の学生生活は亦松本、岡本両君との年月でもあつた。その年月を顧みれば、恰も走馬燈の如く色々のことが思い出され、一片の紙上に記すことは全く不可能なことだ。両君の冥福を祈りつゝ筆を擱く。学友故松本登、岡本省三君安らかに眠り給え。（二十一年卒）

内野輝子さん

鍬先佐和
（旧姓 植木）

内野輝子さんと共に仕事した時の回想

私共二人は学徒動員の際、当時講師をしていられた横山（薬専）先生の御世話により先生の仕事を動員の形で科学研究補助員として奉仕することになりました。二人とも科学にあこがれて胸をおどらせてあの緑の小路を通り一番奥の薬理教室の左端の研究室に通いました。仕事はくわしいことは今覚えていませんが、先生が考えられた薬品の合成、精密な測定等で一日中立ち通しの中にも真剣な楽しい研究が続けられました。特に輝子さんは好学心強く学窓にあるときと同じく追求して止まざる姿がそこに見られました。研究室には二人の外に薬専の生徒二人、製薬所から一人位で私共のような部外者でも御手伝いした位でした。先生の研究されたものは常に寺坂先生と連絡があり動物実験に回わされた。その頃薬理学教室も先生方の出征にともない手不足となり、私は薬専の方から薬理の方にせきをうつし動物（カナリヤ、にはとり）実験の方の御手伝いとなつた輝子さんは毎日先生の御指導の許で合成、融点測定、ミクロ天秤と取りくみ時には色素の方の研究の御手伝いもしていられました。四月でしたか、私は家庭の事情で仕事を一応止めましたのでその後の様子はよくわかりませんが手不足の中で薬にまみれ汗を流して仕事に精進していられた姿、今なお私の眼に浮びます。輝子さんの御冥福を御祈りしながら筆をおきます。時間が許されればと思いながら——。

我が子を追憶して

郡家　政治

歳年の流れは早いものにて、あの原爆の悲惨事があつて満十年と云うものが夢の様に過ぎました。

本年は我国は勿論各国の人々からも原爆の被害やら利用につき諸種の方面から特に論議せられ、其の異常な結果が将来に於て全人類の生命及文化等に及ぼす影響につき考究せらるゝ事と存じますが、私等原爆の直接被害を蒙つた者に取つては、殊に痛切なる思い出やら感想が雲の如く湧出する次第です。

此度当大学でも十周年記念事業をなさるゝ趣きにて何か感想を書く様にとのお薦めにて取るに足らぬ私等如きものにも、又斯様なものもありと云う事を若し余白でもありましたら末端にでも御記載を頂いたら幸甚かと存じます。

私は大体に於て無神経と申しましようか無頓着と申しましようか、戦争中は空襲に対し弾が直接自分の頭上に落下すると云う様な事は千万中に一つも無い物だと云う様な気持から、千万に一つもない事に心を悩ますよりはと思つて防空壕も自宅には造らず、避難もせずに過していました。然るに原爆死に逢つた子供の淑郎は或る日に一度び自分はこんど防空員とかに指定せられたから、いつ何時空襲にやられるか知れぬから覚悟を決めていると父の私に洩した事がありました。

原爆の前日八日は偶然にも電車の中で子供と一緒に乗り合わせ子供は学校へ、私は長崎駅から大村の関係工場に立寄り、唐津の某酒造家に泊りまして、九日昼食を致していますとラヂオで長崎に空襲があり全市民待避すとの知らせが、大した事も無いものと存じまして、翌十日は福岡大学農学部の山崎博士を訪ねました。農場に行かれて留守中との事にてお目にかゝれませんでしたが、途中長崎の元の商工会議所の理事長鈴木苞教さんに逢いましたが、広島の原爆の被害甚大なる事を承りましたが、長崎の被害について話されませんでした。それから福岡県の城島に出で、清力酒醸場の中村氏宅に一泊、翌朝長崎に帰ろうと存じましたら、久留米の空襲で電車が通わず、午後遅くなつて電車が通ずる様になつて鹿島迄終列車で留まり、翌十二日道の尾迄汽車にて出で長崎に入つて被害の異状なのに驚いた次第です。

十三日、十四日は薬専の実験室やらグビロが丘などを何か形でも残つていないかと思つて、次男の徳郎と死骸を捜しましたが何物も得ませんで図書館の焼跡で般若心経を唱えました。途中学校で淑郎が特に御世話に預つた横山先生にお逢いしたのは何よりでした。

就きましては私としては亡き子供の事を追悼しますと万感胸に迫るものですから、子供の事を思い出す様な際は、其の菩提を弔ふ意味で直ちに般若心経や金剛経を誦唱する事と致しています。而して子供は死んだのではなく眠つているのだと思い過しています。

左の様な拙歌を作つて心を慰めています。

原爆の落ちし其の時如何ばかり
　我子淑郎は驚き覚めけん

原爆に覚めし我子の魂は

如何なる花の姿と咲くらん

古きもの皆亡び行き新なる

高天が原の岩戸開をや

天地の開けし初めの古を

古事記を読みて想う此頃

私は古事記や金剛経を読む時何時も子供は死んだのでは無く、私等の心に思い浮んだ時子供等は常に甦生しているものと信じています。

子供が死んだと思つて悲嘆し痛恨するよりは、子供を追善し原爆の思い出を積極的な方面に活用しましたら、子供等は精神的に生きているものだと信じ得られるかと存じます。

原爆時代の犠牲になつたものとさえ思い度ありません。

地に因つて倒れた者、地に因つて起ると申します。原爆に因つて倒れた者は原爆に因つて起きねばならぬと存じます。一瞬にして空虚に帰した長崎医大からは被害が深刻であつただけ其の被害地被害者を中心として新なる世界観、新なる文化の発生地として復活する事を望みたいと思います。

私は仏教は死の道を教え、日本の古事記は生の道を教えるものと存じます。

仏教に般若を体して法華に入ると云う言葉がありますが、般若空の智慧にて法華経の諸法実相の世界を観ると云う事です。法華経の諸法実相と云う観方は古事記の生々主義と余り異ならぬものと存じます。

此の法華経第廿三に薬王菩薩本事品と云うに喜見菩薩が日月溪明徳如来に我れ神力を以て仏に供養せんよりは愛する身を捨てて仏に供養するに如かずと云って、身に油を灌いで焼き此の菩薩が薬王菩薩に甦生する事になつています。此の原爆に焼尽した医大薬専が恰度喜見菩薩であり疎王院菩薩と存じます。今後長崎医大及薬専が如何なる姿で世界に出現すべきか。法華経の第十六無量寿品には仏の生命が久遠なる事を詳説せられています。最近放射能に依り生命は時空を越える事が実証せらるゝ時節となりました。

就きましては原爆の中心地として長崎医大に永久生命研究と云ふが如き形のものを世界学術の先端を行くものとして他に率先して、設置を企てられる様な事にでもなれば、私等如き直接被害を蒙つた者にも非常な意義を感ぜられ、愉悦を覚えらるゝに非ずやと思う次第です。洵に唐突な意向を申述べました次第ですが平素法華経の従地湧出品や無量寿品を読誦、薬王菩薩の捨身焼尽の意義に成る真理に感じつゝある者に取りましては、此度の原爆との間に何となしに神秘的な関係が医大との間に潜在する様に存じますので愚考を申述べた次第です。

或は薬王菩薩を記念碑みた様なもので表徴して頂いたらと存じます。

追つて医大及薬専に多少関係あるかと思わるゝものに梁塵秘抄と云う書に讃歌として

寿量品ノ部に

法華経八巻は一部なり、廿八品其の中にあのよまれ給ふ説かれ給ふ寿量品ばかりあはれに尊きものはなし。

仏は香山浄土にて浄土もかへず身もかへず始も遠く終りなし、されども皆是れ法華なり。

沙羅林に立つ煙、上ると見しは空目なり釈迦は常にましまして雲鷲山

にて法を説く

薬王品

身を変へ二たび生れ来て仏の滅後に参りあい、二つの臂を燃してぞ、多くの国をば照らしてし。

法を求めししるしには臂を燃して仕へつゝ、我が身の髄脳砕きてぞ菩薩の位えたりける。

娑婆に不思議の薬あり、法華経なりとぞ説きたまふ不老不死の薬王は聞く人普く賜ふなり。

死亡者名簿（付属薬学専門部）

教授　山下次郎　杉浦孝

事務　岩本偵吉　横瀬久吉

山本利吉　井手篤子

内野輝子　松尾滝子

(イ) 三年生

荒木一夫　池田敏明　石田憲敬

江島修　仰木英雄　岡本省三

小曾根邦弘　陶山桂　末永孝幸

田中博　多田哲雄　奈良崎一城

橋本慶治　藤田豊弘　松野義輝

松本登　宮本保彦　村山直行

矢富智久　山崎武　山田庸夫

米田量平　渡辺寿

(ロ) 二年生

青木茂樹　一番ケ瀬忠政　郡家淑郎

田村時男　平湯司　福田登

安本道男　吉田功　吉田一馬

(ハ) 一年生

竹本典國　中尾滋　中川原哲夫

中倉光雄

達一の思い出

土肥トラ

八月一日の長崎空襲の時も医大をやられ爆弾が落ちるのと防空壕にすべり込むのと一緒で帽子と眼鏡を飛ばされたそうです。その後から来た人は爆風のため飛ばされ壁に打つけられペシャンコになり即死だつたそうです。空襲はだんだんひどくなるので是非父母の疎開地西彼三重村へ行く様、幾度か進めたのですが卒業も後一週間、大丈夫と云つて別れたのでした。

八月九日午前十一時二分原子爆弾落下私は（達一の姉）浦上と背中合せの立山に住い、ピカツとしたので床下の防空壕へ入ろうとすると家の建具が部屋にとび、ガラスの破片で数ケ所の傷を負い、顎下の一糎五粍角のガラスを取り出し、幾度も幾度もマーキュロにて消毎し、近所に遊んでいた四才と二才の子供を捜しに行きましたら、幸いピカツとしたので庭の防空壕に入れられ無事で安心致しました。

さて医大の弟はどうしているでしよう、心配でなりません浦上方面の空は皆既蝕の時の様な暗さで何だか匂がひどく息苦しい様でした。

夕方頃より浦上方面にでて負傷した人がぞろ〳〵下つて来ました。着物は血だらけでボロボロに破れ、またやけどのため顔や体が赤く腫れた人ばかりだが、医大の生徒らしい人は一人も見えません。私は何時迄も立ち続けやつと二三人の薬専の生徒さんに尋ねますと心配はないでしようと申されましたので、すこし安心しどこかでお世話になつているのだろうと思い、何時来るかと待ち続けましたがとう〳〵帰らず、夜中に雨が降り又心配で〳〵なりません。小さい子供がいるので探しに行く事も出来ず、たゞ弟の無事を祈るばかりでした。

原爆落下三日目の朝時津に疎開していた兄と、三重に疎開した姉とが達一死体を捜出したと知らせに来ました。私は流れ出る涙をおさえ空襲もひどいので死体を運ぶ事も出来ず、その場所へ埋める事にしました。穴弘法の上の山よりすこし上つた道ばたの一段高い一坪ばかりの草原に横たわり、左上の手、肩より少し下の方に医療器具が飛んで来たのか大きな貫通傷を負い、前頭部にも十糎位の傷があり何れもよく繃帯がされ、止血法もしてありましたが出血多量にて倒れたのでしよう。恰度その頃は卒業前にて影浦内科で実習中でした六人兄弟中五人目で小学校の時より成績が良く、父母兄弟共希望を持ち楽しみにしていたのでしたが、運がなかつたものとあきらめるより外ありません。

故土肥達一（当時学部四年）

大正八年四月八日生

昭和十六年長崎医科大学へ入学

（原稿が遅れましたので紙面の都合上こゝに掲載しました）

四、事務関係の部

山木事務官

故山木武俊事務官略歴

故従六位勲六等、法学士、長崎医科大学事務官

明治三十六年五月二十六日山形県に生る
昭和二年三月明治大学法学部卒業
同　年三月文部大臣官房会計課事務嘱託となる
昭和四年七月文部省属に任ぜらる
昭和十四年四月大臣官房会計課監査係長を命ぜらる
昭和十五年二月会計課決算掛長兼務を命ぜらる
昭和十六年六月長崎医科大学事務官に任ぜらる
　　敍高等官七等
昭和十八年二月敍正七位
同　年八月敍高等官六等
昭和十九年二月勲六等に敍し瑞宝章を授けらる
昭和二十年八月九日大学本館事務官室において原爆の犠牲となり殉職

亡き人と語る

故山木武俊
妻　山木節子

いたましい思い出の八月九日がまいりました。あの日から丁度十年。弱い私はまだ生き残っております。

あの当時「もし防衛の第一線にお立ちになられたあなたを失うようなことがあったら私は自殺するよりほかありません。」と申上げたものでしたのに。

この前お会いした時あなたから転任のお話を承り、転任先は非常にお世話になった大学のことでもあり、自分としても転任したいと思う。ついては十二日そちら（疎開先）に行き、遅くとも十五日には赴任する予定だ、と申されました。

そのや先、八月九日の原爆！おそろしかった長崎の様子を避難して来られる方々から聞きながら、やっと十三日の朝、一番の汽車で長女と共に、浦上についた時「あゝやっぱり駄目だった！」と思いました。見渡す限り焼野ケ原で、想像以上の惨事でした。「せめてお骨なりと」と思って病院の受付に行って見たところ数名の学生が居りましたが、様子は全く判らず、どうしようかと思案している時、粛先生にお会いし、先生

のお蔭で、お怪我や火傷をしておられた国房先生にお目にかかり、色々あなたのお話を伺いました。そこへお見舞にいらつしやつた高瀬先生から、変り果てたあなたのお骨を頂きました。そして疎開先の小江に帰り、その後は何をすることもなく、たゞあなたを憶うことだけで涙の明け暮れでした。

或時、おもやの広い庭を眺めておりますと、まだ生れて間もない四羽のヒヨコが母親に守られて歩いて行くのです、後になり先になりして子供を守りながらついてゆくめんどりの姿はその頃の感じやすい私の心に強く訴えるものがありました。それからです……女学校二年の長女、小学校五年の二女、一年の長男、四才の三女、

「今日一日あなたのお守りのもとに、四人の子はお腹一ぱい頂いて、今夜も安き眠りにつきました。」

幸い当時の文部省の方々や、長崎医大の方々のお骨折りで、父亡きあとも、みぢめな生活をしないで、皆元気で思い〳〵の道を歩んで行くことが出来ました。

只今、長女は文部技官の妻で、一女児の母となりました。

二女は進学準備中

長男は高校二年

三女は中学一年

それに母上と妹と楽しく生活をつゞけております。

たゞ気になるのは未解決の御承知の「家の問題」と腫瘍のため私の体が少し弱つているくらいで当時のあなたのお苦しみになつたことを思いますと、ものゝかずではございません。お目にかゝれる日まで一生懸命あなたの分まで母上につくし、子供の養育に専念いたしますから笑顔のあなたを想い出させて下さいませ。

白方事務官や佐藤又一さんにも随分お世話になりました。東大にいらつしやる北村包彦先生にもまたお世話になつているんですよ。どうぞちのことは御心配なく、いつまでもいつまでも安らかでいられますように——

さようなら

節　子

原爆落下前および落下直後の狀況

昭和二十年春以来、本土の主要都市および軍需工場は、しばしば空襲を受け、制空権はほとんど敵の手に渡つた。兵役に関係ある者は毎日のように一人一人召されて征き、大学の事務機構も遂に学校と病院が一本化され、男子に代つて女子が銃後を守るようになつた。当時事務職員は輔仁会を含め二四五名、内女子は一一八名、応召二二名であつた。

敵機は大村の空廠を連日爆撃した。その時長崎市民は高処の見物だつた。しかし遂に、B29は長崎市を空襲、三菱、長崎駅、大波止、大学病院、その他工場はつぎつぎと多大の損害を受け、市民は一丸となつて防衛に努めた。八月六日広島市に新型爆弾が投下されたという風説が伝わり、敗色が一層濃くなつた。東京より帰崎中、広島の惨状を目撃した角尾学長は、八日職員学生を集めその詳細を報告した。しかし軍部は本土

決戦を期しその詳細を一般国民に知らせなかつたが、呪うべき八月九日が来た。

当日朝から空襲警報が発令され敵B29数十機の大編隊が市の上空を通過、十時過ぎ警報が解除され、人々はそれぞれの塩場に帰つた。太陽は丁度頭上近くにあつた。十一時頃だつたろう、急に爆音が聞えて来た。敵一機野母方面より進入市の上空に差しかゝつた。皆はたかが一機位とあなどつていた。突然落下傘のようなものが松山町上空に投下され、瞬間ピカツと火柱がたち、同時にドカンという落雷のような地響がした。二三秒たつたか、ゴオツという物凄い爆風がありとあらゆるものを押しつぶし、辺りは砂煙に覆われ急に暗くなつた。木造の建物はマツチ箱を上から押さえたように斜に傾き、すべての樹木は一瞬にして根こそぎに倒れた。部屋の窓ガラスは粉微塵に飛び散り、書類棚、机、椅子等は滅茶滅茶に破壊され、書類は木の葉のように舞い上りいろいろな破片で部屋中は足の蹈み場もない程散乱、梁がメリメリと音をたて頭上に覆いかぶさつた。梁の下敷となつて助けを求める声、うめき声があちらこちらから聞えてきた。人々は必死になつて脱出しようとあせつた。

かくて数時間後にはありとあらゆるものはすべて焼きつくされ、無事危機を脱出した者もつぎつぎと倒れ遂に事務関係職員一四七名（男七〇、女七七）の尊い生命を奪つた。

学校勤務関係者の遭難状況

教務係の立川孝八郎（八月十五日自宅で死亡）、森野千都子（数日後自宅で死亡）、用度係の相川武夫（二三日後自宅で死亡）、出納係の本多成利氏等外数人は倒潰した本館建物から這い出るように脱出した。法医学教室から脱出した国房教授は傷や火傷で不自由な体を引きずるようにして本館より学校正門に至る間に設けられた壕に待避した。ふと「助けてくれー」と悲痛な叫び声がした。それは長身の山木事務官が事務官室の窓から救いを求める声だつた。国房教授も自分の身が不自由なため、眼前にいる事務官を救助する術もなかつた。やがて本館の各所から火の手が上つた。事務官室も盛んに燃え出した。生身のまま火焔につゝまれてゆく事務官の叫び声も、いつしか建物のバリバリ焼ける音の中に消えていつた。本館から脱出した出納の本多氏は、学校正門前の築山の処までたどりつき、丁度石にもたれるように仰向けに倒れ安らかに眠るように息を引きとつた。正門の何百貫もあろうかと思われる片側の石の門柱が爆風で土台から十五度ばかり離れて傾いていた。

当日雨天体操場裏の防空壕にある金庫の鍵の修繕を用度係長山本正太郎氏（後刻死亡）より命ぜられた機械場の吉村七賀重、矢島富士雄、山口当一（何れも健在）の三氏が壕内の臨時灯の下で作業をつゞけていたが、突然せん光がひらめき爆風で三人は吹き飛ばされその場に昏倒した。それから何十分経過したかわからない。間もなくして吉村、矢島の両氏は山口氏の「あっ痛い〳〵」というめき声に目をさまして辺りを見たが、真の闇だ。壕の入口は爆風で埋められたのか出られない。三人は必死になつて出口をさがした。

「おーい。ぬけ穴があるから声をたよりに這つてこーい」と吉村氏の呼ぶ声の方向に這い出た。急に明るくなつたようだ。丁度図書館書庫（コンクリート造）の裏に出た。そのときは既に図書館の事務室、大講

堂、それに下側にある雨天体操場、学生集会所、そして本館はすべて焼きつくされていた。図書館の焼跡には女子を混じえた数人の屍体が黒焦になつていた。おそらく山口静夫、江崎ミツ、溝越親子、馬場節子、佐藤弘、永田熊太郎氏等であろう。集会所の食堂には輔仁会の福島悦子、川口貞子、深堀久枝氏等の、本館前には雑使婦の稲尾ソモ氏その他事務職員であろうか数名の屍体が横たわつていた。本館焼跡には大小様々の塗料のはげた金庫がぽつんぽつんと取り残され、弁当箱、湯呑茶碗等が散乱していた。教務係の金庫の下敷となつているのは原身武氏ではなかろうか、出納係の金庫の前には桂和七氏らしい屍体があつた。庶務係の瀬戸口国久、深山芳幹、松尾春子、福丸キミ子、本多康子、学生係の達木昭子、田中和子、教務係の平石喜美子、用度係の山本正太郎、赤野義祐、小川スチ、村山トシエ、前川君枝、林田静子、執行信子、土居ユキエ、早田マツ子、監査係の丸勢徳次、中島マサ子、小山幸子、比嘉ヨシ子、小柳クニエ、出納係の小佐々チエ子、山田トミ、小使室の梅津梅吉、山野源次郎氏等それに薬専の清木、杉浦教授その他薬専の学生と一緒に壕掘りをしていた医専教授松尾京哉、助教授福井条一氏（福井氏は八月十八日五島の自宅で死亡）等はどうなつたろうか。その場で即死したか、一応何人か脱出したか、見分けのつかない程黒焦げになつた屍体が十二、三横たわつていた。又破壊された交換台の前には永尾スエノ、深堀君子氏が受話器をつけたまゝの姿で横たわつていた。防空壕内で助かつた吉村、矢島、山口の三氏等と一時間ほど前まで空襲のことで話し合つていた機械場の大野多作、山口作太郎氏の二人は機械場の入口で、辻栄作、小川甾八氏らしい姿り果てた姿が部屋の中に見受けられ、守衛室では本田五三郎、黒田福馬氏の屍体が横たわつていた。又機械場附近では病院の小使篠崎保一郎氏が腸を露出して倒れていた。（二三日後死亡）

生理学教室裏の元射的場では、壕掘りをしていた薬専生徒の無数の屍体が横たわつていた、貯水タンクと薬専の中間にあつた配属将校室の焼跡にも二三の屍体が見受けられ、指揮刀を握つたまゝの姿は、おそらく谷本十三郎准尉であろう。氏は大村から通勤しておられたが、八日まで病気欠勤中、わざ〳〵死ぬ為め出勤したようなものでまことにお気の毒である。同室の雇岡田醇子、給仕山野シゲ子両氏も即死したものと思われる。

木造二階建の薬専は既に焼失してしまつたが、未だ所々くすぼつていた。破壊された機械類が散乱し、黒焦げになつた屍体がごろ〳〵横たわつていた。小使の山本利吉、横瀬久吉、岩本偵吉、雇の内野輝子、井手篤子氏等は無事脱出したろうか。雇の松尾滝子氏は当日壕掘りをしていたとか、欠勤していたとか、はつきり判らないが、それらしい姿も見受けられない。おそらく脱出したであろう（松尾氏は数日後家族に見守られ死亡した由）

吉村氏等三人は燃え尽した大講堂の前で全身火傷した学生に出合つた。「自分は医専二年の海軍依託生です。すみませんが病院へ連れて行つてくれませんか」と哀願、学生を連れて病院の方へ向つた。病院の各病棟からはメラメラと火を吹き、街は一面の火の海と化した。全身火傷した人、衣類のぼろ〳〵になつた人、夢遊病者のようにふらふらと歩く人、元気な者は負傷者を背負つて、これらの人々は灼熱地獄から逃れるように穴弘法へ穴弘法へと避難した。

病院勤務関係者の遭難状況

「ゴオツ」という物凄い爆風が部屋中をかき廻した。大小様々の木の破片が人々の上に覆いかぶさつた。背中や腰を強く打たれた者、後頭部をガラスの破片で突きさゝれた者、瞬間皆は机の下にもぐり込んだ。これは一瞬の出来事である。「眼が見えない」と誰かが悲鳴をあげながら走り去つた様だ。患者係の友成氏は早速眼を開けたが何も見えない。「やられたなあ」と思いながらしばらく眼をつぶつて時をまつた。しばらくして辺りがぼんやり見え出した。「よかつた本当によかつた。」よく見れば部屋の中は爆風ですべてのものがひつくり返され、壁土やゴミの土煙がもう〳〵と部屋中に充満していた。間もなくして、患者係の入口から白衣の人が三、四人走り込み、外に面した右の窓より脱出した。よく見れば先頭が古屋野先生だ。頭を怪我されたのか繃帯をしておられた。隣室の古屋野外科の外来からは待合せの患者さん達であろうか、戸棚のような重いものの下敷になつて、救助を求める悲痛な声が聞えてきた。爆風のため衣類がぼろ〳〵になつて呆然と立つている人、頭を打ちわつて血達磨になつている人、顔がドス黒く焼け爛れた人、この世の人とは思われない、その様相たるや全く物凄く、丁度よく見かける残酷な一幅の地獄図絵である。これらの負傷者を混じえた職員、学生、看護婦、附添人、それに患者が、後から後からなだれのように病院玄関から山の方へ逃れて行つた。同室の山南学、青木完、松田松五郎氏等その他数人の者はどうなつたろうか。辺りを見廻したが誰の姿も見えない。隣室の收入係室に這入つた友成栄次氏は、入口のアートメタルと入退院の窓口係の机との間に頭を負傷し失神して倒れている永田信子氏（健在）を発見、早速玄関前の広場にかつぎ出そうとしたが、先程背中に打撲傷を負つたためか意の如くならず、痛さをこらえやつと表へ連れ出した。玄関前の車庫で自動車の修理をしていた運転手の佐藤寅一氏は負傷して山の方へ逃れて行く姿が見受けられた。後頭部に硝子の破片が突きさゝり出血甚しくシャツを朱に染め玄関前で頭を押えて困つていた山南氏は、通りがかりの永井先生から、山南氏のゲートルで止血繃帯をしてもらい辛うじて調理所の上の芋畑へ逃れて行つた。丁度窓口で患者から料金を受取つていた松浦馬太氏は、余程のショツクを受けたのか、「助けてくれ、助けてくれ」と叫びながら玄関の入口まで来たが倒れてしまつた。裏の收入係が気になつて玄関に引返した友成氏は、松浦氏を発見、かつぎ上げようとしたが体重が重いのと背中の痛みでどうすることも出来ない。附近には誰の姿も見えないので一応部屋の方へ松浦氏をよせ懇ろに合掌した。（松浦氏は後刻担架で山の上へ運ばれ、その夜青木完氏に見守られ大変苦しみながら息絶えた）友成氏は二階に上つて見たが八角廊下が落ち込んで先には行けそうもなかつた。

レントゲン室の疎開跡の材木から三ケ所ばかり火の手がチヨロチヨロ上つていた。これはいかぬと思つて部屋に引返し、バケツをもつて玄関から外道を廻ろうとしたが、病院下の民家は既に焔につゝまれ、熱風が吹き上げ焼けつくようだ。立木が倒れ細い道を塞いでいた。内科と耳鼻科の病棟の間から、ようやくにして現場にたどりついた。未だ火勢は強くなかつた。肝腎の水が附近に見当らない。耳鼻科の病棟から見知らぬ人が一人応援に来てくれた。あちこちでバケツ三四杯ばかり探し出し懸

命に注水したが、一向に消えそうもない。止むなく玄関に引返した。丁度洗濯場前の広場で、永井先生が、学生、看護婦を指揮し、負傷者の救出に当つておられた。友成氏もこれに合流した。そこには洗濯場の鈴田勧氏が倒れていたが、既に死んでいた。洗濯場の大友はつ氏は負傷したのか救護班に手当をしてもらつていた（その夜青木完氏に見守られ山上で死亡）。下からは民家の負傷者が続々上つて来た。顔の腫れあがつて変型した人、腕や脚の焼け爛れた人、衣類のぼろ〳〵に破れた人、誠に悲惨な状況である。表の守衛室までの石畳の坂道には力つきた多数の人々が倒れていた。

間もなく本館にも火が移り猛烈な勢で火を吹き出した。洗濯場の前も危険を感じるようになつた。永井先生の指揮で順次調理所裏手の小高い丘の上に負傷者を移した。容赦なく照りつける真夏の太陽。加えて熱風の中をあえぎあえぎ負傷者を背負つて山をよぢ登るのも大変だ。途中薬局の真野先生が腰に打撲傷を受けたのか非常に苦しんでいたので友成氏は上まで背負つてやつた。そこには頭に繃帯をした山南氏、顔が腫れ上つて苦しんでいる運転手の佐藤氏、それに顔の変型した守衛の原氏の姿も見受けられた。四方はすべてうめき声ばかりの修羅場だ。その中で軍服が血染めとなり、長い木の枝を杖にして指揮をとつておられる永井先生の姿は、まことに崇高なものであつた。何分にも先生の掌握下にあるものは僅か学生、看護婦合せて二三十人。これでは到底多人数の救助は不可能である。間もなく襲いきた紅蓮の焔も燃えるに任せねばならず、室内に取り残された負傷者をみすみす見殺しにすることはかえすがえすも残念である。鉄筋コンクリートの窓から吹き出す火勢の猛烈さは、とても手の施しようがない位だ。山の上の負傷者は口々に「水を呉れ、水を呉れ」と哀願した。しばらく永井先生も考えておられたが、「止むを得ん、飲ましてやれ」といわれた。友成氏は割れ徳利を見つけ出し水を探しに下つたが、綺麗な水が見当らない、ようやく何処からか探し出し少しずつ水を飲ましてやつた。皆な手を合わして喜んだ。

調理所では爆風で鉄窓が飛び、事務室と現場員休憩所の間の壁が倒れ、杉田弁蔵氏はその下敷となつた。調理場の板張にいた市川小夜子氏は、吹き飛ばされた鉄窓にあたり、血まみれになつて昏倒した。深堀ヱキ氏は調理所の出口から逃れようとしたが、出口が塞がつていたため、裏の窓口から飛降りた瞬間、額に傷を負い、血まみれになつて裏の山へ逃れた。（穴弘法へ避難してから知人が川平の自宅まで背負つて帰り一週間後原爆症状があらわれ深堀病院で死亡。）川脇リク（後日城山の自宅で死亡）、山下実枝（後日整形外科の地下室で死亡）、中田ハルノ（後日川平の自宅で死亡）、塩本キミヨ氏（後日死亡）等は調理所を脱出した。尾上亀次郎、高塚アサノの両名は看護婦寄宿舎の炊事場で遭難、高塚氏は即死、尾上氏は汽缶部煙突の下まで逃れ死亡した。病院裏門の守衛亀本近六氏は、コンクリートの落下により、頭髪がベラツとはげ、血だるまになつていたにもかゝわらず元気であつた（八月十六日時津で死亡）。

洗濯場の上貞次氏は頭を負傷しながらも大変元気で負傷者の救出に活躍していた。丁度調理所に行つた時、爆風で倒れた壁の下敷となり苦しんでいた杉田弁蔵氏（健在）を二三人で助けようとしていたが、余りにも壁が重たく意の如くならなかつた。隣の事務室は盛んに燃えていた。上氏は何処からか丸太棒を拾つてきて満身の力でやつと壁を持ち上げ杉

田氏を救助した。（上氏は九月十二日時津の自宅で死亡した）。

機関部の西田和一郎氏（二十日後諫早の海軍病院で死亡）、市原啓次氏（後日死亡）、益永弘　氏（後日時津で死亡）等はそれぞれ負傷脱出、浜崎力太氏は、釜焚の現場で、深堀辰之助氏は風呂場に上半身を突込んで死んでいた。

木造建の輔仁会では堤善吉氏、地本鶴松氏が事務室で、甲斐安太郎氏、早淵ケイ氏、常田チヨ氏は現場でそれぞれ即死、平田マツノ氏は現場から脱出、洗濯場の下で家族に見守られながら息絶えた。辻義夫氏は病院前の漬物屋で遭難、自宅に辿りつき死亡。松尾恵美（八月十七日死亡）、松尾礼子（八月十四日死亡）等はそれぞれ負傷、危機を脱出した。輔仁会へ氷を運搬中の山口英一氏（十日後死亡）、松永清氏の両名は表守衛室の前で遭難、松永氏は即死、山口氏は負傷者に混じて何れかに逃れて行つた。

当日大浦方面へ公用外出中の調理所の佐藤又一氏は、長崎駅まで引返したが、浦上方面には真黒い煙が立ちのぼつて空を覆つていて、おびただしい人々が浦上方面からやつてくる、又こちらからも行こうとする。今のAGの下から駅前にかけては人の波だ。浦上方面から来る人を見れば無残に負傷した人達ばかりだ。着衣はぼろ〳〵、皮膚は焼けたゞれ、シャツの破れかと見れば背中から腹にかけて、皮膚がはげて、バタ〳〵している。頭髪は皆焼け焦げている。まつたく惨鼻の極、今その様子を表現する言葉もない。口々に「浦上は全滅だ」と云う。何とかして人波をくぐつて岩川町の裏道づたいにでも大学へ行きたいと尋ねれば「とても通れない」と答える。人波にもまれながらまごまごしているうちに誰かが「ガスタンクが危い、爆発するぞ」と叫んだ。「危い〳〵」と口々に叫んで群集は潮のように四方に散つた。何時爆発するか判らないような危険な状況で非常線が張られたが、辛うじて非常線を突破、山ぞいに歩いて病院へ着いたのが午後一時半頃、病院の長坂の下にある守衛室は爆風で押しつぶされ、守衛の原寅一氏（八月十八日時津で死亡）は家屋の下敷となつて虫の息。佐藤氏は原氏を背負つて調理所の上の畠まで運び調理所の方へ急いで下つた。調理所の事務室からは白煙がもう〳〵と出ていた。飛び込むようにして事務室に入つた。外の材木が盛んに燃えていたが、これが飛火したのか机の上の書類がメラ〳〵と燃え、手のつけようもなかつた。調理所の板張に血まみれになつて苦しんでいる市川小夜子氏を発見、「しつかりするんだ」とはげましながら抱き起し廊下に出ようとした。そこにも火が移り盛んに燃えていたので、バケツで消火に努めた。ふと見ると市川氏は地下室降口の手すりにもたれていた。それから何分たつたか市川氏の姿が見えない。手すりの処で下を眺めた。地下室にも既に火の手が廻つていた。猛火をくぐつて地下室に降り辺りを見廻した。機関部の早田喜八氏それに市川氏を発見したが、もはや息絶えていた。その時米倉が燃えているのに気がつき必死になつて消火に努めたが、とても消えそうもなかつたので、引返して調理所の裏に出て山へ逃れた。今まで無我夢中であつたがやつと落着いたとき足の疼痛を感じた。これは消火の際焼けたゞれた大豆の中に足を突込んで受けた火傷であろう。

三時過ぎだつたろうか、佐藤氏は急に家族のことが心配になり帰ろうと思つたが、岩川町一帯は火の海で、とても行けそうにもない。調理所

に引返し薬缶に砂糖水を入れ再び山の上に避難した。そこは負傷者で一ぱいだつた。その中には薬局の松岡スナ氏もいた。佐藤氏を見て腹痛を訴え鎮痛剤を要求したが、どうする術もなかつたので水を少し飲ましてやつたが間もなく息を引きとつた。山の上で用度の青木完氏に出会つた。頭に繃帯を巻き、腰にガラスの破片が喰い入つたといつて手で腰を押さえていた。小使の太田黒氏はよく佐藤氏に協力し、二人で負傷者に砂糖水を飲ませてやつた。皆は非常に喜び元気をとりもどしたようだ。山南氏も永井先生にしてもらつた止血繃帯で出血が止つた関係か気分が大分よくなつたようだつた。

やがて夜が訪れた。街は一面の焼野原だ。だがまだあちこち燃えつゞけている処も見受けられ夜空が真赤になつていた。突然飛行機の爆音が聞えたと思つた瞬間、敵機が低空で頭上から山王神社の方向に向つて銃撃を加えた。幸い我々の場所は被弾を免がれたが、このため死傷者が相当出たものと思はれ、彼等の非人道的行為が怨み骨髄に徹し今に忘れることができない。

八月十日以後の状況

やがて夜が明けた。周囲は負傷者で一ぱいだつた。その中には角尾学長が負傷して担架にやすんでおられ、筬島、永井両先生が附添つておられた。調理所の佐藤氏は学長から命ぜられ永井先生と協力して炊き出しを始めた。近郊から救援隊が続々食糧を運んでくれた。

十日から調理所裏の防空壕前に仮本部を設け学長をこゝにお移しした。翌日から事務室を調外科の焼跡に移し、古屋野教授を学長代理として、高瀬、影浦、調、佐野、清木各教授、木戸、佐藤、一ノ瀬助教授等に、事務は友成、鬼塚、一ノ瀬覚、佐藤、杉田氏等と学生、看護婦合せて十数名で陣容を整えた。

先生達は負傷者の治療に、事務職員は市内の電柱に仮本部設置の件を貼り出す連絡やら、生存者、死亡者の整理と遺族の方の応待、炊き出しの準備で夜遅くまでくたくたになるまで活躍した。三日目には久留米の陸軍病院から衛生隊が応援に来て本館焼跡で約一週間患者の治療を行つた。四、五日目には地方からの救援食糧がその始末に困る程あつたが、その後救援も止絶え、米も調味料も欠乏し初めた。本部では種々協議の結果、小児科の佐野教授が市役所へ物資の斡旋方交渉に行かれることになり、佐藤氏から受領手続をきゝ米五俵、味噌一樽、醤油一樽を受領して来られた。

その後負傷者で手当の甲斐なく死んでいつた者が日毎に増していつた。あちこちで廃材を積み重ね屍体を焼く煙が立ちのぼつていた。

八月十五日終戦の当日仮本部に全員を集められ、終戦の御詔勅を古屋野教授が奉読せられた時、皆誰ともなく忍び泣きの声が嗚咽の声となり何か諦め切れない気持に覆われた。

八月二十二日角尾学長逝去の報がもたらされた。やがて筬島助教授はじめ看護婦さん達に附添はれた御遺体をお迎えし病院玄関正面に安置した。その夜角尾内科一門の方々に先生は護られて悲しい第一夜を廃墟の中で過された。

八月二十四日頃桜町の商工会議所へ、それから九月下旬経専へ本部を移転した。その頃には帰宅した職員や復員者がぼつ〳〵出勤し初め、本

省より故山木事務官の後任として白方事務官を迎えた。

十一月上旬負傷者の臨時診療所であった新興善小学校に移転、大学はいよいよ復興の軌道に乗った。

文責　田鶴、田中

死亡者名簿（事務関係）

(イ) 事務官

山木武俊

(ロ) 庶務係

瀬戸口国久　深山芳幹　南里経次
松尾春子　福丸君子　本多康子
佐藤テルミ　松田松五郎　浜田富美

(ハ) 学生係

福井粂一　宮本秀之進　小村美智子
立木昭子　田中和子

(ニ) 教務係

原身武　立川孝八郎　森野千都子
平石喜美子

(ホ) 用度係

山本正太郎　相川武夫　赤野義祐
小川スチ　村上トシエ　前川君枝
林田静子　執行信子　土居ユキエ
早田マツ子　大塚ヨシエ　村松絢子
岩永サヨ子　帯屋昌生

(ヘ) 監査係

丸勢徳次　中島マサ子　小山幸子
比嘉ヨシ子

(ト) 出納係

本多成利　桂和七　石橋定次
小佐々チエ子　山田トミ子　小柳クニエ
菅泰子

(チ) 図書係

山口静夫　江崎ミツ　溝越親子
馬場節子　佐藤弘　永田熊太郎

(リ) 患者係

松浦馬太　佐藤寅一　山口武夫

(ヌ) 調理所

尾上亀次郎　市川小夜子　深堀エキ
深川シヅノ　山村キクエ　川脇リク
山下実枝　中田ハルノ　塩本キミヨ
中路テイ　高塚アサノ

(ハ) 工務係

片岡初市　中村勝吉　岡林周吉

(ヲ) 機械場

大野多作　小川留八　三浦忠雄

辻　栄作　益永　弘　山口作太郎

(ワ) 機関部

西田和一郎　早田一記　山田今平

早田喜八　池井国松　市原啓次

浜崎力太　久保卯喜四郎　深堀辰之助

(カ) 守衛

羽田卯吉　原　寅一　本田五三郎

土井添竹四郎　亀本近六　黒田福馬

松島秀利

(ヨ) 交換手

永尾スエノ　深堀君子

(タ) 小使室

篠崎保一郎　梅津梅吉

川口菊太郎　横尾久吉　山野源次郎

松坂ミヨ

(レ) 輔仁会

堤　善吉　地本鶴松　平田マツノ

福島悦子　小佐々ノブ子　川口貞子

林田百合子　辻　義夫　甲斐安太郎

早渕ケイ　浜岡キヨ子　常田千代子

永野マサエ　松尾恵美　深堀久栄

松尾礼子　平山春子　赤羽江静香

山口英一　松永　清　西田藤幸

西田利子

(ソ) 洗濯場

上　貞次　鈴田　勧　坂元フジエ

浜崎ヒサエ　吉本サヨ　小宮ミチエ

大友ハツ　中山カネ

(ツ) 雑使婦

五十嵐サミ　稲尾ソモ　山崎アサノ

片岡アキ　稲尾ツルヨ　西本ヨシ

石川マツミ　山本タツ

(ネ) 文部省建築課長崎出張所

西浦一二　中野伊作

(ナ) 配属将校室

谷本十三郎　岡田醇子　山野シゲ子

復興記錄

▽復興年譜△

―医学部関係―

昭和二十年八月九日原子爆弾被爆、学長角尾晋以下教職員学生生徒八百五十余名殉難、校舎病棟倒壊炎上す。書類筐冊機械器具その他一切の施設また灰燼に帰す。市内興善町新興善小学校々舎を仮収容所とし患者の診療を開始す。同月教授古屋野宏平学長事務取扱に、教授調来助附属医院長に、教授高瀬清附属図書館長に、各々補せらる。同月下旬大学本部を一時商工会議所内におき、ついで九月下旬長崎経専校舎に移して再建事務を開始す。九月四日勅使久松侍従来学「復興に努力するよう」とのお言葉を賜わる。同月文部属白方元次事務官として着任。十月五日進駐米海軍及陸軍衛生官の斡旋により当時の泰山院長の協力を得、元大村海軍病院において診療並びに講義を開始す。十一月二日大学合同慰霊祭を執行、文部大臣前田多門弔辞をおくる。同月本部を新興善小学校々舎に移転し同時に附属医院として、残存の原爆患者其他の診療を医師会に代り大学の手で行う。十二月二十二日教授古屋野宏平学長に補せらる。

昭和二十一年五月大村市より諫早市永昌町進駐軍駐屯跡(元海軍病院)に移転を開始し新興善を第一、諫早を第二附属医院として七月患者の診療を始む。九月附属医院焼跡の整理に着手。本年度中に調理所並に伝染病棟(計四六〇坪)の応急補修工事をなし学生寮として学生を収容す。尚外来本館補修工事に着工す。

昭和二十二年三月三十一日附属医専廃校。四月一日特設長崎高等学校設置さる。五月三日眼科病棟を清掃し憲法発布実施記念祝賀式を挙行す。七月五日教授高瀬清依願附属図書館長を免ぜられ教授横尾安夫図書館長に補せらる。九月本部の一部、主として庶務課及び用度係の一部を新興善より移しまた基礎医学教室旧外来本館に復帰す。十月二十五日復帰式を挙行す。十一月十二日グビロが丘慰霊碑除幕式を挙行す。本年度中病院外来本館(一、一三七坪余)中講堂及び北講堂等戦災復旧補修工事竣工。

昭和二十三年一月二十三日学長古屋野宏平退職し、教授高瀬清学長事務取扱を命ぜらる。九月教授横尾安夫依願附属図書館長を免ぜられ、教授頼尊豊治図書館長に補せられる。本部会計課新興善より移転復帰す。十一月十二日創立記念九十周年記念式を挙行す。十二月六日教授高瀬清学長事務取扱を免ぜられ、学長に補せらる。同月二十八日教授調来助附属医院長を免ぜられ、教授広瀬金之助附属医院長に補せらる。本年度中内科病棟(九五五坪)皮膚科病棟(四二三坪)眼科病棟(四三四坪)及び小児科病棟(四四三坪)の復旧補修工事及び看護婦寄宿舎(三七七坪余)新営工事竣工す。

昭和二十四年五月二十七日天皇陛下臨幸あり、内科病棟屋上より復興状況御視察。五月三十一日国立長崎大学設置包括さる。高瀬清医学部長兼任となる。六月二十九日高瀬清長崎大学長に補せられ医科大学長兼補となり、医学部長を免ぜられ、八月三十一日教授影浦尚視医学部長に補せらる。六月事務官白方元次大阪大学に転出。本年度中附属病院結核病棟(二五八坪余)精神科病棟(三四七坪余)及び汽缶場等復旧補修工事

竣工。

昭和二十五年三月三十一日特設長崎高等学校廃止となる、四月旧制最後の入学式を行う。同月寺島存事務長として着任、五月高瀬清医科大学長兼補を免ぜられ、学部長影浦尚視医科大学長に兼補せらる。十月附属病院事務部並びに臨床各教室(附属病院各科)新興善小学校々舎より移転復帰し、新興善は外来患者診療所となる。十二月三十一日教授広瀬金之助附属病院長を免ぜられ、教授和泉成之附属病院長に補せらる。本年度中耳鼻科病棟(四五七坪余)外科病棟(八三七坪余)産婦人科病棟(四四一坪余)等復旧補修工事竣工。

昭和二十六年四月新制医学部(専門課程)第一回入学式を挙行す。基礎医学教室焼跡の整理に着手す。十月一日影浦教授学部長兼学長を免ぜられ、教授和泉成之学部長兼学長に補せらる。同月同日教授和泉成之附属病院長を免ぜられ、教授三谷靖附属病院長に補せらる。本年度中看護婦宿舎(二〇九坪余)及び病院附属建物等新営工事竣工。

昭和二十七年十二月三十一日教授三谷靖附属病院長併任終了す。本年度中基礎医学教室第一棟の一部(三三一坪余)新営工事竣工す。病院中央廊下(五三三坪余)の新営工事竣工。精神病棟にエスカレーター取付工事等竣工。

昭和二十八年一月一日教授辻村秀夫附属病院長に併任される。三月三十一日教授和泉成之医学部長兼学長併任終了し、四月一日教授北村精一医学部長兼学長に併任される。同月三十日教授頼尊豊治附属図書館長併任終了し、五月一日教授友永得郎図書館長に併任される。基礎医学教室の中両生理学教室及び管理部(事務部)新営第一棟に外来本部より移転を終る。本年度中基礎医学教室第一棟の一部(五六九坪余)新営工事竣工す。

昭和二十九年三月六日長崎医科大学最後の卒業生八十八名を送る第二十九回卒業式を挙行す。昭和二年第一回卒業式以来約一、六三〇名を世に送り、三月三十一日を以て長崎医科大学(研究科のみ当分存続)は廃止となり新制大学医学部に全面的に切替えられる。二月二十八日事務長寺島存退転し、文部事務官一ノ瀬秀人事務長事務取扱を命ぜらる。十月一日一ノ瀬秀人事務長事務取扱を被免、文部事務官有浦厚事務長を命ぜらる。基礎医学教室の中生化学及び薬理学教室外来本館より移転を終る。本年度中基礎医学教室第二棟の一部(七三七坪)新営工事竣工す。

昭和三十年一月一日教授辻村秀夫附属病院長併任終了し、教授和泉成之附属病院長に併任される。三月十日医学部第一回卒業式を挙行し八十八名に卒業証書を授与す。四月一日教授北村精一再選されて医学部長兼長崎医科大学長に併任される。基礎医学教室中細菌学教室、衛生学教室、公衆衛生学教室、及び法医学教室、外来本館より移転を終る。八月九日原爆十周年祈念式を挙行し、記念碑(旧正門々柱)の除幕式を挙行す。本年度は基礎医学教室第三棟(約一、〇〇〇坪)建築工事(新営)の予定である。

原爆後十年間の薬学専門部並に薬学部の歩み

薬学部教授　高取治輔

昭和二十年八月九日広島に続いて第二の原爆は不幸にも浦陵原頭中空に炸裂した。直線距離一粁の母校附属薬学専門部はその一閃と共に後輩の若い学徒数十名と杉浦孝教授他事務小使諸氏の鮮血と共に一切を灰燼に帰した。時の部長江口虎三郎教授は医大在学中の御長男宏君を原爆の犠牲に供え乍ら悲痛の中にも応急の措置として母校を佐賀市に收容された。燃し乍ら終戦直後の混乱時期ではあり筆舌に絶する江口部長の努力も苦心も予期の成果を見ず再び長崎復帰の一縷の望みを抱いて昭和二十二年一月諫早市外小野村の旧航空機乗員養成所跡に仮移転したのである。

終戦迄ジャカルタ医科大学薬学部に勤めた私は更に一ケ年半を英軍蘭軍に使役して漸く同年の二月一日に復員して来た。

現地で浦上駅北方に原爆投下死傷六万長崎の大半が壊滅し其の跡はアトム・フイールドと称し飛行場に使用して居るとの簡単な報道ではあつたが、其の被害の如何に大きいかは予め想像して来たのであるが二月二日の暁近く道の尾附近からの車窓よりの一年半後尚ほ焼野原の惨憺たる光景に当時の惨状を想い声を呑んだ次第である。遇々小生の復員の報にお訪ね下さつた江口部長と共々に二月五日初めて小野村の薬学専門部を訪れて見た。

此所小野校舎も校とは名ばかりで全く資材施設もなく二百の学徒は只徒らに日を過して居る有様である。

幸にも母校に復転を許されて、江口部長辞任の後を承けた一番ケ瀬部長代理と共に、時の医大学長古屋野教授に窮状を訴え資材設備の整備を懇談したが医大自身壊滅状態からの復興に窮々たる有様で薬専を省みる余裕もないのが実際の状況であつた。

時恰も新学制の発足に伴い専門学校は将来新制大学に昇格する事を前提として文部省は全国的にその資格の査察を行う事となつた。先づ俎上にあげられたのは戦時中乱立した臨時医専である。その結果全国で長崎医大臨時附属医専他一校が四月には不幸にも廃校の憂目を見たのである。行方なく四散する医専の学生の姿を眼前に見せられた我々は此儘で行けば彼の運命は又明日の我が立場と深い心痛に落ちざるを得なかつた。

学生は遂に頼る可き何物もない事を知り爰に自ら立ち上つたのである。即ち五月中一ケ月間の休暇を申出で「我々の実習資金だけでも自分達の手で」と街頭に車内にと大衆に呼びかけて汗と油で集めた金が約二十七万円であつた。而も全学年で集めた此の貴い金を一、二年生は「我々は後で何とかなる是非卒業も近い三年生で之を使つて一つでも二つでも実習をやつて呉れ」と真に涙ぐましい友情を披瀝したのである。之を以て三年生は僅かに薬学教育の最初歩である定性分析の実習を行う事が出来たのである。如何に当時の困窮が言語に絶するものであつたか想像願えると思う。当時を追懐しては本文を草し乍らも尚瞼に涙のにじむものがある。

万策を尽すも四囲の状勢は附属なるが故の不利の立場と原爆による一

物も残さぬ戦災と長崎市に出るのさえ一日がかりの交通不便の僻村と日と共に加わる戦後社会情勢の不況により如何ともなし難く此儘では長崎薬専の再興は何人と雖も達し難いとの結論に到達せざるを得なかつたのである。

我々は爰に於て廃校に備えて「学生の生きる路」を真剣に検討したのである。

即ち八月五日全教官学生の会合を催し右の情勢に就て検討し且つ審議した結果、予ねて聞及んで居る創設計画中の九州大学薬学科に於て九大当局の意向は勿論不明であるが若し幸にも長薬の窮状に同情されその学生を収容願えれば之が残された唯一の活路であるとの意見に一致したのである。我々の教官の真情は身を捨てて学生の活路を拓いてやる、その為めには我々の身分に関しては一切の条件は附けない事を申合せたのである。

右の決定は父兄会並に長薬同窓会の賛同と激励を得て文部省薬学審議会及び九大当局に対して「長薬の九大併合」の猛運動を展開したのである。

十一月二十九日文部視学官上井直博士は単身長崎薬専査察の為め来諫され校情調査の結果終にB校の判定を下されたのである。

此儘過ぎれば廃校との警告を受けたのである。此の頃から漸く薬専問題は衆目の注意する所となり親校医大及び長崎県市当局はその存置運動を展開した。

越えて二十三年二月七日文部省は九大医学部と長崎医大及び薬専の実情再調査の為め薬学審議会から菅沢博士（東大）篠原博士（山之内製薬）上井視学官、臼井文部事務官の一行を派遣した。此の再調査の結果は三月に薬学審議会に報告され、同会は十五対二の絶対多数を以つて長崎薬専の九大併合を支持する旨を文部省に答申した。同じ頃長崎県会は全員協議会を開いて薬専整備を含む医大復興費として一千万円の寄附支出を可決し薬専存置運動は益々猛烈となつた。

三月の情勢はこのような最後的段階迄進んで居たにも拘らず文部省の決定は延々となつて遂に四月十三日P・H・W・の要請で最後的決定を迫られた文部省は薬専、医大、長崎県、査察官を召集して「長崎医科大学附属薬学専門部に関する緊急措置」を裁定して八月十五日迄に文部省が示す最小限度の復興計画の履行を条件として薬専を暫定的に現地に存置させる事となつた。但し八月の査察迄に右条件が完備されない場合は即時廃校で九大併合等は考慮しないと云うのである。この慌しい四ヶ月間に長崎県当局の尽力により実験台が据付けられ薬品が揃い試験管も何とか振れる状態に迄復興した。此の四ヶ月の急設の後八月十八日実に三度目の査察官として湊博士（千葉大）平野博士（明大）桑田博士（武長）竹内氏の四専門委員を迎え辛じて薬専としての最低規準を充すものとして廃校の悲運から免れる事が出来たのである。

然し難関は之を以て突破した訳ではない、引続き次に迫つた問題は即ち新制大学への昇格である。

十一月二十日川上登喜二先生を静岡女子薬専から部長としてお迎えして先生の御構想により着々その準備に着手したのである。

十二月二十九日大学設置委員刈米博士（京大）の査察を受け川上先生の御努力の結果種々の条件付ではあつたが合格の内定を頂いたのである。

昭和二十四年五月三十一日国立長崎大学の発足に当り永年の長崎医大附属の絆を断つて、医学、経済、水産、学芸の四学部と肩を並べて薬学部として独立発足する事となつたのである。

新制大学はその機構上一年間は教養科目を履修する立前上、薬学部第一期生は大村長崎の半数宛に分れて夫々教養部に就学した。

予ねて小野村の僻地から長崎市内への復帰を念願して居た薬学部に取つては此上もない機会が訪れたのである。

西浦上在の旧県立男子師範の校舎は師範学校が学芸学部として長崎大学の一環に含まれた為め其の校舎は当然長崎大学の所管になつて居たのであるが戦後男子師範の大村旧聯隊跡移転後は忘れ去られた形になり新学制による西浦上中学校が創められて居たのである。長崎市より文部省に対しその払下げの申請が出て大学当局も初めて此に気が付いたと云う様な次第で、今日考えられない様な混乱した時代ではあつた。

大学として不用なら市へ払下げるとの本省の話に驚いて五学部長会議に其の利用方法が提案されたのである。

川上学部長は薬学部の現情を述べられて此れこそ薬学部の長崎復帰の絶好の場所である事を力説されて全会一致の賛同を得られて六月正式に薬学部の長崎移転の大計が確立したのである。川上学部長の御努力に対して我々は衷心より敬意と感謝を捧げるものである。

而し校舎は貰つたものの、中にあつた西浦上中学の移転先は無い。爰に於て、我々は高瀬学長、福井局長、守屋会計課長の援助を得て地元西浦上有志の説得により更に協力を得て長崎市当局並に教育委員会と共に、西浦上中学校建設運動を起した。

数回にわたる本省の現地視察、県市大学地元側の陳情を重ねる事一ケ年漸く二十五年六月に六三制予算の決定により、中学建設費の半額国庫補助に次いで七月に市会で半額市起債を可決して中学側の見透しがついたのである。

此れより先教養一ケ年の履修を了えた一期生は五月から夫々の学部に引取る事となつたが来だ長崎市に何等の拠点もない薬学部は彼等を小野校舎に収容する他は途は無い有様であつた。私は新制薬学部は旧制薬専とは別途に此際は他に場所を借りてでも長崎市内で発足して貰い度い旨を川上部長に進言して幸い御諒解を得て比較的餘裕のある校舎を持たれる経済学部に懇願して伊東学部長の御同情と浅野教授の御理解により同学部内に四教室一実習室を貸与して頂く事になり辛くも新制薬学部は五月二十五日から片淵町長崎大学経済学部内の一廊から出発したのである。

尚ほ小野校舎には薬専最終のクラスが卒業期を控えて就学して居る有様であつたが、十一月末諫早市長中島太郎氏は小野校舎の薬専閉鎖後、警察予備隊を誘置する方針で運動中であるが、明年三月迄は待てないので一月迄に引払つて貰い度いとの申し入れであつた。

我々は諫早市の希望を入れて二十五年一月末に引渡し態勢を整えたが、市側の計画進まず薬専三年生は居坐りのまま小野で三月に所定の課程を終了したのである。此等の学生の卒業式は小野校舎で挙行の計画であつたが、私は薬専最後の卒業生となる五十八名は同窓として之れから後に続く新制薬学部の学生との繋ぎ目に当る深い意味を持つ事を考え彼等の母校は西浦上に薬学部として永遠に繁栄し続ける事を目を以て視て行つて貰い度いとの念願から卒業式だけは是非西浦上で挙行して頂き度い旨

を川上部長に進言して三月二日高瀬学長、影浦医大学長臨席のもとに、新制薬学部学生総代の送辞と、薬専卒業生総代の謝辞により爰に新旧の固い繋りを結んだのである。

此より先二十五年十二月から西浦上校舎東側片袖に着工した。第一期補修工事二百五十坪は二月末に薬剤衛生分析の三実習室が完成した。

前年八月二十五日隣接地に起工した西浦上中学のコンクリート新校舎は此の三月竣工予定の所工事の大遅延で何月になるかも解らない有様である。

我々は中学の新校舎移転を待たず或る期間は中学との合世帯でもかまわぬ既定の方針通り第一期補修の完成を機会に薬学部を経済学部より移転する計画を強行する事として連日各方面と折衝し、遂に四月七日西浦上校舎に落ちついたのである。

想えば原爆被害後佐賀に諫早に又片淵にと苦難の途を辿つた母校も爰に始めて安住の地を得て西浦上の地に噛じり着く事が出来たのである。

四月九日には新に教養部を了えた第二期生を迎えて初めて西浦上で始業式を挙げた。

一方遅延に遅延を重ねた西浦上中学校の新校舎も漸く十一月二十三日に竣工落成式を挙行した。実に予定より八ヶ月遅れである。

爰に始めて中学との合世帯は解消したので其の退去の跡に直ちに第二期補修工事を施行した。即ち本館西側片袖三百坪で一階薬品化学、二階生化学、三階生薬の各実験室である。此の工事は翌二十七年三月完成した。

川上学部長はかねて部長交代の御意向を表明されて居たが、六月二十六日教授会で後任者の互選の結果不肖高取が二代学部長を承く事に決定した。

七月十日夏期休暇に入るを待つて本館右半分二百三十五坪の第三期補修工事に着工した。

一方昭和二十四年来二年越し絶えず交渉し続けて来た住吉薬学部間千二百米の瓦斯管引込問題も漸く八月四日話合がつき、十月十三日に竣工したのである。殆ど日を同じうして第三期補修を完成し補修総坪数八百八十坪となつた。

戦前の浦上附属薬専校舎が七百五十坪であつた事を思う時爰に実質的にも戦前以上の薬学部となつたのである。二十九年度は幸にも長崎市の厚意により別棟百四十五坪の講堂の補修を行う事が出来た。

最後に残された部分は本館左半分の直撃爆弾の被害箇所で二階三階のフローアを吹き飛ばされ、大支柱は曲つて居ると云う大破ぶりで一番の難工事の場所である。此の第四期補修工事の難工事は今迄と異り相当費用が嵩むとの見込で文部省もなか〳〵着工して呉れなかつたのである。

而し二年間の辛棒強い陳情が漸く効を奏して六月十四日私と平井事務長と上京して直接に本省に当ると共に本多、中島、馬場の三代議士の御後援により二十八年度は長崎大学としては医学部基礎の継続事業と分校移転で一ぱいである。薬学部の事情は本省でも解り過ぎる位解つているが、本年一年辛棒して呉れ其の代り二十九年度は残りの爆弾大破箇所を必ず補修するからとの確約を貰つたのである。

八月二十五日任期満了により高取は学部長を辞し、代つて梁井教授が三代学部長に就任した。

十月五日予ての約束により本館大破箇所二百七十坪の第四期補修工事に着手し三十年三月二十五日に完成。尚お一部の附帯工事を残すのみであるが此も本年八月頃着工予定である。

戦後爰に十周年を迎え歩んで来た跡を追想する時長い様な気もするし短い様な気もして懐いは複雑である。

何とか苦労の甲斐があってここ迄復興した薬学部を若くして世を去った原爆被害の青年学徒の御霊に捧げる事が出来た事を衷心より感謝するものである。

然し建物施設が如何に完備しようとも、大学に取ってそれは第二次的のものであって、大学の本体は教授陣である。此の第一次的教授陣の強弱こそ其の大学の声価を左右するものである。真の薬学部の復興は此所にあると思う。

今一応の型は出来上ったのであるが今後一層我々教官の努力精進によって此の点を強化し他校に劣らぬ所まで行き度いと念願するものである。

（昭、三〇、八、三）

（本文は薬学部庶務係長藤山祐一氏に纏めて頂いた事を感謝します）

編集後記

筬島四郎

昭和二十年八月九日原爆一閃、青葉に満ちた夏の自然の姿は全く失われ、見渡す限り枯れた色一色となり、我国で医学上最も古い歴史を色々の点でその中に蔵していた長崎医科大学は一瞬にて壊滅し、今後外観は旧に復しても、その内容をもとに戻すことは一朝一夕のことではなく、痛恨これに及ぶものはありません。

十年を経た今日古屋野先生の発起で当時の想い出を記録に残すことになり、私が他の委員の方と一緒にそのお世話をすることになりましたが、なか〳〵原稿が集らず、相当閉口させられましたが、最近になり可なり集つたので一応これで印刷して、一冊の本にすることにきめました。微力真に申訳ないと思つています。恐らくお願い洩れの方が多数あると思います。今後とも思い出のある方は学校宛原稿を送つて頂きたいと存じます。又誤りの点も御指摘願いたいと思います。これらが沢山集つて後日立派なものが出来るのを望んで止みません。この本が礎石となれば私の喜びこれに過ぎるものはありません。

お忙しい中に御投稿下さつた方々に心からお礼申上げます。

終に編集委員の方の名を掲げてその御努力に対し感謝の意を表します。

医学部　田中育郎（第一生理）

久野文次郎（小児科）
尾崎俊行（第二生理）
川野正七（辻村外科）
秦野滋（調外科）
北郷武照（横田内科）
薬学部　河野喜美彦
事務　田鶴寿男
田中正之
永井元
看護婦　久松シソノ
遺族会　鍬先清太郎

尚医学部三年の学生平川省吾、大西繁幸、秋月誠、中西啓の四君に多大の援助を受けたことを感謝します。

昭和三十年十月十五日印刷
昭和三十年十月二十二日発行
（五百部限定）
（非売品）

追憶

編集兼発行　原爆十周年記念出版委員会
代表者　筬島四郎
長崎市榎津町七番地
印刷所　藤木博英社

無断転載を禁ず

「追憶」の再刊について

西森一正

原爆被爆十周年記念事業の一つとして、数数の思い出や記録が収録された「追憶」が刊行されたのが、昭和三十年でした。

当時の経済事情などから、五〇〇部の限定版となったので、発行後すぐ品切れとなりました。

近年、本学関係者で「追憶」の再刊を希望する声が多くなっていました。

「追憶」の編集に尽力された筬島名誉教授、調名誉教授などからも強い要望があり、今年は原爆被爆三十周年でもあるので、滝津同窓会長、阿部副会長と相計り、同窓会の記念事業として再刊することになりました。

再刊に当っては本文に手を加えないこととし、誤植の訂正だけに止めましたが、犠牲者で、その後明らかになった方々の御芳名が犠牲者名簿に加えられています。

また、高津八郎氏の好意を得て、写真数葉を追加いたしました。

八月九日の原爆記念日前に完了したいという時間的制約もあって、写真印刷の方法をとりました。

誤植の訂正や犠牲者名簿の記載など、殆んど調名誉教授が自らお引受け下さいました。心から感謝の意を表します。

この「追憶」が、多くの同窓諸兄や戦争を知らない本学学生の手に渡れば、当時の本学の惨状を目の前に見るように感じとられることでしょうし、原爆の原点に接することにもなろうと考えます。

再刊に当り、左記の方々に御骨折りいただきました。

調　来助　名誉教授
筬島四郎　名誉教授
内藤芳篤（第二解剖）
中西　啓（国立長崎療養所）
久松シソノ（総副婦長）

昭和五十年七月　再発行

追憶

発行　長崎医学同窓会
同窓会本部事務所
長崎市坂本町十二番四号
長崎大学医学部内
電話四七―二一一一　内線二一二

印刷所　長崎市幸町六番三号
大同印刷紙器株式会社

「追憶」の再版について

原爆復興七十五周年記念事業実行委員会
共同代表　前村浩二　宮﨑泰司

「追憶」は、原爆被爆十周年（一九五五年）十月、長崎大学医学部で出版されたもので、当時の長崎大学長古屋野先生の企画により、筬島教授の指揮の下に、各教室・学生・看護婦・その他から資料が集められ、長い時日と弛まざる努力の下に編纂されました、貴重な旧長崎医科大学の原爆記念誌です。表紙には古屋野先生の麗筆になる「追憶」の二字の外に、「長崎医科大学原子爆弾犠牲者の霊に捧ぐ」の添え書きがあり、僅かに五百部しか出版されなかったので今日では、余分のものは一冊もなく、しかも絶版となっていました。　原爆被爆三十周年（一九七五年）に同窓会の記念事業として再版されました。西森一正教授のもと、調来助名誉教授、筬島四郎名誉教授、内藤芳邦教授、中西啓先生、久松シソノ氏が尽力されました。現在ではこれも手に入らず、ご遺族の方々の強いご希望により、七十五周年を機に復刻版を作成し再版することとしました。

令和三年一月

追　憶

発　行　原爆復興七十五周年記念事業実行委員会
〒852－8523 長崎市坂本一丁目十二－四
電話 〇九五－八一九－七〇〇四

印刷所　株式会社 インテックス
〒850－0046 長崎市幸町六－三
電話 〇九五－八二六－二二〇〇